
バカと暴風と召喚獣

小烏丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと暴風と召喚獣

【Nコード】

N1732W

【作者名】

小烏丸

【あらすじ】

Aクラスレベルのオリ主 宇童うどう 空そらがFクラスに振り分けられて
しまい……

バカテス、エア・ギアを知らない方でも問題なく読めるようなものにしたいと考えています。

基本的にバカテスですがたまにエア・ギアと絡みます。（できればエア・ギアとの絡みを多くしたい）

現在3巻終わりにエア・ギアとの絡みあり。エア・ギアは『小烏丸』が『無機ネット』戦を終えたくらい。

更新は1週間に1話……の予定。

想像力、妄想力豊かな方はグロ注意？

1巻・2巻＋閑話を修正しました。前なかったことがつけたされています。読みやすくなっていれば幸いです。
3巻以降は来年修正予定。

誤字脱字、『ここがおかしい』等がありましたらお知らせください。

P・S・感想待ってます！

バカと俺とクラス分け（前書き）

1 巻開始

編集しました

バカと俺とクラス分け

俺がこの文月学園に入学してから2度目の春が訪れた。

学園へと続く坂道の両脇には満開の桜が咲き誇っており、俺こと宇童 空は、悪友の吉井 明久と並んで学園へと歩いて行く。

「宇童、吉井。遅刻だぞ」

玄関の前に浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男がおり、ドスのきいた声で呼び止められる。

「お、鉄人。おはよう」

「鉄じ じゃなくて、西村先生。おはようございます」

俺らを呼び止めたのは生活指導の西村 宗一。通称『鉄人』。目をつけられるとロクな目に遭わない、とは明久の談。

「宇童、鉄人と呼ぶな。西村先生と呼べ。それと吉井も鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

隣にいる明久が冷や汗を流しながら答える。

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろうが」
「あ、すいません。えーっと 今日一段と肌が黒いですね」
「あー、それには俺も同意見だ。
この時期にどうやって焼いてんだ？」

日焼けサロンにでも行っただけなのか？

「……お前らには遅刻の謝罪よりも俺の肌の方が重要なのか？」
「そっちでしたか。すいません」

「あー、悪い悪い。」

ま、細かいことは気にすんな」

「まったく貴様らは……いくら罰を与えても全然懲りないな」

溜め息混じりに鉄人が呟く。

こう言われると、俺たちが遅刻の常習犯のように聞こえるな。

明久は兎も角俺はそうそう遅刻はしてねえ。

「俺はあんま遅刻したことねえよ？」

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

何か含みがある言い方だが気にせず、俺は鉄人が箱から取り出した封筒を受け取る。

「どーも」

「あ、さんきゅ」

今受け取ったこの封筒。

中には今年のクラスが書かれた紙が入っている。

掲示板とかに張り出せば楽だったのに一枚一枚手渡しとは……試験

校つてのは大変だな。

ま、そんなことより今はクラス分けのことだ。

実はこのクラス分けのこと楽しみにしてたんだよな。

「明久、お前はどのクラスだと思う？」

「DかCが妥当なところじゃないかな？よくできたんだし。ちなみに空の予想は？」

「お前のできたはアテになんねえからな。

ま、俺はAだろうな」

「空って何気に頭いいもんね。1年のときもトップを争ってたし有り得るかもね」

「……お前に『何気に』とか言われたくねえ」

そう言いつつ封筒を開け、書かれていたクラスを確認する。

『宇童空…Fクラス』

「……F……？」

「先生！僕がFクラスなんて何かの間違いですよ！？」

明久もFクラスだったようで鉄人に抗議の声を上げる。

「吉井、諦めろ。それは間違いなくお前の実力だ。

宇童に関して名前の書き忘れた。今度から見直しはしっかりすることだ」

……名前の書き忘れ……。

「……なん……だと……」

こうして俺の最低クラス生活が幕を開けた。

バカと俺とFクラス（前書き）

編集しました

バカと俺とFクラス

廊下

「……………なんだろう、このばかデカイ教室は」

今、俺たちは1クラスの生徒数・約50人が授業を受けるには過剰なほどの広さがある教室の内部を廊下から覗きこんでいる。

その教室の壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれており、高級ホテルのロビーのようだ。

「確かにでけえな。普通の教室の5倍はあるんじゃないか？」

「そうだね。これが噂のAクラスなのかな？」

「たぶんそうだろうな。」

てか黒板がねえってどういうこと？」

そう、俺が告げた通りこの教室には黒板がない
がその変わり巨大なディスプレイが1つ。

………なんと言うか規格外だな。

ディスプレイに向けていた視線を少し下にずらすと、壇上に髪を後ろに団子状にまとめ、眼鏡をかけスーツをきっちり着こなした知的な女性がいた。

彼女は学年主任の高橋 洋子（以後、羊羹^{ようかん}）。
おそらくAクラスの担任だろう。

その羊羹^{ようかん}がAクラス生徒に自己紹介をし終わると次は設備の確認を

しました。

『 ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？ 』

「…………… Aクラスって豪勢だね」

明久が呆れたように呟く。

『 足りない物は全て学園が支給致します 』

「そうだな。ノートパソコンは…………… まあ、よしとしよう。許容範囲内だ……………」

だが、個人エアコンやら冷蔵庫やらはどう考えてもやり過ぎだろ！冷蔵庫の中身も学園が支給してくれるらしいし優遇されすぎだろ！？」

…………… おっと失礼。少々Big Voice（発音は滑らかに）が出ていたようだ。

そうやって見てみると、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女が席を立ち教室の前へ出る。彼女はAクラス代表霧島 翔子。坂本の幼なじみ。同性愛者ではないかという噂があるが、本当は……………。

…………… ん？続きが何か気になるか？
だが、こつから先は俺の口からじゃ言えねえトップシークレットだ。潔く諦めろ。

つと、こうしちゃいられねえ。俺たちも自分のクラスに行かねえと。

「明久。そろそろ行くぞ」

「あ、うん。わかった」

そう言う俺たちは走り出さない程度に廊下を進んでいった。

Fクラス教室

2年F組と書かれたプレートのある教室に着いたが、明久が何か躊躇しているようで中に入れない。

「明久、何戸惑ってんだ？」

「えっと……新年度なのに遅刻してみんなに悪い印象持たれないかな？って」

「考えすぎだろ。明久らしくねえ。」

にしてもお前がそんなこと心配するってことは明日は雨か？

傘持って来ねえとな」

「それはバカにし過ぎだと思っよ」

「ははっ、悪い悪い」

ちよつとからかうといつもの様子に戻ったようで、やつと中に入る。そして詫びの言葉を俺は普通に明久は愛嬌たつぷりに言い放った。明久を気持ち悪いと思ったのは心に留めておく。

「悪い、遅れた」

「すみません、ちよつと遅れちゃいました」

「早く座れ、ウジ虫共」

初っぱなから罵倒とか誰だコラ！、と思いながら教壇に立っている男を見る。

その背は意外と高く、180センチ強くらい。やや細身だが華奢なわけではなく、ボクサーのような機能美を備えた細さを感じる。顔は意志の強そうな目をしており野性味たつぷり。短い髪の毛がツンツンと立っている。

……あれだ。俺の悪友の坂本 雄二だ。教師じゃなかった。

「……坂本何やってんだ？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな。要するにこのクラスの代表だ。」

それはそうと、何故空がここにいるんだ？テストの時に休んでたか？」

「いや、テストは受けたんだが名前書き忘れてな」

「ははっ、空も意外とバカだな」

「ハッ、バカにバカって言われたかねえな」

「……………（ガンのくれあい）」

「まあいい。さっさと席につけ」

「へいへい」

そう言つて窓側の空いている席につく。

「それにしても…流石はFクラスだね」

「確かに。Aクラスとの差が尋常じゃねえ。
カビ臭えし」

そうやって明久と話しているとドアが開き、寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相に着た、いかにも冴えない風体のオッサンが入つて来た。

そのオッサンは覇気のない声で話し出す。

「えー、おはようございます。

私は2年F組担任の福原 慎です。よろしく願いします」

そう言つてオッサンは、薄汚れた黒板に名前を書こうとしたが、チヨークがなかったのか書くのをやめる。

チヨークすらまともにないのは流石に涙が出てくる。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出て下さい」

するとクラスメイトが設備の不備を申し出る。

『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー』

「あー、はい。我慢してください」

『先生、俺の卓袱台の脚が折れてます』

「木工ポンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

『センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど』

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請してお

きましよう。

……他に何もないのであればこの話は終わりです。必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

結局、不備を申し出ても改善してくれないらしい。

聞いた意味無くねえか？

「では、自己紹介でも始めましょうか。

廊下側の人からお願いします」

オッサンがそう言つとスツと生徒が立つ。

「うむ、木下 秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

爺言葉の小柄で、肩にかかる程度の長さの髪をゆったりと縛っている男子生徒が自己紹介をする。

おー、誰かと思えば秀吉じゃねえか。

可愛い顔立ちのためよく女子に間違えられるらしい。告られることも結構あるらしい。もちろん男から。

今流行りの男の娘つてやつだよな、たぶん。

ちなみに秀吉は近所さんだ。朝なかなか起きられないためよく起こしに来てくれる。

秀吉とは違って賢い双子の姉がいるんだが何クラスなんだ？もしかしてAクラスか？

Aクラスにそれらしき影が見えたような見えなかったような……。

そう考えていると隣で明久がなにやらしい笑みを浮かべた後、頭をぶんぶん振っていた。

おそらく秀吉に対する邪念を振り払ってんだろぅが端から見たら気持ち悪いことこの上ない。

しかも男相手に何考えてんだよこのホモ野郎。

……今思っただが『桃太郎』と『ホモ野郎』ってなんか似てるよな？『ホモ太郎』ってしても全然違和感ねえ。

「……………土屋 康太」

続いて小柄で寡黙そうな男子生徒。

こいつも知り合いだ。

康太は小柄だが引き締まった身体で運動神経がいいが、おとなしい。

隠れてムツツリ商会なるものを経営しているため目立つことは避けたいんだろぅ。

それにしても、男しかいねえな。
むさ苦しいったらありゃしねえ。

学力最低クラスになると、女子はほとんどいねえのか？潤いが欲しいな……。

「……です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きが苦手

です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は

」

少し考え事をしているうちにまた次の人が自己紹介を始める。

今度はこのクラスには珍しく女子の声。初の潤いか！、と思い顔を向けてみるとまたしても知り合いだった。

彼女は島田 美波。

実はA君のこと好きな乙女。

青春だな。

「 趣味は吉井 明久を殴ることです 」

……その趣味はやめておいた方がいいだろ。愛しのA君がめちゃくちゃビビってんじゃないか。

島田の自己紹介が終わり、その後は淡々と自分の名前を告げるだけの作業が進む。

次は、明久のようだ。

「 コホン。えーっと、吉井 明久です。

気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね 」

『『ダアアーリーーン』』

明久がそう告げると即座に野太い声の大合唱が返ってくる。うぶっ、こいつはやべえ。吐き気がする。

「……失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

明久が口元を押さえながら席に着く。

考えなしに変なことを言うからこんなことになるんだよ。

その後もしばらく名前を告げるだけの単調な作業が続き、俺の番かと思ったその時、不意にガラガラと教室のドアが開き、息を切らせ胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん…」

「丁度良かったです。」

今自己紹介をしているところなので姫路さんをお願いします」

「は、はい！ あの、姫路 瑞希といいます。よろしくお願いします…」

小柄な身体をさらに縮こまらせるようにして声を上げる姫路。

肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかそうな髪は、優しげな彼女の性格を表しているようだ。

保護欲をかきたてるような可憐な容姿（俺はそうは思わないが）は、男だらけのFクラスで異彩を放っている。

姫路は成績を常に上位1桁以内に常に名前を残す程成績が良かったはず。

なんでFクラスにいるんだ？

俺みたいに名前を書き忘れたのか？

俺と似たような疑問を持ったのか自己紹介を既に終えた男子生徒が1人高々と右手を上げ姫路に質問する。

「はいっ！質問です！　なんでここにいらっしゃるんですか？」

質問の内容が失礼な気もするが俺も気になってのことだ。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

その言葉を聞き、クラスメイトは『ああ、なるほど』と頷いた。

姫路はきつと熱のせいで途中で退席したんだろうな。

『試験途中での退席は無得点扱いとなる。その結果としてFクラスに振り分けられてしまった』ってワケだ。

そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でちらほらと言い訳の聲が上がる。

『そう言えば、俺も熱（の問題）がでたせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

……こいつら本当にバカだ。

そんな中、逃げるように明久の後ろの空いている卓袱台に着いた姫

路。

「き、緊張しましたあゝ……」

「あのさ、姫」

「姫路」

明久が姫路に声をかけようとしたその上にかぶせるように、俺の後ろで姫路の隣の坂本が声をかける。

「は、はいつ。何ですか？ えーつと……」

「坂本だ。坂本 雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

「よ、吉井君！？」

明久が口を挟むと、姫路が明久の顔を見て目を丸くする。そこで俺は明久のフォローするため口を開く。

「「姫路、明久がブサイクですまん」」

あ、坂本とかぶった。

「雄二、空。それフォローになってないから！？」

「吉井君は全然ブサイクじゃないですよ！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし……その、むしろ……」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。」

俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし「あつ、それ俺も聞いたことあるな」

「え？それは誰」

「そ、それって誰ですかっ!？」

「確か、久保」

「久保!!」

俺と坂本の溜めに律儀に聞き返す明久と姫路。

「利光だったかな」

久保 利光（性別 ）

それを聞き姫路はホッと安堵する。

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「お前のことを想ってくれているやつがいるんだ大事にしろよ」

「それはシャレにならないよ!」

あ、なんかマジっぽいし少しネタバラしでもするか。

「明久安心しろ。半分冗談だ」

「え？残り半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

盛大にスルーをする坂本。

決してギャグなんかじゃねえからな!

「あ、はい。もうすっかり平気です。 えーと……空君いいですか？」

「あ？どうした？自己紹介か？」

それならまだしてねえからその時でいいだろ？」

「あ、それならそうですね」

「ねえ雄二、空！残りの半分は！？」

「明久、大声出すな。うるさいぞ」

「お前は引っ張りすぎなんだよ」

しつこい男は嫌われんぞ？誰にかは言わねえけど。

「はいはい。静かにして下さい。自己紹介再開しますよ」

そう言つてオッサンが教卓パンパンと叩く。

「了解。俺は」

ガラゲシャッ

俺が席を立ち名前を言おうとした瞬間教卓が崩れ、オッサンが替えを用意しに行くため自己紹介を中断させられる。

明久がその光景を見た後、一瞬姫路の方を見て俺と坂本を呼ぶ。

「…空、雄二ちょっといい？」

「どした？」

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

「別に構わんが」

明久が真顔で言うので俺も坂本も素直に従い、立ち上がって廊下に

出る。

「んで、話って？」

「この教室についてなんだけど、かなり酷いよね？」

「そうだな」

「Aクラスの設備凄かったよね？」

「ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことがない」

「そうだな。Fクラスにちょっと分けてもらいたいな」

「そこで僕からの提案。折角2年生になったんだし、『試召戦争』やってみない？」

「戦争、だと？」

「『試召戦争』か面白そうじゃん」

「それをね、Aクラス相手に」

「……何が目的だ」

「坂本。お前分かってて聞くのはどうかと思うぞ？」

「へ？空どういうこと？」

「お前が体の弱い姫路の為にまともな設備をプレゼントしたい、っていうのが坂本も分かってるってことだよ」

「ど、どうしてそれを！？」

「明久はわかりやすいし、しかもタイミングもタイミングだったからな。すぐ気づく。」

「……それに坂本もお前に言われるまでもなく、試召戦争をやると思ってるじゃねえの？」

「ああ」

「え？どうして？雄二だって全然勉強してないよね？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試みてたくてな。」

それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし　おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

坂本に促され教室に戻る。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

「えー、俺の名前は宇童 空。特技は合気道、キックボクシングなど。一年間よろしく」

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」
「了解」

オッサンに呼ばれ坂本が席を立ち、教壇に歩み寄る。

「Fクラス代表の坂本 雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。
さて、皆に一つ聞きたい」

間の取り方がうまいせいか、全員の視線はすぐに坂本に向けられる。その様子を確認した後、坂本は視線を教室内の各所に向ける。

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

つられて全員が坂本の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが

不満はないか？」

『『大ありじゃあつ！！』』

2年F組生徒が叫ぶ。

「だろう？俺だってこの現状に大いに不満だ。だが不満なら他のクラスから奪えばいい」

そして坂本が告げた。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

バカと俺と宣戦布告（前書き）

編集しました

バカと俺と宣戦布告

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

この学園は現在、世間で話題を呼んでいる新技術『試験召喚システム』の試験採用校である。

これは学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。

その『試験召喚システム』により自身のテストの点に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出し、クラス単位で戦うことを『試験召喚戦争』と呼ぶ。

その戦争で重要になるのがテストの点数。

だがAクラス1人に対しFクラス3から5人で相手をしてもらっても勝てるかどうかわからない程の実力差がある。

誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

だが、圧倒的な戦力差を知りながらも、坂本は宣言する。

「Aクラスに必ず勝てる。いや、俺が勝たしてみせる！」

このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っているからな！」

そんな坂本の言葉を受け、クラスの連中がざわめく。

「それを今から説明してやる。」

おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太。

姫路が顔を赤くしながらスカートの裾を押さえ遠ざかると、康太は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。

「土屋 康太。」

こいつがああの有名な、寡黙なる性識者だ^{ムツリーニ}」

「……………！！（ブンブン）」

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか…………？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ…………』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ…………』

ムツツリーニと聞いて男子生徒がざわめく。

『ムツツリーニ』とは男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられ、たとえどんな状況であろうと自分の下心を隠し続けるムツツリの中位称号。

下位称号はムツツリであることがだだ漏れの『釣^{ルアー}』、上位称号はムツツリであることを何人にも認識されない最強のムツツリ『神の大^{バニ}罪^{ティ}』。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している。
それに宇童もいる。」

知らないやつも《暴風族》って言えば分かるだろう？」

ストームライダー

「ん？俺か？てか、そんな名前で呼ばれてたの初めて知ったぞ！？」

『宇童って確か学年首席の霧島と張り合ってたってやつだよな？』

『あいつ、そんなにすごいのか！？それなら姫路さんもいるしAクラスにも引けをとらないな』

『しかも《暴風族》って召喚獣の扱いが上手いって言うので噂になつてなかったか？』

『ああ、あれだろ。召喚獣の操作練習の時に教師を倒したってやつ』

姫路と俺の名前を聞いてクラスがざわめく。

俺って噂になるようなことしてたんだな。自覚ねえけど。

「木下 秀吉だっている」

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下 優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな！』

やれそうだ、そんな雰囲気は教室内に満ちていた。

「それに、吉井 明久だっている」

シンッ

上がっていた士気が一気に下がる。
ちよつとだけだが明久が気の毒だ。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！」

『誰だよ、吉井 明久って』

『聞いたことないぞ』

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察
処分者》だ」

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違つよつ！ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二」

「明久。ホントのことだからしゃあねえだろ？」

「空まで……」

「そう落ち込むなつて」

そう言いながらポンポンと背中を叩いてやる。

「あ、あの。それってどういうものなんですか？」

頂点に近い場所にいた姫路にはこの単語に馴染みがないようだ。
俺はコイツらと連^つんでたから知ってるが。

「具体的には教師の雑用係だな。」

そのため、こいつの召喚獣は物に触れるが、召喚獣の負担の何割かがフィールドバックされるようになっていて」

『それなら吉井はおいそれと召喚できないってことだよな？』

「それについては、気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ。

兎に角だ。俺たちの力の証明とすと、まずはDクラスを征服してみようと思う。

皆、この境遇に大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

明久が坂本に反論しようとしたがタイミングを逃したようで、突き出した手が所在なさに宙を漂う。

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！出陣の準備だ！

俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ

！」

『『『おおーっ！！』』』

「……それじゃあ、明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？それに『ししゃ』のところに違和感が……」

「大丈夫だ。それに気のせいだ。

騙されたと思って行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている。

俺は友人を騙すような真似はしない」

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

そう言つて明久はDクラスに向かつて歩き始めた。
いつも騙し騙されしてんのにすんなり受けやがった。
やっぱバカだな。

「騙されたあつ！」

しばらくして明久が教室に転がり込んで来た。
騒がしいヤツだ。

「やはりそうきたか」

「やはりつてなんだよ！やっぱり使用者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「明久、坂本を責めるのはどうかと思うぞ？」

「お前が簡単に乗せられたのが悪い」

「……………」

「そんなことより、今からミーティングを行うぞ」

そう言つと秀吉や康太、それに島田が近づいてきた。

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

「んじゃ、先に飯か？」

明久。今日くらいはまともな物食えよ？」

「そう思うならパンでも奢ってくれると嬉しいんだけど」

「バカ言つなよ。俺が食うワケでもねえのに金なんて出せ いや、
今から言つ英文を訳せられたら奢ってやる」

「ほ、本当!？」

「ああ。」

んじゃいくぞ。『I might as well throw
my money away as lend it to you
』」

わかるか？」

「え、えつと……書いてくれると嬉しいかも」

「じゃあねえな」

《I might as well throw my money
away as lend it to you》

「アイ ミット アズ エル タロウ マイ モネ アワイ アズ
レンド イット ト ユー。」

ふむふむ。私は太郎からLサイズのミットを貰い、それとあなたは
私のモネの絵画は淡い赤色です。

これであつてるよね？」

「……いや、全然違い」

読み方から違いよ。

「じゃあ答えは何なの？」

「……『あなたに金を貸すくらいなら捨てた方がいい』」

明久をいじるために最近授業で出てきたこの英文にしたんだが難し
過ぎたらしい。

「……………ちっ、惜しかったか」

かすつてもねえよ。

「……………残念だったな」

「く……………っ！……………本当に……………惜しかった……………」

パンに未練たらたらだな。

「あ、あの。吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「……………あ、いや、一応食べてるよ。塩とか砂糖とか……………」

なぜか明久の言葉に覇気がない。

パンが食べられなかったことに相当ショックを受けているようだ。

「あの、吉井君。塩と砂糖って食べるとは言いませんよ……………」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

明久に向けられる皆の目が妙に優しい。

そこで島田が何かを決心したのか一度頷き口を開く。

「ア、アキ。ウチの弁当分けてあげようか？」「へ……………？そんなことしてもらうのは悪いよ……………」

「俺にはたかるクセによく言っな。

それに好意はありがたく受け取っておけ」

てかいいい加減その覇気のない声を止める。

こっちまで気が滅入ってくる。

「空がそう言うなら……。」

美波……、ありがとう……。」

「べ、別に吉井のためにしたワケじゃないんだからねっ!」

おー、リアルツンデレ初めて見た。

「明久、これからは飯代ちゃんを残しておけよ」

「う……わかったよ……。」

でも今月ご飯代にまわすお金もうないよ……。」

「はあ? まだ四月始まったばかりだぞ?!? 何に使ってんだよ!」

そう説教(?)をしていると明久へ救いの手が。

「あ、あの。良かったら私がお弁当作ってきましょうか?」

「え……? ……ほ、本当にいいの!?

僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ!」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったのう明久。手作り弁当じゃぞ?」

「うん!」

秀吉のからかう台詞をもともしない明久。

やっと声に覇気が戻ってきて一安心。

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。
吉井に『だけ』につくってくるなんて」

棘のある言い方をする島田。
その島田の耳元で俺は言う。

「おい、明久に食わしてやりたいんなら島田も作ってきてやったらどうだ？」

「い、いや。ウチは別にいいわよっ」

「この機会に明久の好感度あげとけて」

「し、しょうがないわねっ。」

アキ！ウチも弁当作ってきてあげるわよ」

「み、美波まで本当！？

それじゃあ。美波、姫路さん、お願いします」

そう言っ明久はペコリと頭を下げる。

「さて、話かなり逸れたが、試召戦争に帰ろう」

「雄二。一つ気になっていたんだけど、どうしてDクラスからなの？」

「確かにのう。段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「明久に秀吉。この面子で行きゃあEクラスなんざ瞬殺だろ？」

「ちょうどいい機会だし自分の周りにいる面子を言ってみろ」

「えーっと……美少女二人に美少年が一人、後馬鹿が二人とムッツリが一人だね」

「誰が美少女だと！？」

「明久が俺をそんな目で見ていたとは知らなかった。悪い」

「ええっ！？雄二と空が美少女に反応するの！？」

「……………（フツ）」

「ムッツリーニに対して美少年って言ったワケじゃないからね！？」

「ならワシのことか！

やっとなとして見てくれるようになったのかの。嬉しいのう」

「秀吉までボケたら、僕だけじゃツツコミ切れない！」

「明久！今の言葉は聞き捨てならんぞっ！ワシは男じゃ！」

「どうどう。秀吉、落ち着け。
俺はお前が男だって信じてる」
「……空よ……！」

なんか知らねえけど感動している秀吉。

「それで、なんでDクラスからの？」
「Dクラス戦は打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだからだ。
それに派手にやって今後の景気づけにするのにちょうどいい強さだしな」

「その言い方だとDクラスに負けることはないってことだよな？」
「ああ。負けるわけないさ。
お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。
いいか、お前ら。ウチのクラスは

最強だ」

根拠がねえ言葉だつてのになぜかその気になってくる。
コイツのカリスマ性はすげえな。

「ふん、いいじゃねえか。そついうの」
「そうね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張ります」

「それじゃ、作戦を説明しよう」

バカと俺と宣戦布告（後書き）

作戦会議をしているのは『授業中または休み時間』のつもりであつて昼休みではありません。

昼ご飯のことが話題に上がったため昼休みと考えてしまつかも知れませんが、『授業中または休み時間』です。

バカと俺とDクラス（前書き）

編集しました

バカと俺とDクラス

空き教室

シャカカカッ

「あー……暇だ」

そう呟きながらも俺の持つシャーペンは分身が見えるほど高速で動いている。

【教えて宇童君！】

Q・空がシャーペンを持っている理由は？

A・振り分け試験のときに名前を書き忘れるという愚行を犯したために補充テストを受けているから。

Q・時間的に今日中に全科目は不可能なんじゃ？

A・無理言って20分で1科目という急ピッチ。休み時間を潰せば全科目できる。（解説：1日7時間授業で授業時間は60分という後付け設定）

Q・20分で1科目とか不可能、できてもまともな点数採れないのでは？

A・両手でそれぞれ違う問題を解いてる。

Q ・頭では1つの問題だけしか処理できないのでは？

A ・10問まで可能。

Q ・目は2つしかないのにどうやって認識しているの？

A ・問題解きながら次々見てる。（解説：問Aを解きながら問B、
C、Dと目を通していく）

Q ・そんなことしたら字がぐちゃぐちゃになるのでは？

A ・慣れた。

Q ・何点採れそうですか？

A ・400は超えるだろ。

Q ・それはどの科目が？

A ・もちろん全科目。

【教えて宇童君！終了】

あー、午前中に計画的にするべきだったな。

全然楽しくねえ。

ま、腕輪とれたと思うし良しとするか。腕輪ねえと俺の召喚獣弱え
からな。

……お、そうだ。俺の召喚獣の説明をしておこう。

容姿はデフォルメした俺で頭に白いニット帽をかぶり、『小烏丸』
のエンブレムのはいった黒いジャケットの中に白いパーカーを着込
んでいる。

武器は足に履いているA・Tエア・トレックと呼ばれるインラインスケートのようなもの。

（解説：ぶつちゃけエア・ギアのカズの格好）

ピンポンパンポン

ん？放送か

《連絡致します。船越先生、船越先生。

吉井 明久が体育館裏で待っています。

生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

船越先生（45歳 独身）

婚期を逃し、最近ついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになったらしい。

明久の野郎そこまでして勝ちにこだわるとは……。

……お前のことは忘れない。安らかに眠れ。

キリスト教徒ではないが胸の前で十字を切って『A m e n』と呟いておく。

Fクラス教室

補充テストが終わり教室へ戻ると明久と坂本の2人が話していた。

「やれる、僕なら殺れる……！」
「殺るなつての」

いきなり過ぎて話が見えてこねえ上に『話していた』って表現は間違ってる気がするな。

「ちなみに、だが。あの放送を指示したのは俺だ」
「シャアアアッ！」

明久は鋭く踏み込みコンパクトに包丁（おそらく家庭科室からパクってきたもの）を突き出す。

その狙いは避けにくく致命傷になりやすい肝臓。
さらに右手でなにかの詰まった靴下を坂本の頭上に振り落とそうとしている。

靴下の伸び具合からいってそれなりに重いものだろう。
殺す気満々だな。

元々は放送を流したヤツにするつもりだったんだろうが黒幕がいることがわかり、その黒幕である坂本を殺そうとしたってところだな。
最近の若者は血の気が多くて困るな。

「あ、船越先生」
「ちいっ……！」

坂本がそう言うのと明久は飛びかかるのをやめ掃除用具入れに逃げ込んで行く。

「おい、坂本。何やってんだ？」
「ん？空戻ったか。」
「早かったな」

「ああ、急ピッチでやってきたからな」

「そうか。」

さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着つけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、
頃合じやろつ」

「……………（コクコク）」

「おっしや！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうつー！』

渡り廊下

渡り廊下に出たのはいいんだが……………帰宅途中の生徒が多すぎてどいつがDクラスか分かんねえ。

そう思いつつ頑張つてDクラスの生徒と帰宅途中の生徒を見分けようとしていると召喚獣で戦っている明久を見つけた。

ん？あれ明久だな。

なんかやられそうだし援護でもするか。

そう思い明久のところへ駆け出すも姫路が先に着いたようで、姫路が敵を斬り伏せる。

今し方斬り伏せた相手が消えると同時に試召戦争が終わりを告げた。

……………結局何もできずに終わったな……………。
無念なり……………。

Dクラス代表 平賀 源二 討死

『『『うおおーっ！』』』』

その報せを聞いたFクラスの勝ち鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

『凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

『ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな』

『坂本 雄二サマサマだな！』

『坂本万歳！』

『姫路さん愛しています！』

代表である坂本を褒め称える声がいたるところから聞こえてくる。一部姫路にラブコールを送っているが……。

そして坂本がいる方を見ると、がつくりと項垂れているDクラス生徒の奥でFクラスの連中に囲まれている姿があった。

坂本は頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見ており照れていることが見て取れる。

坂本が照れたところを見たのは今回が初めてかもしれない。ま、だからどうした？って話だがな。

『坂本！握手してくれ！』

『俺も!』

『俺も頼む!』

にしても、もう英雄扱いか。

よっぽどあの教室が嫌だったんだな。

カビ臭いのが嫌なら換気すりゃいいだけだったのに。
ぶしょうもの
無精者ばっかだな。

そう考えていると坂本のところへDクラス代表の平賀が。

「俺たちDクラスの負けだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう」

「いや、その必要はない」

「え? 雄二なんで?」

「Dクラスを奪う気はないからだ。」

俺たちの目標はあくまでもAクラスだということを忘れたのか?」

「忘れてないけど、それならAクラスを標的にすればいいじゃないか」

「なぜそうしなかったのか少しは自分で考えてみる。」

とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか?」

「もちろん、条件がある」

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したことじゃない。」

俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。
それだけだ」

そう言つて坂本が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

この室外機は、少々貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスの物じゃねえ。エアコンついてねえしな。

じゃあどこの物か？それは

「Bクラスの室外機か」

そう、平賀の言った通りBクラスの物。

スペースの関係でここに間借りしてんだと。

「設備を壊すんだから当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

「それはこちらとしては願ってもいない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」「タイミングについては後日詳しく話す。

今日はもう行っていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

そう告げると平賀が去って行った。

「さて、皆！今日はもう解散だ！ご苦労だった！」

「んじゃ秀吉帰るか」

「そうじゃの。」

帰り道

「のう、空よ。何故雄二はDクラスの設備を受け取らなかったんじやろう?」

「そりゃ、モチベーションを維持するためだろう。」

今が酷いからちよつと上のDクラスでもすげえよく見えて、満足しちまうやつも出てくる可能性があるしな」
「なるほどのう」

その後他愛もない話をしていると家についた。

俺の家は秀吉の家の向かい側でちっちゃい頃からの付き合いだ。

「んじゃ、また明日」

「うむ、また明日じゃ」

ふう……今日一日、いろんなことがありすぎて疲れたな。早く飯食って寝るか。

こうして俺は新年度1日目を終えた。

バカと俺と昼休み（前書き）

編集しました

バカと俺と昼休み

宇童家

ピンポピピピンポーンピンポーンピンポーン

「くー……くー……ん……？」

インターホンが目覚まし代わりに鳴り響いている。
鳴らしてんのは木下姉弟だろうな。

もつと言うなら秀吉の姉の優子（確定）。

……毎度のことながら連打するのは止めて欲しい。
いつかぜってえ壊れる。

俺はのそりとベッドから起き上がり玄関までのろのろと歩いていく。
朝っぱらからこの重労働（ベッドから玄関までの徒歩）は堪^{こた}えるな
……。

「……秀吉、優子おはよう。」

んで、いい加減連打すんの止める。睡眠妨害だ」

「おはようじゃの。」

姉上がすまぬのう」

「空おはよう。」

秀吉。それじゃあ私が悪いみたいじゃない」

………実際悪いよ。

「……優子。コレ渡しとく」

「鍵……？」

「ああ、俺んちの合い鍵。

直接起こしに来てくれるとありがたい」

「え？……あ、うん！」

優子は頬を赤く染めて頷く。

……相変わらず可愛いな。

「頼むぞ？」

「んじゃ、用意してくるから待っててくれ」

そう告げると再びのろのろと動き出し、顔を洗ってから自分の部屋まで行つて着替えを済ませる。

顔洗ったらやっと目覚めた。

『空。弁当できてるから残さず食べるんだよ』

玄關に行き外に出ようとすると不意に背後から声がかかる。

「っ！？……あ、ばあちゃんか。

いつ来たんだ？」

バツと振り向くとそこにはばあちゃんがいた。

昨日の夜はいなかったのにいつの間に。

『今朝早くだよ。

ばあちゃんはいしばらく旅行に行くから、孫の顔を見てから行くこと
思つてね』

「へえ。」

あ、お土産頼んだ」

『わかったよ。』

それよりも空。

今ご飯食べずに学校に行こうとしただろ？

そいつは駄目だよ。朝食とらないと元気出ないんだから。

サンドイッチ作っておいたから行きながら食べなさい』

ほれと言ってタッパーにサンドイッチがぎっしり詰まったものを渡してくれる。

「お、さんきゅ」

『ご飯もしつかり3食自分で作るんだよ。』

それに夜更かしはしない。

それから 』

「了解。了解。子どもじゃねえんだしわかってるって」

『そうかい？ならいつてくるんだよ』

「うい」

そう返事をする俺は家を出ていく。

そっぴゃあちゃんはインターホンのこと何も言わなかったな。

「秀吉、優子。待ったか？」

「それほど、待ってないわよ。」

……ねえ、秀吉からFクラスって聞いたんだけど、何があったの？」

「あー……それはな、テストに名前書くのを忘れちゃって」

「それでFクラスになった、と？
今年は空と一緒にのクラスになれると思ったのに残念だなあ……」

優子がわざとらしく呟く。

「あー……悪い」

「ホントにそう思ってるのかしら？」

「ああ」

「それじゃあ、罰として週末にショッピングモールに行きましょ？」

「ああ、いいぞ。」

「んで、それは『2人』で、か？」

「も、もももちろんよっ！」

「優子。顔赤くなってるぞ？」

「か、からかわないでよっ！」

「ははっ、悪い悪い」

「……ワシ、空気じゃのう（ボソッ）」

俺が優子とじゃれあっていると秀吉が隣で何かを呟いた気がした。

今日は昨日の戦争で点数を消費した連中の補充らしく、俺は1点も消費していないので一人自習。
そうこうしていると4時間目が終わり、今は昼休み。

「よし、昼飯食いに行くぞ！」

今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「坂本。お前食いすぎの上にバランス悪い。」

野菜食え」

「は？ちゃんと野菜食ってるだろ。」

炒飯とかカレーに入ったニンジンとかグリーンピースとかいろいろ」

「あんだけじゃ少ないに決まってんだろ」

口内炎できちまう。

あー、恐ろし。

「雄二。そんなに食べるんなら1つくらい分けてくれると嬉しいんだけど」

「あ、そうだな。その手があった。」

坂本分けてやれ」

「は？嫌に決まってるだろ」

「雄二のバカ！ドケチっ！イ？ポっ！」

「俺はイ？ポじゃねえ！」

「お前ら食前に変なこと大声で言ってるじゃねえよ。」

それに明久。坂本の野郎は気にしてるかしんねえだろ？

あまり言ってるやんな」

「あ、雄二イ？ポだったんだね。ごめん」

「だから俺はイ？ポじゃねえって言ってるだろ！！」

コイツらイ？ポイ？ポ連呼してん何が楽しいんだ？

そうやってわーわー騒いでいるところに島田がやってきた。

「アキ。ウチはアキの分の弁当作ってきたわよ」

「……え？本当？」

明久は坂本と言いつつのを止め島田の方に向く。
そこへさらに姫路も。

「あ、あの。私も作って来ました。
それと余裕があったので皆さんの分までつくって来たので一緒にどうですか？」

「む、俺たちの分まで作ってくれたのか。すまないな」
「……………女子の手料理、興味がある」
「ほう、楽しみじゃのう」

「あー…………俺は自分の弁当があるから今回はいいわ」
「空よ、そんなこと言わずに食べればよからう」
「そうしてえけど久しぶりにばあちゃんが弁当を作ってくれたし、残すと怒られちゃう」

それなりに量が多いし頑張って食べねえとな。

「ああ、なるほどのう。
空の祖父母は怒るとおそろしいからのう。
それならば仕方がない」

「悪いな、姫路」

「いえ、大丈夫です。また今度食べてください」

「ああ、そうさせてもらう」

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、屋上でも行くかのう」
「そうか。それならお前らは先に行っててくれ。

俺は飲み物を買ってくる。

きちんと俺の分をとっておけよ」

「了解じゃ」

「んじゃ、屋上に行くか」

坂本に飲み物を任せ残りのメンバーで屋上へ。

屋上

姫路が持ってきたシートに座り、現在俺は黙々と弁当を食べている。その横では明久が島田の弁当を食べていた。島田の弁当はなかなか手が込んでそうだ。

「美波、おいしいよ!」

「そ、そう? ありがとうね」

島田が顔赤くして答える。

「美波ちゃんだけです。私のも食べてください」

そう言い、蓋をとって重箱を明久の方へ寄せると、動きの素早い康太がエビフライをつまみ取った。

「……………（パク）」

口に入れ飲み込んだ瞬間、康太が顔面から倒れ、小刻みに震えだす。俺たちは啞然としてそれを見るだけしかできない。即効性の毒でも効果が現れるにはもっと時間がかかるだろうが毒以

外に考えられねえ。

「……………姫路。康太に毒でも盛ったか？
今にも死にそうにんだが」

「そ、そんなことしてませんよ！」

「じゃあなんでだ？」

言っちゃ悪いが壊滅的な不味さなのか？」

「作る時に味見したので味に問題ないはずですよ」
「なら食べ合わせか？」

それにしてもこんな死にそうにはなんねえよな。

「もしやムツツリー二が食べたのがたまたま失敗だったのではないのかのう？」

これほど多く作ったのじゃし」

失敗しただけでこんなことになるか？
もっと別の物があるだろ？

「じ、じゃあ、姫路さんもらうね？」

明久は覚悟を決めたのか、唐揚げを摘んで口に運ぶ。

「……………うん！普通においしいよ。
やっぱりムツツリー二が食べたのがたまたま失敗だったんだよ！」
「そうかの。ならワシも食べるかのう」

そう言い秀吉が卵焼きに手を伸ばそうとした丁度そのときに坂本が帰って来たので、秀吉が動きを止める。

「おう、待たせたな！へー、こりや旨そうにじゃないか。どれどれ？」

坂本は床に倒れている康太に気付かず、秀吉が狙っていた卵焼きを素手でつかみ口に放り込む。

「ん？ちよつと酸っぱゴパツ！？」

坂本が口から有り得ない音を出してジュースの缶を床にぶちまけて倒れた。

身体も小刻みに震えている。

秀吉、顔が青くなつてんぞ？

それはそうと坂本が倒れる前に言った『酸っぱい』って単語が気になるな。

『甘い』とか『辛い』ならわかるが『酸っぱい』……。

「姫路。卵焼き作るのに酢でも使ったか？」

「いえ、酢は使ってませんよ」

酢以外は使ったってことだよな？

「じゃあ何使ったんだ？」

「薄めた塩酸と水酸化ナトリウム水溶液を」

「……なんでそれ使ったんだよ」

「塩が切れてたので自分で作るのかなと思ひまして」

……確かに中和すりゃ安全だが危険すぎる。

「そついう時は横着せずに塩を買いに行け。こんなことで人殺しになりたくねえだろ？」

「はい……」

「ま、あいつらなら死にはしねえと思うけどこれから気をつけるよ」
「わかりました!」

そう姫路と話し合っていると坂本と明久が目で語り合っていた。

（貴様毒を盛ったな!?!）

（なっ、違うよ!）

姫路さんの失敗にたまたまあたっただけだよ!
成功してるのはちゃんと美味しいんだよ?）

（本当だな?）

（うん!）

俺と姫路の会話を聞いていないためか未だに失敗だと思ってる模様。

そして明久の言葉を信じ坂本のセカンドトライ。

今度は先程明久も食べた唐揚げ。

「お!?!うまゴパツ」

今『うまい』と言いかけたのに何があった!?!

「姫路!唐揚げにも使ったのか!?!」

「唐揚げには使ってないですよ!?!」

「……じゃあマジで失敗したやつか?」

「う……そうみたいです……」

失敗がここまでヒドいとはな。

「ま、これからうまくなりやいいんじゃないの?」

「が、頑張ります！」

スリル満点の昼食を終え、復活した奴らも含めお茶をすする。

明久・秀吉は2回、ムツツリー二は3回、坂本は6回姫路の失敗＋にあたった。

「そういえば坂本、次の目標なんだけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

次の相手はBクラスだ」

「ねえ、雄二どうしてBクラスなの？ Aクラスが目標でしょ？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てない。

だがクラス単位で勝てないなら、一騎打ちでも勝てない、なんてことはない」

「でも一騎打ちにどうやって持ち込むの？」

「そのためにBクラスを使うんだよ」

「そう上手くことが運ぶかのう？」

それに、そもそもAクラスと一騎打ちで勝てるじゃろうか？

こちらに姫路がいることは既に知れ渡っていることじゃろうし。対策は練られておるじゃろう」

「そのへんに関しては考えがある。

それに宇童のやつが何も活躍していないからな。宇童のことはそう知られていないだろう。

とにかくBクラスやるぞ。明久、行ってこい」

「嫌だ！ また殴られるに決まってる！」

「明久。そのことなら安心しろ。」

Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「それが本当なら僕みたいな365度どこから見ても美少年は大丈夫だよな！」

「ああ、大丈夫だ。自信を持って行つてこい！」

そう言うとき明久はBクラスへ意気揚々と向かつていった。

明久が行った後

「……5度多かったな」

「そうじゃのう。実質5度じゃな」

そんな会話があったことを明久が知る由もない。

「……言い訳を聞こうか？」

「予想通りだ」

「雄二い！空あつ！」

バカと俺と晴れ舞台（前書き）

編集しました

バカと俺と晴れ舞台

Fクラス教室

「午後はBクラスとの試召戦争だが、殺る気は充分か？」

今回は敵を教室に押し込むことが重要になる。今日中に勝ちがきまればなおよしとてところだ。

前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。宇童は数人と組んで特攻して敵を蹴散らせ。

野郎共、きつちり死んで来い！」

『おおおーっ！っ！』

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。

やっと……やっと俺の晴れ舞台だ！

「坂本、行つていいか？」

「ああ、行つてこい！」

「了解！」

坂本の言葉を聞き終えると同時に俺は1人ダツとBクラスへ駆け出す。

クラスメイトを置き去りにしてきちまったがその内来るだろ。

「おっ、いるいる」

廊下をかけているとBクラス生徒を見つけた。
先手必勝！

「Fクラス宇童 空。そのBクラスの3人に英語勝負を申し込む」

「Fクラスがなめやがって。野中 長尾だ。受けて立つ」

「金田一 裕子よ。受けて立つわ」

「里井 真由子です。お願いします」

『試獣召喚！』

喚声に応えて魔法陣が展開し、召喚獣が顔をだす。

敵の召喚獣はそれぞれ槍、蛇腹剣、双剣を構える。対して俺の召喚獣（以後、ミニ俺）はポケットに手をつっ込んだまま直立している。

『Bクラス 野中 長尾

数学 183点

金田一 裕子

数学 159点

里井 真由子

数学 162点

VS

Fクラス 宇童 空

数学 498点』

『なっ！？姫路以外にあんな化け物がなんでFクラスにいるんだよ

！？』

『しかも、腕輪持ちよ！？』

おー、驚かれてんな。

「お前ら俺に巻き込まれないように離れとけよ。それと2人1組になって敵を倒せ。ある程度俺が引きつける」

少々遅れてやってきた俺の部隊の連中にそう指示を出し俺は目の前の敵に集中する。

景気付けにいつちよ派手なのをぶち込むか。

「『ライジング・ロード インフィニティ・アトモスフィアティ・スパイル紫電の道 無限の空・無限の紫鎗』」

ニヤリと笑い腕輪の起動キーを宣言する。

直後、召喚獣の履いているATから無数のワイヤーがのび、それぞれが鎗を形作り雷を纏う。そして

「さっきあったばっかだがここでお別れだ」

ヒュヒュヒュヒュンッ

風切り音と共に敵の3体へ鎗が迫る。

『な！？いきなりかよっ！ちくしょおおーっ！？』

『くっ、避けきれないっ！』

『きゃあっ』

野中の召喚獣は体中を貫かれ爆散し原型保っていない。

金田一のは右半身がえぐれているが頭は無事だったようでまだ僅かに点数が残っている。

そして里井のは俺の攻撃を必死に避けようとしたんだろうが、結果避け損ねたのか下半身がない。

金田一も里井も風前の灯火だ。

それに対しミニ 俺は攻撃は受けておらずピンピンしている

が腕輪の使用により点数を200点も消費している。

まだまだ扱い馴れてねえな。

腕輪使って倒しきれねえのはダメダメだ。

ま、腕輪の精度を上げりゃいいことだがな。

さてと、いつまでも生かしとくのは可哀想だしケリつけてやるか。

ミニ 俺が生き残った2人に肉薄し、蹴りを放つとすぐに0点になり、3人まとめて鉄人により補習室につれていかれる。

『の、野中、金田一、里井が戦死したぞ！』

『なっ！そんな馬鹿な！？』

『今接触したばかりだぞ！？速すぎるっ』

『一体誰がつ！姫路瑞希かつ？』

『いや、姫路はまだ来ていない！』

宇童とか言っヤツだ！』

『……宇童……だと……！？』

霧島と張り合うようなやつが何故Fクラスにいるっ！？』

『……は？はああっ！？』

そんなヤツに勝てるワケないだろ！！』

Bクラスの残り7人に驚愕の表情が浮かぶ。

「お前ら！3人討ち取ったぞ！

お前らもがんばれよー」

『宇童よくやったーっ！』

『俺たちもやったるでえー！』

『『『おおーっ！』』』

敵の士気は下がり、逆に味方の士気はあがる。

「お、遅れ、まし、た…」

そこへ息を切らしながら姫路の前線部隊が到着する。

特攻部隊つつても前線部隊とあんま変わんねえな、と思わなくもない。

『長谷川先生、Bクラス岩下 律子です。Fクラス姫路 瑞希さんに数学勝負を申し込みます！』

「あ、長谷川先生。姫路 瑞希です。よろしくお願いします」

『律子、私も手伝う！』

『試獣召喚！』

どうやら姫路の方も戦い始めたようだ。

敵の2体は剣と槍を構え、姫路の召喚獣は大剣を構え腕輪をしている。

『Fクラス 姫路 瑞希

数学 412点

VS

Bクラス 岩下 律子

数学 189点

菊入 真由美

数学 151点

『腕輪もってるなんて聞いてないわよ!?!』
「じゃ、いきますね」

姫路が小さな手を握り込む。

その動きにあわせて姫路の召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

『ちよつとまつてよ!?!』

『律子!とにかく避けないと!』

大げさなくらい横に跳ぶ敵の召喚獣。

カッ

その直後、姫路の召喚獣の腕輪が光を発し、逃げ遅れた敵の一体が炎に包まれる。

『きゃあああーっ!』

『り、律子!』

「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ」

そう言って姫路の召喚獣は相手を武器ごと一刀両断する。

おい、腕輪扱い易そうでいいな。

『い、岩下と菊入が戦死したぞ！佐野に鈴木もだつ！』

『ちっ！援軍はまだか！』

「おーし！お前らがんばれ！

Bクラス相手に押してんぞっ！

このまんまBクラスの奴らを教室に押し込むぞ！」

『『『おおーっ！』』』

そうしてBクラスを徐々に教室に押し込んでいく。

押し込むまでの間にBクラスの戦死者は20人以上、対してFクラスは3人、奇跡的に戦死者は少ない。

そんな圧倒的な進行具合にBクラスは焦る。

そこへこの状況を好機と感じFクラス本陣の奴らが出てきた。

『Fクラスが総攻撃をしかけて来るぞっ！』

『くっ！俺らBクラスがFクラスに負けてたまるかつ！』

そんな安っぽいプライドなんざ潰してやるよ。

んじゃ、いっちょやったるか。

と意気込んだ丁度そのとき、Bクラス代表の根本 恭二が視界に入
った。

そのBクラス代表は手に封筒を持ってニヤニヤしている。

そして、それを見た姫路が動きを止めてうつむいてしまった。

もしかして姫路のか？

姫路の様子からすると大事なモノっぽいな。

……ラブレターとかか？おそらくA君宛てだろうな。

ふむふむ、なら取り返してやらねえとな。

「姫路、あれお前のか？」

「う……そ、そうです……」

「じゃあ、俺らで取り返してやるよ。
な、明久。根本の野郎ぶつ潰すぞ」

ちょうど近くに来た明久に話を振る。

明久の表情から怒っていることが感じ取れる。
久しぶりにコイツがマジなところ見たな。

「うん！」

姫路さん。辛いのなら休んでた方がいいよ？」

極力怒りに燃えていることを表に出さないよう優しい声音でそう告げる。

「吉井君……」

「さあ、空。行こうか？」

「ああ。援護してやる」

Bクラス教室

『Bクラス田中 亮。Fクラス吉井 明久に物理勝負を申し込む』

「Fクラス吉井 明久。受けて立つ」

「明久。援護する」

『な！？宇童相手に1人では無理だ。田中、俺ら援護するぞ』

『すまない。広瀬、越前』

『試獣召喚！』

敵の3体の召喚獣はそれぞれ斧、鎚、大剣を持っている。
動きは遅そうだが、攻撃の威力は高そうだ。

『Bクラス 田中 亮』

物理 163点

広瀬 幸司

物理 198点

越前 亮輔

物理 155点

VS

Fクラス 吉井 明久

物理 69点

宇童 空

物理 589点
』

『くっ！やはり宇童は強敵だな』

『だが吉井の方は雑魚だ』

『雑魚からつぶすぞ』

敵は明久を集中的に狙うらしい。

だが、そうはさせねえ。

「『重力の道無限の空 - 無限の軌跡』」
グラフィティ・ロボンフィニティ・アトモスフィアティ・ローカス

ミニ 俺は腕輪を発動し、足元に斥力を発生させ斧を持った召喚獣に接近する。

速すぎるためか相手は反応できないようで、そのまま背後にまわり足に重力球を発生させて蹴りをいれる。すると、相手の上半身が消し飛ぶ。

『クソッ!』

「まず1匹。んで5秒くらいか?」

実はこの腕輪は発動中に毎秒10点ずつ消費されちまうから素早くきめねえといけねえんだ。ま、次いくか。

続いてミニ 俺は鎚を持った召喚獣に迫る。

点数がさっきのより高いためミニ 俺の動きに反応したが、避けきれずに腕が消し飛ぶ。

そして無理に避けたために相手は体制を崩しこけ、その隙を衝いてそいつの頭を重力球で消し潰す。

「2匹目つと」

最後に明久の方に向かうと明久の召喚獣が大剣を持った召喚獣の点数をチビチビ削っていた。

一向に終わりそうにないので後ろから重力球を一発。

「3匹目。んで終了つと」

全部倒しきるのにトータルで12秒程。

『くっ!!俺たち3人がかりで手も足もでないとはっ!』

3人がかりつつつてもバラバラだったし負けるワケねえ。

「さあ、根本を潰しにいくぞ」

「うん！」

根本に遭遇するまでに10人程補習室送りにしたため、だいぶ教室がすいてきた。

我ながら反則じみた強さだな。

「さあ、根本覚悟しろよ！」

Fクラス宇童が

『Bクラス山本が受けます！試獣召喚！』

「チッ、近衛部隊か！邪魔くせえんだよ！」

「なら、Fクラス吉井が」

『Bクラス伊藤が受けます！試獣召喚！』

「こっちにも近衛が！」

「は、ははっ！驚かせやがって！」

取り繕うように俺らをわらう根本。

だが、そのわらいも長くは続かない。エアコンが停止したため、涼を求めるために開け放たれた窓から突如侵入してくる2つの人影。

1つは保健体育担当の体育教師、そしてもう1つは康太のもの。

「……………Fクラス、土屋 康太。」

……………Bクラス根本 恭二に保健体育勝負を申し込む」

俺らが近衛部隊を引き付けたため、丸裸となった根本 恭二に逃げ場はない。

「くっ、くそおーっ!!」

『試獣召喚』

『Fクラス 土屋 康太

保健体育 441点

VS

Bクラス 根本 恭二

保健体育 203点』

黒い忍装束を纏った康太の召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は集結した。

バカと俺と戦後処理

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？
本来な設備を明け渡してもらい、お前らに素敵な卓袱台をプレゼン
トするところだが特別に免除してやらんでもない」

そんな坂本の発言に、Fクラスの奴らがざわざわと騒ぎ始める。

「落ち着け。前にも言ったが

、俺たちの目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない。ここはあく
まで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうと
思う」

その言葉でFクラスの奴らはどこか納得したような表情になった。

「……条件はなんだ」

「条件はお前だよ、負け組代表さん。正直去年から目障りだったん
だよな。」

そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。

Bクラス代表がコレを着てAクラスに行って、試召戦争の準備がで
きていると宣言してくれば今回は設備については見逃してやってモ
いい。ただし、宣戦布告はするなよ。あくまで戦争の意志と準備が
あるとだけ伝える」

坂本が女子の制服を持って言う。

どこから持って来たかは聞かないでおこう。人の趣味はそれぞれだ
しな。

「ば、バカなこと言うぐふっ！」

「Bクラス全員で必ず実行させるよ！」

Bクラス生徒が根本の鳩尾を殴る。

……変わり身早いな。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」
「了解っ」

そう言っでぐったりと倒れている根本から制服を剥ぐ。

「うーん……。女子の制服どうやるのか分からないや。
ねえ、頼んでもいい？」

「ええ、いいわよ」

「悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるか」

酷い言われようだな。まあ、否定はしねえが。

「明久、封筒あったか？」

「うん」

「じゃあ、姫路にわたしとけよ？」

んじゃ、俺は帰るな。秀吉、帰ろうぜ」

「うむ、明久また明日じゃ」

「空、秀吉。また明日」

教室に戻り荷物を取って、階段を降りようとするBクラスの方が
根本の声が聞こえてきた。

『こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！
さ、坂本め！よくも俺にこんなことを』

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！』

『き、聞いてないぞ！』

『そりゃ、言っていないからな』

「……やっておるのう？」

「あんな奴撮って何になるんだよ？」

まあ俺らには関係ねえし、ほっといて帰るぞ」

バカと俺とさらば卓袱台（前書き）

編集しました。

優子VS空戦が增強されています。

バカと俺とさらば卓袱台

Fクラス教室

Bクラス戦が終わってから2日後の朝。

いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺たちは、もうじきお別れになる予定のこの教室で最後の作戦の説明を受けていた。

「周りの連中に不可能だと言われていたにも関わらず、俺たちはここまで来た。」

残すはAクラスのみだ！」

『おおおーっ！！』

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。

勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

テンション高えな。

「そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

『誰と誰が一騎討ちをするんだ？』

『宇童と霧島か?』

「いや。やるのは俺と翔子だ」

コイツ血迷ったか?

いくら坂本が頭がいいつってもそれは最下層のFクラスの中だけだぞ?

そんな俺の考えと同じヤツがいたのか坂本に抗議の声を上げる

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあつ!？」

が坂本が投擲したカッターによりすぐに黙らされる。
どうせならもつと粘れよ。

「次は耳だ。」

……まあ、明久の言うとおり翔子は強い。

まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。

だが、まともにやりあえば、だ。

現にDクラスにもBクラスにも勝っている。今回だって同じだ。

俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。

俺たちの勝ち揺るがない。

俺を信じて任せてくれ。

過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ!!』

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ。

科目は日本史。レベルは小学生程度、方式100点満点の上限あり。

召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

ふむ。FクラスがAクラスに勝負を挑むのならそれが妥当だろうな。
だが

「俺はそれで勝てるとは思わねえ。」

お前はまともに勉強してないだろうし、それに俺らが小学生のころ
と今のとでは改変されたところもあるだろう。

例えば『聖徳太子』の写真は『聖徳太子と伝えられている人物』の
写真つてのに変わってるらしいぞ？

そんな感じでお前が知らないことが出題される可能性がねえワケじ
やねえ。

てか確実に1問はある」

「ワシも同意見じゃ。」

それに同点じゃったら延長戦じゃろうし、レベルも上げられるじゃ
ろうな」

「おいおい、あまり俺を舐めるな？そこまで運に頼り切ったやり方
を作戰などと言うものか」

「？それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルの
テスト程度なら何の問題もないだろう」

「雄二。あまりもったいぶるでない。」

そろそろタネを明かしてもいいじゃろう？」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。

俺がこのやり方を選った理由は1つ。

ある問題ができれば、アイツは確実に間違えると知っているからだ。
その問題は『大化の改新』。その年号を問う問題ができれば俺の勝ち。
確実にアイツは間違える。アイツは一度教えたことは忘れないから

な」

その自信はどこからくるんだ？
嫌な予感しかしねえな……。

「この戦いで俺は勝つ！

そうしたら俺たちの机は」

『システムデスクだっ！』

Aクラス教室

今回は代表である坂本を筆頭に俺、明久、康太、秀吉の5人で宣戦
布告にに來ている。

明久に任せてヘマしでかしたら堪^{たま}ったもんじゃねえからな。
それでまず俺が先陣切ってAクラスに入れとのこと。
他の奴らは廊下で待機中。

んで、できれば俺1人で交渉しろだと。

坂本の野郎、無茶言ってくれるな。

「よ、優子」

「あれ？空どうしたの？」

「あー……俺らFクラスはAクラスに試召戦争を申し込む。
こっちの代表とそっちの代表の一騎打ちって形でな」

『『『！？』』』

おー、驚いてんな。

「何が狙いの？」

「狙い？あー……Fクラスの勝利」

てかシステムデスク？

「うーん、面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけど、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要も無いと思わない？」

「それを俺に聞くか？」

ま、賢明だな。

ところでBクラスとやりあう気はあんのか？」

「Bクラスって……、昨日来ていた『あの』……」

「ああ。アレが代表やってるクラス。

幸い宣戦布告はまだされてねえみたいだが、どうなんのかな？」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから3ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

「実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなってるんだぜ？」

規約にはなんの問題もねえ。

BクラスだけじゃなくてDクラスもな」

俺は無関心だったから『和平交渉にて終結』ってことをさっき坂本に教えてもらうまで知らなかった。

んで、一応ここまでは坂本の予想通りの流れ。

アイツってこういうことに向いてるよな。どこまで先を見てんだろうな？

「……それって脅迫？」

「人聞き悪いこと言うなよ。」

ただのお願いだ」

「うーん……そうね。」

何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんて有り得ないからその提案受けるわ」

うし、交渉終了

「でも、こっちからも提案」

今まで優子としか話していなかったが今になって横から第三者の声が入ってきた。

そちらを向くと短髪のボーイッシュな女子生徒が。

坂本！緊急事態発生だ！

まさかのAクラスからの提案が出てきたぞ！？

だが、内心そんなことを考えているということを表に出さないのが俺クオリティー。

「代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い5人ずつ選んで一騎打ち5回で3勝した方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「……………」

考える！どうやったら勝てる？

もし受けた場合誰ならAクラスに勝てる？

坂本：x

明久：x

秀吉：x

康太：保健体育なら？

島田：×

姫路：おそらく？

俺：絶対？

お、3勝できんじゃない？

「その条件呑んでもいいぞ」

「ホント？嬉しいな」

「だが、勝負内容はこっちで決めてもいいだろ？
そんなくらのハンデがねえとイーブンじゃねえ」

そうしねえと康太が使いもんになんねえ。

「優子。どうしよ？」

「え？うーん……」

急に振ってやんなよ。

「……宇童」

「あ？どうした霧島？」

「……宇童の提案を受けてもいい。」

「……けど、その代わり条件がある」

坂本おっ！更に条件付け足されそうなんだが！？

「条件ってなんだ？」

「……負けた方は何でも1つ言うことを聞く」

「それは誰に対して？」

「……Fクラスに対して」
「……」

やべえ……。マジやべえ……。
何する気だ？

……いや、ネガティブに考えんなポジティブに考える。
逆に言えばこつちが向こうになんかできるってことだ。
なら、うまいこといけば優子とクラス同じになれるんじゃない？
よしやあつ、俄然やる気出てきたっ！

「その条件も呑んでやる」

「……雄二に伝えておいて」
「了解」

「空。勝負内容の5つの内2つはこちらで決めさせてくれないかしら？

残り3つは空のところが決めていいから」

今まで考えていた優子からの妥協案。

「ああ、いいぞ」

ぶつちやけ保健体育さえなんとかなれば勝てるだろうってだけだから
な1つだけでも問題ねえ……ハズ。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでもいいか？」

「……わかった」

「んじゃ交渉成立だ。
また後でな」

「ええ」

優子に手を振ってAクラスから出ると明久が話しかけてきた。

「空！どういうつもり！」

「どういうつて何がだ？」

「霧島さんの出した条件のことだよ」

交渉のこと聞こえてたっばいな。

「それがどうかしたか？」

「『どうかしたか？』じゃないよ！」

姫路さんの了承を得てからじゃないとあんな約束したら駄目じゃないか！」

もしかしてコイツ霧島が同性愛者だと思ってんのか？
んなことあり得ねえっての。

「心配すんな。」

姫路に迷惑かかんねえから。

それに、勝ちやいい話だろ？

勝負する前から弱気になってんじゃねえよ」

「そ、そうだね！」

姫路さんの貞操と人生観のために絶対に勝たないと！」

1人燃える明久。

やる気が出るとはいいいことだ。

「空。よくやった」

「おー、さんきゅ」

「それじゃあクラスのヤツらに報告するから一旦帰るぞ」

「了解」

Aクラス教室

「では、両名共準備はいいですか？」

Aクラスの担任かつ学年主任の羊羹（高橋 洋子）が立会人を務める。

「ああ」

「……問題ない」

「それでは1人目の方、どうぞ」

「私から行くわ」

Aクラスからは優子が出るようだ。

「空。行つてこい」

「了解。」

優子。好きな科目選んでいいぞ

「え？ いいの？ 負けても知らないわよ？」

「大丈夫だ。負ける気はさらさらねえから」

「それは私もよ。」

それじゃあ、高橋先生。生物でお願いします」

『試獣召喚!!』

喚声に応じ魔法陣から軍服を着、手にはレイピアを持った優子の召喚獣（以後ミニ優子）が現れる。

『Aクラス 木下 優子

生物 427点

VS

Fクラス 宇童 空

生物 467点』

「腕輪あんのか。手強いな」

「空もね。」

ホーネット
『毒蜂』!」

そう叫び腕輪を発動させながら鋭い突きを放つミニ優子。それをミニ 俺は半歩左に移動することで避け、その伸びきった腕の、軍服の裾を右手で掴み脇に左肘を入れて投げ飛ばす。

『おおーっ!?!』

まるで熟練者がするような滑らかな動きだったためか周りから感嘆の声があがる。

よせやい。照れるじゃねえか。

にしても、ただ投げ飛ばしただけだしあんま点数減んねえな。

「っ……！やっぱり操作が上手ね。

よくあんなことができるわね」

「それほどでも」

柄にもなく謙遜してみる。

「でも、負けないわよっ！」

「おう、どっからでもかかって来い」

話している間にミニ優子は体勢を立て直し再びミニ俺に迫り連続で突きを放ってくるが

「数撃ちや当たるってワケじゃねえんだぜ？」

その全てを、弾き、住^いなし、躲^{かわ}すミニ俺。

ふむ。なかなかスリルがあつて面白え。

ま、優子からしたら当たりそうで当たanneえからストレス溜まりそうだが。

「っ……ちょこまかと!!」

案の定イライラが爆発し突きの速度が上がる。その分、精度は下がったが。

速度が上がっても、冷静になんねえと俺には勝てねえよ？

それに大振りで隙だらけだ。

ミニ優子の連撃の合間を縫って懷に潜り込み蹴り飛ばすミニ俺。そして追撃するため後を追うがミニ優子は素早く体勢を立て直しミニ俺を迎え撃つため身構える。

「突きしかできねえ武器でカウンターを狙うのはどうなんだ?」
「串刺しにするだけよ!」

おー、怖。

ガキヤッ

ついにミニ 俺とミニ優子が接触。

ミニ優子のレイピアに対しミニ 俺はA・Tで迎え撃つ。

カンッ

『ロード・グラディウスファイニティ・アトモスフィアティ・ブレイズ
剣の道無限の空 - 無限の剣聖』」

レイピアを弾き腕輪を発動するとA・Tの踵^{エア・トカがヒ}部分から太腿の方へ湾曲した剣が1本ずつ生える。

「優子。なかなか強かったがコレで終わりだ」

俺がそう告げると優子はなにやら不適な笑みを浮かべる。

「そうね。コレで終わりのよう、ねっ!」

「なにを……っ!?」

ミニ 俺が足を振り抜くよりも先にレイピアを振り下ろす。

ザシユッ

そんな音と共にミニ 俺の右肩から左脇腹にかけて大きな裂傷が走

った。

それによりミニ 俺はバランスを崩しミニ優子を蹴り（斬り）損ねる。

「く……っ!？」

なんでレイピアで『斬る』動作ができたんだよ!？

「いい具合に引っかかってくれたから助かったわ」

嬉々として表情でそう告げる優子。

「どういうことだ？」

「レイピアは突きだけの武器じゃないのよ空？」

「なん……だと……!？」

「突きしかできないのは『フルーレ』っていう武器。

レイピアと似てるから間違えたのも無理もないでしょうけど。ま、これで私の勝ち揺るがないわ」

「ハッ、こんなもん屁でもねえ」

実際屁以上で非常に困る。

「強がるのもいいけど私が腕輪持ちなの忘れてるのかしら？」

そう言つてミニ 俺を指差す優子。

ん？なんうおっ!？徐々に点数が減つていやがる!？毒みたいだな。なんつう厄介な能力なんだよ……。

確かにこれは負けちまうかもしねえ。だが

「殺られる前に殺っちまえばいい!」

未だにミニ 俺の目の前にいるミニ優子に向かって足を振り抜く。

「っ！？」

突然の出来事に驚いた優子はレイピアで防ぐのではなく、距離をとって避けようとした、いや『してしまった』。

「優子。その避け方はハズレだ」

本来なら剣の範囲外の『その場所』に容赦なくそれ（剣）が振るわれる。

「っ！？伸びたっ！？」

「御名答。俺の蹴りは避けちゃいけない。防がねえとな。ま、形勢逆転だ。このまま終わらせんぞ」

ミニ 俺は腰を落としキュッキュツとリズムよくステップを踏み、ミニ優子の背後に回り込む。

「今度こそ終わりだ」

そしてミニ優子の首を刈り取る。

『Aクラス 木下 優子

生物

0点

VS

Fクラス 宇童 空
生物 21点

「勝者Fクラス宇童 空」

羊羹ようかんの宣言にFクラスの連中が歓声をあげる。

「やっぱり空は強いわね」

「優子だって手強かったぞ。」

操作も巧かったし、優子があの時油断してなかったら、もしかしたら負けてたのは俺だったかもしれねえしな」

「そう？ ふふっ、ありがとう」

「お、おう！」

優子の笑みにドキッとしちまったぜ。

「空、戻ってこい。次の試合がある」

「ん？あー、了解。」

優子、また後でな」

「うん、そうね。」

そうしてFクラスの方へ戻って行く。

2 試合目

Aクラス佐藤 美穂 VS Fクラス吉井 明久。

明久が実は左利きなんだ、発言をするも瞬殺されフィードバックにより痛がっている。

……何がしたかったんだろうな。

続いて3試合目。

「では、3人目の方どうぞ」

「……………（スクツ）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

次は工藤と康太が戦うようだ。

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？…………キミとは違って、実技で、ね」

「……………」

お、康太がなんの反応も示さねえ。
珍しいこともあるもんだな。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？
勉強苦手そうだし、保健体育教えてあげようか？
もちろん実技で」

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

ちよつと可哀想だな。

「じゃあ、宇童君はどう？」

「受けて立とう（キリッ）」

「あ、愛子！？空は私とするからそんなの必要ないわよ！」

その言葉を聞き工藤はひゅーと口笛を吹き、告げる。

「優子って大胆だね？」

「あー、優子。テンパつてるとこ悪いけど今すんげえ爆弾発言したぞ」

「……………え？あつ、……………」

優子の顔が真っ赤に染まる。

それを聞きFクラスの奴らが殺気立つ。

『宇童よ。この戦争が終わってから覚えていろ！

我ら異端審問会の名において、学園の風紀を乱す貴様を処刑する』

処刑は確定かよ。

「ま、テメエらなんざ返り討ちにしてやるがな」

俺はそう言つて親指を首の前で横に一閃。

それをし終え再び康太の方に意識を向ける。

「ムッツリー二君。今日のボクってノーブラなんだよ？」

「……………（ポタポタ）」

あ、やっと反応しだした。

「それにこの部屋暑いね」

工藤がそう言っただけでシャツの胸元をあけ、シャツの襟を持ち風を送りこむ。

あ、康太の鼻血が激しくなった。

「……………（ダバダバ）」

「それじゃあ始めようか？」

お手柔らかにね」

工藤が康太にお辞儀をする。

ノーブラでシャツの胸元開けてっからピンクの突起物が見えちまうワケで。

「……………（ブシャアアア）」

「康太っ!？」

『Aクラス 工藤 愛子

生命活動 ALIVE

VS

Fクラス 土屋 康太

生命活動 DEAD

「え?……………」

工藤が何が起きたか分からず啞然としていて、徐々に理解したのか顔を赤くする。

元はエロいのかもしねえけど実技派って言うのはフリだったっばい。

それはそうと2対1でもう後がねえ。

康太が勝つと思ってたのにまさかこんなことになるとは……。
さすがに予想外だ。

続いて4試合目はAクラス久保 利光 VS Fクラス姫路 瑞希。
私は死にましえーん、Fクラスの事がちゆきだからー、発言で総合科目で400点差オーバーで普通に勝利。

そしてついに最終試合。

Aクラス代表霧島 翔子 VS Fクラス代表坂本 雄二。
坂本の宣言通り、小学生レベルの100点満点日本史勝負のようだ。
霧島と坂本はテストを受けるため別の教室へ。

俺たちは坂本たちが受ける問題がディスプレイに映し出されるためそれに目を向ける。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

：

（ ）年 大化の改新

：

： 《

あ、出た。

「これで僕らの卓袱台が
システムデスクに！」
」

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《F	《A
クラス	クラス
坂本	霧島
雄二	翔子
VS	
53	97
点	点
》	》

俺らの卓袱台がみかん箱になった。

バカと俺と約束事（前書き）

編集しました

バカと俺と約束事

「3対2でAクラスの勝利です」

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「言われなくてもそうするつもりだ。

バカ本、歯食い縛れ」

そう告げて拳を握る。

「空君、落ち着いてください！」

「こんなので落ち着いてられるかよ！

なんだよ53点って！

お前が小学生の問題だっつって舐めてなかったら勝てたはずだぞ！」

「言い訳はしねえ……」

潔けりや許してもらえんでも思ってたのか！？

「その言い分もムカつきマス
だ・か・ら……死ねえっ！」

側頭部に向け蹴りを放つ。

バコッ

「イタッ」

そう声をあげる坂本。

……意識を刈り取れないのはまだよしとしよう。

……だがっ、なんで頭が傾くだけで吹っ飛ばねえんだよ！

そんじょそこらの野郎だと病院送りだというこの『悪魔の右足（今命名）』を受けて『イタッ』だと！

連邦（Fクラス）のMS（坂本）は化け物か！？

「……ところで、約束」

康太がその言葉に反応しカチャカチャと撮影の準備をしだす。

「わかっている。何でも言え」

「……それじゃ、雄二。」

私と付き合って」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに」

坂本は霧島に首根っこを掴まれ、拉致られて行った。
どこに嫌がる必要があるのかわからねえ。

「ねえ、空」

「ん？」

「私の条件吞んで」

「条件？あれはクラス単位で1つだろ？」

「そうだったかしら？忘れちゃったわ」

そう言ってチロツと舌をだす優子。

すくく……可愛いです……

「というわけだから私の条件も呑んでね？」

「……ならお手柔らかに頼む」

何言われんだ？

サンドバックか？いや、でも優子そんな凶暴じゃねえし。

「あ、あのね……」

もしかして昔みたいに着せ替え人形みたいにする気か！？

昔はちっこかったから女物の服着てもなんともなかったけど今着たら大変なことになんぞ！！

「き、今日から一緒に家に帰ろ？」

「………悪い。もう一度言ってくれ」

なんか今結構普通なことが聞こえたような？

「だ、だから！……き、今日から一緒に帰ろ？」

聞き間違いじゃなかったっばい。

「そんなことでいいのか？じゃあ、いくらでも」

付き合ってやるよ、と言おうとしたところで明久に声を被せられる。

『総員、投擲用意！』

異端者宇童 空に正義の鉄槌をつ！』

『『『おおーっ！』』』

「は？お前ら何やってんだ、よっ！

優子に当たったらどうしてくれんだ！」

話している途中にカッターがとんで来たので脚で蹴り払い審問会の奴らに迫り次々と蹴り倒して行く。

そして誰もいなくな ゴホンツ 数分後には審問会の奴らは床に伏していた。

「優子。怪我ねえか？」

「空が守ってくれたから大丈夫よ」

あー……、その言葉なんかいい。

1人じーん、と感傷に耽っていると俺の耳に野太い声がかかる。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

「鉄人。何か用か？」

「宇童、西村先生と呼べ。」

貴様ら喜べ、お前らは戦争に負けたおかげで担任が俺に変わるそう
だ。

これから1年死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『なにいつ！？』』』

「お前らFクラスはよくやった。

だが、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡って
いく上では強力な武器だ。

ないがしろにしているものではない。

とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやろう。
今日『だけ』は存分に遊ぶといい」

鉄人はニヤニヤと嫌な笑顔でそう告げる。

「あのれ鉄人め！僕から自由を奪うのがそんなに嬉しいか！

こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ。

「じゃあ優子。帰るか？」

「ええ、そうね」

優子の口元が綻びる。

戦争には負けちまったが優子の笑顔が見れるんなら別にいいかもな。

設定（前書き）

オリ主＋腕輪

設定

名前：宇童うどう空そら

性別：男

身長：178センチ

体重：72キロ

容姿：母親似で西欧人風の顔つき。碧眼で少々たれ目、地毛が金髪。細身だが締まっているため体重重め。

利き腕：右

特技：合気道（祖母直伝）、キックボクシング（祖父直伝）など

部活：工学部

補足：父親は日本人、母親はイギリス人、姉が1人おり現在大学生でイギリスに留学中。

国語・古典：大地の道『無限の空 - 無限の地層』

腕輪：自分の半径二メートル以内にいる地面に触れている召喚獣（敵見方問わず）の動きを封じる、自分も発動中は移動不可

数学：紫電の道『無限の空 - 無限の紫鎗』

腕輪：無数のワイヤーが鎗を形作り雷を纏わせて相手を貫く、発動時に200点消費

英語：轢藍の道『無限の空 - 無限の轍』

腕輪：カウンター時に自動で発動、相手の攻撃に合わせてATで攻撃することで相手のダメージに自身の本来の攻撃力を上乗せしてダメージを与える、タイミングを間違えれば腕輪は発動しない、相手の攻撃力が大き過ぎると弾き返しきれずに多少ダメージを負ってしまう、高度な操作技術が必須

化学：炎の道『無限の空 - 無限の煉獄』

腕輪：「時」（ATによる高速の拳打）を点数を消費して発動、一発につきマイナス10点、最低五発打つため最低でも50点消費する、最大10発

物理：重力の道『無限の空 - 無限の軌跡』

腕輪：自分の足もと限定で点数を消費（使用時は10点/秒）して引力と斥力、重力球を発生、擬似的な瞬間移動を可能とする

生物：剣の道『無限の空 - 無限の剣聖』

腕輪：ATの踵部分から太腿の方へ湾曲する剣を生やす。200点消費。発動中は折れても自動修復

日本史：荊棘の道『無限の空 - 無限の荊鎖』

腕輪：ATのホイールが荊のようになりリーチの大幅up、威力は変わらず

世界史：血痕の道『無限の空 - 無限の牢獄』

腕輪：50→100点消費で『牙』を放つ、広範囲殲滅、消費した点数により『牙』の範囲変化、50点で召喚獣5体分100点で10体分

現代社会：泡翠の道『無限の空 - 無限の泡爆』

腕輪：自身を中心に泡の膜を形成、それに触れたものに泡が広がり体全体を覆うと爆発し相手を消し去る、10点/秒消費

保健体育：腐海の道『無限の空 - 無限の悪夢』

腕輪：二秒間相手を追尾するデフォルメされた豚の召喚
サイズは二つ

小、召喚獣の頭ほど最大五匹、一匹につき消費10点、相手に接触すると小爆発、爆発をうけた場合自身にもダメージ

大、召喚獣ほど最大二匹、一匹につき消費50点、相手に接触すると五秒間拘束、拘束中相手は腕輪の使用可

バーサーカーモード、召喚獣に角が生え暴走状態になる、敵味方関係なく無差別攻撃、任意でon/off可能、点数消費10点/秒

総合科目：翼の道『無限の空 - 無限の風』

腕輪・空気の面を手や足で捉えることにより自在に風をおこす

閑話：俺と優子と約束の週末

side 宇童

Aクラスと試獣戦争をした週の週末。俺は優子と市内のショッピングモールに来ていた。

ショッピングモールは規模が大きく西館に映画館やゲームセンター、飲食店、東館に洋服屋や靴屋、本屋などがある。

そして今、俺たちは西館にいる。

「優子。映画見に行くか？」

「ええ、行きましょ。」

何見るのか決めてるの？」

「もちろん。」

俺のオススメだ」

そう言つて映画館へ向かう。

「やっぱ休日って混んでんな」

「そうね。家族連れとかカップルが多いし。」

……ねえ。私たちって周りから見たら付き合ってるように見えるのかしら？」

「んー、見えるんじゃないか？」

優子はそう見えるのが嫌か？」

「そ、そんなワケないじゃない！」

「そうか、嬉しいこと聞けたな。」

んじゃチケット買っぞ」

side out

side 須川

異端審問会のメンバーである俺こと須川 亮は週末の日課として異端者がいないか見回りをしていた。

今日は1ヶ月前にできたというショッピングモールに来ている。1ヶ月前にできたからと言って侮ることなかれ。ここはすでに魔の巣^{デイト}窟と化し、多数の異端者を捕縛した。妬まし ゲフンゲフン 由々しき事態である。

そんなこんなで見回りをしていると映画館に宇童 空が木下 優子と楽しげに入って行くではないか！？本来ならすぐに捕縛しに行くが今回は相手が悪すぎる。

俺はトランシーバーを使いショッピングモール内にいる他の審問会メンバーに告げる。

「こちら、須川。応答願う」

『こちら、工藤。何があった？』

「A級異端者宇童 空を見つけた。増援を頼みたい。場所は西館映画館前」

『了解した。メンバー全員でそちらに向かう』

「了解」

20分後

「須川。A級異端者はどこだ？」

「今は映画館の中だ。出て来次第捕縛し審問会を開く」

『了解しました！』

side out

side 宇童

「見応えあつて面白かったな！」

「そうね！また見に来ましょ！」

「ああ、いいぞ。」

「んじゃ次どこ行く？買い物か？それともゲーセン？」

「ちょうど西館にいるんだしゲームセンターに行きましょ」

「了解。」

「……ん？なあ、優子。」

俺、あそこの集団に見覚えあるんだが気のせいかな？」

「え？うーん……気のせいじゃない？」

「そうか。なら行」

『宇童が出て来たぞ！捕らえろっ！』

『おおーっ！』

「……気のせいじゃないっばいな。優子！逃げるぞ！」

俺は優子の手を握り適当に逃げ回つつゲームセンターへと向かった。

ゲームセンター

「優子。プリ撮ろうぜ？」

「え？でも、逃げてる途中でしょ？」

「プリ機の中に入れば上半身見えなくなるし分かんねえだろ？」

「そんな簡単に行くかしら？」

「大丈夫だって。統率力なかったし、そこまで頭まわんねえと思う」
「そう？」

「なら撮りましょ」

優子と一緒にプリ機の中に入る。

「400円入れてつと、……設定よく分かんねえから任せた」
「わかったわ」

優子が画面をタッチして設定を進めていく。
手慣れてんな。

「……できたわよ」

「さんきゅ。」

サイドチェストおお！」

「筋肉ないのに何やってるのよ！？」

「いや、俺は細身だがねえワケじゃねえからな。

それに、ボーズをとってこそそのプリクラだろ？」

「わざわざ似合わない格好しなくてもいいんじゃない？」

「……ごもつともです」

そんなこんなで撮り終えラクガキをし、印刷されてできあがった物を優子が手に取る。

「空。私可愛く写ってるかしら？」

「ああ、可愛いぞ」

「ホント!？」

「ああ、マジだ。『本気』と書いて『マジ』と読むくらいマジだ」
「ふふっ、ありがとう」

そう言つてニツコリと笑う。

……その笑顔が一番可愛いです。

「まだ、さっきの奴らは来そうにねえし他のゲームもしねえか？」

「ええ、いいわよ。」

……あつ。あれにしましょ」

優子が周りを見渡しUFOキャッチャーを指差して言う。

「いいぞ。何狙うんだ？」

「黒ネコ。」

空が取つてね？」

「優子はしねえの？」

「私は下手だから取ってくれると嬉しいなあ……と」

「了解。任せとけっ!」

数多のUFOキャッチャーを攻略してきた『落とし神』と呼ばれた俺の技をその目に焼き付けろっ!!

実際の『落とし神』とは全く意味が違います

「ほら、注文通り黒猫。それとブタとサル」

そう言いながら取った3匹をぶらぶらさせる。

「1回で3つも取るなんてスゴいわね」

「まあ慣れてるからな。」

「……お、あれやっていいか？」

「……パンチングマシン？別にいいわよ。」

でも空じゃ大した記録はでないんじゃない？」

「いやいや、あんま俺をナメちゃいけねえよ」

そう言っただけ俺は100円を入れてパンチングマシンの前に立つ。

「勝利のっ！！ガゼルッ！！パンチッ！！」

そう叫びながらパンチを放つ。

ドンッ

ピ。ピ。ピッ

《498kg》

「！？スゴいわね！？筋肉あるように見えないのに！！」

「だからあんまナメちゃいけねえって言っただろ？」

それでよ、もう一発やらしてくんねえか？」

「いいわよ」

再度100円を入れてパンチングマシンの前に立つ。
目指すは500kg以上だがパンチじゃそれは難しそうなので今度は蹴り。

腕の3倍の筋肉が足にはあるって聞いたことがあるからたぶん500kg超えは簡単だろう。

「フッ!」

バゴッドンッゴロゴロ

ピピピッビーツ!ビーツ!

《999kg》

《error》

「あ、やつべ」

「空!? 跳び蹴りはダメでしょ!」

「そんなことより、早くここから離れるぞ! やりすぎた」

まさか機械が吹っ飛ぶとは思わなかった……。

反省はしたが後悔はしねえ。

「もう。なにやってるのよ!」

「ははっ、悪い悪い。」

お、ちょうどいい時間だしこのまま飯食べに行くか?」

「……話をそらされた気がするけどいいわよ。」

それで何食べるの?」

「あー、そうだな……マクナドでどうだ?」

「いいわよ。それじゃあ食べに行きましょう」

side out

side 須川

空たちがプリ機の中へ逃げ込んだ少し後。

くっ、宇童め。逃げ足が速いな。

一体どこに逃げたんだ？

俺はトランシーバーを出し連絡をとる。

「宇童は見つかったか？」

『まだ、見つかっていません。何か心当たりはありませんか？』

異端者が好き好んで行きそうな場所に』

「異端者が好き好んで行く場所……まったくもって検討つかないな」

『今までにも捕らえて来たのに本当に分からないんですか？』

「分からないと言っているだろ！

今回のようなケースは稀なんだ！

第一級審問官だからといってなんでもできるわけではないんだよ！」

訝しむような声音で問われ、つい声を荒げてしまう。

『すいません……』

「……いや、俺も悪かった。何か思いついたら連絡する」

10分後

異端者の行きそうな場所。

……！！そういえば異端者なら誰もが好んで行く場所があるじゃないか！

「こちら、須川。宇童が潜伏しているであろう場所の目星がついた」

「こちら、工藤。」

それはどこだ？」

「おそらくゲームセンターだろう。」

プリクラを撮っていると思われる」

「！？……なるほど。確かに異端者ならそこに行く可能性は高いな。数人連れて向かう」

「了解した。」

……くくっ。さあ、宇童。存分にもがくがいい」

工藤がついた頃には空たちはもう昼食をとっており、須川が自信満々に宣言したことに1人悶えることになるのは少し後の話。

side out

side 宇童

「それじゃ、買い物に行くか？」

「ええ。」

アクセサリーを買いに行きましょう」

「その店分かるか？」

「ううん。ここは初めてだし分からないわ」

「じゃあ探しながら行くか」

そうして歩くこと15分

「優子。あれじゃね？」

「そうね。早く入りましょ！」

「うおっ！？」

優子にグイッと引つ張られ店に入る。

シルバーアクセサリーの店のようだ。店内を見ていると女性従業員が声をかけてきた。

「いらっしやいませ。どのようなモノをお探しですか？」

「あー……優子。この人に聞いたら欲しい物が分かるんじゃないか？」

「え？あ、うん。分かったわ」

優子はアクセサリーを見るのに熱中していたらしく従業員が来たのに気づかなかったようだ。

優子が従業員さんと選んでいる間、俺は店の中にあるベンチに座って待っていた。

俺はアクセサリーとかつけたことねえからこういうのは全然分かんねえ。

しばらくすると優子が買い終えたのか戻って来た。

「いいのあつたか？」

「うん。欲しいもの買えたし今日はこのぐらいで帰らない？」

「まだ、2時だけどいいのか？」

「ええ」

「そつか。んじゃ、帰るか」

帰り道

「空。これあげるわ。今日付き合ってくれた分のお礼」

そう言つて渡してくれたのはチェーンに指輪が通されたもの。

「お！さんきゅ。」

んで、これってどこにつけんの？」

「首にかけるのよ。つけてあげようか？」

「ああ。頼む」

本来なら俺が優子につけてあげるべきなんだろうが勝手が分からねえ。

「で、優子はどんなの買つたんだ？」

「え、えつと……今、空が首にかけてるのと同じやつ……」

少々言いよどむ優子。

「おお！お揃いかつ！

そういうのっていいよな？」

「どうして？」

「だって俺と優子が付き合ってるみたいじゃねえか」

俺がそう言つと優子がビクツとする。

「優子どうした？」

「あ、え、えつと……その……空は……いいの……？」

「ん？何がだ？」

「その……私と付き合つても……」

「もちろん！」

……あれ？コレってある種の告白だよな？

こんなグダグダはいただけねえ。ちゃんとしよ。

「ちょっと待ってくれ」

俺はそう言つて深呼吸を数回し、優子に向き直る。

「優子。俺は優子のことが好きだ。
だから

「俺と付き合ってくれねえか？」

「……………」

俺の言葉に優子は俯き沈黙する。

「……………」

そして2人揃って沈黙。

……………。

ずっと続くかと思われたその沈黙は優子が口を開くことで破られる。

「……………こちらこそよろしくお願いします（ボソ）」

小さな声だがはっきりと俺の耳にその言葉が届く。

その言葉を聞き俺の心に軽口を叩くくらいの余裕ができる。

「^{かしこ}畏まっていつもの優子らしくねえぞ？」

「……………だって今までこんなことなかったのよ？」

「告白されることはよくあったじゃねえか」

「それとこれとは全然違うわよ！」

「だって……………今までと違って……………」

優子の声が尻すぼみになる。

「優子どうした？」

「……………好きな人……………なんだし（ボソッ）」

「ん？悪い、聞こえねえ」

「な、なんでもないわ！」

絶対なんか言ったよな？

このー木なんの木気になる木ー っでことで

「気になる」

「これはダメよ！」

おう、結構マジなご様子で。

「悪い……………」

「あ、空が悪いわけじゃないのよ？」

「あ？そうなのか？」

急に大声出したから俺が変なことしたのかと」

「心配しなくても大丈夫よ。」

さ、家に帰りましょ」

「ああ、そうだな」

「空。私の家に寄ってく？」

「お？いいのか？」

「んじゃ遠慮なく」

「さあ、入って」

優子に促され中に入る。

「秀吉とかいねえのか？」

「秀吉は吉井君のところに遊びに行ってるし、お母さんとお父さんは2人でドライブに行ってるわ」

「そうか。んじゃ、今は2人つきりか」

年頃の男女が2人つきりつてのはなかなか危険なシチュエーションだな。

「そ、そうね。」

そ、空は先に私の部屋に行って。私は飲み物持ってあとから行くから」

「優子にだけ働かせるのは悪いから俺も手伝う」

「そう？じゃあお願い」

そう言いながら優子が冷蔵庫の中から麦茶の入ったペットボトルを取り出しお盆の上に置く。

そして俺はコップを2つ取り出して麦茶の横に置くとお盆を持ち、階段を上がり優子の部屋に行く。優子は俺の後ろについて来る。

「……優子。これどこに置けばいいんだ？」

「どこって机の上に」

「机の上どころか床にもスペース空いてねえんだが」

「え？あつ！ちょっと部屋から出て！すぐ片付けるから」そう言われ俺は部屋から追い出される。

5分後

「さ、入って」

「お！さっそく今日取ったぬいぐるみ飾ってんだな」

優子の部屋に入ると今日とったぬいぐるみsがすでにベッドの枕元に置かれていた。

「うん。空が取ってくれたからね。それよりも立ってないで座ったら？」

そう言つて優子は自分が座っているベッドを指して言う。
俺はそれに従つて座ると優子が肩に頭を預けてきた。

「優子。疲れたのか？」

「え？あ、そんなんじゃないわよ。」

「……ただ……こうしていただいだけ」

そうして穏やかな時が過ぎていき、1時間程して優子が俺に向き直つて言う。

「ねえ。キスしよ？」

そう言つて優子は目を閉じる。
いきなり過ぎやしませんか？

そんなことを考えていると俺の中の悪魔が囁いた。

『そういうことにいきなりもクソもねえよ。』

とつとと漢を見せるよ！ぶちゅつと一発やっちゃまえ。

その後は優子を食っちゃまえ！向こうもそれを待ってんだろ？』

悪魔の言葉通りに行動しようとする今度は天使が囁いた。

『いきなりぶちゅはいただけないな。最初は軽く、続けるほどに深くがいいと思うね。』

雰囲気がよくなればそのままやっちゃってもいいと思うけど、ゴムつけた方がいいと思うよ』

……どっちにしろ悪魔も天使も言ってること変わんねえじゃねえか。まあいい、据え膳食わぬはなんとやら、だ。いっちょ決めてやる。

俺は優子の肩を掴み、徐々に顔を近づけていく。そしてついに優子と唇が触れ合う。

その唇はまさにマシユマロのよう

1000点だ！！！！！！

……はっ！？いかん！某ムツツリモミアゲの台詞が出てしまった。
一瞬でもトリップさせるとは、おそろべしマシユマ口唇。

俺はそのまま優子の口内に舌を侵入させ犯す。優子も負けじと俺の舌に舌を絡ませる。

こいつはやべえ。理性が吹っ飛びそうだ。
というわけで一旦顔を離す。

「優子……」

「……空あ」

優子は顔を上気させ、猫なで声で俺を呼ぶ。

そんなのを聞いて我慢できるはずもなく俺はもう一度キスをし、

今度は服の上から胸を揉みしだくと優子は艶っぽい声で喘ぎだす。

ちっ、服が邪魔で胸の感触がわからねえ。

そう思い服を脱がそうとした瞬間エンジン音と玄関の開く音がして、
ふと我に返る。

「あー……優子。今日はこれで終わりっばい」

「……そうみたいね。」

空、キスしてくれてありがとう。嬉しいわ」

そう言われたのでまた優子にキスをする。

こいつは癖になりそうだ。

「不意打ちは卑怯よ?」

「嫌がってないしいいかな、と思ってな」

「否定はしないわ。」

空。今日の夕食はどうするの?」

「ばあちゃんが旅行に行つてて誰もいねえから1人寂しく食べることになるな」

「じゃあ、ウチで食べていかない?」

「お? いいのか?」

「もちろんよ! お母さんに言ってくるわ」

「さんきゅ」

そうして夜は木下家で過ごすことになり、ついでに泊まることとなった。

秀吉の部屋に布団を敷いて寝たが、朝起きると優子が潜りこんでおり、優子を抱いて（抱き枕的意味）二度寝した。

次に起きた時には昼前で優子がこちらをじつ、と見ていたのでキスをしてやると照れて布団から出ていく。そうしてやっと起きると遅めの朝食を採り、バイトに行く。

バイトから返るとまた木下家で夕食を採ることになり、食べた後は家に帰って風呂に入って寝た。

約束の週末は俺にとって充実したものであった。 side out

s i d e 忘却の須川

空たちが帰った後、それを知らずに根気よく探すも見つかるワケもなく。空1人を捕まえることに熱中し過ぎたために異端者を多数捕らえ損ねたとかどうか。ぶっちゃけもうどうでもいい。

s i d e o u t

バカと俺と秘密兵器（前書き）

2 巻開始

バカと俺と秘密兵器

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、変わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

俺らの通う文月学園では、新学期最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

だが俺の所属しているFクラスでは全く準備が進んでいない。そもそもまだ出し物が決まっていなかったりする。

今も本来なら準備をする時間だがバカ共は野球をしにグラウンドに出ていつている。

そんなわけで、教室にいる時間がもったいないため、俺は今部屋に来ており『清涼祭』でお披露目する『あるもの』を創っている。

『あるもの』とは、ズバリA・T。エア・トレック別名『自由への道具』エア・ギア

A・Tとは超小型強力モーターをホイールに組み込んで、高性能のサスペンションとエアクションシステムで武装した自走シューズのこと。

ホイールのかわりにちっこい玉を使ってるのもあるが俺はホイールの方が好きだ。

できたら玉レガリアも創ってみてえな。

玉レガリアってのは特別なホイールのことだ。例えば…そうだな『牙の玉レガリア』なんかだと衝撃波が撃ちやすくなる。

生身の人間が衝撃波なんか出せるワケない、って思ってるかもしれないけどこれが出せるんだよ。ビックリだろ!?

静止状態から瞬時にトップスピードに達する加速と、トップスピードを瞬時に静止状態に戻すフル・ブレーキング能力、所謂『0-1

00-0（ゼロ・マックス・ゼロ）』と言われる過酷な運動と、それに耐えきれぬ柔らかく強靱な太腿があれば撃てちまうんだ。俺は『0-100-0（ゼロ・マックス・ゼロ）』の運動に耐えきれぬ太腿はもう持つてんだよ。あとはA・Tの完成と『牙の玉璽』次第で人間兵器になれちまう。俺はこれにロマンを感じるんだがどう思う？

それで進行状況だが、ほぼ完成している。今は調律中だ。
『調律』^{チューニング}つてのはA・T^{エア・トレック}を使用者の生体リズムにあわせることによつて扱い易くすることだ。

これが結構難しいんだよ。考えごとをしながらしちまうと狂うからひたすら無心でしねえといけねえんだ。何も考えないつてのは簡単そうで難しいよな？

そうやって調律をしていると急に部屋のドアが開く音がした。
音に反応してしまいちよつと狂う。
うがーっ！！一体誰だよ！！

そう思いバツとドアの方に振り返るとそこには秀吉がいた。

「空よ。クラスの出し物決まったから呼びに来たぞい」
「ん？あー、了解。」

それとこの時期部屋に入るのは静かにな

「うむ。わかったぞい。」

それはそうと何を創つておるのじゃ？」

「『清涼祭』の時に披露目するからその時まで秘密だ」

俺はそう言つて口の前に人差し指を立てる。

「なら『清涼祭』楽しみにしておるぞ」

「おう、目んたま飛び出るぐらいビックリさせてやるよ！」

「それは楽しみじゃのう。」

さて教室に行くかの？」

「了解」

Fクラス教室

「帰ったぞ」

「あ、空。おかえり」

「出し物何に決まったんだ？」

「えーっとね。中華喫茶『ヨーロッパ』になったよ」

中華喫茶なのにヨーロッパか。

変わってんな。

「へえー。喫茶店か。これまたベタだな。」

中華喫茶って言うくらいだからチャイナドレスでも着るのか？」

「今のところはそれはしないっぽいよ。女子が3人しかいないし」

「おい、秀吉は男だぞ」

「うつつ……。空だけじゃ！ワシを男扱いしてくれるのは」

秀吉が俺の横で感涙にむせんでおり、俺の言葉を聞いた明久は意味分らないって顔をしてる。

こいつの中で秀吉は女子って認識らしい。

やべえ、こいつ。早く何とかしねえと久保 利光と同じ方へ走り出

しそうだ。

「それはそうと空はホールと厨房どっちにするの？」

「ん？俺は客寄せ『だけ』するよ」

「2択なのに……」

「客寄せしとく方がたくさん客が来ると思っただが？」

「う……分かったよ。空は客寄せね」

「ああ。そう言うことだから俺は部室に戻るな。

秀吉、何かあったら呼んでくれ」

「了解じゃ」

時は流れ放課後

「うしつ。やっと調律できたっ！
チューニング

んじゃ次は玉璽創るか」
レガリア

どの玉璽にすっかな？
レガリア

んー……『牙の玉璽』もいいけど『炎の玉璽』も捨て難い……。
レガリア

……よし！『炎の玉璽』にしよう。『牙の玉璽』だと衝撃波が見え
ねえから、観てる方は面白くねえだろうし。
レガリア

『炎の玉璽』はホイールを高速回転することによってできる摩擦熱
で蜃気楼や上昇気流を作り出す。走り方次第では炎を出すこともで
きる。
レガリア

『炎の玉璽』を使わずに普通のホイールでも炎を出したり蜃気楼を
作り出したり、といういろでできるがホイールの消耗が激しい。

「設計図作らねえといけねえな……。今日はもう遅いし家に帰ってからでいいか。」

「んじゃ、優子を迎えに行くか」

そう呟いて俺はAクラスに向かっていく。

Aクラス教室

「優子。帰んぞ！……て、優子いねえかなあ、その君！」

「あ、はい。なんですか？」

「優子どこ行ったか知んね？」

「木下さんですか？」

「確か体育館の方に行つてたと思いますよ？」

「お、そうか。さんきゅ」

礼を言つて優子の荷物を持ち体育館へ駆け出す。

体育館にて

『先生！覗きです！変態です！』

むっ！？優子の悲鳴。誰だ覗きやがったクソ野郎は！

そう思い悲鳴の聞こえた方へ駆けて行くと坂本と明久がこちらに走ってきた。

おい。まさかこいつらなんじゃねえの？

ふざけやがって！！このクソ共死に曝^{さら}せ！！！！

俺は荷物を置いてバカ2人に突撃する。

俺はまず坂本に跳び蹴りを放つ。俺がゲーセンでerror(99kgオーバー)を叩き出したあの跳び蹴りを、だ。

それは見事坂本の鳩尾に入り、坂本は元来た道に逆戻り。

気は失ってはいないが相当なダメージを受けたようで動けないでいる。

Aクラスとの試召戦争の時も思ったが、気を失ってねえとか化け物だな。

生命力が半端ねえ。

そんな床に伏したままの坂本が俺を睨みつけ目で語ってきた。

(空。覚えてろよ)

(逆恨みすんな、この覗き魔)

(覗いてねえよ！！)

(優子の悲鳴がちゃんと聞こえたぞ。『覗きです！』っていう悲鳴が)

(それは冤罪だ！)

(言い訳は聞きたかねえ)

俺はそう吐き捨てて(?)明久に向かう。

明久には後ろから腰に腕を回しジャーマンスープレックス。

「え？空！それはがっ！……………」

明久が俺のジャーマンスープレックスに制止の声を上げるが無視してキメる。

そして頭から落ちたためにすぐに気を失った。

ふと思ったのだが合気道もキックボクシングも使ったことがねえ気がする。

じいちゃん、ばあちゃん悪い。

いつか、いつの日か必ず使う。

「鉄人。こいつらの始末頼んだ」

そう言ってバカ2人を追いかけていた鉄人に身柄を引き渡す。

「宇童、助かった。

だが、鉄人と呼ぶなと何度言ったら分かるんだ！」

「あー、悪い悪い」

「まったく。今回は許してやるが次はないと思え」

「了解」

鉄人が補習室に去った後、制服姿の優子が更衣室から出てきた。悲鳴あげてた割に意外と図太いな。

「あ、空。

ねえ、今失礼なこと考えてない？」

「考えてねえよ。

それより帰ろうと思うんだが優子も帰ろうぜ？」

俺は素知らぬフリをしてそう尋ねる。

これが世に言う地文読みか。すげえな。

「ええ。帰りましょ。でも荷物とって来ないと」

「優子の荷物持って来てんぞ」

そう言って優子に荷物を渡してやる。

「ありがとう。」

それじゃ、帰りましょ」

バカと俺と走行練習（前書き）

編集しました。

走行練習を詳しくしました。

バカと俺と走行練習

翌日

教室に入るとバカ2人が俺のことを恨めしそうに睨んできた。

「覗き魔共。俺を睨むな」

「てめえのせいで補習室送りになっただんだぞ！」

「そうだ！謝れ！！」

「なんで謝んねえといけねえんだよ。自業自得だろうが。」

にしてもこれが霧島に知られたら坂本はどうなっちゃうんだろうな？」

「く……っ！翔子には絶対言うなよ」

「昨日のことを水に流すんなら考えてやらんこともない」

「……分かった。水に流そう」

「じゃあ、言わないでいてやるよ。」

明久のことは、島田と姫路に言っというてやるから安心しろ」

「な！？そんなこと言ったら僕が酷い目に遭っちゃうじゃないか！
！？」

「それが嫌なら水に流せ」

「く……っ！？腹に背はかえられない。……水に流すよ」

「『背に腹はかえられぬ』だからな。腹に背じゃねえから」

「そつとも言っよね。」

それはそつと、もしかしたら姫路さんが転校しちゃうかもしれないんだよ！！」

「へえー、そうか。で？」

「で？って。何も思わないの！？」

「転校する理由が分かんねえのに対策なんざたてられるワケねえだろ？」

「あ、そうか。えーっとね、理由は『Fクラス的环境』らしいんだ」「汚ねえってことか？」

「うん」

「じゃあ、喫茶店の売上を設備改善にまわせばいいんじゃないの？」「そうなんだけど……」

「まだなんかあんのか？」

「うん。まわりの人がみんなバカばかりだから勉強しても伸びないんじゃないか？って言うのも理由らしいんだ。

それで試召大会に出て、Fクラスでもちゃんと伸びてるってところを両親に見せて、Fクラスを見直してもらうつもりなんだって」

「あー、なるほど。

でも、それだけじゃ親はOKはくれねえだろうな」

「え？なんで？」

「やっぱライバルがいた方が伸びるからな。

それがクラスにいないんじゃない、いつか伸びなくなる日がくるしれない、って心配されちまうかもしれないねえ」

その結果転校、と。

親は相当教育熱心っぽいな。

「そっか……」

「ま、そういうことなら俺も試召大会に出て、Fクラスにこんなやつがいるんだぞ、ってアピールすりゃいい話だ」

「それはいい考えだね！！」

「だろ？」

「んじゃ、エントリーしてくるな。

ついでだし坂本と明久もエントリーしとくぞ？」

会話に入っていなかった坂本も巻き込んでおく。
旅は道連れ世は情けっていうしな。

存分に俺を助ける。助け合いじゃなくて助ける。

「へ……？あ、ちょっと待って！」

「おい！なに勝手にエントリーしようとしてやがる！！」

「嫌なら俺を捕まえることだな」

俺はそう言って学園長室へエントリーしに行く。

学園長室

坂本たちに捕まらずにここまでたどり着いた。

「邪魔すんぞ」

「失礼なガキだねえ。入るときはノックしてから入りな」

「あー、悪い悪い」

中に入ると学園長が教頭と話をしており、学園長からお叱りの言葉が。

ま、反省してねえけど。

そんな俺を睨みながら教頭が言う。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。

これでは話を続けることもできません。

……まさか、貴女の差し金ですか？」

「馬鹿を言わないでおくれ。

どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「さっきから言っているように隠し事なんて無いね。

アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

そう告げると、教頭は部屋の隅にある植木鉢に一瞬視線を送り、踵きびすを返して学園長室を出て行った。

植木鉢に何かあるらしい。

気になるけど触らねえのが俺クオリティー。

「んで、アンタは何の用だい？」

「試召大会のエントリーに来た。

エントリーすんのはFクラス宇童 空と坂本 雄二、吉井 明久の3人」

「2人1組のペアでの出場だよ。

1人あぶれるけどどうするんだい？」

「あー……んじゃ、吉井、坂本ペアと俺1人、つてのはダメか？」

「……ふむ、それでいいさね……」。

あとでその2人にここに来るよう伝えな」

「了解。

んじゃ、邪魔したな」

そう言って部屋から出るとちょうど坂本と明久がやってきた。

「やっと見つけたぞ」

「おー、遅かったな。バッチリエントリーしてやったぞ」

「何いい!!」

「何てことしてくれるのさ!？」

「別にいいじゃねえか。姫路のためだろ？」

あ、学園長が来いって言ってたぞ。

じゃ、俺は教室に戻るな……の前に。

坂本、部屋の隅にある植木鉢あさつとけよ」

「は?どういうことだ?」

「あされば分かる」

そう言いながらひらひらと手を振って俺は教室へ去っていった。

放課後

昨日家に帰って『炎の玉璽^{レガリア}』の設計図を書いてみた。

あんま難くなかったからすぐ書けた。

んで、今はパーツを組み立て中。

2時間もすりゃできそうだ。

2時間後

完成！！

ホイールの側面には九尾の狐がかかれており、その尻尾は炎のように揺らめいている。

THE『炎の玉璽』^{レガリア}って感じた。テンションあがる！！

できた記念に走行練習がしてえから今日は優子と別々に帰るか。

【To: 優子

Title:

Text:今日は走ってから帰るから一緒に帰れねえ】

送信つと。

メールを見ての通り俺はtitle書かない派。

ブーブーブーブー

あ、もう返信きた。

【From: 優子

Title: Re2

Text:意味がよくわからないわ
もっと詳しく】

【To: 優子

T i t l e : R e 3

T e x t : 風になつてくる】

【F r o m : 優子

T i t l e : R e 4

T e x t : 余計意味がわからないわ】

じゃあなんて送りやいいんだ？

【T o : 優子

T i t l e : R e 5

T e x t : スケートしてくる】

……間違っちゃいねえよな？

【F r o m : 優子

T i t l e : R e 6

T e x t : それなら私も行っていい？】

【T o : 優子

T i t l e : R e 7

T e x t : 驚かせてえからダメだ】

……。。

返信来なくなった。

河原

俺が今やってんのは『歩く（ウォーク）』。

『歩く（ウォーク）』とは初心者がまず最初にするガニ股歩きのこと。

ただガニ股でヨチヨチ歩くだけでいいんだが、これが何気に難しい。気を抜くと滑って転けちまいそうになる。

道路

ある程度なれてきたため今度は走行練習。

河原は石が多かったため道路に移動してきた。

「あー、ドキドキすんな」

ちゃんと走れっというけど。

俺は恐る恐る地面を蹴るが力が弱すぎるためアシストモーターが反応せずのろのろしか進まない。

「ふんっ！」

今度は思いっきり地面を蹴る。

するとその力にアシストモーターが反応しホイールが回転・加速します。

シャカーーーーッッ

「うおっ!?!」

速っ！？

いきなり車並のスピード出てんじゃねえか！？
コイツは怖え……。

プーーーーッッッ！！！！！

そんなことを考えていると俺の前方からトラックが。

やべえ！？まだ死にたくねえぞ俺は！！

どうすりゃ……いや、こっいつ時こそ落ち着け俺。
まずは風を感じる。風を

ザアアアアアアーーーーーッ

そして『風』を切り裂き『空』を駆け！！だ！！

t r i c k : W i n d W i n g

突如俺の姿が消え去る。

だがそれはトラックに弾き飛ばされたワケではなく、トラックのわけた気流に乗ったため。

「ふう……一時はどうなんのかと思ったけど無事で何より。
にしても今のどうやったんだ？」

無意識でやったからよくわかんねえ。

そんなこんなで一般道を走り回る。

走ってる最中に何度クラクションを鳴らされたことやら。

そして1時間ほど走っているとついに白バイが出向いて来やがった。

白バイは馬鹿みたい速くその上しつこさが半端じゃなかった。

危うく補導されかけたがそのおかげで走るのにだいぶん慣れた。

んで、気づいたんだがここらへんには『暴風族』はいねえらしい。

俺の二つ名じゃなくてA・T使い（ライダー）って意味の方な。

それにA・Tを取り扱ってる店がねえ。
エア・トレック

ま、だから俺は自分でつくることになったんだが。

ネットとかだと結構いろいろ『ストームライダー暴風族』同士の戦とか技がバトルアップさ
トリック
れて有名ぼそうなんだけどな。

そして家に帰った頃にはもう10時を回っていた。

5、6時間走ってたっぽい。その内の大半は白バイに追いかけられてたが。

『清涼祭』の始まる1週間前までほとんどそんな感じだったので優

子に怒られた上にしばらく口を利いてもらえなかった。

そのため、『清涼祭』の始まる1週間前からまた一緒に帰るようになり、帰った後もこれまでの反動があつてか俺の家で過ごすようになった。

その一週間で大人の階段を駆け上がったのは俺と優子だけの秘密。いつぞやの大胆発言が本当になったな、と1人感慨にふけていた。

バカと俺と清涼祭初日（前書き）

編集しました

バカと俺と清涼祭初日

『清涼祭』初日の朝

「おはよう。」

お、いつも汚ねえのにだいぶよくなってるな。このテーブルとか」

ガラガラと扉を開けFクラス教室に入ると最近見慣れたみかん箱が姿を消し、変わりに立派なテーブルが置かれている。

「あ、それは木下君がみかん箱で作ってくれたんですよ。」

どこからか綺麗なクロスを持ってきてこう手際よくテキパキと」

尊敬の目で秀吉を見る姫路。

いつものダンボールが劇的ビフォーアフター。

秀吉って器用だったんだな。

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。」

その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

そう言っでクロスを捲ると見慣れた『みかん』の文字が多数。

「これを見られたら店の評判ガタ落ちね」

島田の言つとおり、コレを見られたらイメージダウンは免れねえだろつな。

「きっと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」

「そうですね。」

わざわざクロスを剥してアピールするような人は来ませんよ、きっと」

「ま、来ても俺が潰してやるよ。」

最近おもしろえことやってっから」

そう言つてA・Tの入ったバッグを指差す。

「空君。それなんなんですか？」

「あとで見せてやるから楽しみにしとけ」

「はい！」

姫路の頭を撫でながら言う元気よく返事をする。

姫路つて犬っぽいよな。後ろから尻尾振りながらついて来そうだ。

そう考えていると康太が陶器のティーセットと胡麻団子がうつ載ったお盆を持ってやって来た。

「……………飲茶も完璧」

「おー、美味そうだな」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

俺らは作りたての温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「ムツツリーニ、美味しいよー!!」

「ふむふむ。表面はカリカリでありながら中はモチモチ。甘すぎず、

食感もよい 100点だ!」

「……………(ブイツ)」

俺が目をクワツ、と開け康太に言うと言サインを返してきた。

「あの、空君。私も作ってみたので点数お願いします」

「了解。

……………ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいが んゴパツ」

俺の口からありえない音が出た。そして目に映るのは俺の16年間の軌跡。

ああ、あの時の優子は非常によかつ……………はっ!?!これは走馬灯か!

「空君、どうですか?」

「姫路。 100点だ!」

マイナス側にな。

「え!ホントですか!?!じゃあ、皆さんの分も作ってきます!」

大事な部分を省いて言ってしまったため、勘違いし毒団子を量産しようとしている。

てかやめろ!!俺以外に被害を増やそうとするんじゃない!!

「姫路。そう言うのは大切な人に作ってやった方がいい。

例えばA君とかにな?

だから今は作るな」

「え?わ、分かりました!!」

同じクラスのA君を犠牲にして被害の拡大を防ぐ。
A君、健闘を祈る。

「んじゃ、俺は客寄せしてくる」

ひらひらと手を振って教室から出て行く。

客寄せをして時間を潰し、今は試験召喚大会1回戦。

『えー。それでは、試験召喚大会1回戦を始めます』

「1人とは余裕ですね？」

余裕とかじゃなくて単に数があぶれただけだ。

「宇童！この前の仮は返すわよ！」

「あー、勝手にしてくれ」

『では、召喚して下さい』

『試獣召喚！！』

喚声に応えてお馴染みの魔法陣が足元に展開されそれぞれの召喚獣が召喚される。

金田一の召喚獣（以後、ミニ金）は蛇腹剣を、里井の召喚獣（ミニ

里）は双剣をそれぞれ構える。

『2 - Bクラス 金田一 裕子

数学 187点

2 - Bクラス 里井 真由美

数学 199点

VS

2 - Fクラス 宇童 空

数学 521点
』

「な、なんて点数なの!?

く……っ！真由美、一気にいくわよ？」

「分かった！」

そう言つてミニ金、ミニ里を操作しミニ 俺（空の召喚獣）に向かつて駆けてくる。

そしてその勢いのまま2体ともミニ 俺にそれぞれの武器を振り下ろす。

「おっと。お前ら、自分の武器のこともっと知った方がいいんじゃないの？」

特に金田一。お前の武器は近距離にむかねえ」

そう言いながらミニ 俺は余裕をもって蛇腹剣で攻撃してきたミニ金側に避ける。

そして振り下ろし終えた蛇腹剣の腹を足で押さえつけ、ミニ金に2、3発蹴りを高速で打ち込み（余談だが俺自身もA・Tを使うようになり操作技術が大幅upしたため今のようない技ができるようになった）、よろけたところを思いっきり蹴る。

するとミニ金は蛇腹剣を手放して吹っ飛んでいく。

「もらったっ！」

そう叫びながら蹴り終えた後の硬直を狙いミニ金が双剣を振り下ろしてくるが、ミニ金は前転してそれを危なげなく避けながら蛇腹剣を拾う。

「里井、甘すぎだ」

そしてミニ金は低姿勢のまま振り向き、それと同時に蛇腹剣を左から右に横に一閃するとミニ金の上半身と下半身が斬り離され、続けて右腕を上げて振り下ろすとミニ金の頭が半分になり消え去る。

余裕じゃねえとか言ったけど前言撤回。コイツら相手だと余裕だ。

ミニ金が倒されたその一瞬の出来事に啞然としているミニ金に迫り、首に目掛けて蛇腹剣を振るうと反応する間もなく首と胴体がおさらばする。

「俺を倒してえんだったらもつと操作技術の腕を上げてからにしろ」

そう言っただけで2人の表情が苦くなる。

……腕輪使うような場面はなかったな。

『勝者、宇童 空』

とりあえず一勝。

何とはなしにに教室に帰ってみるとちょうどモヒカン野郎と坊主頭が気持ち悪い動きをして喫茶店に入るところだった。

怪しさ満点だったため、そいつらが入る直前に制服の襟元を掴み隣の空き教室に引っ張り込む。

「おい！何しやがるんだよ！？」「それはこっちの台詞だ。」

お前からこそ何しようとしてたんだ？気色悪い動きしやがって」

「はあ？お前に何の関係があるんだよ！？」

「それって何かするつもりだった、と受け取ってもいいよな？」

「……………」

「沈黙もまた答えなり。認めたと判断するぞ。」

んで何してたんだ？」

「お前に言うわけねえだろ？ばーか」

「……はあ。高校生にもなつてそれはねえだろ？」

なんだよ『ばーか』って。お前の方が馬鹿だろ？」

そう返してやると茹で蛸のように顔が真っ赤になるモヒカン野郎と坊主頭。

「2年風情が調子にのるなよ！」

「凶星か？情けねえな。」

お前らの頭に詰まってるのは脳みそじゃなくてスポンジだろ？

あ、スポンジに失礼か。ははっ、悪い悪い」

「な、舐めるなあ！！」

「気に食わねえんなら、かかって来いよ。捻り潰してやる」

そう言つて指をクイッククイックと動かすとモヒカンと坊主がアイコン

タクトや言葉等の合図をを交わさずに俺の方へ駆け、両サイドからパンチを放ってくる。

ふむ。なかなか息が合ってたな。だが些か動きが単調すぎやしねえか？

俺は右から来る坊主のパンチを避け、その伸びきった腕に手を添えてモヒカンの方に投げ飛ばす。

「っ！？」

ゴンッガシャンッ

モヒカンは坊主が飛んできたことに驚き咄嗟にしゃがんだようで、坊主は受け止められることなく積み上げられて山のようになっていた机や椅子の塊に突っ込んでいった。

起き上がらないことから気絶していると分かる。

なんとも痛そうだ。

ふと『時』のことを思い出したので実践してみようと思う。

『時』とは、本来A・Tで加速した蹴りや平手で、動作の基点となる『動き出し』を止め、さらに顎の先端や後頭部、首筋の根元の神経節を撃ち、運動中枢の自由を完全に奪うことをいう。

相手は頭を打った時と同じように目が霞み、炎のような陽炎が見える。

意識ははっきりしていても体は動かず灼けるような熱さを感じるた

めこれは『炎の道』の技の1つとして数えられる。^{トリック}

俺は腕を前に伸ばし、手のひらをモヒカンに向けるように人差し指と中指、親指を揃えて立て、それ以外を軽く握りむ。それを右の指が上に、左の指が下に向くようにして構え宣言する。

「『時よ』!!」

「死……っ!? あがつ!? ……………」

体勢を立て直し再び殴りかかろうとしたモヒカンにそれよりも速く蹴りや平手を打ち込む。

うー、これは疲れるな。やっぱA・Tがあつた方が楽だ。

俺は腕をプラプラさせながらそう思うと1人教室を出ていった。

そして教室には机や椅子の山に埋もれた坊主頭と殴りかかろうとしたままの体勢で石像のように固まっているモヒカンだけが残っていた。

「それでは、試験召喚大会2回戦を初めてください」

『試獣召喚』

『2 - Aクラス 新島 和也

英語 369点

2 - Bクラス 小野 亮

英語 220点

VS

2 - Fクラス 宇童 空

英語 409点

新島の召喚獣（以後ミニ島）は大剣、小野の召喚獣（以後ミニ小野）は表面にでっかい棘が4つついた大型の盾を構える。

「お前らに攻撃させる気はねえから、そこんところしく」

『腕輪持ちだからってナメるなよ！』

『ぶっ潰してやる！』

「勝手に言ってる。」

『紫電の道 - 無限の空無限の紫鎗』
ライジング・ロード インフィニティ・オメガスフィア・スパイル

腕輪を発動させるとミニ 俺のA・Tの後輪から無数のワイヤーが伸び、雷を纏った鎗を形作る。そして

「悪いがここから先は一方通行だ！！！！」

放つ。

『なっ！？いきなしかよ！？』

亮、頼んだ！』

『任せとけ！あんな針金全部防いでやる！』

するとミニ小野がミニ島の前に出て、盾で鎗に真っ向からぶつかり防いでいるが

『2 - Aクラス 新島 和也

英語 369点

2 - Bクラス 小野 亮

英語 179点

VS

2 - Fクラス 宇童 空

英語 209点』

ミニ小野の点数がどんどん減っていく。

『……っ！？亮！点数が凄い勢いで減っていったぞ！』
『クソっ！防いでるのになんでだ！？』

おー、パニックってんな。

「親切な宇童君が1つ教えてやる。
ワイヤーは雷纏ってたんだ、防ぐと感電すんぞ？」

ま、わかったところでどうもなんねえけどな。

俺はミニ 俺を操作し右側のA・Tから出ているワイヤーをミニ
俺の右足に纏わせ敵2体に接近させる。

「盾諸共砕けろ」

そして、その足で盾を蹴るとそれに合わせてワイヤーが一斉に放たれ、盾と敵2体をまとめて貫きトドメとして膨大な熱量が全てを溶かす。

『く……っ!』

『一方的すぎる……!』

「当たり前だろ？」

「一方通行だ、って言ったんだから」

『勝者、宇童 空』

もうそろそろ昼飯時だし教室に帰ってみるか。

中華喫茶『ヨーロッパ』

教室に入ると明久が島田と姫路に折檻されていた。

……いきなり過ぎた。

……… どういう経緯で俺がここまで行き着いたか俺の行動表をお見せしよう。

『2 試合目終了』

空き教室覗き

（モヒカン野郎と坊主頭が寝ていた。

いつまであおしてるつもりなんだろうな？）

中華喫茶『ヨーロッパ』 来店

今ここ』

もう一度言おう。

教室に入ると明久が島田と姫路に折檻されていた。

「坂本。これってどういった状態なんだ？」

「あ？あのチビッコが明久と結婚の約束したのについて言ったらこうなった」

「明久。ロリコンだったんだな……」。

「そっぴや、試召大会勝ち進んでるか？」

「ああ、もちろんだ。」

「空もその調子だと勝っているんだろ？」

「まあな。」

それで、飯食うために帰って来たんだが、そろそろ飯食いにいかなえ？」

「それもそうだな。行きたいところがあるのか？」

「おう！短いスカートを穿いた女の子がたくさんいる店だ」

「なんだと！？それはすぐ向かわないとな！

我がクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！

「明久！飯食いにいくぞ！」

そして俺、坂本、明久とそれに姫路、島田、チビッコの6人で飯を食へに行くこととなった。

メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』

ここは俺の目的の場所、Aクラスの【メイド喫茶】ご主人様とお呼び！』」なのだが

「空、ここはやめよう」

この動物園から逃げ出したゴリラがだだをこねやがって困ってる。

「ここまで来て何言ってるんだよ！

それにだだこねて良いのは子どもだけだ！

お前みたいなヤツがやっても可愛げがねえ、逆に気持ち悪い！」

「空の言う通りだよ。早く中に入るよ！

霧島さんも待つてるだろうし」

「ああ、そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

坂本を咎める島田と姫路。

「おい、ゴリラいい加減入」

パシャパシャパシャパシャ

すぐ近くからすごい勢いでシャッターを切る音が聞こえてくる。

「……………！！（パシャパシャパシャ）」

「おい、康太」

「……………人違い」

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……………敵情視察」

「ムツツリー二、ダメじゃないか。」

盗撮とか、そんなことしたら撮られている女の子が可哀想だと

「……………一枚100円」

「2ダース貰おう　可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

「おい、康太。」

優子の写真は全部俺に回せ、1枚たりとも他人に売るなよ？
売ったら血祭りだからな？」

俺はニツコリと笑いかけると康太は高速で頷く。

「……………！？（コクコクッ）」

……………そろそろ当番だから戻る（スッ）」

「まったく、ムツツリー二にも困ったもんだね（サッ）」

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

「やだな。もちろん処分するに決まってるじゃないか」

「じゃあ、今俺に渡せ。燃やしてやる」

「い、いや。あとで自分でやるよ」

「明久。一生虫歯を心配しなくていいようにしてやるのか？」

「これをどうぞ！！」

康太のことだ、優子の写真は入ってないと思うが念のためライター
で火をつけ燃やしておく。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

「……………おかえりなさいませ、お嬢様にご主人様」

やつのことでメイド喫茶に入ると霧島が出迎えてくれた。

「お姉さん、きれー！」

「坂本。奥さんが出迎えてくれたぞ？」

「よくできた奥さんだな」

「……チツ」

「……おかえりなさいませ。」

「今夜は帰らせません、ダーリン」

「霧島さん、大胆です……！」

「……それではお席にご案内いたします」

そして6人掛けの席に案内される。

「すごい数の客だな」

「……では、メニューをどうぞ」

霧島が立派な装丁のメニューを渡してくる。

「やっぱAクラスは格が違うな。」

「とんでもなく金がかかってそうだ。」

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で。葉月もそれでいい？」

「うん！」

「あ、私もそれがいいです」

「俺もそれを頼む」

チビッコは島田の妹で葉月と言うらしい。あんま似てないな。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「んじゃ、俺は」

「……ご注文を繰り返します。」

……『ふわふわシフォンケーキ』を4つ、『水』を1つ、『メイドとの婚姻届』が1つ。以上でよろしいですか？」

「全然「よろしいです」

空っ！！」

「うつせえぞ。他のお客さんの邪魔になるだろ」

「……では食器をご用意致します」

そう言つて『ふわふわシフォンケーキ』を頼んだ人の前にはフォークが、明久の前には塩が、坂本の前には実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！コレ本当にうちの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

霧島が去っていく。

「坂本。うらやましいことしてんな？」

「……なら、かわつてやるぞ」

「いや、俺には相手がいるからいいわ」

「何いい！？明久っ！今の言葉聞いたか！？」

「空に彼女いたの！？」

「空君。相手は誰なんですか！？」

「テンション高えぞ。」

相手は
「」

ちょうど俺たちのテーブルの近くに優子が来たので腕を掴んで俺の方に引き寄せる。

「
優子だ」

「きゃっ！？そ、空！？いきなりどうしたの？」

「ん？俺の彼女誰かって言う話になっとな。

それにしても似合ってたんな。可愛いぞ」

「あ、ありがとう……」

俺の言葉に顔を赤くして答える優子。

……やべえ、可愛いすぎる。

「優子。今日『も』一緒に帰るか？」

「ええ、もちろん！」

「お前だけ幸せになりやがって！

今日『も』、とか見せつけてんじゃねえ！！」

見せつけるために言ったんだからな。

「坂本君には代表がいるでしょ？」

「そうなんだけどよお。こいつ、自分の気持ちになかなか素直になれなくてな。

男のツンデレは気持ち悪いだけだつてことに気づいてねえ。

困ったやつだよ、まったく……はあ……」

「なんでお前に呆れられなきゃならないんだよ！！」

お？ツンデレはノータッチ？

ま、いいや。

「だつてよお。見るに耐えられねえんだよ。

霧島のやつあんなにアピールして待ってんのにお前は逃げてばっかじゃねえか。

それが嫌ならはつきり嫌って言ってやればいいだろ？」

「っ！………」

「嫌じゃねえんならとりあえず1回ちゃんと話し合ってみるよ？」

「……分かったよ」

坂本はぶっきらぼうに言い放つ。

以上、空君の人生相談コーナーでしたー。

「さ、食うぞ。優子も食べるか？はい、あーん」

「あ、あーん」

膝の上に優子を乗せて食べ始める。

「……あれいいわね（ボソッ）」

ア、アキ。ほら口開けなさい。食べさしてあげるわ」

「吉井君。私も食べさしてあげます」

「葉月も食べさせるの」

「そ、そんな一気に、もががっ！？」

俺のテーブルでは、ほのぼのとした空気が漂っていた。俺に対する周りの男子の視線がいたかったけど。

3回戦目の相手はモヒカンと坊主だったようだが不戦勝で終わった。

空き教室を覗くとモヒカンが止まったままでそれを坊主が必死こいて動かそうとしていたが見なかったことにして客寄せに戻る。客寄せのためにいろいろと校内を見て回っていると4人組のチンピラに絡まれたので、モヒカンと同じように『時』で動きを止めてやった。

そして次の4回戦目からは一般公開される。

『それでは、4回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』

審判の先生に促され前に出る。

『向こうは1人のようね』

『そうね。速攻でつぶしてやりましょ』

「そこのお2人さん。そういう台詞は強いやつが言うもんだぜ?」

『な!? 私たちが弱いつて言うの!?!』

『あんなやつ絶対倒しましょ!?!』

別に弱いとは言ってねえけどな。

『試獣召喚!』

『3 - Aクラス 佐藤 美穂

古典 378点

3 - Aクラス 小浜 桂

古典 398点

VS

2・Fクラス 宇童 空

古典 419点

「あー、こいつはヤベえ……」

『Fクラスでこの点数！？』

『美穂。彼、腕輪持ちよ。気をつけましょ』

佐藤の召喚獣（以後ミニ佐藤）は鞭、小浜の召喚獣（以後パクロス）は銃を一丁構えている。

今回俺の腕輪は足止めようなので相手の武器を奪って攻撃することにした。

『パンがなければケーキを食べればいいじゃない』改め『武器がなければ奪えばいいじゃない』作戦開始！！

ミニ 俺はパクロスの方に高速で駆け出す。パクロスはミニ 俺に銃口を向けて発砲するもミニ 俺はキレのある切り返しを繰り返してグングン近づいていく。

残り2メートル程になったところでミニ佐藤による鞭攻撃。ミニ 俺は急にきたその攻撃を避けきれず脇腹部分が削りとられる。

そのままミニ佐藤はミニ 俺に追い討ちをかけようとするので急いで離れる。

もう一度銃を奪いに行くも同じように撃退される。

イヤらしい武器使いやがって、と心の中で悪態をつく。

『武器がなければ奪えばいいじゃない』作戦を破棄し、賭けにでる。

だが、これが成功しなければこの勝負、勝てる見込みは0。

まずは思いっきり後ろに跳んで相手との距離を空ける。

そして目を瞑り集中。

俺とミニ 俺が一体になるイメージ。それを明確に。明確に。明確に。

コオオオー、ーーーー

しだいに周りの音が聞こえなくなる。

目を開くと視線が低くなっていた。

成功のようだ。

『試験召喚システム』という科学とオカルトと偶然の産物。そのオ

カルト的要素に賭けた結果がこの召喚獣との一体化だ。

『同化^{シンクロ}』とも呼ぶか。これで負ける気がしねえ。

俺が今まで練習してきた技^{トリック}。

それを魅せてやる！！

バカと俺と暴風族（前書き）

編集しました。

『御披露目』に『空気砲』と『方向指示キー』なるものの御披露目をプラスしました。

バカと俺と暴風族

パンッ

破裂音がフィールドに鳴り響く。

だがそれはパクロスの発砲音ではなく、俺が発生させた音。

trick : After Burner

瞬間、俺の姿がかき消え、俺がいた場所には炎と、数瞬遅れて再びパンッと破裂音が鳴り響く。

この破裂音の正体は衝撃波。

この技は音を置き去りにした超高速移動。

その技は音を置き去りにした超高速移動で2体の召喚獣トリックに近づいていく。

超高速移動のため銃によるエイムはおろか視認することも不可能だろう。そのまま背後にまわると

『時よ』！！

俺は心の中で告げ、高速で蹴りや平手を放つ。速すぎたため腕が干切れかかっているが今は無視。

いつ動き出すか分からないためすぐに間合いをとり、次の技を決めトリックる。

trick : Grand Fang Fire Bird

『牙』（三日月状の衝撃波）に炎をのせて放つ炎の牙。特大の炎の

牙は唸りを発して2体の召喚獣に喰らいつき、そして全てを燃やし尽くす。

本来『牙』を撃つための身体能力のない召喚獣で撃つため右足は吹き飛んでいる。

俺は敵を倒したのを確認し、ミニ 俺と分離するようイメージ。

元の俺の体に戻るとちょうど勝利宣言がされていた。

『勝者、宇童 空！』

すると拍手と歓声があがる。

こついうのも、なかなか気持ちのいいもんだな。

グラウンド

準決勝は相手が食中毒で棄権し不戦勝。まさか準決勝を棄権するやつがいるとは驚きだ。

決勝は明日あり、今から部活の出し物で各個人の作ったものの御披露目だ。俺はもちろんA・Tを。

優子はもちろんのこと、坂本や明久、秀吉、康太などいつも一緒に

いるFクラスメンバーと霧島や工藤も見にきている。
俺の順番が回ってくるまでは優子と一緒に見ることにした。

『私が作ったのはみんなも知ってる某青狸の空気砲』

じゃーん、と言って女子生徒が見せるのはなんの変哲もない鉄製の筒。

『これを手にそーちやく。』

そして……………あ、その赤髪君でいいや。その鉄板持つて』

「あ？これか？」

『うん。それぞれ。』

ちゃんと構えとかなないと“ぶっ飛ばされる”から気をつけてね。
それじゃあいくよ？

“ドカン”』

『ドカン』という言葉がキーとなり圧縮された空気が吐き出され鉄板に接触。

ギョルルルッバキヤッ

「うおっ！？急に凹ん　　がああああああつ！！！！！？？？」

鉄板が貫通して腹に空気の塊があたり回転しながら吹っ飛ぶ坂本。
うへえ、リアル螺旋丸。食らいたくねえ……。

「……………っ！！雄二！！？」

皆目を丸くしてそれを見ていると霧島が我に返り坂本に駆け寄り介抱する。

『観客使っなって何回言えば分かるんだお前は』

『あいたっ！……うう、すみません……』

坂本をぶっ飛ばした張本人は顧問から頭を軽く叩かれている。

『ちゃんと謝っておくんだぞ』

『……はい……』

『それじゃあ次の人！』

『うい。』

俺が作ったのは“方向指示キー”』

次は両手にグローブのようなモノをつけている男子生徒。

『これはベクトル操作のための機械。あらゆるモノのベクトルを自由に操れる。』

例えば 』

男子生徒はペットボトルのキャップを開け、口を傾け左の手の平に中の水を流すとふわふわと浮いている。

『こんなことができる』

『『『『おあー！？』』』』

っ！？すげえ！どうなってるんだ！？

『他にもこんなのか』

そうやってあいている右手で浮いている水を掴むと水が槍のような形状に変化する。

『こんなのとか』

さっき空気砲で破れた鉄板を槍で一閃すると綺麗に真っ二つになる。

『『『おおおーっ！っ！？？』』』

ほー、ベクトル操作って便利だな。何でもできそうだ。

その後も御披露目は続いていく。

部活のやつらは、仮面？イダーの変身ベルトや小型超電磁砲などオーバーテクノロジーで危険なものばかり作っていた。
そしてついに俺の番。

「俺が作ったのはコレ。A・Tエア・トレックと呼ばれるもの。見た目はただのインラインスケートだが性能は全然違う」

俺はそう言ってA・Tエア・トレックを履く。すでに『炎の玉璽レガリア』は装着済み。

「今からすごいことするから見ていてくれ」

そう言って校舎の壁際まで駆けて行きそのまま腰を捻りながらジャンプをすると、ホイールを壁につけ腕の回転力を軸に駆け上がる。

trick: Spinning Wallride Overhang
1800°。

屋上まで駆け上がると皆言葉がでないように口をパクパクしていた。
感想を聞くため俺は横に寝そべるような体制になって壁を、A・T^{エア・トレック}
のホイールを擦りながら降り、みんなのところへ戻る。

「どうよ！？今の技^{トリック}」

「人間にあんなのできるんだね」

ベクトル操作ができれば簡単に登れそうだな。

あ、でも見た感じだと範囲が手だけっぽいし難しいか？

「あれが空の創っていたものかのう。

足だけで壁を登るとはすごいのう」

「お前、本当に人間か？」

いつの間にか起きていた坂本にそんなことを言われる。

「失礼なことやってんじゃねえよ。

んで、後1つとっておきのあるんだが見るか？」

「見る見るっ！！絶対見る！！」

俺が尋ねると優子が目をキラキラさせながら答える。

うつ！！鼻血が出かけたぜ。恐るべし純度100パーセントの笑顔。

「んじゃ、見てろよ」

t r i c k : I k a r o s P t e r o n

カッ力カッキュキュパッ

俺が舞うようにステップを踏むと足元からボツという音と共に3対6翼の炎の翼が噴き出る。
それは本物の翼のように羽ばたく。

『ほえ……』

『……綺麗ね……』

『……そうだな……』

周りから感嘆の声が聞こえてきて、少々照れくさい。
そんな中優子の元へ駆ける。

「優子。どうだった？」

「すごく綺麗だったわ。」

……それに格好良かった」

「そうか、ありがとう」

「空……」

「優子……」

俺と優子の顔が近づいていき唇が触れそうになったところで坂本が話しかけてきた。

「空。イチャついてるとこ悪いが俺と明久はババアに呼ばれてるからもう行くな」

「分かったが空気読めこのゴリラ」

「んだとこの！……この！……」

「思いつかねえんだったら無理に言う必要ねえだろ」

「……このたれ目！」

「捻りだしてそれかよ！？」

別にたれ目ってほどたれ目じゃねえし。それに気にしてねえ」
「く……っ！」

「さっさと行け。

ま、見に来てくれてさんきゅ」

そう言うをやつと坂本と明久が学園長室に行った。

2人が行った後も、しばらく御披露目は続き5時程になってようやく終わり、『清涼祭』初日は幕を閉じた。

バカと俺と決勝戦（前書き）

編集しました

バカと俺と決勝戦

『清涼祭』二日目

俺は試召大会の会場への道を黙々と歩いている。

『宇童君。入場が始まりますので急いでください』

結構ギリギリに來たためか係員の教師が急かすように手招きしている。

《さて皆様。長らくお待たせ致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！》

《出場選手の入場です！》

『さ、入場してください』

係員にポンと背中を叩かれる。

《2年Fクラス所属・坂本 雄二君と、同じくFクラス所属・吉井 明久君です！皆様拍手でお迎え下さい！》

《そして対する選手は同じく2年Fクラス・宇童 空君です！皆様、こちらも拍手でお迎え下さい！》

《なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦にすすんだのは両チームとも2年生の最下級であるFクラスの生徒です！

これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれませんが、

《それではルールを簡単に説明します。試験召喚システムとは

》

アナウンスでルール説明が入る。もう充分に知っていることなので、それを無視して坂本たちに目を向ける。

「お前ら、ここまで勝ち抜いて来たのか？なかなかやるな」

「空も優勝商品が目当てなの？」

「……優勝商品ってあったのか？」

初耳なんだが……。

「え！？知らなかったの！？」

トーナメント表の下の方に書いてたよ？」

「マジか……」

んで、優勝商品ってなんなんだ？」

「えーっと……白金の腕輪と如月ハイランドのプレオープンペアチケット2枚」

「如月ハイランドのペアチケットだと！？」

明久！坂本！大人しくここで死ね！！

俺は優子と一緒に如月ハイランドに遊びに行くんだっ！！邪魔すんじゃないねえ！！！！！！」

「ふざけるな！！」

俺は俺の自由のために絶対優勝しないといけないんだ！

如月ハイランドのチケットを燃やすまで俺は死ねん！！」

「お前の都合なんざ聞いちゃいねえ！とっととくたばれ！」

《 それではついに決勝戦開始です！両者ともに準備はいいですか？

…… それでは試験召喚大会決勝戦始め！》

坂本と言いつている内に開始合図が司会から宣言される。
ちっ、言い争いはここまでか。
なからは試合でケリをつけるのみ！

『試獣召喚！』

喚声と同時に魔法陣が展開され、召喚獣が姿を表す。

坂本の召喚獣（以後ミニ本）はメリケンサック、明久の召喚獣（以後学ラン）は木刀を構える。

『2-Fクラス 坂本 雄二

日本史 215点

2-Fクラス 吉井 明久

日本史 166点

VS

2-Fクラス 宇童 空

日本史 402点』

「点数高えじゃねえか。

なら、最初っから飛ばして行くぞ！」

『シンクロ
同化』！！

俺とミニ 俺が一体化する。

ミニ 俺の身体に馴染んできたためか、今回は周りの音が聞こえる。
そして、俺と、相手のミニ本と学ランは同時に駆け出す。

2人との距離が1メートル程になったところで腕輪を発動させながら股関節を基点とした蹴りを放つ。

『『ニア・ロード インフイニティ・アトモスフィアティ・チェーン
荊棘の道無限の空・無限の荊鎖』』

腕輪によりA・Tの後輪が荊のような一本の鞭に変形する。完全不意打ちにも関わらずミニ本は鞭の下をくぐるように体勢を下げて避け、学ランは足を止め木刀で荊を逸らす。そしてミニ本は足を振り抜いたままの俺に勢いよくタックルし、俺をは吹き飛ばす。

くっ！？やっぱ決勝までのし上がってきただけのことはあるな。いつもバカだから油断してた。にしても馴染んできたためか痛みを感じる。あんまり攻撃を喰らってらんねえな。

そう考えていると

「考え事とは関心できないな」

「っ！？」

いつの間にか俺にミニ本が迫っており、俺の頬に右ストレートが刺さる。

っ……！！このクソが！！

「あんまナメんなよ！！」

そう言っつて荊を使った蹴りをミニ本に放とうとする。

「相手は雄二だけじゃないんだよ？」

だが俺とミニ本の間に学ランが割り込み俺の蹴りを打ち落とす。それにより体勢の崩れた俺の腹に向かって学ランは木刀を横に薙ぎ払う。ちょうど剣道の『胴』のような感じで。

ゴッ

う……っ！！かはっ！！

ボゴッ

が……っ！！

続けてミニ本に顔面を殴られる。

もちろん俺の体はさらに体勢を崩し後ろに倒れかける。

その体勢を直すかのように後ろから学ランが俺の頭を叩き上げにくる。

く……っ！！やべえ……意識が……。

バコンッ

フィードバック率100%のため体中に鈍い痛みが走り、俺の意識を刈り取るうとする。

……あ、これ負け

『そおおらあああああつつつつ！！！！！！！！！！』
「っ！？」

突如優子の叫びが聞こえ、俺の意識が覚醒し諦めかけた心が立ち直る。

『やられてばかりじゃなくてええつつつつ！！！！！！反撃しなさああ

ああああいつつつつ！！！！！！！！！！』

再び俺の顔面を狙ってきたミニ本のパンチをパシッと受け止める。

「さっきまで散々やってくれやがったな」

キュルルルルルッ

ホイールが高速回転し砂を巻きあげ召喚者である坂本と明久から俺の様子を見えなくさせる。

そしてフィールド中を駆け回り今度はフィールドに砂埃を充満させ、外から見える範囲を零にする。

これで見えねえよな？

んじゃ

すううううつ

俺は目を閉じ胸に手をあて、意識的に過呼吸を行い肺にかかる圧力を高める。

「すううううつ」

感覚がリンクしているためか本体も一緒になって過呼吸を行う。そして息を吐き出す。

はあ

「はあ」

体内に溶けこんだ窒素は、ほんの少し息を吐き出すこと、所謂減圧により、気を失うほどの激痛を伴いながら体中の各関節から気泡となって現れる。

ビキビキッ

ツーーーーー!!???

「ツーーーーー!!???」

だがその痛みと引き換えに、気泡状態の窒素がエアクッションの役割を果たし関節の可動域を限界以上に広げ、人間離れた動きを實現させる。

……今は召喚獣だが。

俺は閉じていた目を開くと、ちょうど砂埃が晴れる。

さあ、第2ラウンド開始だ!

さっきまでの俺と思うなよ!!

俺の半径2メートル程にミニ本が入った時、本体の俺が言う。

「木々は腕をからめ天へと伸ばす。

群がる葉々は光を喰らい森の闇をいよいよ深くする。

狩人は気付かない。闇に潜む『森の番人』の双眸も獣たちの牙も…

…。
荆棘の道を進む者。さねいんく 罽^{いば}の使徒は森の中で眠りにつく。

ここは『眠りの森』スリーピング・フォレスト」

「どういうこと?」

「お前らは今死の森に踏み込んだ、ってことだ」

「ふん、そんなものはハッターだろう。」

明久、いくぞ！」

「うん！」

そう言つてミニ本・学ランが武器を構えてかけてくる。

「あまり森の奥に入ることは関心しねえな」

t r i c k : T r e a d a T h o r n y R o a d R u i n
S p h e r e

ギチギチギチッ

足元の荊を操りミニ本を球状に取り囲む。

「な、なんだそれは!？」

「あー……腕輪の本当の力つてとこだな。

ま、坂本はここで消えろ」

ギギギギギッ

俺の言葉に従うように球が回転しながら終^{しま}つていき、ミニ本の体が削られ消える。

それを見た明久の顔が青くなる。

大方フィードバックの想像でもしたんだろう。

ま、俺は明久にも同じことするほど悪魔じゃねえよ。

t r i c k : T h o r n y R o a d T h o r n S p i n s

俺は脚に捻りを加えながら鞭のようにしならせ、更に回転をかけ荊

を加速させる。どんどん回転を加えることにより、ついに荊が音の壁を破り棘のように先の尖った円錐形の衝撃波をいくつも発生させ、それを学ランに向けて放つ。

見えない『棘』が体中にささり、学ランが消え去ると勝利宣言が聞こえてきた。

《勝者、2-Fクラス・宇童 空！！皆様拍手をお願いします》

拍手と歓声の吹き荒れる中、俺は『同化^{シンクロ}』を解除し明久の方を見ると痛みでのた打ちまわっていた。

前言撤回。やっぱ俺、悪魔かもしれないねえ。

坂本は真っ白に燃え尽きている。

《それでは続いて授与式です！！学園長、お願いします》

司会役の先生が学園長にマイクを渡す。

《ガキども。いい試合をありがとうさね。

さあ、優勝したアンタ。こっちに來な。商品渡すよ》

そう言われ壇上に行く。

《まずはこれ、如月ハイランドのペアチケットさね。アンタは1人だからね、もう1枚は知り合いにあげな。

そして、白金の腕輪。こっちは自分で召喚フィールドをはれるやつさね。もう1つは召喚獣を分身させられるよ》

「あー、学園長。俺はチケットだけでいい。腕輪は使わねえ」

『同化^{シンクロ}』して変になったら困るしな。

《そうかい？じゃあ後ろのガキ2人。こっちに来な》

「うう……なんですか？ババア長」

「……なんだババア？」

《アンタたちには一度、この学園の最高責任者が誰だか教えないといけないねえ。

まあ、今はそんなことよりこれを受け取りな》

「これって優勝商品じゃないんですか？」

《アンタ、さっきの話聞いてなかったのかい？

そのガキが使わないって言うからアンタたちにまわって来たんだよ》

「……お？空、サンキュー。」

あと、もう1枚のチケット絶対に翔子に渡すなよ」

「あー、考えとく」

《じゃあ、これで終わりさね。

そのガキ2人はすぐにその腕輪のデモンストレーション頼むよ》

その後、腕輪のデモンストレーションがあり、それが終わると教室に戻り一般公開が終わるまで喫茶店を手伝った。

バカと俺と打ち上げ騒ぎ

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「……………（コクコク）」

「そういえば姫路の父さんどうしたんだ？」

「ん？お義父さんが気になるのか？」

「俺には優子がいるから気になんねえよ」

「なんと！？姉上と付き合っておったのか！？」

『総員狙ええー！ー！ー！』

「うるせえ！！くたばってろ！！」

「108マシンガン！！！！」

アタタターツ、と審問会の連中を蹴り伏せる。

あー、コロツケ懐かしいな。

T・ボーン何気に強かった覚えがある。

「で、姫路の父さんは？」

「後夜祭の後で話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じやな」

「そうか」

「あ、空。俺と明久はババアに呼ばれてるから片付け頼んだ。
ムツツリーニと秀吉も来てくれ」

「……………（コクコク）」

「わかったぞい」

そう言つて坂本たちは俺に片付けを押し付けて教室から出て行つた。

しばらく片付けをしていると新校舎の方から爆発音が聞こえてきた。優子が心配になつたのでAクラスに行くも何も変わつた様子もなく、俺はFクラスに帰つていった。

後で知つたんだが坂本と明久がやつたらしい。教頭も関係していて、俺が学園長室であつたときに植木鉢の方を確認するように見ていたため、たぶんそれが関係しているんだろう。

坂本は俺が言つた時に植木鉢を調べなかつたみたいだな。俺が自分で調べときゃよかつたと思わなくもない。

現在、公園にて打ち上げ中

打ち上げと言つのは名ばかりで、実際は異端審問会の連中に絡まれたので撃退しているだけ。

倒しても倒しても湧いてくるゴキブリ共。量産型GOKIと名づけよう。一級（審問官）専用GOKIもあるとかどうか。ぶっちゃけマスクの濃淡が違うだけだが。

そうこうしていると坂本たちがやって来た。何故か坂本と明久はボロボロだ。

「お前ら遅かったな？」

「ちよつと鉄人に追いかけれちゃって」

「くそつ、鉄人め。あの野郎は手加減をしらないのか」

「秀吉と康太も追いかけられたのか？そのわりには大丈夫そうだが？」

「ワシたちは大丈夫じゃぞ」

「……………雄二と明久の手伝いをしていた」

「何やってたんだ？」

「……………企業秘密」

「そうか。」

「んじゃパーツ、とやるか。坂本、頼んだぞ」

「ん？ああ、わかった。」

「みんな、飲み物が行き渡っているか？」

『おおーっ！！』

いつの間にか量産型GOKIたちが復活しており、その手にオレンジジュースの入った紙コップを持っている。俺の手にもいつの間にか収まっていた。

康太がやったのか？

「みんな！『清涼祭』ご苦労だった！！」

「それでは乾杯！！」

『かんぱーっ！っ！！』

そう言つてジュースを啣^{あお}る。少し苦い気がするが気にしない。

「そついや島田。売上どのくれえなんだ？」

「そつね。凄^{すご}いって程じゃなかったけど、たった2日間の稼ぎとしては結構な額になったんじゃないかしら」

「じゃあ、畳とみかん箱は新調できそうだな」

「空。みかん箱新調してどうするんだよ。卓袱台に買い替えるぞ」

「何気にみかん箱気に入ってるんだが？」

「じゃあ空だけみかん箱で勉強するか？」

「あー……卓袱台がいいわ」

そんな話をしていると姫路が遅れてやってきた。

「あ、瑞希。どうだった？」

「はいっ！お父さんもわかってくれました！」

「よかったな、明久」

「な、なんで僕に振るのさ!？」

「あー、気分だ。」

で、どうなんだ？」

「そ、そりゃ嬉しいよ!！」

「だってよ、姫路」

「吉井君……」

お？なんか目がトロンとしてる。

「ふにゅー……」

そう鳴いて（？）明久にしなだれかかる。

なんとなく2人つきりにしておいた方がいいような気がしたので俺は2人から離れていく。

この日を境に姫路の明久の呼び方が『吉井君』から『明久君』に変わったとか。

木の影で胡座あぐらをかいて飲み物を飲みながら明久と姫路の2人を見てみると、突如視界が暗くなる。

「だーれだ？」

「ん？優子何やってんだ？」

そう言つて声が聞こえてきた方に顔を向ける。

「Fクラスの人たちが見えたから空もいるかと思ってこっちに来たのよ」

「Aクラスもこちら辺で打ち上げてんのか？なら、霧島も連れて来たらどうだ？」

「代表ならもう来てるわよ」

優子が指差した方を見ると、霧島が坂本と一緒にジュースを飲んでいた。

「今日の坂本は逃げ出してねえな」

「昨日の昼食のときに空が言ったことを気にしてるんじゃない？」

「あー、なるほどな。」

それはそうと優子も座ればどうだ？」

「そうね。お邪魔します」

優子が俺の胡座あぐらの上に乗ると、優子から女の子特有のいい香りがする。

「俺の上に座るのかよ！？」

「ダメだった？」

上目遣いで俺を見てくる優子。それを断れるハズもなく。

「あー、駄目じゃねえよ。」

優子。ジュース飲むか？」

ストックしていたジュースを渡すと優子はそれを一度見て、一気に飲む。

のどが渴いていたんだろう。

「……………」

「黙り込んでどうした？」

「……空。なんだか暑くないかしら？」

優子は急にそう言って胸元のボタンを外し襟を持って風を送りこむ。

「いや、言うほど暑くねえと思うが。

てか、ブラ見えてんぞ」

「もつと見たい？」

優子はグツ、とシャツを前に引つ張り胸元が見えるようにする。

スーパーセクシャルサーチ
超・男目線により推定Cカップ。感触はモチモチだった。

「酔ってんのか？」

心なしに顔が赤い気がする。

「酔ってなんかいいわよ！」

酔っ払いの常套句をありがとう。でもなんで酔ってた。ジュースしか飲んでねえのに。

そう思い空き缶のラベルを見る。

《大人のオレンジジュース》

あー……これ酒だ。

どうしょ？このままじゃあれだし。優子を家に送ってやるか？

「優子。家に帰るか？」

「ヤダ。空と一緒にいたい」

「……家に帰ったら一緒にいてやるよ」

「じゃあ帰る。おんぶして」

「あー、はいはい」

優子が子供っぽくなっており、俺が優子の前にがしゃがむと乗っかってくる。

オツが背中当たってんぞ、とは言わねえ。役得。役得。

そしてAクラスの集まっているところに行き優子の荷物をとると帰路に就く。

木下家前

「優子。着いたぞ」

「すう……すう……ん……」

……部屋まで送って」

「了解。」

お邪魔しまーす。優子を届けに来ましたー」

「はいはい。」

……あら。そーちゃんじゃない。ゆーちゃん寝てるし。

じゃあゆーちゃんを部屋まで送ってあげてね？」

「ういっす」

優子の母さんに優子の靴を脱がしてもらい階段を上がる。部屋について優子をベッドに寝かせ、布団をかけて出て行こうとすると手を掴まれる。

「一緒にいてくれるって言った。私と一緒に寝て」

そして優子にベッドの中に引き込まれ、俺が逃げ出さないよう腕にしっかりと抱きついてくる。

俺の手は優子の太腿に当たっており、俺の鼓動が速くなる。

「優子。手の位置がヤバイ」

「むふふ。こっぴどいこと？」

今度は一転してイタズラっぽくなり、太腿でガッチリと俺の手を挟む。

「そっぴどいことだからヤバイ」

「手を出してもいいんだぞ？」

「……………じゃあキスだけ」

促されたので優子のマシユマ口唇にキスをする。

「もつとちよーだいつー!!」

語尾にハートマークが付きそうな感じで口をとがらせて言う。
なぜにこんなに甘えん坊になったんだ？

そう思うもキスをする。今度は口内に舌を侵入させ優子の舌と絡ませながらのキス。俺が攻めると優子も負けじと攻め返す。
顔を離すと優子の目がトロン、としていた。

結局キスだけではガマンできずに優子のCカップ（推定）を直に揉みながらキスをする。

山のとっぺんを弄ると優子の口から甘い声が漏れてくるので更にヒートアップし、一階に優子の親がいるにも関わらず《ピー》やら《ピー》が《ピー》で《ピー》とか《ピー》を《ピー》に《ピー》して。 。これで2回目だな。

若気の至りと言うやつだろう。

優子は嬉しそうにしていたので良かったと言えは良かったが悪かったと言えは悪かった。

途中から酔いが醒めて普通に楽しんでいたように思える。

その後は家に帰ってシャワーを浴び、飯を食べて早めに眠った。

こうして『清涼祭』は幕を閉じた。

閑話：俺と優子と如月ハイランド

ある日の学校での会話

「空。そういえば、如月ハイランドのチケットどうした？」

「あ？あれは康太が『……………買ってやる』って言ってたから売ったぞ。」

チケットの行方を知りてえんだったら康太に聞けば？」

「ああ」

そう言ってやると坂本は康太のところへ行く。

「ムツツリーニ。如月ハイランドのチケット、誰か買ったか？」

「……………（コクコク）。」

……………誰が買ったかは言えない」

「これだけは聞かせてくれ。」

翔子じゃないよな？」

「……………SK-？」

「は？どういう意味だ？化粧品のブランドか？」

「……………気にしなくていい」

「……………翔子を買ったようじゃないしいいか。」

手間かけさせたな」

「……………問題ない」

SK-？ Shoko Kirishima grade？ 翔子

霧島 2年生 2年生 霧島 翔子

……気のせいかな？そんな安直なワケねえよな。

とある休日

電車とバスで2時間ほどかけ、俺と優子は如月ハイランドの前にいた。

「やっとついたわね」

「遠かったな。」

ま、今日は目一杯楽しむか！」

「そうね！」

早く入りましょ」

俺は優子と腕を組んで入場ゲートまで行く。プレオープンという限定的な期間である為か、特に待つこともなく係員の青年の前に進むことができた。

「いらっしやいマセ！如月ハイランドへようこそ！」

アジア系っぽい顔立ちのその男は、若干訛りの混じった口調で俺たちに笑顔を振りまいた。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

俺は財布からチケットを出して男に渡す。

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると笑顔のまま一瞬固まる。

「そのチケット使えないのか？」

「イエイエ、そんなコトはないデスよ？
デスが、ちよっとお待ちくだサーイ」

係員はポケットからケータイを取り出し、俺たちに背を向けてどこかに電話をし始める。

「どうかしたのかしら？」

「んー、分かんねえな。

俺何も変なことしてねえよな？」

「ええ。心配しなくて大丈夫よ」

優子と話していると係員が電話を終えたようすで話しかけてくる。

「でハ、まず最初に記念写真を撮りますヨ？」

「写真撮んの？」

「ハイ。サイコーにお似合いなお2人の愛のメモリーを残しマース」
「空とお似合いだつて」

係員の言葉に優子が仄かに頬を赤らめている。

……可愛いな。

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。
この声聞き覚えあるぞ？

「お前、明久か？」

「人違いですっ！？」

明久はそう言うのと走り去っていった。
あ、転けた。慌てすぎだ、あのバカ。

「吉井君、バイトでもしてるのかしら？」

「ここ時給良さそうだし、そうかもしんねえな」

「でハ、写真を撮りマース。何かポーズをとってクダサーイ」

そう言われたため俺は優子を抱きかかえる。俗に言うお姫様だつこ
だ。

「そ、空！？は、恥ずかしいよお」

優子は俺の胸に顔を埋める。

うへえ、何この子？可愛すぎる！！

「大丈夫。大丈夫。」

ほら、笑って？すぐ終わるから」

そう言うのと優子は埋めていた顔をカメラの方に向けて頬を赤らめながらニッコリと笑う。俺もカメラの方を向いて微笑むと、フラッシュが焚かれピピツという電子音が聞こえる。

「スグに印刷して来マスから、ソのまま待つて下さい」
「わかった……。」

優子、よくできましたー」

係員が去っていき、俺は優子をおろして頭を撫でると耳まで真っ赤になっていた。

「そんなに恥ずかしかったか？」

「……人に見られたのが恥ずかしかった」

抱きかかえること自体はあまり恥ずかしくなかったらしい。

「印刷して来ましタ。はい、どうぞ。」

サービスで加工も入れておきまシタヨ」

係員が戻って来て写真を渡してくる。

「どれどれ……。」

おー、綺麗に写ってんな」

「ねえ、空。ここに『私達、結婚します』って書いてるわよ？（ポツ）」

優子が写真の上部を指差し頬をさらに赤める。

「お、本当だな。いい記念になるわ、コレ」

2人で話していると係員が話しかけてきた。

「アイヤー、お二方。コレをパークの写真館に飾っても良いデスカ

「？」

「ん？写真館に、か？そいつはやめといてくれ」

「私もやめておいて欲しいわ。恥ずかしいし……」

「そうデスカ？ワカリましタ。

それでハ、如月ハイランドを心行くまで楽しんで来て下さい」

「んじゃ優子。行くか？」

「ええ」

そう言つて歩き出す。

しばらく優子と腕を組んで歩いていると前方にジェットコースターが見えてきた。

「お？ジェットコースターあるぞ？」

「そうね。ちようどいいしアレに乗りましょ？」

そう言つてジェットコースターに向かう。

このジェットコースターは世界で3番目に速く、いろいろな方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするらしい。

「結構すいてんな」

「まだプレオープンだからじゃない？」

それに、並ばなくてすむんだしあまり気にしなくていいと思うわよ？」

「そうだな。んじゃ乗るか」

「そのの異端者！！木下 優子から離れろっ！！」

ジェットコースターに乗って楽しんだ後、別のアトラクションを探しているとき黒いネズミの着ぐるみ（ネズミーランドの住人にあらず）が俺を指差して叫んできた。

なんだコイツ？なんで優子のこと知ってた？……！？もしかしてストーカーか！！？この糞ネズミ、死に曝^{さら}せえ！！！！

俺はネズミに駆け寄り、視認できないほどの速さで頭に向かって蹴りを放つ。そんな蹴りをネズミは避けられるはずもなく、スーパーボールよろしく吹っ飛んでいく。
ただいまの記録：12バウンド

「空！？いきなり何してるの！？」

「害虫駆除」

「『害虫駆除』、じゃないでしょ！！あの中の人^{ひと}がケガでもしたらどうするの！？」

『中の人』とか言っちゃあ子どももの夢壊しちゃうぞ？

『オレ。今、木下 優子に心配されてる！！もう死んでもいい！！』

蹴り飛ばしたネズミからそんな声が聞こえてくる。

「中の人、元気そうだなぞ?」

「今回はそうだったけどいつもそうとは限らないでしょ!」

「まあ、そうだな」

「でしょ? ほら、謝ってきなさい?」

「了解」

優子が母親みたいだ。

俺はネズミのところまで歩き、表面上謝るフリをする。

「悪かったな」

「今のオレは最高に幸せだ!!」

今日はなんて良い日なんだろう!」

……聞いちゃいねえ。

優子のところへ駆けて戻る。

「ちゃんと謝った?」

「一応。さ、次のところに行こうぜ」

そこへ大きなリボンをつけたキツネの着ぐるみがヒョコヒョコと近寄ってきた。

「その兄さんたち、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ?」

フィーのオススメはねっ、向こうに見えるお化け屋敷だよっ」

着ぐるみの手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を指し示す。

廃病院を改造したらしくおどろおどろしい雰囲気醸し出している。
あー、怖いー。

「雰囲気がやばいな」

「そうね。でも面白そうだし行ってみましょ」

「マジか!？」

「そう言えば空は昔からお化けとか苦手だったっけ？まだ怖いのかしら？」

優子は挑発するような笑みを俺に向ける。

「べ、別に怖くねえよ。

さ、行くぞ」

「声が震えちゃってるわよ？」

「そ、そんなワケねえじゃねえかつ。気のせいだよ」

「ふふつ、強がっちゃって。

たまにある、空のそういうところ好きよ？」

なんと言っことでしょう!？」

今の一言は、彼女に言われた言葉ランキング（by俺）ベスト5
ですよ!!不意打ちって言うのがポイント高いね。

そんなことを考えていると、ついに目の前に俺を喰らわんとするモ
ンスター（お化け屋敷）が口（入り口）を開けて構えている。

大丈夫だ。なんとかなる。逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃ
だめだ!!

ATフィールド展開!!

そらは じぶんの からに とじこもった

やべえ、テンパリ具合がハンパない。

「優子、背中はずけたっ!!」

「何言ってるのよ。さ、入るわよ」

優子に腕をガッチリと組まれ、お化け屋敷に入っていく。

閑話：俺と優子と暴風の叫び（前書き）

少々グロ増強。

閑話：俺と優子と暴風の叫び

お化け屋敷にて

薄暗く肌寒い感じが恐怖を一層引き立てる。さらに足音が大きく響くこの廊下も恐怖を倍增させる。

しくしく。俺のライフはもう0よ。

「空。これはさすがに怖いかも」

「俺が守ってやるから。だ、大丈夫だ」

「声が震えてて全然格好つかないわよ」

「だって廃病院だぞ？マジで病院はねえよ。普通の病院ですら怖えるのに。」

足元の非常灯の色をもつと明るくして欲しいです！！」

「そんなことしたらお化け屋敷じゃなくなっちゃうじゃない！？」

「恐怖と安心を天秤に掛けたら安心の方が重くなるじゃねえか？」

「でもそれじゃあ、面白くなっちゃうでしょ？」

「面白さより恐怖の方が強えからなんとも言えねえ」

「幽霊とか出そきやあああああつっ！！！！！！？」

急に優子が叫び出し組んでいる腕に力が入る。力の入り方が尋常じゃなく俺も悲鳴をあげる。

「腕があああつ！！？ねじ切れるように痛いいいいつ！！！！？」

俺の新しい左腕は『機械鎧』オートメイルかな？鋼の召喚術師、はじまるよ！

「うつ……」

痛みのあまり意識を失っていたようだ。
床の冷たさが心地よい。

「起きた？」

頭上から声がかかり俺は立ちあがって答える。

「ああ」

「腕、大丈夫？」

「ちよつと感覚ねえかも」

「ごめんね？びつくりしちゃって」

「そこまで酷くねえから気にすんな」

そう言つて優子の頭を撫でる。

髪の毛サラサラだ。

「そついや何に驚いてたんだ？」

「ひんやりしたモノがほつぺにペタッ、つて」

「それコンニャクなんじゃねえの？」

「な、何にしても怖かったんだからっ！！」

優子はプイツ、と横に向く。

なにしても可愛いな。

なんか熱いものがこみ上げてきた、胸じゃなくて鼻に。

「さ、進むぞ」

優子の手を握り、再び歩き始める。

『 ザッ……ザー…… ジー……』

「空。なんか聞こえない？」

優子が空いている左手で俺の服をキュッ、と握ってくる。

「ん？そうか？」

『 ザッ……ひめの……ザー……がこの……な…… ジー
が……かい……』

「……不気味だな、コレ」

そばに置いてあるラジオから声が聞こえてくる。
やべえ、マジ怖え。俺、死ぬる。

『 姫路の胸の方が好みだな おつかイデー……！』

……え？何コレ？しかも俺の声。

「空。どういこと？」

優子が修羅になっている。

「俺、こんなこと言ったことねえし。そもそも姫路のことなんとも思ってたねえから」

「じゃあ、それを今証明して」

「何すりゃいいんだ？」

問うと優子は自分の唇を指差す。

キスしろってことか？

俺は優子に軽くキスをする。

「気持ちがこもってないからもう1回!!」

優子に怒られた。どうしろと？

俺はもう一度キスをする。

今度は舌を優子の口内に侵入させ絡ませた。優子の口内を俺の舌が犯しまわり優子に反撃の隙を与えない。

しばらくして顔を離すと長くしすぎたせいか優子が息切れをおこす。

「はぁ……はぁ……空。んっ……激しい……」

「あー……悪い」

「んっ、ふう……空の気持ち、……んっ……本物だって、わかったから、いいわよ……」

吐息エロし……

脳内会議

少佐：『処理落ちしかけているぞ！！？何かいい方法はないか！？』

トム：『手っ取り早くMiss・木下を排除すればいいと思うであります！！』

少佐：『よし！その作戦でいこう！！』

サム：『少佐っ！！』

少佐：『なんだ、サム！！口応えするか！！』

サム：『隊長^サ！！自分はお持ち帰りがvery niceです！！あとでゆつくりたっぷりぬつとり味わいマース！！』

少佐：『サム！！お前は時々、急に頭がよくなるな！！許可する！！』

今は息を潜めて待て！！』

トム：『イエッサー！！』

サム：『イエッサー！！』

脳内会議終了

「さ、進みましょ」

「ん？ああ」

その後は何か（怖すぎて後ろを振り向けなかった）に追いかけられ
たり、突然高笑いが聞こえてきたりとトラウマが……。だが、怖いことばかりではなく嬉しいこともあった。途中驚いた優子に抱きつかれ柔らかいものを感じられたり、またまた驚いた優子に押し倒されムフフな状態になりかけたり。役得。役得。

「やっと出口か……」

「ホント怖かったわ」

「お2人ともお疲れサマでシタ。

デハ、豪華なランチを用意してありますので、こちへいらして下サイ」

係員の男に案内されこ洒落たレストランへ案内される。

「コチラでランチをお楽しみ下さい」

「いらつしゃいませ。宇童 空様、木下 優子様。

それでは、こちらへどうぞ」

ボーイが現れ、席に案内される。席につくとグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくる。

「お客様は未成年とのことなので、こちらをご用意させて頂きました」

「ども」

「それではごゆるりとお過ごしください」

ボーイがお辞儀をして離れていく。

「豪華だな」

「そうね。すごく美味しそう」

「んじゃ食べるか」

そう言つと食べ始める。

そしてデザートを食べ終え席を立とうとしたその時、会場に大きくアナウンスの声が響き渡った。

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としたお付き合いをしている高校生のカップルがいらっしゃるのです！》

ほー、『結婚を前提としたお付き合いをしている高校生のカップルか。』

高校生って俺たちくらいしか見当たんねえんだが？

《そこで、当如月グループとしてはそんなお2人を応援する為の催しを企画させて頂きました！

題して【如月ハイランドウェディング体験】ゝ！》

《これは弊社が提供する最高級のウェディングプランを体験して頂けるというものです！

もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍と言うことでも問題ありません！》

《それでは、宇童 空サン&優子サン！準備があるノデこちらに来て下サイ》

「空！！やってみましょ！！」

そう言われ、優子に引っ張られていく。

《皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！》

園内全てに響き渡るのではないかと思える程の拍手が聞こえてきた。

「宇童 空サン、お願いしまス」

「了解、つと」

トントン、と小さな階段を昇る。そのままステージに上がると、スポットライトの明かりに一瞬眩暈がした。

会場には数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席、おまけにスモークの設備はおるかバルーンや花火まで用意してあるように見える。

《 続いて新婦のご登場です 》

BGMの音量が上がり、会場の電気が全て消え、スモークが足元に立ち込む。

《本イベントの主役、木下 優子さんです！》

アナウンスと同時に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。暗転から一転して輝き出す壇上で、思わず目を瞑ってし

まう。

そして、再び目を開けた時に飛び込んできた純白のドレスを纏った優子の姿に俺は一瞬言葉を失った。

ドレスは皺1つ浮かべることなく着こなされ、スカートの裾は床に擦らない限界の長さに設定されているようだ。

『……………綺麗』

静まり返った会場から溜息と共に漏れ出た、誰のものともわからない台詞。

優子がステージの中央まで歩いてくる。

「優子、だよな…………？」

「……………うん」

思わず確認してしまう俺。

「……………どう？私、お嫁さんに見えるかしら？」

「ああ、大丈夫だ。すげえ似合ってる」

「空……………」

《ど、どうしたのでしょうか？

花嫁が泣いているように見えますが……………？》

仕事を思い出したかのようにアナウンスが入り、優子の肩が微かに震えていることに気づく。

「お、おい。どうした……？」
「ずっと、夢だったから……」

涙混じりのかすれた声。

「夢？」

「……うん。空と2人でこうやって結婚式を挙げること……。私が空のお嫁さんになること……」

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当一途な方のようです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか？》

『どう応える』？んなもん決まってるんだろ。

「優子。俺も」

『あーあ、つまんなーい！マジつまないこのイベントお。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな～い？』

『だよな。お前らのことなんてどうでもいいっての。』

つてか、お嫁さんが夢です、つて。

オマエいくつだよ？なに？キャラ作り？ここのスタッフの脚本？バカみてえ。ぶっちゃけキモイんだよ！』

んだと、テメエら！！

「そこのクソ共今なんつったあ！！？」

俺は声のした方に視線を向け、声を張り上げ叫ぶ。

『誰がクソだと、コルア！』

『きやーっ。』

リユータ、かつこいーっ！』

「もう一度言うぞウンコクス共！

今なんつった！」

『キメエ、つつたんだよ！！』

なんか文句あつか！？』

『そうそう、マジキモイんだけど。あのオンナ、アタマおかしいんじゃない？』

俺がクソ共と言い合っている、そんな短い時間の間に

《は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ？》

アナウンスの声を聞き、俺は優子のいたところに目を向けると、壇上にブーケとヴェールを残して姿を消していた。

一応、ヴェールは拾ってズボンのポケットの中に折り畳んで入れておく。

「う、宇童さん！木下さんを一緒に捜して下さい！」

慌てたスタッフが俺に言う。だが

「悪いけどそれよりもやんねえといけねえことができた」

「え？ちょ、ちょっと、宇童さん……！」

上着を脱ぎ捨て、スタッフに背を向けてクソ共のところへ駆け出す。

「おい、ウンコクズ共。覚悟はできてんだろおな？」

『ああ？さっきのオナナのオトコか？』

俺とやんのか teme ？ぶつ殺すぞ！！』

クソ猿 が俺の襟を掴んでくる。

『リユータ、そんな頭悪そうなやつ殺っちゃいなよー！』

「クソ猿、強い言葉を使うな。弱く見えるぞ。」

それと、クソ女猿めんど！！今からお前のオトコが俺に蹂躪されるとこをしつかり目に焼き付けとけ！！

『空を駆る者』ストームライダーを怒らせるとどうなるか、しつかり胸に刻み込んでおけ！！」

そう言つて俺は襟を掴んでいるクソ猿 の手を捻り上げ、痛みに怯んだところに鳩尾を蹴りぬくと、クソ猿 は胃の中ものを撒き散らし呻きながら床に沈む。

だがそれだけで俺の気が済むハズもなく力づくで立たせ、フラフラしているところへ顔面に『勝利のガゼルパンチ（498kg）』。上半身を仰け反らせ鼻血を出しながら後ろに倒れ込むが襟を持って再び立たせる。そして、すぐに頭を掴み床に叩きつける。動かなくなったクソ猿 の髪を掴み、顔を上げさせ言う。

「なあ、知ってつか？耳って引つ張ったらカントンに千切れるらしいぜ？

お前の耳は髪で隠れてて見えねえから有っても無くてもかわんねえよな？」

『ああ……いつ……だ……やめ……』

「あ？何だって？」

『うう……やめ……てくれ……』

「は？今どっちの立場が上かわかってんのか？」

『や、……やめてくだ……さい……。うう……おね、おねが……い……します……』

「は？やめるわけねえだろ？」

そう言つて左手でクソ猿の右耳の^{みみたぶ}を掴み、上に折り返すように思いつき引つ張ると右耳が千切れる。

『あああああつつつつつ……！！……！』

クソ猿は耳のあつたところに手をあてて喚き^{わめ}叫ぶ。

耳からの血で床が紅く染まっていき、クソ女猿はすぐそばで腰を抜かして泣いている。

「もう片方も同じようにしてやるよ。」

某ネコ型ロボットも耳を食われてああなつたんだ、お前も明日から『ドラえもん』って呼ばれるようになるぞ？人気者だな？」

^{わら}嗤いながら言つ。

『空を駆る者』^{ストームライダー}は『魂を狩る者』^{ソウル・イーター}へと姿を変え、テメエの魂を喰らうまで動くのをやめねえ。

死神に見初められたヤツに日の光を拝むことなんざできねえってことを教えてやるよ！

「さよなら人間。そしてこんにちはドラえもんっ！」

そう言つて残りの耳も強引に引きちぎる。
それにより喚き声が大きくなる。

……うるせえ。

コリッ

静かに喉を握り潰す。

『かひゅっ！？』

「やっと静かになつたな。んじゃ次はその汚れたガラス玉だな。
綺麗に汚れを拭いてやるよ。紙鑢かみやすりで」

どこからともなく紙鑢かみやすりを取り出す。

頑固な汚れは根元から削り取らねえとな。

ザリッ

『……………つつつ！！！！』

「おい、暴れんなよ。汚れがとれねえだろ？
しゃあねえ、本当はしたくなかったが2度と動けねえ体にするか」

そう言つてのそつと立ち上がるとクソ猿 からキツと睨まれる。

「おいおい、そう睨むなよ。

コレは俺のせいじゃねえ、全部お前自身のせいだぜ？

俺を恨むのはお門違いってやつだ」

そう言いながらクソ猿 の腰あたりに行き脚を振り上げ

「これから病院が友だちだ」

そして背骨に向かって踵落とし。

バキィッ

『—————っっっ！！！！？？？？』

「んじゃ汚れとり再開だ」

ザリザリザリザリザリザリッ

削る間に何度も呻き声が聞こえたが全て無視。

「おー、さつきとは見違えるほど綺麗になったぞ。綺麗な綺麗な紅色だ。

んじゃ、今日のところはこれぐらいでいいか。

また綺麗になりたかったら俺のここに来ればいい。無料にしといてやる」

お前の命と交換でな、と付け足してやる。

俺はまだ馬鹿にしゃがったことを許してねえからな。

んじゃ優子探しに行くか。

でもその前にトイレにいかねえとな。手が汚れちゃったし洗わねえといけねえ。

服も元のに着替えねえと優子がびっくりしちまうな。

「よっ。随分と待たせてくれたな」
「……ごめん」

如月ハイランドの中にあるグランドホテル前で待つことしばし。玄関から優子がトボトボと俯きがちに出てきた。

「んじゃ、帰るとするか」

「………空」

「なんだ？」

「空は私の夢、笑わないの？」

「笑って欲しいのか？」

「そんなわけないじゃない！！でも………」

「周りのことは気にすんな。」

それに俺は絶対その夢を笑わない」

そう言つて拾つてきたヴェールを優子の頭にかけてやる。

「！？………これ、さっきのヴェール………」

「俺は優子のが好きなんだぞ？愛してるって言つても過言じゃないくらいにな。」

だからな、結婚なんていつでもしてやるよ」

「空、ありがとう………」

そして夕日をバックに口づけをする。

「それじゃ、帰るぞ」

そうして帰路につく。

その後家に帰ると、優子をゆっくりたっぷりぬつとりと味わった。
……………表現がキメエ！！

週明けの学校にて

「おい、明久」

「ん？なに？」「あの時会った後、一度もお前と会わなかったんだが何してたんだ？」

「僕はね、雄二の方を手伝いに行ってたからね。」

他にも何人がパーク内にいたんだよ？」

「へえー、知らなかった」

「明久」

「ん？どうしたの雄二？」

「如月ハイランドでは随分と色々とやってくれたな。」

そのお礼だ。今話題の恋愛映画のペアチケットだ。

『気になる相手がいれば』一緒に行くといい」

坂本が強引に明久の手の中にチケットを握らせ、明久の席から離れる。

俺も離れとこ。

しばらくして明久の悲鳴が聞こえてきた。
今日も平和な1日だな。

閑話：俺と優子と暴風の叫び（後書き）

空が如月ハイランドの件で学校側からお咎めなしかったのは如月ハイランド側が大事にしくなかつたために秘密裏に処理した、という事で。

ヤンキーカップルに関しては口封じをして返した、ということ。

閑話：バカと俺とプール掃除（前書き）

少し変えました

閑話：バカと俺とプール掃除

ある週明けの教室

午前中の授業を終え、今は昼休み。俺が食堂で昼食を採っていると明久が話しかけてきた。
最近はもちろんと昼食を採っているようで何よりだ。

「空。今週末にプール掃除しないといけないから手伝って」

「ん？予定ないし別にいいぞ」

「理由は聞かないの？」

「おおかた鉄人に罰としてするよう言われたんだろ？」

今回は何したんだ？」

「僕がいつも問題起こしてるみたいに言わないでよ」

明久が少し怒った風に言ってるが事実だしな。

「問題起こしてなかったら今ごろ『観察処分者』になんてなかっただろうが」

「うつ……」

痛いところを衝かれ明久は顔をしかめる。

「で、何したんだ？」

「夜に学校に忍びこんでプールに入ろうとしたんだ」

「は？なんでだ？」

「ガス止められてて家のシャワー、今水しかでないから」

「食事代だけじゃなくてガス代の分も余裕つくれよ？」

それとプールも水だろ？」

「あ、盲点だった……」

悔しそうに舌打ちしているが、お前はただのバカだ。

「で、何曜日にするんだ？」

「土曜日の朝10時に校門前で待ち合わせだから。水着とタオル忘れないでね」

「了解」

土曜日

文月学園校門前

「おはよー。絶好のプール日和だね」

「あー、おはよう明久。プール日和じゃなくて掃除日和だな」

明久に挨拶をし、周りを見ると秀吉、姫路、島田姉妹、坂本夫婦、そして鬼気迫る表情でカメラの手入れをしている康太がいた。

「明久。こいつら全員で掃除すんのか？」

明らかに康太は掃除する感じじゃねえんだが？」

「『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』って鉄人に言われたから、掃除をする前にみんなで遊ぶつもりだよ」

「な！？そういう大事なことは先に言えよ！！」

優子誘えねえじゃねえか！！」

俺は明久の胸座むなぐらを掴み高速で前後に揺する。

「わわわっ!?!」

「『わわわっ!?!』じゃねえぞ、このアホンダラア!?!」

『雄二!!--ムツツリ!--空がキレとるようじゃから一緒に止めてくれい!!--』

『分かった』

『.....了解』

少し離れたところでそんな声が聞こえた。

「やっと、落ち着いたかのう?」

「ああ、悪い。少し取り乱した」

下から坂本、明久、康太の順で重なっており、俺はその上に腰を下ろしている。

女子はすでに着替えに行っているようだ。

.....優子の水着姿見たかったな。

「それで『少し』じゃと!?!なら、本気でキレるとどうなるんじや!!--」

「たぶんここら一帯、更地になるな」

「じよ、冗談じゃよな?」

「ああ、冗談だ。」

本当は人1人跡形もなく消滅するだけだ」

そう、それ『だけ』だ。

「それもそれで怖いんじゃないが……」

「今はそんなことより着替えに行こうぜ？」

「うむ。そうじゃの」

気絶している3人を残し更衣室に向かう。

20分後

「やっぱり女子はまだ着替え終わってねえな」

「そうみたいじゃの」

俺と秀吉はプールの入り口の方を見て待っている。気絶した3人は目が覚めていないのかまだ来ていない。

ここで秀吉の水着について説明しよう。上は肌に張り付くようなショートタンクトップ、下は飾り気のない普通のパンツの上にショーツパンツのようなズボンが一番上のボタンを外した状態で重ねている。ぶっちゃけ女物だ。

「……秀吉。その水着ってツツコんでもいいのか？」

「ワシのどこにツツコムところがあるんじゃない？」

「『どこ』って全部」

「空よ。それは何が何でも酷いぞい」

「秀吉。お前の着てる水着は女物だからな？」

「な、何を馬鹿なことを言っておるのじゃ！？ワシは『トランクス
タイプの水着が欲しい』と店員に言ったのじゃぞ！？」

「確かにトランクスタイプだが女物だ。

女子が来てから聞いてみる」

「むう。わかったぞい」

さらに10分後

女子陣が着替えてやって来た。

霧島は白のビキニに水着用ミニスカート、姫路は薄ピンクのビキニ
にゆったりとしたパレオ、島田はスポーツタイプのセパレート、妹
の方はスクール水着、を着ている。

「……………お待たせ」

「き、木下！！アンタ、なんて格好してるのよ！！」

「木下君！！なんで女の子の水着を着てるんですか！！」

「わっ。お姉ちゃん、とっても可愛いですっ」

三者三様の答え。

「な？お前のは女物だ」

「な、なんじゃと！？」

「男物に普通、上があるワケねえだろ？そのときに気付よ」

そう言つてやると秀吉は床に手をつきショックで項垂れる。
うなだ

「……ねえ、雄二は？」

「坂本たちはまだ気絶してるか今着替えてるかのどっちかな。気になるんなら更衣室に行ってみたらどうだ？」

「……そうする」

冗談で言ってみたが本当にするようだ。積極的だな。

「お前らはどうすんだ？遊ぶのか、更衣室行くのか」

「葉月はバカなお兄ちゃん呼びに行くですっ」

そう言くと更衣室へ霧島に続いていく。

「は、葉月！？」

し、しょうがないわね！！わ、私も行かなくちゃ！！」

最初から行く気満々だろうが。

「姫路はどうすんだ？」

「わ、私はいいです！！」

「そうなのか？明久がいるんだぞ？」

「そ、その、こういうのは大人になってからの方がいいと思います
！！」

これは弄ったら面白そうだな。

「『こういうの』ってどういうの？」

「え！？そ、それは……その凸と凹がくっつくようなことを……」

姫路が頬を赤く染め、もじもじしながら言う。

コレ、小動物みたいで可愛いな！！てか、姫路って何気にエロい。

更衣室って聞いてそこまで発展するとは妄想力豊かだ。

「それなら俺と優子はもうしてんぞ?」

「え？……ええええええええ！！！！！」

「驚き過ぎだぞ」

「あつ、はい。すみません……」

姫路の声が尻すぼみになる。

「ま、姫路の自由だし行っても行かなくてもいいぞ」

「い、行ってきます!!」

そうやって敬礼をすると更衣室へ駆け出す。

秀吉はまだ項垂れたままで今の話は聞こえてないようだ。

俺はみんなが集まるまでプールで漂っていることにした。

余談だが姫路が駆けているときに胸がプルンプルンしていた。眼福。

「あれ？宇童君そこで何してるの？」

漂っているとプールサイドから声がかかり、そちらを向く。

「あ？工藤じゃねえか。どうした？」

そこには坂本たちではなく、Aクラスの工藤が水着姿でいた。黒に白のドットの入ったビキニに黒い水着用ミニスカートを着ている。

「先に質問したから答えてくれると嬉しいかも」

「あー、悪い。今日はプール掃除しに来たんだよ」
「なるほどね。」

じゃあ次はボクが答えるね。ボクはね、部活で泳ぎに来ただけど休みだったみたいで。ここまで来たんだし、ついでに泳いでから帰ろうかなって感じだよ」

「水泳部なら競泳水着じゃねえのか？」

「たまにはこういう水着も着てみたいの。」

ねえ、ボクの水着姿似合ってる？」そう言ってその場でクルリ、と一回転する。

「ああ、似合ってんぞ」

「可愛い？」

「可愛いな」

「ホント!？」

「ああ」

「ふふっ、嬉しいな」

上機嫌になって水の中に入り、俺の方へ近づいてくる工藤。

「宇童君。君はボクのことどう思ってるのかな？」

「『どう』とは？」

「好きとか嫌いとか」

「んー……好きだな」

「実はね、ボクも宇童君のこと好きなんだ」

「おー、そっか。さんきゅ」

「ボクはね、『本気』で宇童君のことが好きなの」

さつきまでの陽気な雰囲気が一瞬のように消え去り、真面目な表情になる。

「……悪いな、俺にはもう彼女がいるから」

「優子でしょ？知ってるよ。」

ボクはそれを知った上で言ってるの」

「……諦められねえのか？」

「ボクには宇童君しか考えられない！！」

「……なんで俺じゃないと駄目なんだ？俺と工藤は何か接点があったってわけじゃねえだろ？」

「『接点』はちゃんとあるよ！！」

2年最初の試召戦争の時とか『清涼祭』の時とか、それにボクは優子の友だちだからそういうのも全部、ボクからしたらみんな『接点』だよ！！」

工藤の目元には涙が溜まっている。

無茶苦茶な理論だが、そういうのは嫌いじゃねえ。

「……なんで俺を好きになっただんだ？」

「そんなのわかんないよ！！」

気づいたら好きだったんだよ！！

いつの間にか宇童君のこと目で追うようになって、いつか優子みたいに宇童君の隣でいれる、宇童君にとって特別な存在になりたいって思ってたんだよ！！」

「その気持ちはすげえありがたい。けどな」

その気持ちは受け取れない、と言おうしたところで工藤に声を被せられる。

「宇童君くらいの人ならボクと優子を同時に愛せるような男になつてよ!!」

ボクのわがままだつてわかつてるけどそんなんじゃ絶対諦められない!!」

「……………」

『ボクと優子を同時に愛せるような男になつてよ!!』か……。難しいこと言ってくれんなあ。どうしようかね?

「……………うつつ……………お願い、ボクのお願ひ聞いて……………」

感情が高まりついに泣き出す工藤。
なんか俺が悪者みてえだな。実際悪かったかもしんねえけども。

「……………わかった」

「……………え?」

「付き合おう、工藤、いや愛子。」

愛子が俺に言つたように2人同時に愛してやるよ」

そう言つてニツ、と笑う。

さて、優子になんて言おうか?なんか無性に怖くなつてきた。
でも、男つてのはみんな女の涙に弱えから仕方ねえよな?

「ホ、ホント!?嘘じゃないよね!」

「ああ、本当だ」

「ありがとう、空君!!」

そう言つて俺に抱きついてくる。

いつの間にか呼び名が『空君』に変わつてるな。にしても柔らかいな。

何が柔らかいか、って？それを聞くのは野暮つてもんだぜ？
だが敢えて言おう、愛子の オツである、と。

「空君。今えつちなこと考えてるでしょ？」

「顔にでてたか？」

「ううん」

そう言つて首を横に振る。

「でもね、空君のこと好きだから何考えてるのか大体わかるの」

世に言う地文読みつて以心伝心みたいなことだったのか？

「嬉しいこと言ってくれるな」

愛子の頭を撫でる。略して愛撫。

「その略し方はないと思う」

「ははっ、悪い。」

そうだ、プールの水で涙の跡、流しとけ」

俺は手に水をつけ目元を拭つてやる。そこへ坂本たちがやって来て

「金髪のお兄ちゃんが知らないお姉ちゃんとちゅーしてるですっ」

「なんだと!？」

「空。死ね!!」

愛子の頬に手を当ててたから間違われたのか？

島田妹が爆弾を投下し、坂本と明久が俺に飛びかかってくるが、俺は入り口から離れたところにいるため距離的に不可能。回ってくればいいのにな。やっぱバカだな。

普通にプールに落ち、そこから俺のところまですごい速さで泳いで来る。

だが、俺のところには絶対にたどり着けない。なぜなら

「愛子。息吸って俺に掴まってるよ？」

1度深く息を吸い込み、水中に潜る。そして、坂本と明久に向き直る。

風の『面』を相手に叩きつけるように……それを水で。

手で捉えた水の『面』を押し出す。

すると、俺の周りの水が渦巻き、そこから複数の渦がプール内を縦横無尽に駆け巡る。もちろん坂本と明久を巻き込んで。

その間、俺はしっかりと愛子を抱いて（性的な意味ではない）おく。流されたら大変だからな。

そしてしばらく渦が治まり水中から顔を出すと、坂本と明久がプカプカ浮かんでいた。それを確認し終え愛子の方を見る。

「愛子。大じぶっ!？」

「空君。どうしきやつ!？」

とある理由で俺は愛子を抱き寄せる。

「おい、愛子。水着どうした？」

「へ？水着？………きゃああああ！！！！？」

愛子は自分の格好に気づき、耳まで真っ赤にして自分の体を抱きしめて隠す。

突然の大声に頭がクラクラする。

その悲鳴を聞き島田がプールサイドを駆け寄ってくる。

「宇童！！アンタ、何したの！！」

「俺なんもやってねえよ！！」

とにかくさっきの渦で愛子の水着が流されちゃったから探してくんね？」

「わ、わかったわ。すぐ、見つけて来るから！！」

『つ、土屋君！？すごい血の量です！！』

『血の噴水なんて葉月初めて見たですっ』

『……綺麗（ポッ）』

『………死して尚、一片の悔い無し………！！』

くっ！？康太に見られちゃった。後で殴って記憶消しておかねえと！！

「宇童！！見つけてきたわよ！！」

「さんきゅ！！」

愛子、着てくれ」

そう言つて愛子に着てもらつ。

「ねえ、空君。紐結んでくれない？」

「ん？ああ、わかつた」

愛子がそう言つて背を向けるので紐を結んでやる。
肌キレイだ。

「できたぞ」

「ありがとう。」

あ、ねえ。さつきボクの胸見た？」

「あー……見た……」

目を泳がせて答える俺。

「やつぱり空君えつちだよね？」

優子とはもうイイコトしちゃったのかな？」

「『やつぱり』ってのが気になるが……優子とはもうしたな」

「あちやー、優子に先に進まれちゃってるね」

「あんまり気にしないでいいだろ？」

「そう？」

でも先に進まれちゃってるから、ボクは優子に負けてるって思つちやうんだ。

だからね、ボクも先に進みたいんだ？」

あれ？これ、『ヤ・ら・な・い・か？』っていうお誘い？

「だからってやったから同じになるワケじゃねえんだぞ?」

「さ、さすがにそんなこと考えてないよ!!」

ただ……キスして欲しいなって」

「……わかった」

そう言うのと俺を見上げ、目を閉じる。そして俺は愛子にキスをする。やはりマシユマ口唇か!?!この感触クセになるんだが?

「空君。もう一度お願いしたいな」

愛子はそう言うのと俺の顔を自分の方へ引き寄せキスをする。

キスをしていると俺の口内に愛子の舌が侵入してくるがそれを押し返し、逆に愛子の中を犯す。愛子は舌遣いがうまくよく俺の舌に絡みついてくる。

唾液が俺と愛子の中を行き来し、キスし終わると銀の糸が引いていた。

「はあ……はあ……空君って激しいんだね?」

「苦しかったか?悪い」

「はあ……んっ、……大丈夫だよ。」

ボクね、今、すぐドキドキしてるんだ」

そう言うって愛子は俺の手をとり自分の胸にそれをつける。

やべえ!?!マジやべえ!?!

キス+『こんなこと』したらmy sonがお目覚めになっちまう!!

心を落ち着ける、悪即ぜ じゃなかった……色即是空空即是色天

上天下唯我独尊……

ふう、落ち着いた。

「ああ、すげえバクバクしてんな」

「でしょ？」

それにね、今日のはファーストキスだったんだからしっかり味わってくれた？」

「ああ、おいしくいただいた」

……俺、何言つてんだ？変態じゃねえか。

「ふふつ、面白い答え方だね。」

ボク、空君とキスしちゃったんだ。えへへへ」

上機嫌な愛子。

そういえば集中していて気がつかなかったが、周りがなんだか慌ただしい。俺らのことには気づいてなさそうだ。

何が原因かと思い周りを見渡すと、さっきまでプカプカ浮いていた2人とプールサイドにいた者たちが必死に血を流しすぎた康太に延命措置を施していた。

ほどなくして手配していた救急隊員が駆けつけ事なきを得た。

その後はプールだけでなくプールサイドも掃除して帰った。秀吉はまだショックから立ち直れないようにで放置している。プール掃除の時に邪魔だったのは言うまでもない。

宇童家

「空。来たわよ。
話って何かしら？」

玄関のドアが開けられ優子が入ってくる。
愛子のことを話するために呼んだ。

「リビングで話すぞ」
「わかったわ」

そしてリビングへ向かう。

「あれ？愛子、なんで空の家にいるの？」

リビングに入り発した第一声がコレ。

「優子、ボクね。空君と付き合うことになったの」

「え？……空！？どういうこと！！」

「そのままの意味だ」

「え？どうして！？私の何が不満なの！！私、………空と別れた
くないよぉ……うつつ………」

優子が目に涙を浮かべ、そのまま泣き出す。

そんな優子を抱き寄せ言う。

「優子。俺も優子と別れる気はねえよ」

「え？でも……」

「今日、告られた時に『宇童君くらいの人ならボクと優子を同時に愛せるような男になつてよ！』って言われてな。」

そういう選択もありかな、って思ってた」「じ、じゃあ、私、空と別れなくていいの？」

「ああ。」

だが優子が許可してくれるかが問題でな」

「……なら前と同じ、いやそれ以上に愛してくれる？」

「ああ」

「じゃあ、許してあげる」

そう言うつと愛子の方を向き

「愛子。本妻は私だからね！！」

「いいよ。でも、ボクに盗られないよう気をつけてね？」

愛子が意地悪く返し、俺は呆れたように言う。

「ケンカ両成敗だからな。ケンカするなよ？」

「ええ！」

「うん！」

2人の元気な声がリビングに響き渡る。

バカと俺と名無しの手紙（前書き）

3 巻開始です。

バカと俺と名無しの手紙

新学期になり2ヶ月が経過し、日没の時刻にはつきりとした変化を感じ始める。

そんな中、俺は優子と愛子の3人で登校している。

今までは俺・優子・秀吉の3人で登校していたがプール掃除の日に、愛子の家が俺や優子の家から然程離れていないことを知り、最近^{about}は愛子を含めた4人で登校している。

秀吉がいないのは演劇部の朝練らしい。部活熱心で何よりだ。

優子と愛子の間柄も良好で、むしろ仲の良い好敵手といった感じだ。お互いを高めあっている。

何を高めあっているか、って？

それはだな、どっちが俺をたのごふっ！？

視認できないほど速い拳が俺の鳩尾に叩き込まれる。それも重みのある2発。

「空。あまり変なこと考えちゃダメよ？」

「そっだよ。」

それに女の子の秘密をバラそうとするのはいけないよ？」

俺と腕を組んでいる2人が何事もなかったかのようにそう告げる。

「……………ああ、悪い」

俺は痛みに悶えていてすぐに言葉が出ない。
胃の中の物が出ちまいそうだ。

「気分悪そうだけど大丈夫？」

少々顔色の悪くなった俺を見て愛子が心配そうに尋ねてくるが、その原因は愛子たちだつてのを忘れてねえか？

「大丈夫じゃねえ……。すっげええらい」

氣い抜いたら吐きそうだ。

「男の子なんだからシャキツとしなさいよ」

……無茶言つな。これはマジでキツい。

「……知らないようなら言つとくが鳩尾は人間の急所だからな？」

「そうなの？なら悪かったわね」

「ボクもごめんね？」

少しは謝るのを渋ると思ったが意外と素直に謝る2人。

何故か、最近2人とも凶暴になつちまつたんだよ。理由が思いつかねえ。

「理由はアレの時にいつも攻められてるからその反動よ」

『アレ』ってカタカナなら4文字、アルファベットなら3文字のやつか？

「うん、ソレで合ってるよ。」

アレで攻められるのは嫌じゃないけど自分も攻めてみたいんだよ」

「それでコレか……。」

流石に急所殴るのは止めて欲しいな」

「考えておくわ」

「……頼むぞ」

「それにしてもボクは付き合い始めてからまだ1ヶ月きてないのに空君とヤっちゃってるし、空君って手を出すの早いよね？」

「俺も自分でそう思うけど愛子だって『や・ら・な・い・か?』的なオーラ振り撒いてたじゃねえか」

「それでもボクは悪くない」

キツパリと言い切る愛子。

手を出すのが早いのは認めるが『全部俺がした』みたいなことは認めねえ。てか認めたくねえ。

康太とは違ったムツツリーニの称号がつけられるかもしれない。

『第2のムツツリーニ（ver.実技）光臨!』みたいな感じで新聞部発行の新聞に載るかもしれねえ……。

「別にいいじゃない。有名になれるわよ?」

「よくねえよ。女子からの評判が地に落ちる」

「空君、その言い方たらしに聞こえる」

「……もうたらしでもなんでもいい」

開き直る(?)俺。

「あ、校門見えてきたよ」

「……お、本当だ。」

「じゃあそろそろ襲撃されそうだな」

秀吉・優子と一緒に登校していた1年の冬頃から量産型GOKI共に襲撃されているが、愛子とも登校するようになってから更に激しさが増している。そのため登校時はA・Tエア・トレックを履いて常に臨戦態勢。昔はA・Tエア・トレックがなかったため少々大変だった。

「いつも大変ね？」

「向こうが全然懲りないからな。」

先に学校行つてろよ？」

「ええ」

「うん、わかった」

「諸君。ここはどこだ？」

『最期の審判を下す法廷だ！』

「異端者には？」

『死の鉄槌を！』

「男とは？」

『愛を捨て、哀に生きるもの！』

「宜しい。これより SSS級異端者宇童 空の処刑を執行する
！」

優子と愛子が学校に駆けて行くとどこからともなく量産型GOKI Sが湧いてくる。

リアルGOKIを連想させるような素早い動きが気持ち悪い。それと、いつの間にかA級からSSS級にはね上がっている。俺が何したってんだよ。まったく……。

「とつとと終わらせるぞ」

trick: Infernal Bloody Baron

俺を球状に囲むよう『牙』を無数に放ち留める。

そして中を『炎』で素早く熱すると空気が膨張し、球が弾け、『牙』と熱の両方が量産型GOKIsを襲つ。

本来なら相手を切り裂き、傷を炙る技だが、今回はそこまでせず気絶する程度にセーブしている。

死人が出たりしたら困るからな。

俺は量産型GOKI共が気絶したのを確認すると、復活しないうちに校門をくぐり学校に入っていた。

Fクラス教室

教室に入ると入り口付近で秀吉と、荷物を持ったままの明久が話していた。

「明久、秀吉、おはよ。」

「おはようじゃの」

「おはよう」

「明久、今日は早いじゃねえか」

「明日からの強化合宿が楽しみでさ。早く起きちゃったんだ」

「あ？強化合宿って明日からなのか？」

「うん、そつだよ。知らなかったの？」

マジか……。

「……全然用意してねえ」

「昨日、『もうすぐ合宿じゃのう』と話しながら学校に来たじゃろうに」

「アレは演劇部のことかと思ったんだよ」

「姉上も工藤も普通に話しておったじゃろう？」

……あ、そういえばそうだな。何であの時気付かなかったんだ……。

「帰ったら急いで用意しねえと……」

「がんばるのじゃぞ。」

それにしても学力強化が目的とは言え、皆で泊まりがけじゃ。胸が躍るのう」

「やだなあ。胸が躍るって言うほど大きくないくせに」

「いや、ワシの胸は大きくなつては困るのじゃが……」

しかめっ面をする秀吉。

「明久。秀吉が困ってんだろ。あんま弄ってやるな。」

それと、荷物をロッカーに入れてから話そうぜ？いつまでも持つてんのはしんどいし」

「あ、うん。そうするよ」

そう言つてロッカーに荷物を入れ、秀吉のもとへ戻ろうとしたときに、明久の方からなにかに驚いている雰囲気が伝わる。

「どうかしたか？」

「What's up, Sora? Everything goes so well...」

「秀吉！明久が変になったから直すの手伝ってくれ！」

「や、僕は全然変じゃないよ！？」

「お前が英語を口を衝いて出せるワケねえだろ？秀吉も言っ
てくれ」

寄ってきた秀吉に話を振る。

「そうじゃな。明久が英語を話すこと自体が有り得ぬことじゃ
から」

「その言い方はあんまりだよ！？」

「現実を見る。」

で、どうしたんだ？」

「と、とくに大したことじゃないから気にしないでいいよ。」

僕はちょっとトイレに行ってくるから」

そう言っ
て教室を飛び出していく。

「マジでどうしたんだ」

「なんじゃったのかのう」

明久が出ていってしばらくした後、明久の『最悪じゃあーっ
っ！』という叫びが聞こえてきた。

「明久。一体何があつたんじゃ？」

教室に戻ってきて机に突っ伏している明久を見て秀吉が声をかける。

「べ、別になんでもないよ」

「ウソばかり。さっき妙な叫び声が聞こえたし、何か隠してるでしょ？」

「あ、美波。おはよう」

質問を無視して挨拶をする明久。

「おはようアキ。」

それで、何を隠しているのかしら？

まさか、ラブレターを貰ったなんて言わないわよね？」

チャキチャキチャキ

島田のある一言を聞きクラスの奴らがカッターを構える。

「美波、言葉に気をつけるんだ。ラブレターという単語に反応して皆が僕に向かってカッターを構えている」

「皆、落ち着いて。アキがラブレターなんて貰えるわけないでしょう？隠しているのは別の物に決まっているわ」

「ふふん！そのまさかさ！今朝僕の靴箱に」

「明久、死にたく無かったら言動に気をつけた方がいいぞ？」
明久が言い切る前に忠告する。

「脅迫状が入っていたんだ」

島田がキレそうだ。

事故ってんぞ？

「へえ、脅迫状なんだ。面白い冗談ね。

それで本当はなんなの？」

「だから脅迫状なんだって!!」

明久も意地になったのか脅迫状と言い張る。

「脅迫状なんてくるワん……？」

スウサツ

ふと、明久のズボンのポケットから封筒らしきものが顔を覗かせているのを見つけ、俺はそれを明久に気づかれないようにする。

「空。その封筒はなんなのじゃ？」

「たぶん、コレが叫びの源」

「『源』と言っほど元気にはならんと思うのじゃが？」

「そこは気にすんな」

そう言っ封筒から紙を抜き出す。

「何が書いてんのかね」

「ドキドキするぞい」

そして折り畳まれた紙を開くとそこには

《あなたの秘密を握ってます》

『最悪だ（じゃ） あああーっ！っ！』

俺と秀吉の叫び声が教室に響く。

「空、秀吉。急にどうしたのさ？」

「五月蠅いわよ？」

俺は脅迫状をサッ、と隠す。

「あ、悪い」

「すまんのう。何でもないから続けてくれて構わぬぞい。

まさか本当に脅迫状じゃとはのう（ボソッ）
「続きを見るぞ（ボソッ）」

脅迫状にはまだ続きがあった。

《あなたの傍にいる異性にこれ以上近づかないこと》

ふむふむ。島田と姫路のことだな。

《この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します》

ん？写真？

ちようと写真が入るようなサイズの封筒が同封されている。その中には3枚の写真が入っていた。

1枚目：メイド服姿の明久

「似合っておるぞい」

「確かに。秀吉に負けてねえ」

「それはそれで複雑なのじゃが」

2枚目：メイド服姿の明久（パンチラ エディション）

「コスプレ趣味だったのかのう」

「パンチラすんのにトランクスはねえだろ」

「見るところはそこなのかのう……」

3枚目：ブラを持って立ち尽くす明久（着替え中メイド服着崩れバ
ージョン）

「変態だな」

「女子になりたかったのかのう？」

「今からでも遅くない、アレをとる手術をしろ」

さて

「秀吉。コレどうする？」

「明久に返さぬのか？」

「それだと面白くねえじゃねえか」

「ふむ、確かにのう」

「あ、久保に渡すか」

「Aクラスの久保 利光かの？明久のことが好きな」

「ああ、そいつ。じゃあ、渡しに行こうぜ」

「うむ、わかったぞい」

俺と秀吉は誰にも知られることなく教室から抜け出す。明久は島田と未だに話しており、周りの奴らもカッターを構えて明久の動きに意識を向けていた。

Aクラス教室

「邪魔するぞ」

「失礼するぞい」

Aクラスの教室に入ると優子と愛子が声をかけてきた。

「あら？空に秀吉じゃない」

「空君、会いたかったよ」

「ちよつと用があつてな。」

久保 利光いるか？」

教室に響くくらいの大きさで言う。

「僕だが何か用かい？」

「1、2、3の内どの数が好きだ？」

「急にどうしたんだい？」

「プレゼントのお知らせだ」

ニツ、と笑う俺。

「それってボクたちもやっていいのかな？」

「姉上たちには悪いのじゃが今回はダメじゃ」

「秀吉。それはどういうこと？」

「姉上たちが貰ってもゴミになるだけじゃ」

明久の写真をゴミ呼ばわり。

哀れ明久。

「ま、そういうことだ。優子と愛子はまた今度な。
で、久保。何番がいいんだ？」

「ふむ。1をお願いしよう」

「1はこいつだな。

ほらよ。絶対になくすなよ?」

メイド服姿の明久の写真を渡す。

「な!?!コレは!?!

宇童君、感謝する。このお礼は必ず返すよ」

「いいってことよ。

んじゃ、俺らは教室に戻るな?」

「失礼したぞい」

そう言つてドアの方へ向かつて歩いていく。

「あ、空君待つて」

「ん?」

愛子の声に振り向くと

ちゅっ

一瞬俺の唇に愛子の唇が重なる。

周囲の女子がきゃーきゃー言つて興奮している。

男子（久保 利光除く）からは殺気が出ている。

「……………」

脳内会議

エリアA【脳内支部A】

トム：『コアが完全に陥落（処理落ち）しました！！
生き残った者が応援を求めています！！』
中将：『くっ！！』

総員、急いでコアの奪還（復旧）に向かえ！！』
総員：『イエッサー！！！！』

エリアS【コア】

銃弾が飛び交うさなかとある物陰での会話

マイク：『なあ、ジョン。』

俺、この戦い（復旧）が終わったらジェーンと結婚するんだ』

ジョン：『そうか！！なら、絶対生きて帰らないとな！！』

マイク：『ああ。ジョンも絶対生きて帰れよ』

ジョン：『おう！！』

2人の戦士は拳をぶつけ雄叫びをあげながら敵に向かって駆けていく。

敵を倒してまわる中、マイクがスナイパーに狙撃され倒れる。
そんなマイクにジョンが慌てて駆け寄る。

ジョン：『マイクっ！！？大丈夫か！！』

マイク：『ごふっ、……ジョン、か……？見ての通り、……もう、俺は……うほっ、……無理、だ……ごほっ……』

ジョン：『マイク！！絶対生きて帰るんだろ！！ジエーンと結婚するんだろっ？

諦めるなよ！！まだ助かる！！』

マイク：『ジョン……もういい、……お前も……ごほっごほっ……

わかってるだろ……？俺が……助からない、がはっ……ってことは……。

今、すごく、眠いんだ……寝かせて、くれ……眠いよ、パトラッ、

シュ……（ガクッ）』

ジョン：『マイクウウ！！！！』

- B A D E N D -

mission：マイクを守れ・コアの奪還 失敗

脳内会議終了

「あ、愛子！？何やってるのよ！！」

「空君見たらついしたくなっちゃって。えへへ」

そう言って愛子は笑う。

「姉上！！空の反応がないぞい！！」

「大丈夫よ。すぐ治せるわ。」

運動中枢の小脳がなにかのショックを起こすところなるそうよ。
今回の場合は愛子の突発的なキスが原因でしょうけど。
空、帰ってきなさい！」

そう言つて空の左胸辺りにストレートを一発。

「ゲホッゲホッ!!」

は!?!何が起こった!?!」

ジョンがミッションを失敗したため記憶の飛んでいる空。(解説)

「空。『ただいま』のキスよ」

そう言つて今度は優子がキスをする。

『ただいまのキス』ってなんだよ!?!

「……………」

脳内会議

エリアA【脳内支部A】

トム：『コアが再び陥落（処理落ち）しました!!
生き残った者が応援を求めています!!』

中将：『くっ!!』

総員、急いでコアの奪還（復旧）に向かえ!!』

総員：『イエッサー!!!!!!』

エリアS【コア】

銃弾が飛び交うさなかとある物陰での会話

マイク：『なあ、ジョン。』

俺、
『

ジョン：『そこから先は言うな。今は生きることだけを考えろ』

マイク：『ああ。ジョンも生きて帰れよ』

ジョン：『もちろんだ。』

2人の戦士は拳をぶつけ雄叫びおたけをあげながら敵に向かって駆ける。

敵を倒してまわる中、マイクがスナイパーに狙撃されることなく、
ついに今回の原因にたどり着く。

マイク：『ジョン！！コイツはもしや！！』

ジョン：『ああ。コイツは魔獣【ボンノウ・キッス】。人の煩惱に
巣くう厄介な魔獣だ』

マイク：『なんでこんなところにいるんだ！！』

ジョン：『焦るな。』

能力はそれほど高くはない。2人がかりなら殺れる』

マイク：『ああ！！』

2人の戦士は激闘の末、ついに魔獣【ボンノウ・キッス】を倒すこ
とに成功し、応援部隊とともに本部の奪還をも成し遂げる。その後

マイクはジェーンと結婚し、ジョンも彼を待っていたキャシーと結婚した。

彼らの物語は子にも語り継がれていくだろう。

チャラララッチャ、チャッチャッチャー

- TRUE END -

mission：マイクを守れ・コアの奪還 成功
bonus：2人の結婚式

脳内会議終了

ボーナスイらね。

男子（久保 利光除く）からの殺気を無視しながら愛子に言う。

「大胆になったな？」

「愛子にされちゃったからね」

「ん？俺って愛子にキスされたのか？」

「覚えてないの」

表情を暗くする愛子。

「悪い。覚えてねえ」

「じゃあ、もう一回」

そう言つて愛子は俺にキスをする。

………は！？危ねえ！！また脳内会議に飛びそうになった！！

「……んじゃ帰るな？」

「うむ。失礼した。」

姉上、ほどほどの」

去り際に秀吉が優子をやんわりと注意し、やっとAクラスからFクラスへ戻っていく。

Fクラス教室

Fクラスに戻ると明久はボロ雑巾のように転がっていた。

「島田に信じられなかったみたいじゃな」

「仕方ないっちゃ仕方ないだろ」

「まあおう。脅迫文が送られてくるなど滅多にあるものじゃないからのう」

「それも学校でな」

秀吉は島田に視線を向けて言う。

「それにしても島田は不機嫌そうじゃな」

「明久の写真でも渡して機嫌直させるか」

「む、また渡すのかのう」

「明久が起きてまたボコボコにされるよりかはいいと思うんだが？」
「そうじゃの。なら渡してくるぞい」

そう言つて秀吉は封筒から適当に1枚抜き出して島田の方に向かつていった。

後1枚残つたな。残しとくか？

……いや、やっぱ誰かにやろう。その方が面白そうだし。
誰にやろうか？明久のことが好きなやつがいいよな。

……あ、姫路にやるか。

そう思い姫路のところへ。

「姫路。俺からプレゼントだ」

「あ、宇童君。おはようございます。
プレゼントってなんですか？」

「コレだよ。」

絶対他のやつに見せるなよ。それとなくすな」

残った写真（ブラを持って立ち尽くす明久（着替え中メイド服着崩れバージョン））を姫路に渡す。

秀吉はパンチラ エディションを持っていったらしい。

「う、宇童君！？こ、コレは！？」

「神様からの細やかなご褒美だと思つてくれていいぞ」

何に対する褒美かは分からねえけど。

「ありがとうございます!!」
「いいってことよ」

俺は姫路に渡し終わると自分の席へ帰っていく。
さてここからが問題だな。脅迫状に写真はもうねえからちよこつと
弄らねえとな。

そう考えていると秀吉が戻ってきた。

「空よ。渡して来たぞい」
「どうだった?」

「えらく上機嫌になっておったぞ。
『こ、こんなの貰っても嬉しくともなんともないんだからね!!』
と言っておったしのう」

声真似上手いな。

「明久の寿命が延びて何より。
それはさて置き、脅迫状改造しねえといけなくなつたな」
「残り1枚はどうしたのじゃ?」
「姫路にやった」
「なるほどのう。」
「それじゃあ、どう字を消すかの?」
「『同封されている』を消すだけでいいか?」

俺はノートに書いてみる。

《この忠告を聞き入れない場合、

写真を公表します》

「それじゃと捻りがないじゃろう。それになんの写真かわからんじやろうに。」

こういうのはどうじゃ?」秀吉が俺のノートに書き込む。

《こ　　　　　れ

を公表します》

「直す前とあんまり意味が変わってねえ」

漢字を弄るとどうなんだ?

忠　中・心

告・合・同　　口・口くち(ろ)

聞　門・耳

場　日・易

封　寸

写　与

真　目・具

公　八はち・八(は)・ム

表　衣

読点までは全部残しといた方がいいよな……。しかもちゃんと脅迫してねえといけねえし……。

「むむむ、コイツでどうだ?」

《この忠告を聞き入れない場合、

目をム　します》

蒸しタオルで目を覆うとか考えねえよな?

「おおっ!!! コレは脅迫になっておるのう」

「だろ？さ、すっかり消して明久に戻してやんねえと」

文字を消し終わると気絶している明久が起きないように脅迫状を戻してやる。

しばらくすると起き上がり脅迫状のことを康太に話しにいていた。弄つていてなんだが犯人見つかるといいな。

明久が坂本を交えた3人で話しているとガラガラと教室の扉が開く音が聞こえ、大きな箱を抱えた鉄人が入ってきた。

「遅くなつてすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。」

HRを始めるから席についてくれ」

そう告げると自由にしていたクラスメイトが席につく。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。」

集合時間と場所のページはよく読んでおくことだ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

しおりをもらい、パラパラ捲つて中を見る。
帰ったらちゃんと用意しねえとな。明日が楽しみだ。

「
いいか、我々Fクラスは他のクラスと違って

「現地集合だからな」
『案内すらないのかよっ!?!?』

まさか現地集合とは……。

Fクラスの扱いが雑すぎて涙が出てくる。

バカと俺と強化合宿

強化合宿1日目

車窓から流れる緑の多い風景を見ると、いつもの街から遠く離れた土地に來ていることが実感できる。電車に乗って、たったの1時間で随分と景色は様変わりして見えた。

「あと2時間くらいはこのままですね」

姫路が携帯電話を見て呟く。

「2時間か。眠くもないしなあ。」

雄二、何か面白いことない？」

「鏡がトイレにあったぞ。存分に見てくるといい」

「それは僕の顔が面白いと言いたいのかな？」

「いや、違う。お前の顔は割と

笑えない」

「笑えないほど何！？笑えないほど酷い状態なの！？」

明久が喚く。^{わめ}

「明久、うるせえぞ。黙って座ってろ」

「いや、でもこれは大事なことだよ！？」

「お前の顔が笑えないのは今に始まったことじゃねえだろうが。気にすんな」

「……………」

「泣くなら姫路の豊満な胸に顔でナニでも埋めてろ」

そう言っでやると明久は姫路の胸に飛び込もうとするが

「アキ？何しようとしてたのかしら？」

島田に頭を掴まれ、霧島直伝アイアンクロー。

「ぐわああああつつつ！！！！？」

メキメキメキ、パキユッ

明久の頭からそんな音が響く。

「おい、島田。今、明久の頭からヤバい音がしたぞ」

「白目をむいておるように見えるぞい？」

「ア、アキ！？大変、介抱しなくちゃ！！」そう言っで姫路の隣から明久の隣へ席を移動し、膝枕をしてやる島田。

自分でしといてその反応はなんだよ。ま、心配するのは悪いことじゃねえけど。

それはそうと、脅迫状の忠告のこと忘れてんのか？

「ま、俺には関係ねえしな。」

「……………あー、平和だ……………」

そう呟くと俺は眠りに入る。

1時間後

「空。そろそろ昼飯食べるぞ」

坂本の声を聞き意識が覚醒する。

「ああ、了解」

俺が起きたところで姫路の声が聞こえてくる。

「皆さん。実は私、お弁当作ってきたんです」

そう言っって大きな弁当箱を鞆から取り出す。

「良かったらどうですか？」

「悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまったの」

「……………調達済み」

「俺もだ。」

それは明久にやってくれ」

復活していた明久をロシアンルーレット弁当の餌食に。

『当たりは美味しいのじゃがハズレはすこぶる酷いのう』とは秀吉の談。

「ごめん。実は僕もこうして惣菜パンを」

「おっと、手が滑った（パシッ）」

「……………足が滑った（グシャッ）」
「ああっ！僕のパン！」

見事な連携に明久のパンは踏みつぶされる。

「坂本、食い物を粗末にするなよ？」

「ああ、大丈夫だ。コレは俺が責任を持って処分する」

「……………明久、弁当分けてもらえ」

「でも……………」

「分けてくれるって言うてんだし一緒に食ったらいいじゃねえか」

「……………男なら腹をくくれ」

「ぐぐぐ」

渋っている明久にとって突破口となる救いの一言が島田から放たれる。俺たちにとっては迷惑極まりないが。

「アキ。良かったらウチの弁当も食べてみる？」

「美波も分けてくれるの！？」

それならいっそのこと、みなでお弁当を広げて少しずつ摘もうよ
！」

やはりこうなったか！！どう回避する？

「わ、ワシとムツツリーニは向ここの席なので遠慮させて頂こうかの」

「……………！（コクコク）」

「俺も遠慮させてもらう。」

島田も姫路も明久と食べたいだろうし邪魔するのは悪い」

これでどうだ？

「え？空も一緒に食べ」

「それならしょうがないわね」

「そうですね。それならしょうがないです」

「え！？何がしょうがないの！？」

明久っ、余計なことは聞くな！！

「俺らはお邪魔のようだし秀吉の方で食ってくるよ。
坂本も行こうぜ」

「ああ。」

感謝する（ボソッ）

「困った時はお互い様だ（ボソッ）」

そう言って秀吉の方で昼食を採り、談笑していると目的の駅に着く。
明久は一応無事のようだ。

合宿所 午後8：10

元々は旅館のこの合宿所は文月学園が買い取って現在のように改装したらしい。贅沢な学校だ。

今は割り当てられた部屋にいる。

部屋には畳が敷いてあり、トイレと風呂が備え付けられてある。

俺は既に布団を敷いており、髪ゴムで前髪を縛りジャージを着てくつろぎモードで布団に寝転がっている。

この部屋は俺・秀吉・明久・坂本・康太の5人で使うのだが今は康太がいない。

「なあ、康太どこいったんだ？
さっきまでいたと思ったんだが」

そう言った瞬間、部屋の扉が開き康太が入ってくる。
噂をすればなんとやら、つてか。

「……………ただいま」

「康太。何してたんだ？」

「……………情報収集」

なんの情報だ？

その情報に身に覚えがあるのか坂本が答える。

「昨日俺と明久が頼んだ例のヤツか。随分早いな」

明久は脅迫状のことか。坂本のはなんだ？

「……………昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

「おおつ。さすがはムツリーニだね」

「……………手口や使用機器から、明久と雄二の件は同一人物の犯行

と断定できる」

「それで、その犯人は誰だったの？」

「……………（プルプル）」

明久が尋ねると康太は申し訳なさそうに首を振る。

「……………『犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』ということしかわからなかった」

「何を調べておるのじゃ！？」

ついッッコム秀吉。

「秀吉、今は我慢しろ。話が進まねえ」

「すまぬ……………」

「……………小型録音機。校内に網を張った」

そつ言いながら小さな機械を出す。

「……………昨日学校中に盗聴器を仕掛けた」

「……………康太。あの時の忠告忘れてんのか？」

「……………大丈夫。覚えている」

「嘘だったらどうなるか分かってるよな？」

「……………！（コクコクッ）」

思いっきり睨みつけると康太は高速で頷く。
それを無視して明久が尋ねる。

「ムツツリーニ。コレが情報なの？」

「……………（コクコク）」

落ち着いた康太が普通に頷いてスイッチを押すと内蔵されている音源からノイズ混じりの声が部屋に響く。

《　　らっしやい》

《……雄二のプロポーズを、もう1つお願い》

「坂本。お前、霧島にプロポーズしてたんだな。」

「違う！！試召大会の時に秀吉が俺の声を真似て言っただよ！！」

「照れんなって」

「嘘じゃねえ！！」

素直じゃねえな。

俺が坂本と話している間にも再生は進んでいく。

《　　明日からは強化合宿だから引き渡しは来週の月曜で》

《……わかった。我慢する》

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かった……」

「プロポーズがそんなに嫌なのか？」

……あ、自分で言いたいってことか。なるほどな」

「違げえよ！！」

「……………それで、こっちが犯人特定のヒント」

康太が俺らのコントを無視して進める。

《　　相変わらず凄い写真ですね。バレたら酷い目に遭うんじゃないんですか？》

《ここだけの話、前に一度母親にバレてね、文字通りお尻にお灸を据えられたよ。おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？　》

「……………わかったのはこれだけ」

「なるほどね。」

「どうやってその女子をみつけようか？」

「秀吉に見て来てもらうか？そろそろ女子の入浴時間だしな」

「なぜにワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」

「坂本。いくら秀吉でも風呂を覗かせるのを俺は許さねえし、それに秀吉は個室風呂に入ることになってるから無理だぞ」

しおりの入浴時間のページを開いて見せる。

「くそっ！」

「……………万策つきた」

「どうしてワシだけ個室風呂なのじゃ！？」

そうやって唸っていると

ドバン！

「全員手を後ろに組んで伏せなさい！」

凄いい勢いで俺らの部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入ってくる。秀吉以外は窓から外へ脱出を試みる。

「な、なにごとじゃ！？」

「木下はこっちへ！そっちのバカ4人は抵抗をやめなさい！」

先頭に立つ島田が、咄嗟にこの場から脱出しようとした俺らの機先を制した。

「なぜお主らは咄嗟の行動で窓に迎えるのじゃ……？」

体の構造が違うんだよ。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

それと島田に『バカ』なんて言われたかねえ！！」「宇童も『バカ』じゃなかったらFクラスにいないでしょうが！！」

『バカ』の部分を強調して言い放った島田の後ろからCクラス代表の小山が高圧的に言う。

「よくもまあ、そんなにシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐにわかるというのに」

「犯人？犯人ってなんのことさ？」

「コレのことよ」

明久の問いに小山が答え、俺らの前に何かを突き出す。

「ムツツリーニ。アレが何か分かるか？」

「……………CCDカメラと小型集音マイク」

「女子風呂の脱衣所に設置されてたの」

これで愛子や優子を撮ろうとしたのか。ふむふむ。なるほど。

「コレがお前らのなら俺はここでお前らを消さなきゃなんねえ。覚悟はできてんな？」

俺から殺気が滲み出て、女子が小さく悲鳴をあげる。

「ぼ、僕たちはそんなことしてないよ!!」

「空も一緒にいたから分かるだろ？俺らが脱衣所にカメラを取り付ける暇なんかなかった」

「……まあ、確かに。」

じゃあ、他の男子か？いや、この学校だと女子もありえるな（ボソツ）

顎に手を当てて考えている俺の呟きを聞いた島田が反論する。

「ち、ちよつと待ちなさいよ!!」

女子がするわけないじゃない!!」

「その自信はどこからくるんだ？」

お前を『お姉さま』つつてストーキングしているやつは男より女が好きだろ。ならそいつがやったのかもしれないだろ？」

島田をストーキングしているのはDクラスの清水（ ）とかいうやつ。

「っ!？否定できないわね」

「もしかすると本当にそのストーカーかもな？」

今いるんなら聞いて見ればいい」

「……美晴。どうなの？」

「お姉さま!？み、美晴がそんなことをすると思っっているのですか？」

「思ってるから聞いてんだろっが」

「黙りなさい!!この豚野郎!!」

女子一行の中からストーカーの声が聞こえる。
言葉遣い悪いな。

「愛しのお姉さまから疑われちまって哀れだねえ？」

「黙りなさいと美晴言ってるんです！！」

「何をそんなに焦ってるの？ストーカーちゃん？」

もしかして本当のこと言っちゃったか？

いやー、悪いね。お兄さん気がつかなかったよ」

俺がおちよくるように言っているとストーカーのいる辺りから黒い霧^{もや}がでる。

「クロスクロスクロスクロスクロス」

「沸点低いぞ？」

「ダメレエエエエ！！！！」

俺の一言が引き金になったのか、ストーカーが飛びかかってくる。
手を突き出し俺の喉を潰しにくるが俺は受け流す。ストーカーはバ
ランスを崩し、そのまま床に激突しそうなので落ちる前に襟を掴ん
でやる。

「うげっ！？」

変な声出たけど無視だ、無視。

「喉狙うとかえげつないこと女の子がすんなよ」

「げほっ、げほっ、このっ！！豚野郎！！離しなさい！！」

黒い霧^{もや}が消え片言じゃなくなったストーカー。

俺をポカポカ叩いてくるが全然痛くねえ。

「豚豚言っな、ストーカー」

「なら、そっちもストーカーなんて呼ばないでください!!」

「じゃあスネークって呼んでやるよ。いつもスニキングミッショ
ンやってるしな」

「いつもしてるワケじゃありません!!」

「でもやってんだろ？」

「っ!!!!」

言葉に詰まるスネーク。

「でだ、お前が犯人か？」

「……………」

「沈黙もまた答えなり。認めたと判断する。

それと、カメラはコレだけか？」

スネークにそう尋ねると島田が意味が分からないといった感じで俺
に聞いてくる。

「宇童、それどういうことよ!？」

「こっちは囃かもしんねえってことだよ」

「なんでそんなことが分かるのよ!!」

「やっぱりあなたたちがしたんじゃないかしら？」

なんか知らんが振り出しに逆戻り。

「いやいや、スネークがやったって言うてんじゃねえか」

「清水さんは何も言っていないわよ。あなたが勝手に決めつけてるだ
けじゃない」

「もしかして美晴に自分たちのしたことを擦り付けようとしてるの！？」

女子一行から『サイテー』だのなんだの聞こえる。

『サイテー』なのはスネークだからな。俺らに盗撮したの擦り付けようとしてやがる。

「いやいや、もしそうならもう1つカメラがあるかしんねえことを教えると思うか？」

「む、それもそうね……」

「島田さん、騙されてはダメよ。」

きつと第3、第4のカメラが実はまだあるのよ。第2のカメラを見つけさせることで私たちに安心感を与え、そちらに目が向かないようにするための罠よ」

どこの魔王だよ、そのカメラ。

スネークがほくそ笑んでいやがる。うぜえ。

「これ以上は時間の無駄よ。皆、やっておしまい」

小山が指揮を出し、女子一行が素早い動きで捕まえにくる。

「……浮気は許さない」

「翔子待て！落ち着ぎゃああああっ！……！」

坂本は嫁に捕まりアイアンクロー。

「くっ……！」

「アキ、逃がさないわよ？」

「明久君には失望しました」

明久は島田と姫路に。

「……………無念」

康太はその他大勢に、それぞれ石畳の上に座らされ拷問されている。
えげつな。

俺はと言うと既に愛子と優子に捕まっている。

ただいま愛子・優子の部屋で亀甲縛りで拉致られ中。

3階の俺の部屋から1階のこの部屋まで引きずられてきて体が痛え。
それにしても、どこで亀甲縛りなんて覚えたんだ。

「ネットで覚えたのよ」

「Sに目覚めたのか！？俺はMじゃねえぞ！！」

「大丈夫だよ。ボクたちにしてもらうつもりだから」

「全然大丈夫じゃねえから！？」

やべえ、早くなんとかしねえと。

「それはそうと、本当に盗撮なんてしたの？」

「んなもんするワケねえだろ」

「でも土屋君って怪しいよね？」

「その『怪しい』はどの『怪しい』だ？変態の方か？それとも疑惑の方か？」

「両方ともよ」

……………康太、悪い。否定できねえ。

「でも今日は一緒に行動してたからな、カメラを設置できる暇はなかったように思うぞ。それに約束があるから康太はこういうところではしねえよ」

「約束？」

「『愛子と優子を盗撮したらどうなるかわかってるよな？』てな感じだ」

「それって脅迫って言うんじゃないの？」

「脅迫も約束も大して変わんねえだろ」

違うところは強制力の有無だな。

「……そうかもしれないわね。

ま、私たちの心配をしてくれてるって言うのは嬉しいわよ」

「当たり前のことじゃねえか」

俺が言い終わると優子がキスをしてくる。

不意打ちにもいい加減なれた。

ご褒美ですね。わかります。

「でも、土屋君じゃないなら今回の犯人って誰なんだろうね？」

「さっきも言ったように俺はスネークが怪しいと思うんだが」

スニークキングミッションしてるって言ってたしな。

「でも女の子だよ？」

「スネークは島田loveだ」

「あ、そうか。でも、それが理由で撮りたくなるものなのかな？」

「あー……どうなんだ？」

優子に振ってみる。

「私に聞かれても困るわよ!!」

ごもつともです。

「ま、このことは保留にしておいていいんじゃない？」

「あー、いいと思うがまだカメラがあるかもしれないからねえから気をつけろよ？」

「ええ」

「じゃあ、そろそろ部屋に戻るからコレ^{ほど}解いてくんね？」

ずっと縛られたままで話してたから恥ずかしい。

「うん、わかった。」

でも、今はまだ戻らない方がいいと思うよ？」

愛子が慣れた手つきで解きながら^{ほど}言ってくる。

「何でだ？」

「たぶんまだ拷問とかやってると思うし」

「今戻ったら巻き込まれるわよ？」

「マジか……」

じゃあ、何して時間つぶそ？

「空。時間つぶすんだったら、私たちはお風呂に入ってくるからその間の留守番お願い」

「了解」

「じゃあ、入ってくるわね」

「行つてきまーす」

「おう。カメラ、あるかしんねえから気をつけるよ?。」

「わかったわ」

そう言うと2人は部屋から出ていった。

留守番はいいけどなんもやることねえ……。

約40分後

「留守番ご苦労さま」

「ただいま」

何もすることなくボーっとして過ごしていると扉が開き2人が帰ってきた。

風呂上がりのためか2人共頬が仄かに赤く染まっている。

「空。顔がちよつと間抜けかも」

俺の状態を見て優子が言う。

自分でも、間抜けそうな顔してんだろうな、とは思ったがやっぱそうだったらしい。

「2人共おかえり。」

大丈夫だったか?」

「空君の言つた通り、カメラがまだあったから、取り外して先生に渡しといたよ」

「そっか、これで安心だな。」

でも一応、毎回入る前にチェックしていた方がいいぞ」

「ええ。わかったわ」

「じゃあ、俺は部屋に戻るな。

なにか用があつたらメールしてくれ」

「わかったわ」

「また明日ね。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

そう言つて部屋に戻っていく。

その後部屋に戻るも誰一人おらず、ちょうどD・E・Fクラスの入浴時間になつていたので、地下にある大浴場に入り、それを終えて部屋に戻っても誰もいなかったため、枕投げをすることなく眠りについた。

バカと俺と参戦決意

強化合宿2日目

今日はAクラスとの合同学習。

学習内容は基本的に自由で質問があれば周囲や教師に聞く、言わば自習だ。そのため机の並びも生徒同士が向かい合うような形になっている。

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

「霧島、気にせず座ってやれ。今のは坂本なりのカミングアウトだ」
「どこをどうとったらそうなるんだ!？」

照れやがって。

霧島が膝に座るとクラスの奴らが投げた靴が絶妙なコントロールで坂本だけに当たる。

見事だ。

それ（霧島が坂本の膝に座るところまで）を見た俺の左右にいる愛子と優子が俺の膝を物欲しそうに見ている。

「座るか？」と言おうとして口を開いたその時、明久が声をかけてくる。

「ねえ、空。なんで自習なのかな？こんなところまで来て自習なんて勿体無いような気がするんだけど」

「確かにな。折角だし遊びたいよな」

うんうん。その気持ちわかるぞ。

「いや、そうじゃなくて。なんで授業やらないのかな？つて」

「こいつ、本当に明久か？（明久。お前熱でもあんのか？）」

「本音と建前が逆になってるよ！？」

「あ、悪い。」

本当は『明久。お前熱でもあんのか？』だ」

「それとさっきのつて大して変わらないよね！？」

うつせえ！！

そのツツコミは無視だ、無視。

「で、『なんで授業しないか』だよな？まず聞いとくがお前はAクラスと同じ授業を受けて理解できるのか？」

「むっ、失礼な。僕にとってはFクラスもAクラスも大差はないよ」

「あー、そっか。お前どっちも理解できねえもんな」

俺が笑って言うつと霧島が続けて明久に説明する。

坂本はもう靴を投げられていないようだ。

「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

「翔子、それだけじゃ明久にはわからんだろ。」

つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題ではないということだ」
「なるほど」

やっぱ坂本と霧島はお似合いだよな。息合ってるし。

「それと木下姉。空の膝に座りたいんだったら座ればどうだ？」

さっきの仕返しのつもりか坂本が優子に俺の膝に座るよう促す。
妙に勝ち誇った顔がうぜえ。

「優子、座るか？愛子もいいぞ」

「じゃあ、お邪魔します」

「え？ホント！？ありがとう」

2人が座るとFクラスのやつらが今度は俺に向けてシャーペンを投
げてくる。

それを見て俺は拍手をするように構える。

『ウイング・ロード翼の道』、それは空気を『面』で捉え、床と手の隙間の空気の『
面』、そして空気と空気の隙間の『面』を『認識』し『制御』する
ことが絶対条件。

空気と空気の密度の隙間……『風と風の隙間』、言わば境界線にほ
んの少し手を添えてやると風はいとも容易くその流れをかえ、俺の
手足へと姿を変える。

今しようとしているのは、手と手の間の空気を押し合わせることに
より自身の周りに空気の壁を発生させることだ。

パンツ

俺が構えた状態から手を叩くと風の膜が俺を覆うように展開されシ
ャーペンの侵攻を防ぐ。

その光景を見て膝の上に座る2人から感嘆の声が聞こえる。

俺はそれを聞きながら坂本を見て鼻で笑う。

（何かやったか？）

（くそっ！！覚えてろよ！！）

坂本が苦虫を噛み潰したような顔になる。

「ねえ、空。なんで実技の人も座ってるの？」

俺の人間離れた技を無視して、明久が嫉妬に燃えた目で俺を見て言う。

「ボクは『実技の人』なんかじゃないからね」

「しょうがねえだろ？最初の自己紹介の時に保健体育の実技が得意だ、って言うてたからそっちの方がインプットされてんだろ。」

しかも『やらない？』みたいなことも言うてたし」

「でも、もうボクは空君のものだからそんなことしないからね？」

……火に爆薬ぶち込みやがった。

「空。貴様二股か！？」

明久、叫ぶな！！

『やっぱり宇童君って二股だったんだね』

『教室で木下さんと工藤さんとキスしてたものね』

『もう、いろいろしちゃってるんじゃないか？』

『出したり入れたりくらいはしてると思うよ？』

『何を？』

『ナニを』

……ハズれちゃいねえけど……

『でも、もしかしたら宇童君が犯人かもね。女の子に興味津々そうだから』

『それなら、きっとAクラスの私たちから毒牙にかけていくつもりよ』

『カメラで撮ったのを脅迫に使われて無理やり犯されるわ』

『サイテーね』

『うつつ……初めてなのに……』

『でも宇童君カッコイイし襲われてもいいかも』

……話が飛躍しすぎだろ。

それと最後の娘、my sonの餌食にしてくれよう。

『なに！？木下の姉に加えやはり工藤まで誑たぶらかしていやがったか！』

『しかもハーレムをつくる気だと！？』

誰もそんなこと言っ
てねえ！！

『諸君。ここはどこだ？』

『『最期の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『宜しい。これより ディザスター 災害級異端者宇童 空の処刑を執行する！』

Fクラスの奴ら（坂本・秀吉除く）とAクラスの奴ら（久保 利光

除く）が黒いマスクを被りだし、量産型GOKIへと姿を変え、手にはカッターを。

異端審問会って規模がデカいんだな。ここにいるだけで100人近くいやがる。

はあ、面倒だ。

「2人共、一旦膝からおりてくれ。害虫駆除しねえといけなくなつた」

「がんばってね」

「また後で座らせてね？」

「了解」

そう言つて2人が膝からおりると俺は立ち上がり、GOKIsに向き直る。

『 罪状を読みあげたまえ』

『はつ。 須川会長。』

えー、被告、宇童 空（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第2学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。

甲の罪状は強制猥褻^{わいせつ}及び背信行為である。

甲がAクラスの女子生徒である木下 優子（以下、この者をゆうこりんとする）と同Aクラスの女子生徒である工藤 愛子（以下、この者をAIBOとする）に対して強制的に猥褻行為を働いていたところをAクラス教室で目撃。その時点では確保できず現在に至る。今後、甲とゆうこりん・AIBOの関係に対して十分な調査を行った後、甲に対して然るべき対応を 』

背信行為なんざしてねえし。そもそもお前らみたいな怪しい団体に入つてねえ。

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『キスをしていたので羨ましいであります！

もしかするとそれ以上もしている可能性もあるので妬ましいであります！』

『うむ。』

実にわかりやすい報告だ。

それでは八つ裂きに 』

先手必勝！！

言い切る前に技を放つ。
トリック

t r i c k : P i l e t o r n a d o

両手で風を操りコイル状にし、その風を蹴ることで量産型GOKI共に一直線に進む竜巻が発生する。

量産型GOKI共は整列していたためそれを諸に食らい、直撃を免れた量産型GOKI共も風圧で吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。ぐったりしているが大丈夫だろう。

「空、お疲れ」

「瞬殺だったね」

「おう。いつも相手してるからな、さすがに慣れた。2人とも膝に座るか？」

「ええ」

「うん」

そう言って座った後、愛子が話しかけてきた。

「そうそう、空君。

ボク面白いもの持ってるんだよ」

愛子を取り出したのは小さな機械。

「なんだコレ？」

「コレはね、小型録音機だよ。

ちよつと見ててね」

小さな機械をカチカチ弄ると、少し間を置いて内蔵されているスピーカーから声が聞こえてきた。

ピツ 《保健体育が得意だ》 《から》 《やらない？》

「俺の声じゃねえか！？」

しかも音量でけえよ！！」

「ね、面白いでしょ？」

「いやいや、こんなんに、特に女子に聞かれたら」

『あんなこと言ってるし宇童君が絶対カメラの犯人だよ』

『お盛んね』

『実技によつぽど自信があるんでしょうね』 『すごいテク持ってるのかな？興味あるね』

さつきと同じ最後の娘、my sonの餌食にしてあげよう。

「こういうふうに女子に聞かれたら俺の評価だだ下がりだからな？ほんの一部除いて。てか、最後の娘除いて」

お盛んな雄犬のレッテル貼られた。『お盛んな雄犬』と書いて『フエンリル』と読もう。

……無駄にかっこいい。

「ボクたちは空君のことが好きだから大丈夫だよ」

「そうよ。心配しないでいいわよ」

「そうか。ありがとな」

ちよつといい雰囲気になっている俺を含む3人に、割り込むように坂本から声が発せられる。

「工藤。今のは録音した会話を合成したのか？」

「うん。そうだよ」

愛子の返事を聞き、坂本は少し考え込んでから言う。

「……工藤。体に火傷の痕あるか？」

「おい、坂本。あのこと（録音されたプロポーズ）で愛子を疑ってんのか？」

「念のためだ。」

工藤、火傷の痕あるか？」

「火傷の痕はないよ」

「本当にないのか？尻にあつたりしないのか？」

「……雄二。浮気は許さない」

「今の言葉のどこに浮気の要素があつたんだよ……！」

「今のは『愛子の尻が見たい』って言外に言ってるんだろ」

火傷ないのか？ 特に尻に 見て確認しなくては、てな感じで。無理やり感が否めねえけど。

それより奥さんの目の前で浮気とは……。

「な！？ そんなことぐああああああつ……！！！」

坂本は霧島にアイアンクローをされるが明久のように軋んで陥没していない。

頭になに仕込んでんだ？

「霧島。坂本はお尻フェチらしいし、頭撫でるのはそれくらいにして、霧島のが好みかどうか聞いてみたらどうだ？」

俺の言葉にピクツと反応する霧島。

「……………うん、そうする」

そう言つて気絶した坂本を連れて学習室から出て行った。

……………なんで出て行つたんだ？

ピッ 《愛子の尻が見たい》

「愛子おおお！？」

不意打ち過ぎるだろ！？

しかも合成してねえ分ダメージがでけえ……………。

優子は呆れてねえで愛子止めてくれ！！

『公衆の面前でよくあんなこと言えるわね』

『宇童君ってお尻フェチなんだ』

『破廉恥です』

『いつもイヤラしい視線をお尻に感じると思つたら宇童だったのね』

今の声は島田だよな。

「島田。テメエの尻になんざに興味はねえ。」

それとその視線は絶対スネークのだ」

『また美晴に擦り付けようとする!!』

『サイテー』

『昨日どこに逃げたか知らないけど先生に受け渡した方がよくない?』

『そうね。先生呼んでくるわ』

……面倒なことになったな。

「愛子。悪ふざけがすぎるわよ。

それに今はタイミングが悪いでしょ? 空が犯人にされちゃうじゃない」

「……ごめんなさい」

咎めるように言う優子に愛子はしよぼくれる。

「ま、俺は犯人じゃねえし話せばわかるだろ。

あ、でもその機械没収な。

優子、管理頼んだ」

小型録音機を回収し優子に渡しておく。

「ええ、わかったわ」

そうやって話しているとさっき教師を呼びに言った女子生徒が鉄人を連れて帰ってきた。

『西村先生。宇童君がカメラの件の犯人です』

犯人って決めつけんな。

「宇童。向こうで話そうか」

「了解。」

2人とも行ってくるな」

そう言つて優子と愛子の2人を膝から下ろし鉄人のところへ向かう。

「本当にお前が犯人なのか？」

「ちげえよ。あいつらが勝手にそう思いこんでるだけだ」

「本当にそうなのか？」

「しつげえぞ。鉄人」

「……宇童、お前口が悪くなつたな。」

まあ、今はいい。カメラのことは犯人じゃないと信じよう」

そこでひと息ついて鉄人はまた話出す。

「実はな、昨日お前の部屋の奴らが覗きを働こうとしていた。返り討ちにしてやったがな」

「は？それマジか？」

鉄人は俺の反応を怪訝そうに見る。

「宇童、お前知らなかったのか？」

てつきりお前が疑われた腹癒せはらいいに企てたのだと思つたんだが」

「そんなに器はちっちゃくねえよ！！」

「そうか。それはすまなかつた。」

あいつらはおそらく今夜も覗きにくる。それに便乗して宇童もくると言つのなら、俺はここでお前を行動不能にするつもりだ」

「ハッ、鉄人にそんなことできるのかよ？」

ま、便乗することはねえ。俺は鉄人側につくよ。

あのバカ共をブツ潰してえからな」

優子と愛子が覗かれようとして黙ってられっかよ。

「そうか。なら今夜から頼むぞ」

「了解」

追記、坂本は夕食まで帰って来なかった。

バカと俺と負けず嫌い

女子大浴場前

「西村先生。流石に今日は彼らも現れないのでは？」

昨日あれほど指導をしたことですし」

「布施先生。彼らを侮ってはいけません。

彼らは生粋のバカです。あの程度で懲りるようであれば今頃は模範的な生徒になっっているはずですから」

「そうだぞ、付箋^{ふせん}。あいつらはバカだから諦めるなんてことはしねえよ」

「ふ、『付箋』とは私のことでしょうか？」

付箋のコメカミがピクピクしている。

「正解。布施先生だから付箋。布先でも可」

布先。……………お！？呂布奉先でもいいかも！！

「付箋、呂布奉先でもいいぞ。強そうだし。好きな方選んでくれ」

「宇童君！先生には敬意を払いなさい！」

「へいへい、りょーかい」

トトトトトトトトトトトト！

『おおおおつ！障害は排除だーっ！』

『邪魔するヤツは誰であれブチ殺せーっ！』

『サーチ&デエース！』

……やっぱり数が増えてんな。

「に、西村先生！大変です！

変態が編隊を組んでやってきました！」

「まさか、懲りるところか数を増やしてくるとは。

これだからあの連中は……！」

付箋の渾身のギャグをスルーとは、付箋が可哀想だな。

「あのバカ共、Fクラスのウンコグズ共を仲間に取り入れやがったか。

ま、1匹残らず潰してやるよ……！」

俺は自分の頬を叩いて気合いを入れる。

「布施先生、警備部隊全員に連絡を！1人として通しては行けません！」

私は定位置につきます！」

「は、はいっ！」

「宇童も定位置につけ！」

「一発デカいのを撃つてからな」

「勝手な行動をするな！」

「すぐ終わるからいいだろ？」

試獣召喚……！」

「宇童。まだ召喚フィールドは展開して

」

俺の喚声に応じて魔法陣が展開され、白いニット帽をかぶり小烏丸のエンブレムの描かれたジャケットの中に白のパーカーを着込んだ俺の召喚獣が姿を現す。

『Fクラス 宇童 空

世界史 409点』

「ハッ、召喚フィールドがなんだって？」

目を見開いている鉄人を見て俺は笑う。

「どういうことだ！何故召喚できている！？」「俺とコイツは一心同体だ。召喚フィールドなんざチンケなもん縛られるワケねえだろ。」

「んじゃいくぞ」

『シンクロ
同化』

ミニ 俺と同化したため視線が低くなる。

本体は大浴場へ続く廊下の中央で腕を組んで威風堂々と立っている。前髪を結んでいるので格好がつかないが。

「ウンコクス共、こつから先は通行止めだ。お引き取り願おう」

『な！？宇童だと！？』

『構うな！！障害は排除するのみ！！』

『おおおおお！！』

やっぱ下がんねえよな。

「なら、『ブラッディ・ローボーンフィニティ・オメガスフィア・ジェイル血痕の道無限の空無限の牢獄』」

持ち点409点から200点を消費して『牙』を放つ。

『シンクロ同化』の影響が消費点数が200点に固定され、『牙』の範囲が

自在に変化するようになった。今回は廊下いっぱいまで広げる。

『アイツ、何をぐあああああつっ！！！！？』

『は？があああああつっ！！！！？』

『牙』は衝撃波のため視認できず、ウンコクス共を尻払いながら突き進んでいく。

そして廊下の突き当たりの壁にぶつかりと大きな傷痕を残す。
物理干渉できるといいな、くらいで撃つたのに本当に物理干渉できるとは……。

「宇童！壁に傷をつけるな！
それと今なにをした！？」

「何って腕輪を使っただけだ」

「何故物理干渉ができるんだ？」

「物理干渉はできたらいいな、ってな感じでやったらできた」

「……お前は規格外なようだな」

「自分でもそう思うよ。」

ま、だいぶ数は減ったしいいんじゃないの？」

「そうだな」

『試獣召喚！！』

鉄人と話していると変態の編隊から喚声が聞こえてくる。

生き残ってるのは明久・坂本・康太・秀吉の4人だけのようだ。

……………。

召喚フィールドが展開されていないためバカ4人の召喚獣は召喚さ

れない。

「なんで召喚されないのさ!？」

「……………不可解」

「干渉でもなさそうじゃの……………」

《説明しよう！

干渉とは、2つ以上の召喚フィールドが極端に近い位置で展開されるとお互いに干渉し消滅することである《

3人がウンウン唸っていると坂本が口を開く。

「もしかしてフィールドが展開されてないんじゃないのか？」

「そんなこと有り得ないでしょ!？」

「現に空はフィールドなしで召喚している」

「もしそうじゃとしても、何故物理干渉ができるのじゃ？」

「それはフィールドなしで召喚できるのに関係してるんだろう」

「……………それよりも白金の腕輪」

「ああ、やられっぱなしじゃ嫌だからな。反撃するぞ！

アウェイクン
『起動』!」

坂本が起動キーを唱えると点数を消費して召喚フィールドが展開される。

白金の腕輪により展開されるフィールドの科目はランダム。今回は康太の得意科目の保健体育のようだ。

これはマズいな。気抜いたら負けちまう

「……………俺が出る。先に行け。

……………試獣召喚」

康太の喚声に応じ魔法陣が展開され、黒の忍装束を着た召喚獣（以後、陸奥璃威児）が召喚される。

「鉄人！そいつらの相手頼んだ！」

本体の俺の横を駆け抜けていく明久と秀吉の相手をするよう鉄人に言う。

あいつらの相手をしてる暇はねえ。坂本は教師の召喚フィールドとの干渉を恐れてか康太の少し後ろにおり、そこからことの成り行きを見守っている。

『Fクラス 土屋 康太

保健体育 622点

VS

Fクラス 宇童 空

保健体育 482点』

俺の使用科目はフィールド内にいる場合、その科目に影響されるようだ。

それにしても点数高すぎるだろ！！

「『腐海の道無限の空無限の悪夢』」
スメラード インフィニティ・オメガスフィア・ラスト

バーサーカーモードがどう本体の俺に影響を及ぼすかわからないため、同化を解除して腕輪の起動キーを唱える。突如ミニ 俺（決して俺ではない）から汗（？）が噴き出し床に水溜まりならぬ汗溜まりを作り、それが蒸発してミニ 俺の周りに汗の霧が漂う。汗溜まりは常時作成中。

……………すっげえ汚え上に見てくれが悪い。

そんなことを考えながら陸奥璃威児へ駆けるミニ俺。

「……………『加速』」

「『オニギリ5つ』!」

陸奥璃威児が腕輪を発動したのと同時にミニ俺も腕輪の2段階目を発動する。

俺の保健体育の腕輪は2段階の起動があり、2段階目は3つに分かれている。

その1つが今告げた『オニギリ』で点数を消費して発動する、召喚獣の頭ほどの大きさのデフォルメミニ豚爆弾を汗の霧や汗溜まりからの召喚。今回はソレを5匹。

発動キーがコレなのはエア・ギアの8巻を読めばわかるかも（解説）

その5匹の豚の内、俺の正面に出現した2匹が突然爆発する。

ミニ俺を斬りにきた陸奥璃威児に接触したようだ。

陸奥璃威児の腕輪の能力は『trick:After Burner』ばりの高速移動。コレがレポートなんかだったら豚と俺の間に出てこられて今ので死んでたな。

爆発により動きの止まった陸奥璃威児へ残りの3匹の豚が向かう。

さっきの爆発をくらったため警戒してか腕輪を使い、元いた場所へ戻る。

その間に豚共は出現して2秒たったため消えていく。

『Fクラス 土屋 康太

保健体育 522点

VS

Fクラス 宇童 空

とりあえず100点。

このままいけば勝てそうだな、と思っていた時期が俺にもありました。

「……………加速、加速、加速。

……………ニンニン、分身の術」

俺を錯乱させるため腕輪を連発し、ミニ 俺を囲むように分身を作り出す。

いやいやなにその腕輪？点数消費なしでそこまでできるとか便利すぎるだろ！

「……………手裏剣影分身の術」

そう言つて陸奥璃威児が手裏剣ではなくクナイを投げってくる。分身することなく1本だけだが。

それを難なく避けるがすぐに別の方向からスピードの上がったクナイが飛んでくる。また避けるがすぐに別の方向から。

それを繰り返しているとクナイが分身しているように見えるではないか！？感動モノだ。

ふざけるのはここまでにして、流石に避けきれなくなったためミニ豚を召喚し、盾にしようとするがそれらを貫通してミニ 俺に迫ってくる。爆発によってスピードが一気に速くなるオマケつきで。頬が浅く切れた。浅はかだったと後悔も反省もしている。

「『コーヒー黒豚2匹』！」

今発動したのは2段階目の能力の2つ目。ミニ豚とは違い拘束用で

召喚獣ほどの大きさの黒いデフォルメ豚。
起動キーがコレなのもエア・ギアを読めばわかるかも（解説）

ミニ豚のようにすぐに殺られることなくある程度までは消えないで残る。さらに、ミニ豚は相手を追尾できる2秒間だけしか存在できないが、黒豚は5秒間相手を追尾した後、拘束できなければ破壊されるまでその場に留まる。

ミニ 俺は黒豚の陰に隠れながら陸奥璃威児の方へ駆けるが、向こうもそれに合わせて移動する。

……全然近づかねえ。

しかも黒豚が出番なしで終わった。陸奥璃威児と腕輪の相性悪すぎるな。俺の点数だけ減っていつてるし……。
もう3つ目も使っちゃうか。

「『バーサーカーモード』！」「ミニ 俺のかぶっているニット帽を突き破って角が生える。」

『Fクラス 土屋 康太

保健体育 522点

VS

UNKNOWN

保健体育 283点』

あ、クラスのとこが消えた。

『オオオオオオオ！！！！』

ミニ 俺が叫ぶと霧がミニ 俺の背中に翼を形作る。汗溜まりからは黒い大剣や禍々しい西洋甲冑ができ装備される。

……汗からできるんだな。なんか嫌だ。カッコイイのに汚え。

ミニ 俺は翼を羽ばたかせて高速で陸奥璃威児に向かうが腕輪の能力がスピードに特化しているだけあって、陸奥璃威児の方が素早い。何度かクナイと剣により火花が散るがだんだんミニ 俺に傷が増えていき、ついに

「……………終わりだ」

クナイと剣で鎧迫り合いをしていたが陸奥璃威児が力を弱めた瞬間、ミニ 俺が体勢を崩し、その隙を狙って陸奥璃威児が首にクナイを突き立てるとミニ 俺は消え去った。

「くっ！」

「ムツツリーニよくやった！」

「……………興奮めだ。」

……………先に進むぞ」

坂本と一緒に俺の横を通り過ぎるときにそう言う。

……………なん……………だと……………？

「康太あああつー！！」

オッ、レッ、をッ！！俺ッ様ッをオッ！！！！ナメッテンじゃねエエ
エエエエエ！！！！！！」

「……………（ピタッ）。

……………負け犬の遠吠えか？見苦しいぞ。

……………出直してこい」

……『負け犬』だと？

「ナメツてんじゃねえぞ！！

次はぜってえぶつ潰してやる！！

首洗って待っていやがれ！！！！」

「……………（フツ）」

あんのクソ、鼻で笑いやがった！！

許すまじ！！マジ潰す！！

その後、俺は補習を受けさせられ、俺の部屋で寝るのが嫌だったため荷物を持って、優子の部屋で寝た。ルームメイトが霧島や愛子だけだったので何も言われなかった。

バカと俺と最終決戦（前書き）

編集しました

バカと俺と最終決戦

強化合宿3日目

「んっ…………ふあああ」

目が覚め、大きくあくびをする。
俺は手探りで、枕元に置いてあるケータイをとり、ディスプレイを見ると、突然の光が目染みる。

「痛っ…………！？」

しばらくして痛みが引くと改めてディスプレイを見る。

《3：48》

早え、もっかい寝よ。

もう一度眠りにつくため寝返りを打つと

コッソ

頭に何かがあたる。

『何か』が気になったためソレに手を伸ばす。

ふにふに

…………柔らかい。手か？…………いや足だな。
優子は寝相悪くねえし愛子の足だろう。
しゃあねえ、布団に戻してやるか。

そう思い、薄暗い中俺はのそつと立ち上がる。

「……………見えすれえ」

自然と眉間にシワが寄る。

足元を確認しながら愛子近づくと服が捲れ上がったまま寝ているのがわかった。

「腹出してつと風邪ひくぞ？」

そう呟いて捲れ上がっているだばだばしたＴシャツの裾を掴んで腹を隠してやり、愛子をお姫様だっこをする。

「すぴー……………すぴー……………」

「ふっ、幸せそうに寝てんな」

「すぴー……………んっ、……………そら……………くん……………？」

「あ、悪い。起こしちまったか？」

「だいじょぶ。いっしょにねよ？」

寝ぼけてんのか舌足らずな話し方になってんな。

「はいはい」と生返事をし、愛子を布団に寝かせ、すぐ横の布団に戻ろうとすると、愛子に足をつかまれ布団に倒れ込んでしまう俺。

「うおっ！？」

デカイ声が出ちまった！！

「いっしょにねるの！」

だっ子のように言って俺の背中に乗ってくる。

「こっちむく！」

「無茶言っな。乗られたままだとできねえよ」

「むう」

愛子は唸ると背中から転がり降りる。

「うえむく！」

「はいはい。」

……よいしょと

「ふとんかぶるのため！」

「寝るんだから布団かぶるだろうが」

「もういいもん！」

そう言うところこそと俺の布団に入ってきて、俺の上に向かい合うように乗ってくる。

愛子。当たってる、てか潰れてるぞ？

「しってる」

「この状態で寝るのか？」

「ぐっすりねむれるとおもう！」

「俺はぐっすり眠れねえ！」

煩惱を断つのに必死だ。

「別にしてもいいんだよ？
こんな感じに」

そう言つてキスをしてくる。

おい、話し方が流暢になつてんぞ。さっきまではフリか？

「正解

それで空君。カタくなつてるよ？」

「何がだ？」

「それを女の子に言わせるの？ま、言っちゃうけど。
ナニがカタくなつてるよ？」

「カタくなつてんじゃないねえ。カタくしてんだよ」

……何言つてんの俺？

「じゃあやつちやつた方がいいよね？」

「ここじゃできねえだろ？」

「大丈夫大丈夫 声出さないように我慢するから」

「ぜってえ声出るから」

「ちっちゃいことは気にしないーい」

ちっちゃくねえ……ワケじゃねえか？

「それじゃゴム着けてあげる！」

どこからか出した近藤さん（全国の近藤さんゴメン！）を布団で隠れている覚醒したmy sonを見ずに着ける。

何やってんだ！？てかなぜつけれる！？

「愛の力だよ

それじゃ」

「ら。起きい」

「空く　だよ？」

誰かが俺の体を揺すりながら声をかけてくる。

「空。起きなさい」

「もう朝だよ？」

「んっ……………ふああああ。」

……………おはよ。じゃ、おやすみ……………」

優子と愛子の2人に挨拶をした後、布団に深く潜り込む。

「もう朝なんだから起きるのよ！」

そう言っつて優子が俺の布団を剥ぐが俺は起きることなく体を丸め、ダンゴロムシのようになる。
眠い。寝かせてくれ……………。

「空君、なんだか可愛いね。」

けどダメだよ。もう起きる時間なんだから。
朝ご飯食べに行くよ？」

愛子が俺に馬乗りになり跳ねながら言う。
うっ……………頭に響く……………。

「……………押し入れに入りたい」

「何バ力なこと言ってるのよ。」

さ、早く起きなさい。置いていくわよ?」

……置いていかれるのは嫌だな。

「起きる」

そう言つてのそつと起き上がると

「わわわっ!？」

馬乗りになっていた愛子が転がり落ちる。

「あー……悪い」

「大丈夫だよ。それじゃご飯食べに行こ」
「了解」

……ん?なんかおかしくね?

昨日てか今日愛子とやってたような……。夢か?

「夢じゃないよ」

「途中から記憶がねえんだが?」

「ボクはあるよ。ま、気にしないで食べにいこ」

そう言われ強引に食堂へ引つ張られていく。

学習室

朝食を採り終え今は学習室でFクラスのやつらとは離れて保健体育を猛勉強中。

「どうしてそんなに保健体育勉強してるの？」

「土屋君超えちゃうわよ？」

「それでもいい。昨日のリベンジのためだ」

「『昨日の』ってFクラスが覗きにきたってやつのかしら？」

「ああ、ソレだ。康太に負けちまってな」

「ん？どういうこと？空君も覗きにきたんじゃないの？」

「俺は覗きを阻止する側だったよ」

「それで土屋君と勝負することになって負けちゃったのか……」

「でも相手が土屋君だし、しょうがないんじゃないの？」

「それでも勝たねえといけねえんだ」

あんなにナメられたままだと気がすまねえ。

思い出したらムカムカしてきた。

ぜってえぶつ潰す！！

「そうなんだ。じゃあ、ボクも手伝ってあげるよ。保健体育得意だし」

「私はそれほど得意じゃないから手伝えないけど、今夜から参加するわ」

「あ、ボクもボクも！」

「お？マジか！？それなら心強いな」

「他の何人かにも声をかけておくわね？」

「ああ、頼む」

さてと勉強再開すつか。

20:00

優子が『何人が集めておく』と言っていたがほとんどの女子が参加することとなった。

交友関係がどうなったらこうも短時間でそんなに多く集まるか不思議だ。

んで集まった女子の中に諸悪の根源のスネークがいたんだが……早く捕まんねえかな？と思わなくもない。

今は仲間だし多めにみとくか。

それで俺が女子にすんなり受け入れられたかというところじゃねえ。昨夜Fクラスの連中が覗きを働こうとしていたため、俺もその一員なんじゃないの？みたいな感じで最初は大半の女子が俺のことを訝しんでいた。

だが、鉄人など教師陣の説明によりそういうのはなくなり、その説明を受け、俺をカメラの件で犯人扱いした女子たちが謝りにきてく

れた。

スネークとは大違いでみんないい娘だな。

そして、現在大食堂でテーブルを囲い作戦会議中。

「空。本当にここにいれば彼らはやって来るのかしら?」

「間違いねえよ」

「なんでそう言い切れるのかにゃー?」

Aクラスの……名前なんだっけ?

さっき自己紹介したのに忘れた。

「御門さんよ」

確かそんな名前だったな。

サングラスを頭にかけておりにゃーにゃー言っているネコ娘。

「しおり見たら分かると思うが女子大浴場に行くには男子側の部屋から食堂の前の廊下を通るか、A・Bクラスの女子部屋付近の階段からじゃねえと行けねえんだよ」

「なるほどにゃー」

「それならこの前の廊下って結構な数のヤツらが来るよな?」

確か神上とか言うけつたいな名前のAクラスの女子生徒。言葉遣いが男子っぽいのが特徴的。

「ああ、そうだな」

「こんなに人数少なくて大丈夫なのか?」

神上の言う通りここにいる人数は教師を含めたったの10人。

「大丈夫だろ？ここに居るのはAクラスの娘だけだし」

「Aクラスだからって強いとは限らんのよな。」

それに物理干渉できるのが先生しかおらんのよ。横を素通りされるのがオチよな」

盾宮（だったと思う。髪がうねってるのが特徴的）が反論を述べ、

その意見に同調する娘が1人。

名前は^{あくあ}亞愛。なんか変わった娘。

説明がアバウトだがなんて言ったらいいのかわかんねえから許してくれ。

「そうである。我には1人で大人数を相手にはできぬし、物理干渉もできぬ」

「^{あくあ}亞愛ならやれそうな気がするんだが？」

うまく言えねえけど身に纏ってるオーラが……その……グオオオオオオオオオオって感じだから滅茶苦茶強そう。

「それは言い過ぎであるよ」

ハッハッハッ、と亞相手は豪快に笑う。

「ま、素通りはさせねえよ。俺が食い止めるからな」

そこら辺のヤツらは大した脅威にならねえし、もし康太が出てきても保健体育以外だとFクラスレベルだから心配いらねえ。全員、^{シンクロ}『同化』したらすぐ倒せるレベルだ。

ま、康太を潰すときは保健体育で真っ向からいくがな。

「うどん君。相手の規模がどれくらいか予想つくう？」

「おい、うどんじゃねえ宇童だ」

「分かってるよお、うどん君？」

ぜってえ分かってねえ。

さっき自己紹介したときからずっとうどん呼ばわりしてくるこの娘の名前は甘夏。

おもつくそミカンだ。

「ミカン。規模は前回よりさらにデカくなってると思う。DとEくらいは取り込んでんじゃねえか？」

「『ミカン』かあ。おいしそうなあだ名、ありがとお」

皮肉が効かねえ。

「空君。それなら相手は100人くらいだよな？」

単純に相手が食堂前の廊下と階段に分かれて攻めて来てもこの人数で50人は相手しないといけないよ？

いくらなんでも無理じゃない？」

「それに関しては『とっておき』があるから大丈夫だ。だいたいのヤツらは俺1人で相手できる」

「それは召喚獣どうしでの戦いであろう？」

「いや、人に対しても有効だ」

「それってどういうことかしら？」

空気の壁でも使うの？」

昨日のこと言ってたんだろうな。

気が向いたらアレも使ってみるか。

「アレとは違えよ。もっと意外なことだ」

「……まさか……物理干涉できるのか？」

「正解！頭を撫でてあげよう」

正解した神上の頭をよしよしと撫でてやるが不機嫌そうだ。

「おい、子ども扱いするな」

「悪い悪い。」

で、話戻すぞ。俺の召喚獣は物理干涉できる。さらにフィールドなしの召喚も可能」

「にやー！？そいつは本当なのかにやー？」

「マジだ。」

試獣召喚」

俺の喚声に応じ魔法陣が展開され、白いニット帽をかぶり小烏丸のエンブレムの描かれたジャケットの中に白のパーカーを着込んだ俺の召喚獣がテーブルの上に姿を現す。

「にやー！？」

「ぬっ！？」

「！？すごいねえ」

ミカンの声は間延びしていてあまり驚いているように聞こえねえな。

「でも触れんのよな」

盾宮がミニ 俺に触ろうとするがスカスカと手がすり抜けている。

「ああ、それはだな」

『シンクロ
同化』

『シンクロ
同化』がさらに馴染んできたのか召喚獣視点と本体視点の2つが一度に見えるようになってる。

便利だが酔いそうだ。

視点の切り替えできねえのかな？

そう思い本体の視点に集中してみるとミニ 俺の体から本体の体に戻る事ができた。

ミニ 俺は『シンクロ
同化』なしのときと同じように操作でき、さらに物理干渉もできるようだ。

問題 解決。

「コレでどうだ？」

「おおっ！？」

「触れるぞ！？」

「だっこできそうだね」

そう言つてミニ 俺をだっこをする愛子。

ふおおっ！！後頭部に オツの柔らかい感触が！
フィードバックは切れてないっぽい。

…… オツがよかとです。明久にも教えてやる。

「宇童君。ちよつといいかい？」

そこへ今まで空気だった日本史教師（ ）が俺を呼ぶのでそちらへ行く。

みんな知ってるだろ、的な空気を出して自己紹介しなかったか

ら名前知らねえ。

「なんだ？」

「君は自分の召喚獣を改造したのかい？」

そついや鉄人は『改造か？』とかは尋ねてこなかったな。雰囲気ですついうのじゃねってわかったのか？

ま、考えても答えはでねえしどうでもいいや。

「改造なんざしてねえよ」

「なら何故そんなことができるんだい？」

「それは俺も分かんねえよ。やったらできた」

「……合宿が終わったら調べさせて貰うけどいいかい？」

「どうせ断つても調べるんだろぅが」

「まあね。学校へ戻ったら学園長室に行くんだよ？」

「了解」

日本史教師と話し終え、皆のところへ戻ると亞愛^{あくあ}が俺に話かけてきた。

「それで、勝てる見込みはどれほどであるか？」

「そんなの100%に決まってるんだろ」

「……それは信じていいのか？」

「ああ、泥船に乗った気でいろ！！」

「空。それスゴく心配」

.....。

「……………今のなし。
神上もつかいさっきの振りやってくれ」

そう言つと、神上はため息を吐きながらさっきの言葉を繰り返す。

「……………それは信じていいのか？」
「ああ、方舟に乗った気でいろ！！」

シンッ

一瞬時が止まり、そして動きだす。

「……………宇童って実はアホなのかにゃー？」
「空君。方舟じゃなくて大船だよ」

ミニ 俺を抱いたままの愛子が苦笑しながら教えてくれる。

やべえ、すんげえ恥ずかしい。

……………優子抱いて落ち着こ。

俺がそう思っていると隣に座っていた優子が膝の上に乗って俺を抱きしめてくれる。

はふう……………落ち着くぜ。

でもこの体勢いろいろとマズい。

『見せつけてくれるのよな』

『くっ！！オレにも彼氏の1人や2人すぐに』

『できないよあ？』

『甘夏！テメエのふざけた幻想ぶち壊すっ！』

『らぶらぶだにやー』

『愛子も入らぬのか？』

『いってき』

『……………！！（ピクッ）。ヤツらがくる』

足音はまだ聞こえてないがもうすぐ来るらしい。
黒野って女子ver.の康太みたいだな。

「優子、さんきゅ。もう大丈夫だ」

「わかったわ」

「先生はフィールド張ってくれ。
みんなは用意を。」

あと、愛子は俺の召喚獣降ろす」

「むう、しょうがないね」

渋々ミニ俺を降ろす愛子。

今まであった オツの感触が名残惜しい……。

「『ニア・ロード インフィニティ・オメガスフィア・チエーン
荊棘の道無限の空無限の荊鎖』」

早速腕輪を発動し、ミニ俺のA・Tの後輪が荊の鞭になる。
エア・トレック

「もう、腕輪を発動するのかにやー？」

「ああ、やりたいことがあるからな」

そう言い終わると本体からミニ俺に視点を移し替える。

side ミニ 俺

手を握ったり開いたりして体の調子を確認すると、俺は意識的に過呼吸を行う。

深く深く、小さく強く knock して、『扉』を1つずつ開くように体の隅々まで、奥の奥まで空気を導き入れていく。自分自身が空気になる感覚。

空気は俺。

空気の柔らかさは俺の柔らかさ。

空気の流れは俺の流れ。

たとえば言えばそれは水深20mの世界。

肺にかかる巨大な圧力はいわば高水圧下での空気ボンベ。

気圧が高まると空気は急速に体内に溶けていく。……それは実に地上の3倍以上。

大量の酸素は脳や筋肉を活性化し関節を柔らかくする。

しかし、ここで最も重要なのは、普段人体に全くの無害かつ大気の70%を占める『窒素』！！

俺は過呼吸をやめ、息を吐き出す。

これにより限界まで体内に吸収された窒素はほんの少しの減圧で一気に結合。

体中、特に体の隙間、所謂関節に窒素の泡が発生する。

ソレは想像を絶する激痛。

だが、その天然のエア・クッションをはさんだ関節群はその限界可動域をやすやすと超え、『人』の動きすら超える！！

ま、今は召喚獣だけでも。

これで戦闘準備完了。

みんなも召喚獣を出して臨戦態勢。

《んじゃ、行くぞ》

聞いたことのない声が聞こえる。

……俺の口から出た気がするが気のせいかな？

「……………！？し、召喚獣がしゃべった！？」

寡黙な黒野が目を見開いて驚いている。他のみんなも目を見開いている。

気のせいじゃなかったっぽい。

《どうなってんだ、コレ？》

「こつちが聞きたいわよっ！」

《どうどう。落ち着け、優子》

「馬扱いはひどいと思うよお」

《あ、悪い》

「この子、空君みたいだね」

「そうだな。」

宇童が思っていることをコイツが言ってる、ってのはありえないのか？

「どうなのかにゃー？」

《まあ、そんなとこだな。

それは後にして、今は迎え撃ちに行くぞ》

「うむ！剣の錆にしてくれよう！」

「ああ、アイツらの幻想ぶち壊す！」

「この道を選んだことを公開させてあげるわ」

「適当に行くにゃー」

「私もお」

「2人ともがんばるよ!」

「……………血がたぎる」

「腕輪の餌食にしてやるのよな」

「若い子にはかり任せてられませんからね」

……………なんぞこの最終決戦前的ノリ？

バカと俺と言語問題（前書き）

禁書読んでて思いついた

バカと俺と言語問題

引き続きside ミニ 俺

食堂前廊下

俺たちは食堂の正面の廊下中央に陣取る。

トトトトトトトト

《エロリストたちが来たぞ?》

「エロリストってなによ……」

俺の言葉に優子が呆れた感じで返す。

《エロ+テロリスト=Eロリスト》

「くだらないこと言っていないで気を引き締めなさい」

《了解。

んじゃ、先制攻撃するな》

そう言ってみんなより前に出る。

「まだ、離れてるぞ?」

「……………当たるの?」

《当たるぞ。ま、見てろって》

ジャララッジャララッ

俺は体を荊のようになやかに、鞭のようにねじり上げ、回転を加速させていく。

ジャッジャッシャッシャッシャッ

速く！

もつと速くっ！！

キュッ、パッパッパッ

荊の突起が空気を弾く。

《こっ……んのっ……！！》

痛みが俺を襲うがそれを耐えつつ速度を上げる。
どこまでも速くっ……！！

パパパパパパッ

ついに荊は音の『壁』を破りソニック・ブームを生み出す。

《クソがつ！！……死につ……曝せええっ！！！！》

荊の突起全てから発せられる『ソレ』は風を切り裂く荊の『棘』と
なっておりあらゆる敵を撃墜する。

『がつ！？』

『いぎっ！？』

『あがつ！？』

『ぐはっ！？』

8人ほどのエロリストに『棘』が突き刺さりなにが起こったのかわからないまま、痛みで気絶していく。

《はあ……はあ……。クソえれえ……》

「宇童。お前すごいな。」

今の衝撃波か？」

《ふう……。ああ、正解。

よく見ただけでわかったな》

「まあなっ」

上機嫌で笑みを浮かべる神上。

『ちっ！！宇童がいやるぞ！！』

『あのチート野郎がなんでここにいるんだよ！！』

『俺たちクジ運悪過ぎだろ！！』

『昨日の二の舞はごめんだぞ！！』

昨日潰したウンコクズ共が懲りずにまた覗きにきたらしい。

『おい！！なんで宇童が物理干渉できるんだよ！！』

『そんなこと聞かされてないぞ！！』

『それにアイツに適うヤツはこの中にはいないぞ！！』

「パニックになっているようだな」

「そうだにゃー」

「絶好の機会だよねえ？」

「でも物理干渉できんのよな」

「そうなのよね。ちよつと不便ね」

「空君と先生にやってもらうしかないね」

「……………先生お願い」

「宇童も続けて頼む」

「わかりました」

《了解》

上から亞愛、御門、ミカン、盾宮、優子、愛子、黒野、神上、日本史教師、俺。

日本史教師……卑怯者ってあだ名にするか。別に卑怯じゃねえけども。

卑怯者の召喚獣（以後、ミニ卑怯）は体に鎧を手には刀を装備している。

二刀流とはカッコイイな。

ミニ卑怯と俺はパニックに陥っているエロリスト共に駆けていく。

「それでも剣道を嗜んでいてね。剣の腕にはなかなか自信があるんだよ」

そう言つて峰打ちでバツバツと倒していく。

やっぱ操作上手いな。もう5人も気絶させてるし。

にしても剣道のこと関係なくね？召喚獣の操作と勝手が違うだろ。

『くっ！？試獣召喚！！』

『ちっ！！試獣召喚！！』

『試獣召喚！！』

持ち直したエロリスト共が召喚獣を召喚するが

「やっと我らの出番である！」
「テムエらの幻想ぶち壊す！」
「腕輪の効果を味わうのよな」
「愛子！やるわよ！」
「うん！」

まず最初に攻撃を仕掛けたのは亞愛の召喚獣（以後、アックア）。敵の密集しているところへ駆けていき、そのまま手に持つアスカロンと呼ばれるアックアの身の丈を優に越えるほどの巨剣を振り抜く。それにより一気に6体の召喚獣が屠^{ほふ}られる。攻撃範囲が広すぎる。剣の範疇を超えてんだろ！？

アックアに続いて神上の召喚獣（以後、上条）が拳を握って敵に肉薄する。
武器のメリケンサックで召喚獣の頭を殴ると点数に差がありすぎるためか、召喚獣の頭が消し飛ぶ。
……えげつない。

そして、腕輪持ちの盾宮の召喚獣（以後、建宮）はフランベルジュと呼ばれる剣を手にもち、赤く大きな十字の入った服を着ている。

「『聖人』！！」

盾宮が起動キーを唱えるが腕輪が淡く光るだけで建宮にはなんの變化もない。

不発か？、と思った瞬間建宮の姿がかき消え次に姿を現したときには周りにいた6体の召喚獣が細切れになっていた。

康太の『加速』に斬撃の『増殖』を追加した感じか？
敵にまわしたくねえな。面倒そうだ。

ミニ優子と愛子の召喚獣（以後、ミニ愛子）のペアは、武器がレイピアで小回りのきくミニ優子が敵を翻弄し、斧が武器のミニ愛子がミニ優子に翻弄され隙だらけになった敵を斬り伏せて、1体1体確実に仕留めている。

意外と堅実だな。愛子は猪みたいに突っ走ると思ったのに。

「空君！それは失礼だよ！」

《……悪い》

「明日も相手してくれたら許してあげる」

またやる気か！？……ま、いつか。

《了解》

最後に黒野の召喚獣（以後、ミニ黒野）は遠距離戦用にスナイパーライフル、近距離戦用にコンバットナイフを2本を持っており、今はライフルを構え狙いを定めている。

「……………Have a nice trip・(よい旅を)(ニコッ)」

黒野が微笑みながらそう呟くと同時にミニ黒野は引き金を引く。

パシユッ

撃ち出された弾は的確に敵の頭を撃ち抜く。

リロード不要のため続けて狙いを定め引き金を引く。また頭を撃ち抜く。その次も。そのまた次も全て頭だけを打ち抜く。どうやって狙いを定めているのか不思議だ。

もしかして『同化』^{シンクロ}できるのか？有り得ねえ話じゃねえな。

御門とミカンは戦闘に参加せず応援している。

「みんながんばるにゃー」

「頑張ったら私の好感度が上がるよお」

「マックスまでたまったらイベント発生にゃー」

「あーんなことやこーんなもできるよお」

……俺はロリ体型に興味はねえ。逆にその応援は萎える。

そんなこんなで殲滅終了。戦死したエロリスト共は鉄人に連れていかれた。

んじゃ『同化』^{シンクロ}解除。
本体へ視点が戻る。

s i d e o u t

s i d e 本体

「みんなお疲れ。」

「……あ、なあ。思ったんだが今風呂に入ってる女子っているのか？」

「気になるのかにやー？」

「あ？うん。そうだな」

「やっぱり宇童君も男の子なのよな」

「健全で良いではないか」

「オレは裸見られたくねえ」

「……なんか勘違いしてんだろ？」

「そんなことないよお」

「……………（コクコク）」

なんで息ピッタリなんすか？

「別に覗きに行くとかじゃねえんだぞ？」

「L e t ' s 宇童語に訳してみようにやー！」

『イエーイ！！』

なんか始まった。愛子と優子も混じってるし。

『ルールは簡単、今言った宇童君の言葉を訳すだけにゃー』

『そのまんまの意味なんだが……』

『それでは始めるにゃー。まずは』

『はいはい！！ボクから！』

『あくあ 亞愛からにゃー』

愛子の主張を無視してあくあ 亞愛を氏名する御門。

「うむ、わかった。

『べ、別に覗きに行きたいワケじゃねえんだからなっ！！』だ」

ツンデレじゃねえ。

『定番だにゃー』

「あくあ 亞愛、空君のことわかってないね。空君ならこうだよ！

『別に覗きに行くとかじゃねえんだぞ？ただ……やりに行くだけなんだ』」

「はい、愛子アウト」

そんなに狼じゃねえ。

『残念ながら宇童君から初アウト宣言が出てしまいましたにゃー』

「いい線いったと思ったんだけどな」

心底残念そうにする愛子。

いい線もクソもねえよ。

「……………（スクツ）」

黒野が手を挙げる。

『じゃあ次は黒やんにやー』

「……………今までのような捻りのないモノじゃない。

……………私の本気みせてあげる。

……………『処女狩りじゃい!』」

「黒野アウトオオオオ!」

黒野がそんなこと言うなんて想定外だ。

『本日2人目のアウトができました。なかなか審査員の宇童君は厳しいですね』

「そうだね。いつもはあんなに優しいのに」

方向性が違うからな。

「キケンなのがダメなようよな。
なら、コレはどうよ？」

『俺はオンナに興味はねえ。あるのは幼女だけだ!』」

「ロリコンじゃねえから」

「いいこと聞いたよお。ならコレだねえ。

『俺はちっちゃな男の子に』」

「シヨタコンでもねえから」

「『俺は俺の娘』」

「それも違いから。

3人まとめてアウトな」

「幼女が好きで何が悪いのよな!

あの未成熟なぼでー。まさに神秘!」

「そうだよお!!シヨタコンをバ力にするなあ!!」

あの愛くるしい笑顔お…………萌えるう!!」

マジでやべえ。この異様なテンション、頭叩いたら治るか？

「宇童。是非ともコレを着てくれ！絶対似合うっ！」

神上がそう言つてゴスロリ服を渡してくる。

お前だけはまともだと思つてたのに。

「神上が自分で着たらいいじゃねえか」

「ダメだ！宇童に着てもらわないと！」

俺が目を見て言つと意志の籠もった眼差しで見返して言つ。

……なんか断れねえ。

「……気が向いたらな？」

「ありがとうな！」

カメラの用意しねえとっ！！」

カメラを取りに部屋の方へ走つていった。

誰も今着るとは言つてねえよ。

……はあ。すんげえ疲れた。

『さらに3人もアウトをもらつてしまい計5人がアウトですにやー！。
残すところあと1人ですにやー』

「コレって当ててもいいんでしょう？」

「ああ、いいぞ。てか、いい加減当ててくれねえとグレる」

「じゃあ当てるわね。」

『別に覗きに行くワケじゃねえからな？ただ入ってる娘がいねえんだったら守る意味なくね？』よね？」

「正解！！」

と、いうワケでどうなんだ？」

「わからないわね。もしかしたら入ってるかもしれないし」

「入ってないかもしれない、か。」

どっちかなら守った方がいいな」

そこへケータイをズボンのポケットに仕舞いながら卑怯者が俺たちに告げる。

「皆さん。今回の件の首謀者たちが取り押さえられたようなので解散していいですよ？」

「お？マジか。」

康太にリベンジできなかったのは残念だな……」

「空君。優子。部屋に戻る？」

「わかったわ」

「了解。さっきの変なゲームも終わりな？」

「今回の勝者は優子でしたにゃーっ！！」

無理やり締めくくる御門。

「んじゃ、お先に失礼する」

「宇童君。そっちは女子部屋の方なのよな？」

「俺、今優子のところに泊まってっから」

「え！？木下のところに泊まってるのはか！？」

「なんでえ？」

「きつと彼女と一緒にいたいのであるっ」

「あわよくば3人で乱れたりするにゃー……」

「……………すごく、いい（ポツ）」

妄想力豊かだな。

「ま、そんなとこだ」

本当はもっとガキっぽい理由だが。別に言う必要もねえだろ。

「それじゃ、また明日」

俺は手を振って去っていく。

バカと俺と睡眠不足

強化合宿4日目

0:00

「くー……くー……」

体を酷使する『荊棘の道』^{シニア・ロード}を使ったフィードバックでぐっすり睡眠
っている俺こと宇童 空。

そんな俺にもぞもぞと近づいてくる影が1つ。

その影は俺の布団に侵入し、仰向けに寝ている俺にのしかかって弾
んだ声で告げる。

「そーらくんっ 起きてー?」

「くー……くー……」

「起っ、きっ、るっ!」

再びそう言いながら今度は俺の上に寝そべったまま跳ねる。

「くー……ん?……」

目が覚めるが頭が覚醒しきっておらず、今の状況が飲み込めない俺。

「……愛……子?」

「正解

さ、相手してよ?」

「なんの?」

「えっちの」

……昨日の今日でマジでするとは……。
性欲持て余してんな。

「ボクは狼なんだよ？がおー」

『がおー』のところに萌ゆる俺。

「狼は狼でも子狼だろ？わんこと変わらねえ」

「そんなことないもん。ボクは立派なハンターだよ」

「強がんなって」

そう言つて頭をポンポンと軽く叩く。

「そんなこと言つて昨日ボクに食べられたクセに！」

愛子はべー、と舌を出す。

「あれはたまたまだろ」

「たまたまかどうか今から試してみたらいいよ」

そう言つてもぞもぞと布団の中に潜り込んでいきmy sonのあたりで止まると

「っ！？」

my sonの頭に噛みつかれた。

くっ！！my sonの防御が紙装甲と知つての狼藉か！！
てか脱がすな！

「そのお願いは聞けないよ？
てことだから逝っちゃえっ」

かぷっ、はむっ、はふっ

「……………無念……………なり」

その後、my sonは一方的に蹂躪されてお逝きなさる。

ぐっ！！屈辱だ！！

『荆棘の道』^{ソニア・ロード}のフィードバックさえなけりや自由に動けたのにつ！！

「言い訳は聞きたくないよ？」

愛子は嬉々とした表情で告げる。

「……………たとえmy sonが死のうとも第2、第3のmy son
が現れきつと愛子を倒すだろう」

「じゃあそのたびに食べてあげるよ」

「来るなら来い！my sonは不滅だ！」

「ふふっ、強がってられるのも今の内だよ？すぐに倒しちゃうん
だから」

そう言いながらmy sonに近藤さん（全国の近藤さんゴメン！）
をつせる愛子。

「my sonは今日、魔王へと進化するのだ！」

「魔王は勇者に倒されるのがお約束だよっ！」

突如、魔王もといmy sonが締め付けられる。

「くっ!!」

my sonが……!

「あれっ? 空っ、君っ。もうっ、苦しっ、そうだよっ?」

「まだ……まだ……!？」

my sonを締め付けたり緩めたりと一息に逝かさず、じわじわと苦しめる愛子。

くっ!! my sonの紙装甲ではやっぱ無理だっ!!

グハッ、と吐血して再びお逝きになるmy son。

「あれれ? 空君もう終わり?

ボクはまだまだこれからだよ?」

そうやって話していると

「……空……騒がしいわよ……?」

優子が起きちまったらしい。寝ぼけていて俺と愛子は何やってるかわかってないっぽい。

「悪い」

「あ、優子起きちゃった」

手を頭に当てあちゃー、てな感じで愛子が言う。

「……………」。

愛子だけズルいわよ！私もするわ！」

しばらくボーっとしていると急に優子が大声をあげ、襲ってくる。

……あれ？優子ってこんなキャラ

アーーーーッ！？

俺の記憶はここで途切れた。

食堂

ただいま食事中。

愛子と優子に生気を絞りとられ少々やつれた俺は朝食のサンドイッチをチビチビと食べている。

俺の両サイドには俺とは逆にツヤツヤした肌に生気のある愛子と優子が。

「げっそりしておるよな」

「どうしたんだ？」

テーブルを挟んで向かい側に座っている盾宮と神上が心配そうに見

てくる。

「……2人に生气吸い取られた」

そう言つて愛子と優子を指差す。

「もしかして本当にやったのかにやー？代表によく気がつかれなかつたにやー」

「わああ！？すごいねえ！！合宿するんだあ」

「……………見たかつた（ガクッ）」

御門・甘夏・黒野のテンションが高くなる。

……相手にしてらんねえ。

でも、あんだけ騒いでた（？）のに霧島起きなかつたよな。

「代表はボクが空君の布団に潜り込んだときにはいなかったよ」

……へえ。

「宇童よ。今日は部屋で休んでいる方がよからう」

「ああ、そうするよ」

亞愛は一番の常識人かもな。

あー、眠い。

俺がサンドイッチを食べながら、うとうとしていると背後から興奮した声がかかる。

『宇童。こつち来い！』

誰か知らねえが呼ばれたので行ってみる。

「どうした？」

『これ、見てみるよ！』

そう言って見せてくるのは2枚の写真だった。

1枚目：浴衣姿の姫路と秀吉のツーショット

「……秀吉似合ってんな」

『いや、姫路さんもだろ！谷間見えてんだろ！』

「あー、そうだな」

デカけりやいってもんでもねえだろ。

『もっと他の反応ないのかよ！』

「……寝不足でそんなハイテンションにはできねえ」

大声は頭に響く。

『そんな疲れもコレ見たら吹き飛ぶだろ！』

「それはあり得ねえ」

『は？まさかお前男に興味が』

「変な誤解すんな。俺は普通に女子が好きだ。

ただデカすぎるのは別に好きじゃねえってただけだ」

『そっういうことか』

「ああ」

2枚目：浴衣姿の霧島とハーフパンツ姿の島田

『流石の宇童もコレなら元気出るだろ！』

「出ねえよ」

『は？なんでだよ！ハーフパンツの娘はともかく霧島さんはパーフェクトだろ！』

島田ナメられてんぞ。

「お前知らねえようなら言っておくが霧島には旦那がいるんだぞ？」

『は？ハアアアアアアアアア！！！？』

「うるせえ」

『誰だよそいつ！』

俺の肩を持ってぐわんぐわんと揺する。

「揺らすな。気分悪くなる」

『あ、悪い。で、誰なんだ？』

「そいつの名前は」

『そいつの名前は？』

「坂本 雄二だ」

『坂本……雄二……』

……クロス！ブッコロス！クロスクロスクロスクロスクロス

なんか狂った。

ま、いいや。

その後サンドイッチを食べて、昼まで寝た。愛子と優子は普通に寝かしてくれた。

俺の調子を見てやりすぎたと思って反省しているらしい。起きてからは保健体育の勉強に励んだ。

バカと俺とシンクロ率

20:00

俺がいるのは女子大浴場前廊下。

この階にいるのは保健体育の大島 武（以後、武）、鉄人、昨日作戦を共にした卑怯者除く8人のみ。

昨日の8人はそれぞれを得意科目の教師のところに分けようとしたが全員一緒がいいとのこと。

学年主任の高橋 洋子や霧島などは1階の階段付近に、その他も各階の階段付近に散らばっている。

もうすぐエロリスト共が侵攻してくるころだろうがぶっちゃけると今回阻止する気はねえ。

女子生徒が1人として入ってねえからな。全員阻止するのに回っている。

ま、風呂に入っている女子がいるように見せるため、全体の4分の1くらいは自分の部屋で待機しているが。

「誰もこないね？」

「工藤、焦るなよ」

そわそわしている愛子に神上が一言。それに続いて亞愛が告げる。

「そうである。」

『急いては事を仕損ずる』と言うようにどんと構えて待つておく方がよかるう」

「……うん、わかった」

やっぱ愛子は特攻の方がいいっぱいな。

「なあ、この中で何かの教科が400点超えた娘いるか？」

俺は毎度のことながら全科目400点オーバー！。

「我は世界史が超えたのである」

「オレは化学」

「……………数学」

「古典が超えたにやー」

「残念ながら今回は超えなかったのよな」

「私も超えなかったわ」

「私はあ、現代社会が超えたよお」

「ボク初めて保健体育が400点代に乗ったよ！
空君と勉強したおかげだね」

上から順に亞愛、神上、黒野、御門、盾宮、優子、ミカン、愛子が言う。

ほとんど全員が腕輪持ち。

……戦力が集中しすぎだろ。

「お、そうか。愛子おめでと」

「えへへ」

頭を撫でてやると照れたように笑みを浮かべる。

「おそらく、坂本・明久・康太・秀吉の主犯格バカ4人が真っ先にここを目指してやってくる」

「その4人を倒せばいいのであるな」

「いや、倒すのは3人だけでいい」

「それはどういうことかにゃー？」

「主犯格の1人の康太は俺がこの手で潰すからな」

これは譲れねえ、と言葉を付け足す。

「因縁の対決みたいなあ？」

「ま、そんなとこだな。」

あー、愛子は俺について貰うぞ」

「え？ボク？」

「ああ、そうだ。もし俺が康太を潰しきれなかったときは愛子が潰してくれ」

「うん！わかった！」

元氣よく返事をする愛子。

「Fクラスのヤツらが3人か」

「……………楽勝」

「あのバカ共をナメてかかると痛い目みるぞ？」

…………『バカ共』って言うてる時点で俺もアイツらをナメてたのか。
それで負けたんだな。ふむふむ。

「腕輪持ちはいないのであろう？」

「腕輪を持つてねえからって弱いワケじゃねえよ？」

「その言い方だとお、その3人が強いみたいだよお？」

「実際強えよ。」

坂本と明久はコンビを組みましたら腕輪なしで戦うと絶対勝てねえ。
どんなに点数とってもな」

「そんなに強いのかにゃー？」

「ああ、文化祭のときに実証済みだ。
ま、油断しなけりや問題ねえよ」

そつ、最初っから徹底的に潰しにかかれば問題ねえ。
もう、油断はしねえよ。

ガガガッキンッキンッ
ドゴッ、ババババババッ

1階の方が騒がしくなってきた。
早え、もう来やがったのか。降りてくるのも時間の問題だな。
ま、潰してやるだけだがな!!

「試獣召喚!!」

『Fクラス 宇童 空
保健体育 871点』

『は?.....はああああああああ!!.....?????』
うるせえ.....。

「宇童!どうやってたらそんな点数がとれるんだよ!?!」
「アホにや!!アホがいるにや!!!」

アホアホ言っな!

「……………キングオブS U K E B E」

保健体育ができるからってスケベじゃねえから。

「ははは……………コレはあり得んのよな……………?」

「ボクの倍はあるよ!？」

「お花畑が見えるう!」

「やっぱり空って規格外ね……………」

「うむ……………」

なんかみんな苦い顔をしている。

ミカンに至ってはラリってる。

ま、ほつとこ。

『シンクロ
同化』!!

視点はミニ 俺へ。

sideミニ 俺

《腐海スメラードの道無限インフィニティの空無限オメガスコチアの悪夢ラスト》

俺は腕輪を発動すると汗が吹き出る……………のではなく液体が体表面に召喚され続ける。

俺は『シンクロ 同化』中、本来ないはずの召喚獣の匂いを感じとることができると汗だと思っていた液体はそれ特有の臭いがないために別の何かだという結論に至った。

康太と戦ったときは『同化^{シンクロ}』を解除していたためわからなかったが。それよりもこの謎の液体は何故かいつものように霧状にならない。どうやったらなるんだ？霧になれえ、とかでいいのか？

ジュワッ

蒸発したような音とともに液溜まりから霧ができる。
マジでできるとは……。

蒸発したような音がでたのはアレだな。霧っていうのは空気中に浮いた極小の水滴だし、一度液が気化して水蒸気（？）になり、それが俺を覆ったところで自動的に露点に達し、霧みたいになったんだろ。

思っただけで状態変化するとはすんげえ便利。
これなら普通に固体にもなるんじゃない？

『固体化』

ピキピキピキという音と共に俺の足下の液溜まりからツララのような形の氷柱（？）が生えてくる。

おおっ！！やっぱできた！！

……でも『バーサーカーモード』みたいに剣とかじゃねえな。

剣を想像して再度『固体化』してみるができるのはツララのみ。
ふむふむ。アレは『バーサーカーモード』限定か。

あ、言い忘れていたが今回は『同化^{シンクロ}』したまま『バーサーカーモ

ド』を発動するつもりだ。

本来、『バーサーカーモード』は発動すると暴走状態になって制御不能になっちゃうが、無理やりにも制御しねえと康太には勝てねえ。それに本体にどう影響を与えるかわからねえけど康太に勝つためには『同化^{シンクロ}』したまましてもしやあねえ。

『バーサーカーモード』でスピードを底上げしつつ、精密なコントロールがねえとまた殺られちゃう。

「あれ？空君は？」

「さっきまでいたわよね？」

「うむ。どこに行ったのであろうか？」

「トイレにでも行っただんじやないかなにゃー？」

「こんなときに行くかなあ？それに召喚獣置いてそこまで離れられるのぉ？」

1人考え込んでいるとみんなの話し声が耳に入る。

あ？なに言って……は？

俺は本体のいる方に目を向けるもそこには何もいない。

《……どうなってんだコレ？》

「自分でもわかってないようよな」

盾宮の言葉の通り、今の状況を理解できていない俺。

……もしかして、マジで『同化^{シンクロ}』したのか？

最近、一体感が増してきていたと思ったが急にココまでいくとは……。

まだ、味覚だけはわからなかったハズだぞ？もしかして……。

《……愛子飴とか持ってるか？》

「え？あ、うん」

《ソレくれ》

愛子に向けて手を突き出す。

「もらってどうするの？」

《俺が食う》

「召喚獣が食うのか？無理だろ？」

《無理だったら吐き出せばいい。
て、ワケだから飴くれ》

もう一度、愛子に向けて手を突き出すと飴を手のひらに置いてくれる。袋をのけた状態で。
気が利いてるな。

ぱくつ、もぐもぐ

……あ、甘いいい！！

「飴が甘いのは当たり前じゃないかしら？」

「……ん？召喚獣って味覚感じるのか？」

「……そもそもここに宇童がおらんのになぜ普通に会話ができるのよな？」

「五感がリンクしているとかあ？」

「そんなことあるのかにゃー？」

御門の問に答える者が1人。

「……………五感のリンクは有り得る」

《やっぱ黒野……》

「……………（コクコク）」

やっぱ『^{シンクロ}同化』ができるのか……。

「どういうことなの？」

「……………私の狙撃、召喚獣にしては正確すぎると思わない？」
「うむ。確かに」

「それが五感とリンクしているため、と言っのかしら？」

「……………（コクコク）」

「いつからできるようになったのお？」

「……………わからない。気がついたらできるようになってた」

ふむ、自然にできるようになることもあるんだな。

俺は気になることを聞いてみる。

《黒野、進行具合はどのくらいなんだ？》

「……………進行具合？」

ん？わからねえのか？
なら……

《リンクした五感はなんだ？》

「……………視覚」

《それだけか？》

「……………？（コクコク）」

いまいち分かかっていねえっばい。

だんだん進行していくもんじゃねえのか？なら、俺のはなんだ？

「突然黙り込んでどうしたのであるか？」

《……あ、いや。なんでもねえよ》

「悩んでるんだったら相談にのるわよ？」

「ボクも」

《2人共さんきゅ》

「ウチらも相談にのるのよな」

優子や愛子以外もみんな助けてくれるっぽい。

《みんなさんきゅ》

「それじゃそろそろ定位置につくかにやー？」

「ああ、そうするか」

《あ、誰か俺のところに大島先生呼んできてくれ》

「わかったあ。

じゃあねえ」

みんなが散らばっていく。

《……この液体のことに誰も触れなかったのは優しさかな？》

液溜まりの中心に突っ立っている俺のその眩きは虚空に消えていった。

バカと俺と狂戦士

sideミニ 俺

《よお、お前らよく来たな》

俺は階段を降りてきた主犯格の4人の坂本・明久・康太・秀吉に告げる。

液溜まりは俺の半径1メートルより外には見えない壁に阻まれたように出れないらしく溜まり続けている。

現在膝くらいまで浸かっている。

「召喚獣がしゃべってる!？」

《明久。その件はもう経験したからいらねえくだり》

そう言っでやるとなにか言ってくるが無視。

謎の液体のことにツツコミをいれないのは優しさか？

「空はどこにいるんだ？」

《お前の目の前にいるだろ?》

「コレは召喚獣だろ」

《……お前らの見えないところから操ってる》

信じねえから嘘ついてやった。

《俺は康太以外に興味ねえから先に行つていいぞ?》

「……………お前らは先に行け。」

「ムツツリー二、相手は3人だぞ?」

《安心しろ。俺と康太の一騎討ちだ。武（大島先生）と愛子は手を

ださねえから》

コイツらがくる前に武にそのことを伝えてあるから手はださねえ。
ま、俺が負けたら戦うと思うが。

「……………先に行け」

「……………わかったぞい。あとで必ずくるのじゃぞ」

「……………ああ。」

……………試獣召喚」

黒の忍装束を身に纏った陸奥璃威児が魔法陣から姿を現す。

『Fクラス 土屋 康太

保健体育 774点

VS

Fクラス 宇童 空

保健体育 871点』

「……………！？」

「ムツツリー二の点数もそうだけど空の点数も教師を超えてるよ！
」！」

「どうやったらこの短期間で400点以上も上がるんだよ！！」

さっき話してるときから俺の頭上に浮かんでたんだが気づかなかったのか？

「コレは援護にいった方がいいじゃろ！！」

「そうはいかないよ。もし土屋君の援護にいくんならボクと大島先

生が相手をするよ?。」

俺と主犯格の残り3人の間に愛子と武が割り込む。
武がさつきからもなんも言わねえ。

「くっ!!ムツツリー二絶対勝てよ!!」

「『アガルタ理想郷』はもう目の前なんだから負けないでね!!」

「……………任せろ!!」

康太が答えると3人は曲がり角を曲がり大浴場の方へ向かっていった。

それを見届けて俺は告げる。

《さ、死合おうぜ!!》

『バーサーカーモード』!!』《》

起動キーに反応し、俺の頭からニット帽を突き破って2本の角が生える。

《ガ、ガアアアアアアアアア!!!!!!》

ビリッビリッ

俺の咆哮に大気が震える。

上の階にも響いているだろう。

『バーサーカーモード』の影響で意識が混濁する。

《グルッ!!》

俺の唸りに反応し、膝まである液溜まりから禍々しい翼とアックアのアスカロンほどの大きさの無骨な灰色の巨剣が2振り召喚される。今回は甲冑はない。

前回と武具が変わっているが俺はそれを認識できない。

それを見て康太が呟く。

「変わったのは格好だけか。興奮めだ。速攻で終わらす。」
「加速」「加速」「加速」。影分身の術」

前回と同じように陸奥璃威児が分身して俺を取り囲む。

「……黒き閃光」

瞬間、すべての陸奥璃威児の姿がかき消える。

ザンツ
シュ
ババ
ババ
ツ

俺は防御する暇もなく体中を刻まれる。

《ガアアアアアアアアアア！！！！？？？》

痛みに叫ぶ俺。
だが

つ！？ぐあああああああつ！！……

決して小さくはないダメージを負ったが痛みのおかげで俺の意識が浮上する。

そのためか翼と巨剣が霧散する。

……クソがつ！！康太の野郎切り刻むとかえげつないことやがつて
！！滅茶苦茶痛えじゃねえか！！

「……………」『加速』

……………」コレで終わりだ」

武器のない丸裸の状態の俺にトドメを刺そうと攻撃を仕掛けてくる
康太。

なっ！？クソがつ、ツララでもなんでもいいから生えてこいっ！！

半ばヤケクソになってそう念じる俺に応えるように、液溜まりから
無数のツララと武器が生えてくる。

「……………」！？」

キキキンツ、ザクツ

生え始めの最初の数本は往^いなしていたが急増する武器に捌ききれな
くなり陸奥璃威児の左腕に小刀が刺さる。それと同時に分身も消え
る。

「……………」くっ！！」

康太は苦悶の表情を浮かべ、陸奥璃威児を急いで俺から離れさせる。
それに対し俺は安堵の表情を浮かべる。

ふう……………」できてよかった。

てか剣がでるようになってる。『バーサーカーモード』にしかでき

ねえっていう予想は当たってたっぽい。
想像すれば翼とか武器とかできるのか？

そして俺は想像する。

想像するのは白銀の翼。フクロウのように羽音を隠し、ツバメのよう
に疾い翼。^{はや}

そして武具。……武具はこの便利液体を気化させてその時々
にすりゃいいや。
んじゃ、生えろ！！

バサッ

《おおっ！？生えた！！》

想像通りに白銀の翼が生え、液体は気化したためか液溜まりが無く
なっている。

《んじゃ、おとなしくくたばれ康太！！》

俺は無音で羽ばたき姿を消す、と言っても高速で天井スレスレまで
飛んだだけだが。

「……………！？どこに行った！？」

急に動きが変わったため俺を見失い困惑して隙をつくる康太。

その隙について俺は陸奥璃威児に向かって滑空しながら無数の剣を
召喚。

そして陸奥璃威児に接触間近で一斉に放つとズガガガガッと墓標

のように床に突き刺さるが

「……………くっ！！」

串刺しにしたと思ったが間一髪『加速』を発動して剣の雨から逃れたらしい。

……………『加速』は厄介だな。まずは動きを封じるか。なら

《『鍵の墓標』》

陸奥璃威児の頭上に漂わせていた便利液体（気体ver）から剣の雨を降らす。

「……………っ！？『加速』っ！！」

捌ききれないと判断し陸奥璃威児は腕輪を発動し雨の隙間を縫って範囲外に出ようとする。

だが、その隙間は俺が陸奥璃威児を誘導させるために作り出したもの。《剣牢》

雨の範囲外から抜け出したことに安堵し気のゆるんだところに剣が陸奥璃威児を格子状に取り囲む。

「……………くっ！！」

《その中からの脱出は康太の腕輪じゃ無理だぜ？》

「……………誰がそんなことを決めた！！『加速』『加速』『加速』っ！！」

ガガガガガガガッ

高速で剣を斬りつけるが少々削れるだけ。

だから康太の腕輪じゃ無理だっ！のに。ま、楽に逝かせてやるよ。

《黒髭危機一髪》

無数の剣が『剣牢』に刃を向けて召喚される。俺の手にも1振りの漆黒の大剣が。

そして『剣牢』に漆黒の大剣を向けて告げる。

《終極》

ズガガガガッ

無数の剣が『剣牢』に突き刺さっていく。

《『覇』！！》

そう言つて大剣を下向きに握り直し思いっきり床に突き刺すとそこから剣の雪崩が発生し陸奥璃威児を飲み込む。

ゴアアアアアアアアアッ

唸りを上げ1つの生き物のように陸奥璃威児を蹂躪したあと無数の剣は虚空へと消えていく。

『Fクラス 土屋 康太

保健体育

0点

VS

Fクラス 宇童 空

保健体育 15点

うおおっ！？やべえっ！！『バーサーカーモード』解除おおっ！
！！！！

廊下を埋め尽くしていた剣や俺から生えていた翼は霧散し、角も消え去る。『Fクラス 宇童 空

保健体育 5点

ギツリギリセエエーッ！！！！！

マジ危ねえ……。寿命が10年くらい縮んだ。
……折角勝ったのにカッコつかねえな。

《俺の勝ちだな。ま、覗きにいききたいんだったらいいぞ？》

「……………何を企んでいる？」

《なんも企んでねえよ。別に愛子も優子も入ってねえし阻止する理由がねえ》

「……………恩に着る（ペコリ）」

そついうと康太は駆けていく。武は止めないようだ。

ドドドドドドドド

『障害は排除するのみっ！』

『邪魔者はブチ殺せーっ！』

『理想的は目の前だーっ！』

『『『おおおーっ！』』』

エロリスト共が上の階の女子や教師を倒してやって来た。

……相手にしたくねえ。植木鉢の陰に隠れとこ。

廊下の角にある植木鉢の陰に隠れエロリスト共が過ぎ去るまで息を潜めようとするが

ゴロゴロゴロ

ん？なんだこの音？

エロリスト共の方から聞こえてきたため目を向けると剣が突き刺さったときにできた溝に引つかかって転けている。

……………ドンマイ。

そう思っていると愛子や優子、それに神上たちがやってきて話しかけてきた。

「土屋君相手によく勝てたわね」

「そうだにゃー。すごかったにゃー」

「アスカロンに似ていた剣があったのであるな」

「あの剣を召喚するやつは反則だろ？」

「普通串刺しよな」

「土屋君みたいにい、避けられないよねえ」

「天使みたいで綺麗だったよ」

「……………驚愕」

……愛子はわかるけど他のみんなも見てたのか？

「ええ、そうよ。」

土屋君対空の勝負なのよ？見ないのは損だわ」

「金とってもいいくらいだったぞ」

《お、それはさんきゅ》

なんか照れるな。

「そう言えば空君戻ってこないね？」

「なにしてるのかにやー？」

《あー、折角だから見せてやるよ》

「何をであるか？」

《ま、ちよつと見ててくれ》

同化解除。

○

沈默。

「何やってるの？」

ミカンの問いかけは俺の耳には入ってこない。

あれ？コレはなんかの間違いだよな？そうであってくれっ！！

『シンクロ
同化』
解除おおつ！！

.....○

再び沈黙。

《はは、
ははは、
ハハハ
ハハハ
ハハハ
ハハハ
ハハハ
ハハハ
ハハハ
ハハハ

!!
!!
!!
!!

「……………!?（ビクッ）」

バカと俺と狂戦士（後書き）

オリキャラsは機会があればまた出します

バカと俺と人体錬成

side ミニ 俺

しばらくパニックに陥って落ち着いた後。

「どういうことなのよな？」

《『同化^{シンクロ}』が》

「『同化^{シンクロ}』ってなんなの？」

……優子に被せられた。

「……たぶん、五感のリンクのことだと思う」

黒野、そのことであってるぞ。

「それで『同化^{シンクロ}』がどうしたんだ？」

《……解除できねえ》

「でも身体には影響はないのであろう？」

《それは黒野みたいに症状が軽い場合だ》

「その言い方だと宇童のは重いのかにゃー？」

「さっき進行具合がどうこう聞いていたことが関係していそうよな？」

盾宮鋭いな。

《ああ。俺のケースが特殊なんだと思うが、俺は『同化^{シンクロ}』を使う度にリンクする感覚が増えてんだよ》

「……………視覚以外も全て？」

《ああ、今は五感全てがリンクしてる。もちろん痛覚もな》

「それってえ、ダメージが全部う自分に返ってくるってことだよなえ？」

《そうだな》

「それなら人体に影響与えまくりじゃねえか」

「『同化^{シンクロ}』が解除できないのは全部リンクしちゃったから？」

《たぶんな。

いやあ、まさかマジで『同化^{シンクロ}』するとは驚きだな》

ははは、と笑って言う俺。

「じゃあ今日の前にいる召喚獣は宇童そのものなのか！？」

《そういうことだ。ははっ、やべえ》

「笑っていられる状況じゃないでしょ！！」

優子による一喝。

こ、怖え。

「空、それって深刻なことよ？」

もし点数が0点になったら本当に死ぬかもしれないのよ？」

あー、確かにそうかもな。

「空君、死んじゃヤダよ！！」

愛子が目に涙を浮かべて言う。

《まだ死ぬって決まったワケじゃねえだろ？それに試獣戦争をしなけりゃいい話だ》

「それはそうだが元の体に戻れなかったらどうするんだ？」

《戻らない、なんて言う選択肢はねえよ。ぜってえ戻る。

ま、とりあえず学校に戻ったら学園長にみてもらっ《

その後のことは考えてねえけどどうすっかな？

……あ、そっぴや視点を変えたらどうなるんだ？

俺は本体があるものと思い、それに視点を移し替えようとするがで
きない。

学園長にみてもらっのが一番手っ取り早そうだな。ふむふむ。
そう考えていると

『『『割にあわねえーっつ！！』『』』

エロリスト共の叫び声が聞こえた。

大浴場まで突破したっばい。

鉄人が負けたのがちよつと驚きだ。

何かに向かって努力するってことはカッコいいことだと俺は思う。

現にエロリスト共は大浴場まで自力で突破したしな。

ま、エロリスト共が汗水流して手に入れたものはピチピチモチモチ
の女子の裸じゃなくて賞味期限切れのババア（学園長）の裸だがな。
全部知ってて通した俺ってなんてワルなんだ。自分のしたことに鳥
肌がたつぜ。

合宿明け

《『処分通知

全男子生徒

総勢150名

上記の者たち全員を一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル』。

……おいババア長。なんで俺まで停学なんだよ《

強化合宿も終わり停学処分をくらった初日、俺は『同化^{シンクロ}』の件も兼ねて学園長室に来ていた。

「ほお……コイツは驚きだねえ。

言葉を話す召喚獣かい」

《話そらすなババア。

俺は覗きに参加してねえし。そもそも阻止してただろうが《

「口の悪いガキさね。

そんなことは分かってるよ。ただアンタがちゃんとしなかったことを大島先生から聞いてるさね。

それに合宿所の地下をボロボロにしたんだ。それくらいで済ましてやったことを感謝するさね」

《ちっ、まあいい。

それよりも俺の『コレ』は治るか？《

「今のところなんとも言えないさね。前例がないから下手に対処す

れば悪化しかねないよ」

そう簡単に解決しないとは思ってたが口に出して言われるとなんかくる物があるな。

「今は様子見の段階さね」

ずっとこのままってのはな……。

《なんか仮説とかたててねえの?》

「私と思うに『ソレ』が解除できないのは、本体が『ソレ』に適應するように作り替えられているからさね」

《なんでそう思うんだ?》

マジでそうなら願ったり叶ったりなんだが。

にしても研究者としてその意見はどうなんだ? 普通あり得ねえだろ。

「どういうワケかアンタの本体は影も形もなくなってる。最初は質量を無視して召喚獣の方に吸い込まれたのかと思っただけで切り刻まれたときに血はでなかったと聞いているさね。

なら有り得るのは分子レベルにあるいは遺伝子レベルに分解されて『ソレ』用に再構築されている途中さね」

人体錬成とか洒落しゃれになんねえよ。めっちゃめっちゃオカルト寄りじゃねえか。

《話がぶっ飛びすぎじゃね?》

それに研究者がそんなオカルト寄りの考えでいいのか?》

「召喚獣っていうのは科学とオカルトと偶然でできたモノだってこ

とを忘れてるのかい？

それに、世界には科学だけじゃどうにもならないことがごまんとある。アンタがしている『ソレ』も科学だけじゃ理解できないさね」

《あー、まあそうだな》

「ま、理由なんてアンタにはぶっ飛んでるくらいがちょうどいいさね。

意外と今から本体が出てくるかもしれないさね」

バチッバチチチチッ

ババアがそう言った瞬間、急に空間が放電し出す。

「本当に本体が出てくるんじゃないのかい？」

そうだと嬉しいな。

ブオンッ

不意に耳元で低い音がきこえる。

ん？なんの音だ？そう思い周りを見ると視界の隅に俺の肩が映り、そしてそれがブレた。

ブオンッブオンッ

《うおっ！なんか知んねえけどやべえ！俺の体がブレてまくってる！》

「ほお、面白いさね」

ババアが笑いながら言う。

《他人事だと思いやがって！》

「他人事さね。」

本体に戻れなかったら骨でも拾ってやるさね。ありがたく思いな」

《この調子でいったら骨なんか残らねえだろ！！》

「うるさいさね。早く逝った逝った」

《このクソババア！！覚え　ブツンツ》

言い切る前に俺の体が消え去った。

s i d e o u t

バカと俺と仮想空間（前書き）

今回から数回エア・ギアと絡みます。

セリフ

「……日本語

」……英語

今まで説明のためにエア・ギアのキャラなどで説明していたところがありますが、空が知っているのではなく、作者が説明のために使っているだけです。

バカと俺と仮想空間

side 本体

「……………うつ……………」

……………知らない床だ」

久しぶりに愛しのmyぼでーに帰還を果たした俺こと宇童 空は見慣れないの床に仰向けに倒れこんでいた。

「よっこいしょっと」

そう言つて起き上がり体の調子確かめる。

エア・トレック
A・T履いてることに気づいたが別段気にすることでもねえだろう。

コキコキパキパキ

「あ……………。なんか帰ってきたって感じがすんな。
んじゃババ…………ア…………？」

俺はババアに文句を言おうと振り返るとそこにある光景に言葉を失う。

「……………なん……………だ……………コレ……………？」

俺は見上げながらそう呟く。

そこにあるのは巨大な機械。

その機械のモチーフはおそらく女性と龍。

その機械の前方には女性の顔が象かたどつてありそのすぐ下には龍の顎あぎと、

胴体部分には骨が剥き出しの龍のあばら、その側面には竜の翼がイメージして創られている。

機械って言うより像って言う方がしっくりくるな。

周りを一度見てみるとさっきまでいた学園長室ではなく、教会のよ
うな建物の中にいた。

もう一度言おう。

「なんだコレエエエエエエ！！？？」

ブオンオンオンッ

「！？」

突如、軽くトラウマになり気味の音が俺とは反対側の翼のそばから
聴こえ、体がビクツとする。

その音が気になり巨大な機械の陰に隠れながら反対側の翼へ。

そこにいたのは男女あわせて8人。タキシードを着ている男意外は
全員俺と歳が近そうだ。

『そこに隠れている君、出てきたらいいだわ』

不意にタキシードの男が俺が隠れている方に向いて言う。

っ！？バレてやがる。

素直に出て行った方がいいよな？もし危なかったらA・Tで逃げれ
ばいいし。エア・トレック

「あー、怪しい者じゃねえよ？」

両手を上に挙げて『降参』のポーズを取りながら翼の陰から出て8人組みに歩みよる。

左目に眼帯をした、青い髪が目つきの鋭い小柄な少年（？）以外は俺が出てきたことに多少驚いている。
眼帯君も俺のことわかってたのか？

「誰だデメエ？」

小柄な少年（？）に敵意向きだしの声で問われる。

「あー、俺は宇童 空」

「……『宇童』だと……？」

お前、宇童アキラの親戚か？」

「宇童アキラ？ 違いよ」

俺と同じ『宇童』って名前か。

会ってみてえな、おもしろそうだし。

「で、眼帯君の名前はなんなんだ？」

「……俺はアギト。そしてこっちが」

少々警戒しながら言い、そして眼帯を左から右に移動させる。

「僕は亜紀人だよ」
あきと

急に声が丸くなる。

「……二重人格？」

「正確には三重だよ」

「へえ。すげえな」

人格の切り替えができるってのがすげえ。

「悪い人じゃなさそうだし、みんなも自己紹介しようよ?」

亜紀人がそう言うのと警戒して離れていた他の奴らが寄ってきた。

「じゃあ、まずは僕から。」

僕は御仏みほとけ 一茶いっさ。みんなからは仏茶ぶつちやって呼ばれてるよ」

コーヒー色の肌にヘッドホンをハゲた(?) 頭につけた巨漢。

「俺は美鞍みくら 葛馬かすま。カズって呼んでくれ。」

よろしくな」

「おう」

頭に白いニット帽をかぶり、蒼い灰色の目に金髪、おそらく白人とのダブル。

俺と同じだな。親近感湧く。

次は黒髪で鳥の巣頭(天パではない)の男。

「俺様の名は南みなみ 樹いつき。」

この『小烏丸』のリーダーでここにいるやつら全てが我が下僕」

「ちよつとまてえっ!!」

「ああ? しょーがねーな。」

オニギリにはパシリのポストをくれてやる」

「テメっ、さがってんじゃねーかつ!!」

オニギリ頭の男はまんま『オニギリ』ってあだ名らしい。
オニギリと樹いつきがあーだこーだと言い争ってるが次の自己紹介が始まる。

「アタシは安達あたち 絵美理えみり。

アイツの下僕じゃないからね!!」

「了解」

愛子とは違った種類の元気な娘。

特徴は髪が肩まであることとデカいこと。背じゃくて胸がな。
続いて黒髪長髪の真面目そうで地味目な娘。

「私は東雲東中学しのめひがしちゅうがく3年5組24番、中山なかやま 弥生やよいです。よろしく願
いします」

中山はそう言ってお辞儀をする。

礼儀正しいな。にしても

「中学生？」

仏茶ぶつちやは中学生に見えねえよ。安達も然り。

「そうだわ。彼らは皆中学生だわ」

一番最初に俺に気づいたタキシードの男が教えてくれるけど

「オッサン誰？」

名前知らねえ。

それとオッサンってほどじゃねえけど、この中じゃ断然年食ってる。

「……………私はファルコ。旧『眠りの森』^{スリーピングフォレスト}の『牙の王』だわさ」
おおっ、オッサンについてなにも言ってこねえ。大人の対応だな。

「『眠りの森』^{スリーピングフォレスト}ってなんだ？」

『牙の王』についてはなんとなくわかる。

『王』と呼ばれるってことは『道』^{トリック}（簡単に言えば人それぞれの技の特徴のこと）を極めたってことだ。

ならファルコは『王』と呼ばれるだけの強さがあるってことだな。
……………戦ってみてえ。

俺の中の何かが『戦え！喰らえ！殺せ！』と訴えてくる。

「『眠りの森』^{スリーピングフォレスト}は特AクラスのA・Tチームだわ。」

チーム創ってねえから『特Aクラス』とか言われてもわかんね。

「へえ。そうなんだ。（棒読み）」

「……………ゴホンッ。」

なんかしかめっ面だ。

「もういいだわ。」

皆、特に『嵐の王』……………そして『牙の王』聞くだわ」

ファルコ意外に2人も『王』がいんのか！？

「君達は以前……『塔』の中に招待されたことがあったただわ?」

『塔』ってなんだ?言い方からして普通の塔じゃねえよな。

「実はあの時のキリクは……今日の私と同じことをしようとしたただわ。

君達をこの『スカイリンク空間』で『テスト』しようよね……」

「……ちよつとまで……」。

……ということはあの『塔』からでもこのバーチャル空間に接続できるってことか?」

いつの間にか眼帯の位置が変わり『亜紀人』から『アギト』になっている。

『塔』のことを知ってるってことはアギトが『王』の1人か。

もう1人は誰だ?

それとバーチャル空間ってことはコレは現実^{リアル}じゃねえのか。
すげえな。

「あの『塔』どころか世界中どこからでも可能だわ」

カツンツカツンツ

不意に背後から足音が響く。

『この《スカイリンク》は全てのライダー……全てのA・T^{エア・トレック}が繋がって構築されている世界なのだからね』

その声の主は親切にもココの説明をしてくれる。……ただし英語で。

『よければその先は私に説明させてくれないか?』

俺が振り向いて声の主を見ると

『チエンジだ!!』

そこにいたのは次期大統領のジョン・オハマと+。

次期大統領の外見はまんまオバ?だ。
いえすういーきゃん。

+ の1人はボンキュッボンの巻貝ヘアの女性ともう1人は次期大統領と同じ黒人の女性。黒人女性の方はテレビで見たことある気がする。

確かA・Tを使った世界陸上のチャンピオンだったような。

「ああー……?」

んだ?このやたら齒の白エー外人は!!ひっこんでろツ!!」

おおっ!?樹^{いっき}すげえな。

お偉いさんに面と向かってそんなこと言えるとは。

でも大統領のこと知ってる仏茶^{ぶっちゃ}とカズに取り押さえられてる。

『君達の戦^{バトル}は一部始終見せてもらったよ。

君達は鉄の勇気と実力を兼ね備えたナイスファイターだ。

素晴らしい戦士たち(グッドファイター)と素晴らしい試合には素
晴らしいご褒美が必要だ』
^{グッドワード}

……まるつきり部外者な俺がいますが……?」

『君達は《テスト》に合格し《全てを知る権利》が与えられた』

そして次期大統領は巨大な機械もとい像を指差して言う。

『この像の中に君達が《空の玉璽》^{レガリア}と呼んでいるものが眠っている。もつと正確に言えばこの巨大ネットワーク《sky link》こそが《空の玉璽》^{レガリア}の一部なのだよ！！』

周りから息をのむ音が聞こえる。

……《空の玉璽》^{レガリア}ってなんだ？聞いたことねえ。

1人置いてきぼりをくらってすんげえ寂しいと宇童は宇童は報告してみる。

……余計虚しくなるだけだな。

バカと俺と侵入者（前書き）

あと1、2話続きます

バカと俺と侵入者

『　　というわけで　　長い調査の結果　　』

……話長え。クソ長え。

『私は現大統領のモツシュが進めてきた《空の玉璽^{レガリア}計画》ともいうべきものの存在をつきとめたのだ！

非常に厳しい戦いになるだろッ！！敵は強大だ！！

しかし！！この地球で生きる全ての人々のために今！！我々は立ち上がらねばならない！！』

『YES！！WE CAN！！』

ドーンと効果音が出そうな感じで締めくくることが如何せん長すぎる。

『小烏丸』の面々はアギト以外全員寝てんぞ。

『！？In the 爆睡ッ！？』

「オ、オイッ！起きるだわ……！」

と、とても重要な話してるだわッ！！」

樹^{いっき}を起こそうとするファルコ。

「あ……。んん……？」

AKB48はどことなくAK47に似てる……、までは聞いた」
「んな話ハナツからしてねえだわッ！！」

思つくそ聞いてねえじゃねえか。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！

まあよくてこんなところじゃねえか？コイツらはよッ」

「んん……あなたの話はつまり……なんというか……とても政治的な話？……だよな。

エネルギー問題とか……次世代の世界の主導権を誰が握るのか？……ということみたいだけど……」

「悪いけど……ソレ、俺らにゃあんま関係ねえ話っぽいで」

『……What？

君らだって……《空の玉璽》^{レガリア}が欲しくて戦ってるんじゃないのか？』

「ふああッ。

へふに……ほんなほわせないふあ……（別にそんな欲しくないなあ）

「あの……私達、特に『空の玉璽』^{レガリア}の正体とかは興味なくて……」

「俺らはただ……コイツが俺らを飛ばしてくれるから。

俺達を自分の翼だと俺達を必要だと言ってるから戦ってるだけなん
で」

カズは樹を見ながらそう告げる。

……なんか羨ましいな。

俺も気が向いたらA・Tチームでも創るか。

「………はあ………。

申し訳ありません。……非礼の数々……私からお詫びを……」

『……いや………』

巻貝が頭を下げようとするがそれを制する次期大統領。

ちょうどその時

「……ん？」

「……！！」

「アギトにファルコどうし……は？」

あまりに突然すぎて俺は自分の目を疑っちまう。

それはなぜか？アギトとファルコの腹から刃物突き出てっから。

……マジ意味わかんねえ。何事？

キュウウウウウウウウウウ

アラート
アラート
《警告！！》

《警告！！》

「LV8（レッドシグナル）」

《強制ダウンロード

プログラムが介入中

防壁プログラム中和

アラート
アラート
《警告！！》

突如警告音が鳴り響き光が渦巻く。

なんか出てきそうな予感がするな。

「先走りもほとばしりすぎやで、ガウエイン」

その渦の中から、先程アギトとファルコをA・Tから生えた刃物で

エア・トレック

突き刺した、顔と二の腕にタトゥーのある男に声がかかる。

その男は刃から滴る血をピツと払いながら応える。

『アンタらが……ノロマなんだヨ……』

『なんだよ、もうー！』

僕の方も残しとけって言っただろオー？

せつかくあのオルカを倒した《牙の王》って奴を見にきたのにナア

……』

光の渦が消え去り、ガウエインに続き4人の侵入者が現れた。

今言葉を発したのはソバカスメガネの白人。

その後ろにも3人の侵入者が^{たたず}佇んでいる。

たぶん真ん中の腕を組んだ糸目男はここにいる全員の中で一番強え。
不気味な^{かぜ}空気を纏っていやがる。

「カツ。」

モリガン！マーリン！」

糸目男が小さく笑い、そばに控えていた2人の女性に命令を下す。

ヒュッ

モリガンと呼ばれたのは全身真っ白な女性。

対し全身真っ黒な女性はマーリン。

彼女らに加えソバカスメガネは軽やかに疾走する。

「カズッー！！」

「オオッ」

「パイルトルネードー！！」

「『時よ』ー！！」

樹^{いっき}は風をコイル状に操りカズの『時』を乗せて蹴りだすことにより

迫り来る3人の侵入者を迎え撃つ。

樹は『風』、んでカズは『炎』、と。

こつも『道』がはつきりしてるチームってのは珍しいんじゃないか？

ドパッ

「がはッ!？」

「!？」

……は？力業で2人の技破りトリックやがった!？
なら

「喰らつとけつ!！」

t r i c k : G r a n d F a n g F i r e B i r d

ゴオオオオオオ

俺は『炎』の『牙』を放つ。

さっきの樹とカズの技トリックよりは威力は高えぞ？

『W o w ! ! やるねえ』

あんのメガネ避けてんじゃないぞ!!

それに俺を見下しやがって……!!

クソ野郎が!!ぶっ殺してやるっ!!

t r i c k : T a E s c h a t a B r a d e F a n g W i

ng

ヒュッゴアアアアアア

風を操って突風を生み出し、それに無数の『牙』を乗せ、威力を倍増させる。

そこらの奴らじゃ絶対打ち破れない幅100m高さ50mの『牙』の巨大な『壁』。

その『壁』はバキバキと床を抉りながら進んでいく。

『ただ大きいだけじゃない？』

そう言つて『壁』の範囲外に逃れようとするが

「俺の『道』は『牙』だけじゃねえんだよ!!」

『壁』は意思があるかのように3人の逃げ道を塞ぎ回転しながら閉じ込める。

ま、実際俺っていう意思があるがな。

『なッ!?!』

ソバカスメガネの表情が引きつり、顔の隠れているモリガンとマーリンの2人からも驚いている雰囲気が伝わる。

「残念だったなウンコクズ共!!」

俺を敵に回したのが運の尽きだ!!」

風を操ることにより『壁』は回転速度を上げながら3人に急速に迫る。

「挽き肉にでもなってる!!」

『く……っ!!』

そ、そうだッこんな時こそあのセリフをオオーッ!!

《ひでぶッ!!》

あア!このアホンダラアアア!!!!

俺をナメてんのか!!

グチャチャチャチャッ

『ぐああああああ!!!!』

『壁』が紅く染まりながら、中からそんな悲鳴が聞こえる。

ナメたこと言ってたから回転速度落として苦しめることにした。

ゴアアアアア、――

「うへえ。グロいな」

波が消え去るとそこには四肢の千切れたソバカス^{ひび}罅入りメガネに上半身と下半身がおさらばして内臓がはみだしているマーリン、そして四肢は健全だがほとんどの肉が削ぎおとされ骨が見え隠れしているモリガン。

マーリンもモリガンも オツがなくなって壁になってんな。
特にモリガン。Gくらいあったのに今じゃAだ。

『……がはっ……』

『……かひゅー……かひゅー……』

『……うっ……』

しぶといなコイツら。

「俺って赤の他人に手加減するほど優しくはねえんだ。それも敵に
つてワケで、死ね」

冷たく言い放ち、まだ息のある3人に球状に囲むよう切れ味の鋭い
『牙』を放ち留める。

「
『無限の牢獄』
インフィニティ・ジェイル

閉じる……『牙』」

キュウウウウウウウウッザンッ

ポトツポトツという音と共に床に落ちる肉塊。

それを見ても顔色1つ変えないガウエインと次期大統領に迫ってい
る糸目。

この3人のことを仲間とは思ってなさそうだな。
殺しといてなんだが気に食わねえヤツらだ。

「……今のアギト君の……」

ふと中山の呟きが耳に入る。

どうやらアギトはこの『無限の空』
インフィニティ・アトモスフィア
を使えるらしい。
ならアギトがファルコの言っていた『牙の王』で確定だな。

『無限の空』
インフィニティ・アトモスフィア

それは簡単に言うと玉璽^{レガリア}の能力のこと。

俺の場合、独自で開発した『炎狼の玉璽』
レガリア
（『炎』『牙』『棘』）

風』の4種類の融合)で複数の『無限の空』インフィニティ・アトモスフィアを発動することができる。

戦^{バトル}に集中してて気づかなかったが周りが騒がしいな。

俺は次期大統領を守るため糸目野郎の方へ駆けながら周りの話に耳を傾ける。

「2人(樹とカズ)がやられたのにあんな軽々と倒したよッ!」

「一体なにもンなんだッ?」

「カズッ!!--リード持ってたよなッ!!--」

宇童のレベル計れッ!!--」

「ああッ!!--」

樹の言葉を受けカズがリードと呼ばれるA・T使い(ライダー)の戦^{バトル}レベルを計る機械を俺に向ける。

そのアプリをケータイで簡単にダウンロードできるらしいけど俺はしてねえから自分のレベルを知らねえ。

ピピッ

「.....は?」

「カズッ、いくらなんだ!!--」

「.....Battle Level.....に、249.....」

おおっ!!--なかなか高いな。

初めて数ヶ月(いや、2ヶ月くらいか?)だつてのによくここまで

あがつたな。

ハッ、成長速度に自分でもビックリだ。

「何イツ！？俺らとあんま年かわんねエのに！！」

「宇童君、君はなに者なんだい？」

仏茶が警戒心バリバリで尋ねてくる。

「あー……俺か……？」

なんて答えよう？

ただの高校生？ただの迷子？それともただのA・T使い（ライダー）？

うーん……。『ただの』っていうのは合わねえか。

そうだな、なら

考えが纏まり俺は口を開く。

「俺は『炎狼』宇童 空。

『道』は『獣の道』。ロード・フェンリス

そして

『煉獄の王』」

ゴアアアアッ

突如、俺の背後に炎を纏った巨大な銀の狼が姿を現し、駆けつけている俺に追従する。

この狼の正体は『影技』^{シャドウ}。
『影技』は『王』の素質のある者にのみ現れる……ようないような。

「安達っ！！大統領と一緒に伏せろっ！！」

t r i c k : L e v i a t h a n

安達と次期大統領が伏せるのを確認せずに糸目野郎にバリ濃いめの『牙』を放つが

「ふんっ！！」

パンッ

糸目野郎は手を合わせて空気を破裂させて『牙』をかき消す。

は……！？マジかよ！？濃いめに撃ったつてのにつ！！
風系のライダーだからってそんなことできるもんじゃねえぞ！！

「ハエにようはないんや。消えとけ」

そう面倒くさそうに告げると、床を砕き、その破片に風の『面』をぶつけ弾丸のように飛ばしてくる。

ヒュンヒュンヒュンッ

「クソったれがっ！！」

対して俺は、風の『面』を『時』で撃ち出し、弾丸と化した破片を撃墜する。

「ほお……よやるの……。ワイの技を防ぎきるとは。
ま、こんな防げれへんでワイの相手しよ言っんならただのクズやけどな」

……そのスカした顔ぶん殴りてえ。

「スカしてんじゃねえぞ、この糸目っ!!」

t r i c k : A f t e r B u r n e r

ボンッポポッ

俺は元いた場所に『炎』と衝撃波を残して消え去り超高速で糸目に迫る。

t r i c k : G r a n d F a n g F i r e B i r d

そして背後に周り零距离で『炎』の『牙』を放ち糸目を灼く。

「ぐあああああああ……!!??」

もういつちよあっ!!

「『無限の牢獄』っ!!
インファイニティ・ジェイル
閉じろおおっ!!『牙』!!」

キュウウウウウウウウッザンッ

「がはあっ……………!!」

……………コレがっ……………お前の……………真の……………『力』っ……………か……………!!」

そう言っつて糸目は倒れこむ。

……………なんか呆気なくねえか？

念には念を。

t r i c k : F e n r i r E s c h a t a

人1人分の厚みのある俺の最強で最凶の『牙』を糸目に放つ。
この『牙』は切るっつて言うよりは粉々にすり潰すのに向いてる。

ベコンツギヤギヤギヤッ

床『だけ』が抉^{えぐ}り削られる。

「うおッ!?……………危ないやつだな。

オイ……………もう楽な死に方はできへんぞワレ」

「それはこっちのセリ……………!?!」

なんだコレ!?体が動かねえ!!

声もでねえ!!

「……………ガウエインツ。大統領殺つとけッ」

『……………遊んでる内に逃げられた』

「はア?なに言っつてんね……………ん……………?」

糸目は次期大統領がいた方に目を向けるとそこには誰もいない。

いつの間にか樹たちもいなくなってる。

……あれ？俺ヤバくね？

「はア……。まったくいらん仕事増やしおって。

……ワレ、自分のこと『煉獄の王』とか言いよったけどぬるい『炎』
やったわッ。

カカツ、アレで本気言っんなら死んどけッ」

そう言つとさつきと同じように俺に破片を飛ばしてくる。

クソがつ！！死んでたまるかよっ！

一か八かつ！！

『試獣召喚』っ！！

俺の前に見慣れた魔法陣が展開され俺の召喚獣が出てくる。

『Fクラス 宇童 空

日本史 427点』

よっしゃあっ！！出てきたっ！！

「ぶはっ。そないな人形だして何する気やねん。

お人形遊びでもするんか？その年でキモいやっちやのう。カカカカ
カツ」

なんとでもいいやがれっ！！

『シンクロ
同化』っ！！

本体が消えミニ俺に視点が変わる。

それと同時に俺がいたところを破片が通過した。

s i d e o u t

バカと俺と絶対絶命

sideミニ 俺

ヒュンヒュンヒュンッ

俺の頭上を破片が過ぎ去る。

怖え…… もう少しで死ぬところだった……。

「どこに逃げよったんや、あのハエはッ！ー！」

糸目が本体に気をとられている間に俺は戦う準備をする。

それは『荆棘の道』^{ソニア・ロード}を100%扱うための意識的に行う過呼吸。

深く深く、小さく強くknockして、『扉』を1つずつ開くように体の隅々まで、奥の奥まで空気を導き入れていく。

俺は過呼吸をやめ、ブハアと息を吐き出す。

これにより限界まで体内に吸収された窒素はほんの少しの減圧で一気に結合。

体中、特に体の隙間、所謂関節に窒素の泡が発生する。

ピキッパリッ

激痛。

だが、その天然のエア・クッションをはさんだ関節群はその限界可動域をやすやすと超え、『人』の動きすら超える！！

さて、こっからが俺の『本気』だ!!

《『荆棘の道 - 無限の空無限の荊鎖』》
ソニア・ロード インフィニティ・オメガスフィア・チェーン

呟くように言つとA・Tの後輪がジャラツと荊の鞭に変化する。
その音に気づき糸目は俺の方に目を向ける。

「ん? カツ、人形が勝手に動いとるわ」

《人形じゃねえよ。人間だよ!!》

「……お前、さっきのハエか?」

《ハエハエ言つてんじゃねえよ糸目えっ!!》

そう叫びながら糸目に迫り蹴りを放つ。「なんや? なんも考えんと
突っ込むたあお前あほちゃうか?」

手をパンツと叩き空気を破裂させるが

《ナメるなよ》

毒のつまつた棘の生えた、『風』を切り裂く荊の鞭。それが『荆棘
の道』。
ソニア・ロード

ギュルルツバチンツ

俺の荊が空気を破り初めて糸目に傷を負わす。と言つても頬から血
が一筋流れたただけがな。

《もう一度言つ……。

ナメるなよ》

「口だけいつちよ前やな。
ならワイも『本気』だしたるわ」

パキッピシピシッ

……は？俺夢でも見てんのか？
アイツの足から岩の剣というか斧が生えてるように見えるんだが…
…。

「ぶはッ！！なんやそのアホ面はッ！！
ワイを笑い死なせる気かッ！！」

《っ……！！》

ひとまずあの足をなんとかしねえと。

「ワイの足をどうこうしよ言っんは無理やけにやめといた方がええ
で」

ピンポイントで当ててきやがった。
だが

《誰がそんなこと決めたっ！
やってみねえとわかんねえだろっ！！》
「誰が決めたとかそんなことちゃうねん。
ワイがコレだして負けたことなんて

ないねん」

ザシュッ

速
つ
!
!
?
?

俺の体が右肩から左脇腹にかけて大きく斬られる。

《ぐあああああ！！！！！？？？？》

「ま、コレ出さんでも負けたことないけどな。」

ほな、さいなら「煉獄の王」

俺に目掛けザンツと足を振りおろす。

つ！？
『同化』
シンクロ
解じ

グシヤツ

Side out

バカと俺と絶対絶命（後書き）

エア・ギアとの絡みは一旦終了

バカと俺と白い部屋

side 本体

何だかふわふわ漂っているような感じで心地よい。

そんな中閉じていた目を開くとそこは雪ぐ……ゴホンッ……真っ白な空間だった。

……。

まだ『スカイリンク』とか言う空間の中か……？

…… あ、そっぴやあの後どうなったんだ？

俺死んでないっばいし。

《それについては俺が答えてやるぜ》

最近聞き慣れたミニ 俺の声が足元から聞こえてくる。

『シンクロ同化』してねえのになんでしゃべれんだ？

《それは秘密》

俺によじ登りながら人差し指を口の前で立てて言うミニ 俺。

仕草が人間みたいだな……。

…… てか会話が成り立ってる気がするんだが？
口に出てたか？

《兄貴はなんもしゃべってねえよ。ただ俺が兄貴の心を読めるだけ》

「勝手に心読むな、プライバシーの侵害で訴えるぞ？」

それと『兄貴』ってどういうことだ？」

《そのまんまの意味だぜ。

俺たちは兄弟も同然なんだぜ、ブラザー兄貴？》

そう言つてどや顔をしてくる。

「『わかるだろ？』みたいな顔されてもわかんねえよ」

《要するにだな、秘密を共有するのも兄弟のたしなみってことだ》

「意味わかんねえ」

《はあ……いちいち文句ばっかだな》

……コイツ……！

《じゃあねえ、ちゃんと教えてやるよ。

兄弟つて言うのは、俺とコイツは一心同体だ、だのなんだのと兄貴が言つてたから》

……あー、合宿のときか。

俺が自分で蒔いた種つてことか。

《そついうこつた》

「……話変わるが、なんで俺つて無事なんだ？」

《えーつとな、あの時確かに踏み潰されたんだが、兄貴は解除した後で俺だけグシャツと》

「マジかつ！！死ななくてよかった……」

生きてるつて素晴らしい！！

《おい、俺の心配しろよ！！》

「生きてんだからいいじゃねえか」

《まあ、兄貴が死なねえ限り俺は死なねえけど心配されてえんだけ

ど?》

なんかガキっぽいな。

《そりゃそうだ。

俺、生まれてからまだ1年しか経ってねえガキンチョだぞ? 1歳児だぞ? 赤ちゃんだぞ?

世話しろコラ》

……世話……子育て……か。……優子と子育て……愛子と子育て……。

……なんかいいかしんねえ。

「じゃあねえな。家に帰るぞ」

《うん!! わかったパパっ!!》

「ぶふっ!! お前何言ってんだ!？」

《こういうのは形から入る方がいいだろ?》

「それにしても不意打ち過ぎるだろ!!」

《細けえこと気にする男は嫌われるぞ?》

「ぐうつ……!!」

1歳児にこんなことを言われるとは……。

《ねえ、パパ。僕に名前つけてよ》

ぐっ、どうしても『パパ』のところに反応しちまっ。

《いい加減なれろ》

そんなこと言われるほど多く呼ばれてねえよ。

「…………名前だよな。何にするかな？」

…………アンバンマン
闇絆満

悪との絆が強くなりすぎて愛と勇気の友達がいなくなりそうだな。

…………ドラえもん
怒羅衛門

怒りっぽくなりそうだな。

…………シュバルツ
守刃瑠都

普通にカッコよくな？

《却下だからな。もっと普通のにしろよ》

ワガママだな……。ま、1歳児だししゃあねえか。

普通…………

…………るり
瑠璃

可愛い子になりそうだ。

…………こはく
琥珀

気の強い子になりそうだ。

…………みやび
雅

上品な子になりそうだ。

なんか女の子みたいな名前ばっかだな。

《パパ、僕『琥珀』がいい！》

「…………OK。流石にもう慣れた。大丈夫だ」

…………コレは予行演習みたいなもんだ。そう考える俺。

《何ブツブツ言ってたんだ？気持ち悪いぞ》

「コラ、琥珀。パパにそんなこと言っちゃいけねえだろ？」

《はーいっ！》

「んじゃ、家に帰るか。」

琥珀、こっから出る方法知ってるか？」

《起きろー、って念じたら出られると思うよ。

ココはパパの精神世界みたいなものだし》

「へえ。俺の中って何もねえんだな……。

んじゃ起きるか」

そう言っただけ目を瞑ると何かに引っ張られる感覚を覚え、次の瞬間にはさっきまでのふわふわした感覚はなく重力を感じるようになった。

バカと俺と白い部屋（後書き）

あと1、2話で3巻終了のつもりです。

バカと俺と天使の力

I n t h e 病院のベッド

A M 2 : 2 7

「……知らない天井だ」

精神世界から帰ってきて目に入っただのは見慣れない天井。
どこだココ？

それに誰かに手を握られてる感触がする。

俺は首だけを動かし、自分の手のあるところに目を向けると、そこ
には優子と愛子が俺の手を握って眠っていた。

2人の頬にはうっすらと涙の跡が残っているように思える。

「……心配させたっばいな」

俺がそう呟くと突如、魔法陣が展開され俺の腹の上に琥珀が降り立
つ。

《ママを泣かすのはどうかと思うよ？》

「ぶふっ！？ゴホッ、ゴホッ……！」

急に何言ってるんだよ！

《僕はママを心配しただけだよ？》

「……その『ママ』ってのはなんだ？」

《そのままの意味だけど?》

「……そうか。」

……てか今日1日すげえ濃かったな」

あー……初めて人殺したな。逆に殺されもしたし。

ははっ、なかなか有意義だった。

《パパってなんか壊れてるよね?》

「その俺と普通に話してる琥珀もなかなか壊れてんじゃね?」

《パパと一心同体だから仕方ないよ》

「そういうもんか?」

《そついうものだよ。》

それとパパにとっては1日でも現実では5日経ってるよ》

「は?それどういうことだ?」

《答えてしんぜよう!》

急に話し方が素に戻りどこからかヒゲメガネを取り出しかける琥珀。
ダメメガネでいいじゃねえか。

《学園長室で消えた時、俺と兄貴が分離したんだが、そのときに兄貴は魂と意識の2つに別れて、意識の方は俺に魂は『スカイリンク』にとんでいった。

その魂と意識をまた1つにするために約2日間、俺は『スカイリンク』内を探し回った。

そして3日目に入るくらいで魂見つけ、それと兄貴の意識を1つにしたらそのまま糸目一族に襲撃されてお陀仏。……かと思いきや、またまた『スカイリンク』に放り出された今度は分離せずに気絶だけした兄貴の魂を2日間くらい捜して現実世界の再構築された本体に押し込んで、それから精神世界でだべって今に至る》

「……あー、さんきゅ」

琥珀がいなかったらヤバかったな。
マジで死んでたかもしれないねえ。

《いってことよ。

んじゃもう遅いし寝ようぜ?》

「……ああ」

そうして俺は眠りについた。

AM 9:02

「………ん、……ふあああっ」

「空!!」

「空君!!」

「むぐっ!?!」

目が覚めると優子と愛子に抱きつかれた。

頭に抱きついてきた愛子の胸で呼吸を止められ、さらに胸の圧迫により意識が遠のきかける。

柔らかさの前に苦しさが……。

「あ、愛子っ!!空がっ!!」

俺の手が痙攣してきたのを見て優子が叫ぶ。

「へ？あつ、空君ごめんっ！！」

「はぁ……はぁ……っ、……だ、大丈夫だ。」

ふう……2人共心配かけたな、悪い」

「もう『同化^{シンクロ}』は使わないでね？」

「……できる限りそうする」

「空君！！ぜえつつつつたいに、使っちゃダメっ！！」

「……はい……」

渋々承諾。

いつも温和な愛子が鬼の形相で迫ってくるんだぜ？

コレは下手なこといつたらやべえだろ。

「あ、2人に見せたいもの（？）というか人（？）がいるんだ」

「どっちなの？」

「俺もよくわかんねえ。たぶん人。」

ま、見りゃわかる。

琥珀、出てこい」

《はいなー》

そう言つて魔法陣から琥珀が俺の膝に出てくる。

あるえ？なんかデカくなつてね？しかも人間味が増してる。

40cmくらいだった身長が60cmくらいになって、髪がサラサラで肌がツヤツヤになつてる。

この数時間で何があつた？

「空君！！『同化^{シンクロ}』はダメって今言つたばかりでしょっ！！」

召喚獣が話してるから『同化^{シンクロ}』したと思つたんだろう。

「いや『同化^{シンクロ}』してねえよ」

《そうだよー。僕とパパの人格は別だよー》

話し方1つに統一しろ。

「『パパ』！？空、どういうこと！！」

「誰かの子どもってワケじゃねえからな」

「じゃあどうということよ？」

ジト目で見てくる優子。

「……琥珀、説明頼んだ」

《はいなー。》

パパと同化&分化の繰り返し。

同化の時のパパの意識の残りカスが蓄積。

自我の芽生え。

みたいな感じなのー》

「マジか！？」

初耳だ。

「空君も知らなかったの？」

《それはね、僕の自我が芽生えたのが最近だからだよー。
それに教えてなかったしー》

「そういう大事なことは教えるよ。」

自分で、秘密は共有するもんだ、って言ってたじゃねえか」
《知らなーい》

べーつと舌を出す琥珀。
悪ガキに育ちそうだな。

「はぁ……。まあ、いい。」

でだ、琥珀を育てなきゃならなかったから一緒に世話してくれると嬉しいんだが」

「そんなことならお安いご用よ。」

でも召喚獣のお世話って何すればいいの？」

「メンテナンスとかはできないよ？」

「そう言われてみたらそうだな。何すりゃいいんだ？」

《僕は半分は人間だから普通の子どもと同じようにしてくれたいよー》

……。『半分は人間』……？

《パパの体を再構築する時にパパの体の半分を僕の体を構築するのに使ったんだー。

だから僕も成長するんだよー》

テヘッと笑う琥珀。

……。可愛いからうが今のは見逃せねえ。

「コラ、人の体で何してんだよ。てか俺の残り半分はなんなんだよ！ー」

《優しさかなー？》

「バフ？リンじゃねえか！ー」

バ？アリンの半分は優しさで出来てるらしいっていうのをだいぶ昔に聞いた。

《ママー、パパが怖いよー》

琥珀はそう言って優子に抱きつく。それを見て愛子は肩を落としている。

マジで俺の体のもう半分はなんなんだよ！！

「パパ、子どものしたことよ？許してあげなさい」

優子が『ママ』と呼ばれ、うつとりとした表情のまま俺をなだめる。

優子が懐柔されちまった。

しかも『パパ』って呼ばれた。

「いやでもよ、心配になるじゃねえか」

「そうね……琥珀、パパに教えてあげて？」

《ヤダ》

優子の腕の中にいる琥珀は即答し顔をプイツと背ける。

「今日の晩ご飯は琥珀の好きなオムライスにしてあげるからパパに教えてあげて？」

……琥珀ってオムライス好きなのか？

《うん、わかったー！

えっとね、パパの残り半分は 》

……………。

溜めたままちらちら俺の方を見てくる琥珀。

溜めとかいらねえから。

……！！ああ、なるほど。

「残り半分は？」

そう言っでやると琥珀の表情が一気に明るくなる。

《『天使の力』^{テレスマ}だよー》

「ふむ、てれずま……っでなんだ？」

《『天使の力』^{テレスマ}って言うのは字の通り天使の力だよー》

……天使の力、か……なんかスケールでけえ。

「そんな物が存在するのか？」

それに俺って半分天使？」

《『天使の力』^{テレスマ}は存在するよー。神の子って言われたキリストも使ってたらしいし。

それと天使についてはどうかなー？》

「違いのか？」

《たぶん。『天使の力』^{テレスマ}を持ってるからって天使ってワケじゃないんだよー》

「そうなのか……じゃあ俺はなんだ？」

《人間でいいと思うよー》

なんだその『笑えばいいと思うよ』的な返事は……。

「琥珀君。空君がもしその天使の力をなくしたらどうなるの？
もしかして……死んじゃうの？」

愛子が泣きそうな表情で尋ねると琥珀は呑気な口調で答える。

《その心配はないよー。

もし『天使の力』^{テレスマ}がなくなっても自動的に『同化』^{シンクロ}して、また溜まるようになってるからー》

「その言い方だと俺って電池じゃね？」

それと『天使の力』^{テレスマ}の供給路が琥珀の中にしかねあってことだよな？」

《そう喻えてもいいねー。

まあ、使わなければ『天使の力』^{テレスマ}は消費されないし大丈夫だと思うよー。

それと供給路のことだけどその通りだよー。パパにも供給路つけようとしたんだけど容量オーバーだったのー》

「琥珀は俺よりちっこいのになんで供給路があるんだ？」

《それは基盤が違うからだよー。パパは基盤が人間だから魔改造しないと供給路がつけられないし、魔改造すると本当に天使になっちゃいそうだからやめたのー》

「なるほどな。

……あ、もしなんか問題があって『同化』^{シンクロ}できなかったらどうなるんだ？」

《そうなったら体型が子どもになるよー》

「……？どういうことだ？」

《『同化』^{シンクロ}できない場合は残りの体で元の体をつくるようになってるんだけど、もとの体積が少ないから子どもになるのー》

「へえ、俺の体って不思議だな」

ふと思ったが琥珀ってハイスペックだな。

人間を天使にできるっぽいし。人の体吸収するし。

……人の体を吸収するのってハイスペックか？

そう考えていると優子が琥珀に尋ねる。

「ねえ琥珀。パパと『同化^{シンクロ}』して何も影響ないの？」

《問題ないよー。僕とパパはほとんど同じ体だから『同化^{シンクロ}』してもいつも通り過ごせるのー》

……そういや俺の召喚獣ってどうなるんだ？

琥珀は制御から外れちまったっばいし。

「学園長に相談してみたら解決してくれるとボクは思っけど」

「あの薄情者のババアに相談するのか……気が進まねえな……」

「でも召喚獣がないと試召戦争できないわよ？」

《召喚獣なら僕がいるよー？》

琥珀がそう言ってくるが

「子どもに戦争なんざさせるワケねえだろ」

《でも今までしてきたじゃんかー》

「アレとコレとは別物だ」

「子どもが戦争とか危ないことしちゃダメだよ？」

《うー……わかったー》

俺以外の人のことはよく聞くんだな……。ちよっと悲しい。

「んじゃ、とりあえず俺はババアのところに行ってくるな」

そう言っってベッドからペタッペタッと音をたてて降り、自分の足で

立つ。

「空君！病み上がりなんだから安静にしとかないと倒れちゃうよ！」
「それは大丈夫そうだ。」
「なんか体が軽い」

軽くジャンプをしながら愛子に答える。
今なら風になれそうだ。
……走りてえ……。

ガガガガキキギギパキツピキツ

突如、聞こえてくる機械音。

「え？なんの音？」
「そ、空君、その足どうしたの？」
「足がどうしたん……あ、A・Tじゃねえか。いつの間に……」

足元を見るとそこにはA・Tがあつた。
心優しい誰かがいつの間にか俺にA・Tを履かせてくれたらしい。
ありがたや。ありがたや。

《思いの具現化かー。スゴいねー》

琥珀が優子の腕の中から布団に飛び乗り、俺の足元をみて言う。

「何それ？」
「『天使の力』^{テレスマ}の能力みたいなもののー」
「へえ。『天使の力』^{テレスマ}って便利だな」
「でも、ソレが壊れちゃうと『天使の力』^{テレスマ}が消費されちゃうからね

「」

「マジか……。気をつけねえと。
んじゃババアのところに行ってくるな」

あでゅー、と言って窓から外に飛び出す俺。

『空！ここ5階よ！！』

『空君！！』

病院内から2人の悲鳴が。

『と、飛び降り自殺だっ！！』

『きゃあああああああああ！！！！！！！！』

外からも悲鳴が聞こえる。

判断早すぎねえか？

それに自殺なんざするかよ。

「ふんっ！！」

ドツツパツ

地面に触れる瞬間に足で空気の『面』を叩きつける。
それにより俺の体は空を舞う。

『……飛んでる……』

誰かの眩き。

その眩きが引き金になり波紋のように広がっていく。

『飛んでるっ……!!』

『人が……飛んでんぞっ……!!』

ドッジャアアッ

着地。それと同時に独特なステップを踏む。

キュツ、キュキュツ パパパパッ

t r i c k : I k a r o s P t e r o n

ボツ、ゴアッという音と共に3対6翼の『炎』の翼が足元から吹き出す。

派手すぎたか？ま、気持ちよかったしいか。

「くうーっ!!なんか久しぶりって気がするな!!」

俺は1人伸びをしながらそう叫ぶ。

『……天使……?』

『お迎えが来たようじゃな』

『っ!？おばあちゃん!そんなこと言わないでっ!!』

『長いこと生きたんじゃ。お迎えが来ても不思議なことじゃないじやろっ』

『うう……おばあちゃん……』

『やっぱり私の病氣治らなかったんだね……。もつと……生きたかったな……』

『そんなことないわ!!手術すれば治るから!!絶対に治るから!』

！』

『お母さん、もういいの。……もう……いいの……』
『うう……命お……』

俺トリックの技を見たためか悲観的になっトリックている者が多数。

……なんかネガティブ振り撒いてね？

魅せるための技トリックがなぜにネガティブにさせる？

ゴオオオオオオオオオ

『きゃっ！』

突如、ネガティブsに突風が襲う。

その犯人はもちろん俺。

「テメエら！！下ばっか見てねえで『空』も見ろ！！
俯いてばっかで何が見つかる！！」

俺は天を指差して言う。

「テメエの心にはテメエの『翼』が生えてんだろ！！その『翼』で
羽ばたいてみるよ！！」

数人のネガティブsが顔をあげる。

「こんな腐った『檻』の中でそのまま腐って死んでくのか？

そんなこと俺は御免だね！！俺は俺の『翼』で『空』を飛ぶ！！
だからテメエらも『病気だ』『寿命だ』とちっせえこと気にしてね
えで『空』を目指せ！！
死ぬなら好きなことやってから死ぬ！！
以上！」

なんか支離滅裂だが言いたいこと言ったし別にいいだろ。生きるか死ぬかはそいつの自由だし。
んじゃババアのところに行くか。

学園長室

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン」

ノックをせずバーンと学園長室の扉を開ける俺。

「開けるときはノックしな。」

それで、何の用さね？」

「あー、俺の召喚獣新しくくれねえ？」

「それまたなんでさね？」

ババアが訝^{いぶか}しがる。

「俺の召喚獣が制御できなくなったから」

「そんな危険なモノをそこらへんにほっとくんじゃないよ！！」

「それについては大丈夫だ。優子と愛子が面倒見てるから」

「……どういうことさね？」

「召喚獣に自我が芽生えた」

「はあ……。アンタなにしたのさね？」

最近呆れられることが多い気がする。

「特に何もしてねえよ」

「なら、アンタの召喚獣一回バラしていいかい？」

ゴオオツ

突如俺の背後に炎を纏った銀色の狼の『影技^{シャドウ}』が現れ、肌をチリチリと灼くようなプレッシャーが放たれる。

「本気で言つてのか？」

「そんなわけないさね」

そんなことすれば酷い目にあうのはわかりきっていることだからね」

プレッシャーを物ともせず飄々（ひょうひょう）と答えるババア。

……食えないやつだ。

「で、どうなんだ？」

「考えておくさね」

「了承しねえのは、また同じようなことになったら困るからか？」

「それもあるさね」

「他に何があるんだ？」

「近いうちに『試験召喚システム』の設定を一新しようと思つていてねえ。」

今新しい召喚獣を作つてまた後で設定し直すのは面倒だから避けた

いところさね」

「あー……、なら一新してからでいいぞ」

「わかったさね」

「んじゃ俺は帰るな」

そう言っでドアノブに手をかけようとしたところでババアから声がかかる。

「ちょっと待ちな。アンタに1つ聞いとくけど課題はやったのかい？」

「課題……？」

なんかあつたか？

「停学処分と一緒に山ほど出てたはずさね」

「あー……なんかもらった気がする。」

でもFクラスレベルだろ？すぐ終わるだろ」

「おそらくアンタのだけは特別製さね。」

先生方がアンタには解けないような問題をつくるんだ、って躍起になってたからね」

……課題つて18cmくらいの束だったよな？それが全部クソ面倒な問題だと！！あと1日半しか時間ねえんだぞ！！

「ふざけんじゃねえっ！！」

「もし課題終わってなかったら補修時間プラス2時間らしいさね。せいぜい頑張るんだね」

そのニヤニヤした顔クソうぜえ。

「ババア！覚えてろよっ！」

俺はそう捨て台詞を吐くと病院へ帰っていった。

病院へ行っただのはまだ安静にしているとのことらしい。結構暴れたけど……。

追記。

飲まず食わずでやったらなんとか終わった。『天使の力』^{テレズマ}の影響が
疲れることがなかったのが唯一の救い。

俺の担当医が『精密検査を受ける』って言ってきたが俺は遠くを見て『やらなきゃいけないことがあるんだ……』って言ってやったら『背負ってるモノがあるんだな』って感動しながら帰っていった。
チヨ口いな、と思ったり思わなかったり。

さらに追記。

いつの間にか琥珀の身長が80cmに達していた。
ちっちゃい子ってこんなに成長早いのか？

バカと俺と天使の力（後書き）

3巻終了です。

原作のように区切ると変になりそうなのでここまで。

設定2（前書き）

空＋琥珀のみ

設定2

名前：宇童うどう 空そら

性別：男

身長：178センチ

体重：72キロ

容姿：母親似で西欧人風の顔つき。碧眼で少々たれ目、地毛が金髪（黒髪黒眼にならなかったのはご都合主義）で少々長め。

細身だが締まっているため体重重め。

利き腕：右

得意科目：数学、物理

特技：合気道（祖母直伝）、キックボクシング（祖父直伝）、A・エア・トレック
Tなど

道：獣の道（自称）
ロード・フェンリス

王：煉獄の王（自称）

二つ名：A級異端者 SSS級異端者 災害級異端者 ???（次

巻にて）

ストームライダー 暴風族・空を駆る者・魂を狩る者 ソウル・イーター

鋼の召喚術師・お盛んな雄犬フェンリル・キングオブSU KE BE・炎狼

部活：工学部

補足：父親は日本人、母親はイギリス人、姉が1人おり現在大学生
でイギリスに留学中。

半身が『天使の力』
デレスマ

現在、召喚獣なし

名前：琥珀こはく

性別：（？）

身長：81cm

体重：16kg

容姿：金髪碧眼の中性的な顔。基本的に空似、目はなぜか優子似。琥珀七不思議の1つ。

補足：約1歳。

半身が『天使の力』テレスマ
着替え可能

召喚獣だったときの名残かニット帽を被っている

設定2（後書き）

二つ名で記入漏れがあれば教えて頂けると幸いです。

バカと俺と2人の悪魔（前書き）

4 巻開始

バカと俺と2人の悪魔

停学明け

いつものように量産型GOKI Sをしばき倒し今は校門前。

「なあ、このまんまだと絶対なんか言われるだろ？
周りのヤツらにもチラチラ見られてるし」

琥珀を肩車したまま優子と愛子の2人に問う。そう、『琥珀』を肩車したまま。

家に1人でおいとくのはマズイだろ、ってことになって連れてきた。

「きっと大丈夫よ。みんな可愛がってくれるわ」
「そうだよ。琥珀君、可愛いし女子から人気でると思うよ」
《ファンクラブとかできちゃうかも》

頬に手をあてて俺の頭の上でくねくねしながら言う琥珀。
……言葉のキャッチボールが成り立ってねえ気がする。

「……学校で『パパ』とか『ママ』とか呼ぶなよ？」
「私は別にいいわよ？」

「優子はよくても俺はダメだ。
クラスのバカ共がぜってえ襲ってくる」

「そうかしら？」

「ああ」

『木下との子どもだと！？この異端者め！！』とか言って襲ってくるに違いない。

そうやって優子と話していると愛子も琥珀と話していた。

「ねえ、琥珀君。ボクも『ママ』って呼ばれてみたいかも」

《うーん……お姉ちゃんは『ママ』って言うより『お姉ちゃん』の方があつてるからダメなのー》
「うっ！！」

琥珀のその一言は思った以上に愛子には堪^{こた}えたらしい。
現に愛子は地面に手について頂^{うなだ}垂れている。

「うう……ダメージ大きいよ……」

「そんなこともあるだろ。ま、元気だせ」

ポンポンと愛子の背中を叩きながらそう言ってやるとちょうど明久の声が背後かかる。

『空あー！おはよーっ！』

まだ離れているためか叫ぶような形で挨拶をしてくる明久。

「愛子、立った方がよくねえか？スカート短えんだし明久に見られ

ちまっ

「うう……わかった」

そう言って愛子はふらつと立ち上がる。

いつもなら『心配してくれるの？なら、ほーれほーれ』とか言っ
てスカートをはひらひらさせるのにそれがねえとはかなり落ち込んで
な。

「この異端者め!!」

俺のところまで来た明久の第一声。

それなりに離れてたのに来んの早すぎだ。

「意味分かんねえこと言うんじゃねえ」

「しらばっくれるな!!その子は木下さんとの子どもだろ!!」

そんなことできるなんて羨ま　もとい妬^{ねた}ましい!!」

ゴオオオツ

突如、俺の背後から狼の『影^{シヤドウ}技』が現れ、肌をチリチリと灼くよう
なブレッツシャーが明久に放たれる。

「おい、よく俺の前で『優子を襲いたい（空の脳内変換）』なんて

ことが言えるなア？あア？

蠟人ぎよ　消し炭にしてやろうか？」

「ひいつ！？い、いやっ、そ、そんなこと言ってないよっ！！」

優子のことを『そんなこと』だとおお！！？？（空の脳内変換）

「お前は俺を怒らせた！！

死をもって償え！！」

「意味が
」

A・T殺法：宝玉砕き『Golden Crusher』
エア・トレック

ドスッ

何かが潰れたところじゃないような音。

ぶっちゃけA・Tで加速された秘技もクソもねえただのキャンタマ
エア・トレック
への蹴り。

「ふぬおおおおおおお！！！！

下腹部に謎の痛みがああああああああ！！！！？？？？」

明久の叫び声が響き渡る。

「フハハハハ！正義は必ず勝つ！」

小悪党っぽい高笑いをする俺。

「どちらかと言うと空君が悪の気がするよ？」「ぶっちゃけ悪魔よ
ね」

優子と愛子が何か言っているが気にしない。

《おーっ！『Golden Crusher』カッコイー！》

「おおっ！この良さがわかるか！

さすが俺の子だ！」

《パイエイ！》

「イエーイ！」

パンツと琥珀とハイタッチ。

肩車をしているため少々変な形になるがそれはご愛敬。あいぎやう

「うう……酷い目にあつたよ……」。

……それじゃあ、その子どうしたの？空のこと『パパ』って呼んでるけど」

早くも復活した明久が琥珀を見て俺に問う。

コイツなんでこんなに復活すんのが早えんだよ。

「お前に『パパ』なんて呼ばれたかねえ！」

「好きで呼んだわけじゃないよ！！

……それでその子本当にどうしたの？」

「あー……、この子は親戚の子」

琥珀、合わせてくれよ？

《琥珀なのー。よろしくねー》

「あ、僕の方こそよろしくね、琥珀ちゃん」

……前々から思ってたんだがコイツって男と女が見分けられねえの？

確かに琥珀は可愛らしいが纏っているオーラが男の子だと主張している。

「吉井君。琥珀は女の子じゃなくて男の子よ」

「ええっ！？こんなに可愛いのに！！」

「明久、お前に俺の子どもを会わせたくねえ」

変なことされそうだ。

「え！？空、子どもいるの！！」

「んなワケねえだろ！！未来の話に決まってる！！」

「必死になるところが怪しいです」

「うおっ！？」

不意に背後から声が聞こえて驚く俺。

「あ、姫路さん。久しぶりだね」

どうやら俺の背後から声を発したのは姫路らしい。
霧島並に気配を消すのが上手いな。

「皆さん、おはようございます。

それと、明久君、空君。お久しぶりですっ。

元気でしたか？」

「うん。元気だったよ」

「まあ……一応？」

すんなり答える明久に曖昧に答える俺。

俺はずっと病院のベッドの上だったしな。

「実は、その、明久君たちに謝らないといけないことがあるんです」
「え？どうしたの急に？」

「なんかあったか？身に覚えがねえんだが」

「強化合宿の初日なんですけど 覗き魔扱いしてごめんなさいっ」

姫路が腰を折って深々と頭を下げる。

「ほえ？……あ、いや、覗き魔扱いも何も、僕らは覗き魔そのもの
なんだけど……？」

「俺を含めんなコラ。一片たりとも覗いちゃいねえから」

「あ、いえ。そうじゃなくて、一番最初は誤解だったじゃないですか。」

その時、明久君たちを疑っちゃったから申し訳なくて……」

「あははっ。結局覗きをやったのに謝られるなんて、なんか変な感じだよ」

「別になんとも思ってたねえから気にすんな。」

それにしてもスネーク捕まったのか？」

「ええ、捕まったわよ」

「カメラがない、って言って発狂してたところを島田さんに見つか
って、尋問したらすぐに吐いたんだって」

「そうか。犯人が捕まってなによりだ」

ぶっちゃけ言って自業自得だし、なすりつけようとした相手が悪い
な。普通に選択ミスだろ。

そう考えていると姫路がもじもじしながら明久に尋ねる。

「あ、あの……明久君……」

「ん？なに？」

「そ、その……そこまでして、女の子の裸を見たいものなんで

すか……？」

「まあね」

軽くフツと笑って答える。

「『まあね』じゃねえぞ明久ア！！
ブツ殺されてえのか！！」

その明久の対応に再びゴオオツと狼の『影技』^{シャドウ}が現れ、肌をチリチリと灼くようなプレッシャーが明久に放たれる。

『優子と愛子の裸が見たい』（空の脳内変換）だと！！ふざけたこと言ってるじゃねえぞツ！！

「ひいつ！！い、今のは口が滑つ　　じゃなくてっ、こ、心にもない言葉が咄嗟に僕の口から……」

「嘘だったら消し炭にすんぞ！！」

「う、うん！」

首が吹っ飛びそうならい素早く頷く明久を見て姫路が言う。

「ふふっ。良かったです。」

明久君がきちんと女の子に興味があるみたいで」

「うぐ……」

も、勿論興味津々だよ！特に……姫路さんにはね！」

「え？……えええっ！」

明久の返しに一気に耳まで真っ赤になる姫路。

……イチャついてんじゃねえ、てか見せつけてんじゃねえよ。
自分がする分にはいいが人のを見るのは嫌だ。

「あははっ。冗談だよ。姫路さんが僕をからかうから仕返しを」

「……………いいですよ（ボソッ）」

「……………はい？」

「だから、その……………覗いても、いいですよ……………」

それを見て俺は優子たちと目で語る。

（姫路ってこんなに大胆だったか？）

（Fクラスの影響受けたんじゃない？）

（毒されたのか。もう手遅れだろうな）

心の最奥で手を合わせで南無南無と言っていると愛子から声（？）がかかる。

（そんな重病人扱いは酷いと思うよ？）

（そうか？じゃあなんて言えばいいんだ？）

（別に言わなくていいと思う）

……………確かに。

「えええっ！？何を言ってるの姫路さん！？大丈夫！？」

「覗いてもいいですけど、その代わり」

「そ、その代わり！？」

「わ、私を明久君のお嫁さんにして下さいね？」

それを聞きわたたと取り乱す明久。

《逆プロポーズ?》

「みんなが見てる前でするなんてスゴいね」

「結婚式には呼べよ? 恋のキューピッドの俺が祝福してやる」

「空がやったら大変なことになりそうよ?」

「大丈夫だ。やる時はちゃんとやる男だと自負してる」

そんな俺たちの会話が聞こえたのか姫路は必死に否定してくる。

「あ、そ、そういうわけで言っただけじゃないです!

た、ただ明久君をからかおうとしただけで……」

「本当にそうなの?」

「うつ……そ、そうですっ!」

「変に肘張らなくてもいいのよ?」

「うつ……」

「さつさと『好き』って言って楽になっちまえよ。ウケケケケ」

《そうだよー。早くしないと盗られちゃうよー?》

ウキヤキヤキヤキヤ》

『アキっ!』

俺と琥珀の中の悪魔が顔を出したその時、遠くの方から威勢のいい声がした。

……琥珀のイメージが崩れちゃうな。

「ん。久しぶりだね、美波」

「おー、久しぶりだな島田」

声のした方を向くと、元気に走ってくる島田の姿が見える。

「え？あれ？どうしたの？」

島田は妙に真剣な表情をしていて、それに戸惑う明久。

「美波ちゃん、どうしたんですか？」

その様子を見て姫路もキョトンとしている。

「アキ、目を瞑りなさいっ！」

「え？は、はいっ！」

お？グーパンか？それともパーか？

「……瑞希、ゴメンね……」

「え？なんですか美波ちゃん……？」

殴るのになぜ姫路に謝ったのかわからなかったが、その理由はすぐにわかることとなった。
俺の勘違いという形で。

《わああ、ちゅーしてるー》

そう、琥珀の言う通り島田が明久にキスをしているのだ。

島田が謝っていたのは、たぶん『先にキスしちゃうけどゴメンね』的なことだろう。

いつもの島田にあるまじき行為だな。

てかむやみやたらに『盗られちまうぞ』とか言つもんじゃねえな。
実際こういうのを見ると気まずすぎる。

「青春してるね」

「吉井君にも春が来たようね」

「青春うんぬんの前に修羅場だ。」

飛び火して来ないうちに学校に行かねえか？」

「そうね」

「わかった」

2人の了承を得て明久から素早く離れ学校へと向かった。

バカと俺と審問会

1F：廊下

学校に入り靴を履き替え現在各々のクラスに向かっている。

新校舎と旧校舎という違いはあるが、AクラスもFクラスも同じ3階にあるので途中までは優子たちと一緒に一緒だ。

「琥珀。俺とFクラスに行くか？それとも優子たちと一緒にAクラスに行くか？」

《うーん……パパというー》

「学校で『パパ』って……」

『呼ぶなよ』と言おうとしたが言葉を止める。

あー……、さっきおもった『パパ』って呼んでたし、もう『パパ』でいいか。

《どうしたのー？》

「いや、なんでもねえ。」

それで本当にFクラスに行くのか？Aクラスの方が快適だぞ？」

《いいのー。パパといたいからいいのー》

俺の頭にガシッと抱きついて琥珀が言う。

ぐおっ！？純度100%の言葉が俺を浄化するっ！！

「知ってたか？純粋な言葉って時には凶器になるんだぜ」

誰に言うワケでもなく呟いたその言葉は虚空へ消えていった。

Fクラス教室

『諸君。ここはどこだ？』

『『最期の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『宜しい。これより 2 - F 異端審問会を開催する！』

ガラガラッと扉を開けるとそこはサバトの会場だった。

量産型 G O K I s の真ん中には手足を縛られた明久と坂本がいる。
おそらく朝のキスの件で捕まったんだろう。坂本がなんで縛られているか分からねえが例のごとく霧島になんかされたんだろうな。

《いつもよく飽きないねー》

「それだけがアイツらの生きがいだからな」

『っ！？《神に背きし者》^{アボステイト}の宇童が来たぞっ！』

『捕らえる！』

『『『おおーっ！』』』

新しい二つ名が増えたな。

さっき倒したばっかなのに復活するのが早すぎる。

名実共にリアルGOKIになってきてんな。しぶとい。

『毎日ボコしやがって！死ねえっ！』

『木下や工藤とイイコトしてんじゃねえっ！』

『俺だつて宇童みたいにハーレムつくりたいんだよ！』

お前の願望なんざ聞いてねえ。

そもそもハーレムって言うほどの規模じゃねえ。

「うるせえ、黙ってる。

絶対不可侵領域『アイギス』！」

《わっ！？》

量産型GOKIsが襲いかかってくるが、俺は肩車をしていた琥珀を前に突き出す。

これで攻撃できまい。

『くっ！！確かに絶対不可侵領域だ』

『子どもを盾にするとは卑怯なり！』

「ハッ、お前らが女子供に弱いのはリサーチ済みだ。大人しくして
る」

『……………後ろがから空きだ』
「っ！？」

このしゃべり方は康太か！

襲ってくるやつはいないだろうと高をくくって余裕ブツこいていた
ら康太（確定）が襲ってくる。

そのため俺は素早く琥珀をおろし康太から距離をとろうとするが

『……………甘い』

「なっ！？」

《パパっ！》

小さく琥珀の悲鳴があがる。

俺はいつの間にか張ってあった縄に足を取られ体勢を崩してしまい、
そのまま縄で素早く手足を縛られる。

「クソが！解けねえじゃねえか！」

『……………観念しろ』

モゾモゾ動いて縄を解^{ほど}こうとするが解^{ほど}けない俺に康太は辛辣な言葉
を浴びせる。

そして俺を同じように縛られた坂本や明久のところまで引きずって
いく。

「え？あれ？どういうこと？」

俺が引きずられていくとちょうど明久が目覚めたようだ。
まだ覚醒しきっておらず状況が理解できていない様子。

「起きたか明久」

明久のすぐ近くに転がっている坂本が言う。

……なんかシニールだ。

「……雄二、何やってんの？それに空も」

「……お前の巻き添えだ」

「俺もお前の巻き添えってことにしとく」

忌々しげに吐き捨てる坂本に便乗する。
ひんじょう

「巻き添えって？」

「お前のせいで『寝ている間に翔子にキスされた』って話がアイツらにバレたんだ。」

「とんだ迷惑だ畜生」

「おー、ラブラブだな。」

「俺は優子と愛子とイイコトしたのがバレた」

「なんでバレたんだろうな？……不思議だ。」

「…………はい？」

「アホ面晒めくしてどうした？」

「皆大変だ！坂本 雄二・宇童 空両名共に異端者の疑いがある！
至急異端審問会の準備を始めるんだ！」

急に叫びだす明久。

「待て明久！お前、如月ハイランドの一件ではむしろキスさせようとしていなかったか！？というか、お前こそ異端者だろうが！」

「坂本の言つとおりだぞ。自分のこと棚の向こうにほっぽってんじやねえよ」

「2人共見苦しいよ！そうやって謂われもない疑いを僕にかけて自分の身を護ろうって魂胆だな！

その手は食うもんか！」

「こ、このバカ野郎が……！」

信じられないのならアイツらの言っていることを聞いてみる！」

「……………」

坂本の言葉を聞いて、明久は周りの声を聞くため耳を澄ます。

『 罪状を読み上げたまえ』

『はつ。 須川会長。』

えー、被告、吉井 明久（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第2学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。

甲の罪状は強制猥褻及び背信行為である。本日未明、甲が同Fクラス的女子生徒である島田 美波（以下、この者をペッタンコとする）に対して強制的に猥褻行為を働いていたところを我らが同胞が確保現在に至る。今後、甲とペッタンコの関係に対して充分な調査を行った後、甲に然るべき対応を 』

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『キスをしていたので羨ましいであります！』

『うむ。実にわかりやすい報告だ』

「……………」

なんのことかさっぱりといった感じで首を傾げる明久。
あまりのショックに記憶が飛んでいるようだ。

教えてやった方がいいよな？

「明久。お前は今朝、島田とキスしてたぞ。しかも俺や姫路のいる目の前で」

「ははっ。冗談はよしてよ空。だって、あの美波が僕なんかキスをするわけじゃないじゃないか」

「あんま自分を卑下するなよ？」

「明久。確かにお前は容姿学力性格が最低だが、それらに目を瞑れば甲斐性と財力が皆無というだけじゃないか」

「この野郎！言うこと欠いて僕の取り得は肩たたきだけだと！？」

「その歳で肩たたき！？反論するにしても他に何か取り得はなかったのか！？」

「雄二！バカにするにもほどがある！

僕の肩たたきはマッサージ機に劣る！」

「劣るのかよ！？」

自信満々に告げる明久。

嘘でも『劣らない』って言えよ。

「明久。お前にはまだ他に立派な取り得がある。それも人に誇れるほどのモノが」

「なっ！？このバカにそんなモノがあるのか！？」

「空！是非とも教えて！」

「それは」

「それは……」

「女装が似合うことだ」

「……」

俺がそう言つとシーンと静まり返る。

なんて言つた俺がダメーシ食らつてんの？

「……やっぱりそんなことだろうと思っただよ」

「似合っても秀吉には負けるだろ？」

「いや、本当に似合ってたぞ。秀吉並に『メイド服』が」

「ぶふっ！？そ、空！？どうしてそのことを知っているのさ！？
空はそのときいなかったはずだよ！？」

写真見たから知ってる、とは言わずに俺は続ける。

「そう言えばちゃっかりブラもしてたな」

「……本格的だな」

「空っ！バラすなっ！このっ、死ねえ！」

俺に飛びかかるうとするが手足を縛られたままなのでモゾモゾと動くだけに止まる。

「それでよ、ずっと気になってたんだがどこでメイド服なんて着たんだ？」

「そんなこと僕が言うわけじゃないか！」

「堅いこと言っでんじゃねえよ」

俺と明久が話していると坂本の呟きが聞こえてくる。

「……ん？メイド服……」

「坂本。なんか知ってんのか？」

「明久が最近バイトでメイド服着ていたな、つてのを思い出してな。確かに男子にしては胸がデカいとは思ってたが」

「雄二！貴様も黙れ！」

「明久、うつせえ。聞こえねえだろ。」

で、なんで着ることになったんだ？てかどこのバイト？」

「制服の数が合わなかったから明久はメイド服になった。
場所は『ラ・ペデイス』って言う駅前の喫茶店だ」

『ラ・ペデイス』ってのは美味い上に値段が手頃で文月学園生徒御用達の店。

俺も優子や愛子と何回か行ったことがある。

「あー、あそこか。

まだバイトの募集してんのか？」

「それはわからないな。見に行ってみたらどうだ？」

「ああ、そうする」

そう言い終わると俺は周りに意識を向ける。

俺たちが話していた間にももちろん審問会も続いているわけで。

『……………裏切り者には、死を』

そう言って静かな殺気を放っている康太が明久に写真をつきつける。

「おー、明久。ばっちり証拠が残ってんぞ」

「如月ハイランドにでも飾ってもらえ。俺が翔子にアイアンクローを食らっている写真より何倍もいい」

「……………」

しばしじつくりと写真を吟味する明久。

「ふむ。僕とよく似た男の子が美波によく似た女の子とキスをして

いるね」

「……コイツ何が何でも認めない気だな」

「島田が聞いたら泣いちゃうぞ？」

「ええっ！？これホント！？アレは夢じゃなかったの！？」

「夢だったら今こうして縛られるようなことはないんだがな」

「そ、そっか、それでこんなことになっているのか……」

島田とのキスを思い出したのか耳まで真っ赤になっていく。

そんな明久に坂本が尋ねる。

「明久。どうしてお前らはそんなことになったんだ？」

「そんなの、僕が聞きたいよ」

「そのスポンジのような頭でよく考えてみる。」

最近何か様子がおかしかったとか、どこかに思い当たるフシがあるんじゃないか？」

「うーん……」

坂本の問に考え込んでいるが答えがでてこないようだ。

「質問を変えよう。お前が島田と最後に会ったのは？」

「えっと……強化合宿の最後の夜かな？」

最後の夜……『夜』？

「今、『夜』って言ったか？」

「うん。皆が寝静まった後、美波がこっそりと僕のところに来たんだよ」

「はあ……なんでそれをおかしいと思わねえんだよ」

坂本も俺と同じように呆れ顔になっている。

「いや、だって、僕を殺しに来たものだと……」

……明久ってすんげえ鈍いよな。

「……それじゃ、夜に会う前には何を話していた？」

「告白みたいなことを言ってた」

「……島田が明久にか？」

「いや、僕が美波に」

「そんなことがあったのか……」

……ふう………

坂本が大きく息を吐く。

あ、なんか嫌な予感が。

「くたばれ！」

メリイツ

案の定坂本が明久の顔面目掛けて靴裏をめり込ませる。

俺は転がって緊急回避。

危ねえ、被弾するところだった。

「……っ！顔が……っ！顔の骨が陥没したような感覚が……っ！」

「なにが『わからない』だ！思い当たるフシだらけじゃねえかバカ野郎！」

のたうち回る明久を坂本がバカを見るような目で見ている。

「それでなんて言っただんだ？」

「……『雄二より好きだ』って」

「待て！お前の好きの比較基準は俺なのか！？」

坂本が心底嫌そうな顔をしてゴロゴロと転がって明久と距離をとるが量産型GOKIに蹴られまた俺らのところに戻ってくる。それを見ているとこの審問会の主催者らしき人物が告げる。

『異端者、吉井 明久。』

汝は自らの罪を悔い改め、裁きを受け入れるか？』

「あのさ、返事をする前に質問があるんだけど」

『聞いてやろう』

「裁きつて、何をするの？」

『まず、魔法の種と七色に輝く不思議な液体を用意し、そして不思議な液体を吉井にかけ、後は魔法の種をそこに落とすだけだ』

「魔法の種って何？」

『そうだな……、ヒントしか言えないがメラの使える種とだけ言うておこう』

メラの使える種？

「じゃあ不思議な液体は？」

『水を弾くという特徴がある』

水を弾く……疎水性の液体か？

油とかそうだな。

「水責めでもなさそうだし何なのかな？」

ま、危険そうじゃないしいいかな？」

……ん？油……。そっぴや光の反射でいろんな色にも見えるな。

「僕、吉井 明久は島」

なら、メラの使える種「火の魔法の種」火（の魔法の）種か……。ライターとかだろうな。

「明久。メラの使える種はたぶんライターとかの火種のことで、七色に輝く不思議な液体は油だ」

俺がそう教えてやると明久は言いかけていた言葉を無理やり修正する。

「国根性です！

僕ほど教義に順ずる信徒はいません！

だから火炙りだけはご勘弁を！」

なんだよ島国根性って。

「そうか。それならば、自白を強要するまでだ」

「言った！今いきなり『自白の強要』って言ったよ！？」

この裁判は無効だ！だから火炙りも無効だ！」

そう叫ぶが聞き入れられるハズもなく

『『『そうだ！自白を強要しろ！』』』

『『『議事録を改竄かいざんしろ！』』』

「ねえちよつと！皆ノリで言ってない！？」

普通こういう時は自白の強要が事実だと認めちゃいけないと思うんだけど！」

『ええい、灯油とライターを用意はまだか！』

「もう隠す気ないよね！？」

それに自白させる拷問もそれなの！？

どっちも処刑だよね！？」

『違うぞ吉井。罪を認めない場合は自白用と断罪用の2回があるから、1回分お得なんだ』

「騙されないぞ！そんな洗顔フォームの増量キャンペーンみたいな売り文句を言われても僕は騙されない！

雄二と空も何か反論しなよ！このままじゃ僕らは焼死体だよ！」

今まで空気だった俺と坂本に振る。

そう言われたら言うことは決まってるんだろ。

俺が坂本の目を見ると坂本も俺の目を見返し、そして頷くと量産型GOKISに向かって告げる。

「「てめえら……！やるならコイツだけをやれ！」」

「2人共……ありが　　違う！」

その台詞、よく考えると僕を売って自分だけ助かるうとしているだけじゃないか！

自分だけ良ければいいのかこのゲス野郎！」

『男らしいじゃないか坂本に宇童。』

そこまで言うのなら、お望み通り吉井をやってやる』

「気づいて！このままだと被害者は僕だけということに！」

明久が声の限り叫ぶが、盛り上がった雰囲気は収まる気配を見せない。

『では、灯油の手配が遅れているようなので、ここはひとまず吉井に《特別バンジージャンプ》をやらせてみようと思う』
「一応聞くけど、その特別バンジージャンプってどんなものの？」
『そうだな……、多くを説明すると吉井に余計な不安を与えかねないから、ヒントしか言えないが』

暗幕で閉ざされた窓を見るように顔を背ける。

『パラシュートのないスカイダイビング、とだけ言うておこうか』

「余計な不安も何もヒントだけで丸わかりだよ！
紐無し！？紐無しのバンジージャンプをやらせる気！？」

さすがにこれは可哀想だ。

「明久」

「え？何、空？」

「コレ使え」

そう言っただけ渡すのは白い固形物。

「……何コレ？」

「空を飛べるお薬」

「なんでこんなもの持つてるのさ！？」

「冗談だ。実はそれラムネだ」

てへ、舌を出して言う俺。

「……空は何がしたいの？」

……マジトーンはやめろ。俺のガラスのハートが砕け散る。
……本当は軽くて丈夫なプラスチックだが。

「明久。ならコレを使え」

そう言って今度は坂本が何かを手渡す。

「……輪ゴムでどうしろと？」

「足に巻きつけるといい」

「……あのね雄二。嬉しいけど、こんなもの1本じゃ僕の体重は支えられないんだよ？」

「俺をナメるなよ。それだけなわけがないだろ」

「え？ そうなの？ 疑って」

「もう1本用意してある」

自信満々にもう1本輪ゴムを取り出す坂本に絶句する明久。

「あのね雄二。本数の問題じゃないからね？」

明久が坂本にそう言うのと同時に朝のHRをしに鉄人がやってきた。

「はあ……停学明け早々、お前たちは何をやっているんだ……」

「あ、先生！ 助けて下さい！ 校内暴力です！ クラスメイトの虐めなんです！」

『違います！ これは学内の風紀を護るための聖戦です！』

吉井は不純異性交遊の現行犯なんです！』

そんなバカ共の言葉を聞いて、思いつき呆れ顔になりながら鉄人が告げる。

「あー……。なんでもいいが、お前たちは点数補充のテストは受けなくてもいいのか？」

強化合宿のせいで男子は全員点数がないに等しいだろう？。」

鉄人が言っているのは、試験を受けるための申請のこと。

普通の授業時間にテストを受けたい場合は、教師の準備があるため事前に申請が必要になる。

強化合宿では最終的にどの教科も入り乱れての死闘になったらしく、ほぼ全員が全ての教科の点数を消費している。そのため、点数の補充をするべきなのだが

「今はそれどころじゃありません！」

坂本と明久が言う。

『前の試召戦争からまだ3ヶ月過ぎていないためFクラスから試召戦争を仕掛けることはできない上に、最低設備のため攻め込まれる心配もない。そんな当面は使いもしないようなテストの点数より、今からの行く末の方がよっぽど重要な問題だ』という理由で2人は言ったんだろう。

ま、コイツらのことだし別にどうでもいいが『備えあれば憂いなし』って言葉を知らねえのか？

「やれやれ。お前らがそう言うなら構わんが……。」

とりあえず連絡事項だ。先週から行われていた試験召喚システムのメンテナンスだが、予定が遅れている。

教師も動員して推進しているが、明日までは終わりそうにもない。その間は試召戦争ができないので注意するように。それと宇童は子どもを連れて職員室に來い。以上だ」

言い終えると鉄人は教室を出て行く。

……まさかこんなに早く呼び出しを食らうとは。それなら誰か解ほどいてくれねえかな？

そう思うが量産型GOKIsは全員明久の方に意識が向いており解ほどいてくれそうにない。言っても解ほどいてくれるとは思われないが。

《僕が解ほどいてあげるー》

そう考えていると琥珀が量産型GOKIsの間を縫ってやって来てそう言う。

いい子だ。家に帰ったら飴ちゃんをあげよう。

「結構ガツチリ縛られてるけど大丈夫そうか？」

《うん！》

元気よく答えるところからともなく白いナイフを取り出す。刃渡り50cmほどの凶悪なやつを。頑張れば人を両断できそうだ。

《これでザックリ切るから大丈夫なのー》

擬音が怪しすぎる。

「お、俺の身まで斬るなよ？」
《任せてー》

そう言つてニコツと笑つた後、俺に向かつてナイフを斜めに振り下ろす。縄ではなく俺に向かつて。

ザシュッ

……あ、ありのまま今起こったことを話すぜ。

『俺は琥珀に頼んで縄を切つてもらおうとしたらいつの間にかまとめて俺まで斬られていた』

な、何を言っているのかわからねえと思うが俺も何をされたのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだ……。

イタズラだとか反抗期だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ……。

《パパー、別に痛くないでしょー？》

俺は自由になつた手で傷痕を押さえる。

ぐっ、痛くねえワケ……

「……あ、痛くねえ。てか傷がねえ。なんで？」

《コレつて『天使の力』^{テレズマ}からできてるから同じ『天使の力』^{テレズマ}持つてる人には効かないのー》

「あー、なるほど。」

てか、そうなら先にそう言つて欲しかった」

《ごめんなさい》

琥珀が素直に謝ると俺は琥珀の頭を撫でながら言う。

「次から気をつけような？」

《うん！》

「んじゃ職員室に行くか」

そう言つて琥珀を肩車して立ち上がると

『宇童が脱走を計っているぞ！』

『何っ！どうやって縄から抜け出した！』

『子どもがナイフで縄を切ったようだ！』

『ちっ、ひっ捕らえろ！』

量産型 GOKIS に気づかれる。

また、捕まつてたまるか！

そう思っていると扉がガラガラッと開いて誰かが入ってくるがそつちに気を回す余裕はない。

「こ、これは一体何事じゃ！？」

秀吉が来たらしい。

今朝は珍しく起きていなかったため、秀吉は置いて来た。

『木下。邪魔してくれるな。』

今我々は異端者である吉井 明久・坂本 雄二・宇童 空の3名の処刑を行うところなんだ」

審問会からただの私怨を晴らす会になっている。

「そうじゃったのか。」

しかし、雄二と空はわからんでもないが、明久は何をしたのじゃ？」
「よく聞いてくれた木下。」

異端者・吉井 明久はよりによって我らが聖域である文月学園敷地内で朝っぱらから島田 美波と接吻などという不埒な行為を」

ガラッ

量産型GOKIの口上の途中、耳まで真っ赤になった顔を俯けて足早に自分の席に向かう女子生徒・島田 美波が現れた。

『『『……………』』』

教室内が水をうったように静まり返る。

これは好機！

俺はスルツと量産型GOKIの間を抜けて廊下へと飛び出した。

バカと俺と審問会（後書き）

島国根性

他国との交渉が少ないため視野が狭く、閉鎖的でこせこせした性質。
（広辞苑より）

バカと俺と血の噴水

職員室

今は1時間目終わりの休み時間。

1時間目の始まる直前に行ったんだが『授業が終わってからまた来い』って鉄人に言われて追い返された。

折角量産型GOKIsから抜け出してきたのに鉄人の野郎適当に返しやがって。俺の努力を返せ。ま、それは置いといて。

「鉄人来たぞ」

《来たぞー》

俺の言葉を真似して琥珀が言う。

「……宇童。今日呼び出した理由は分かっているよな？」

「ああ、琥珀のことだろ？」

そう言って俺は琥珀を指す。

「その通りだ。」

それで、その子はどうしたんだ？」

「どうした、って親戚の子」

「それにしてお前に似すぎてないか？」

「昔から世話してたからな」

「いや、内面のことではなく外見のことだ。
お前の一族、って言うのも変だが国際結婚しているのはお前のところだけなんだろう？」

あー……そういやそんなこと言った記憶があるな。

「あー……最近国際結婚した人がいてな、その人の子だ」

「最近できたにしては大きすぎる」

「最近つて言ってもアレだぞ？去年だぞ」

「国際結婚うんぬんを聞いたのは去年の12月ごろだ。」

それ以降に国際結婚して子どもができたとしても、最低1年は過ぎないと足腰はしっかりしてこない。

肩車なんて普通はできるはずがない」

「……隠してたんだが実は俺の弟だ」

「それなら隠す必要はないだろう？」

「……まあ……そうだな……」

「なぜ言いよどむ？」

人に言えない理由があるんじゃないのか？」

「そんなもんはねえ」

「本当か？」

お前の子どもだったりしないのか？」

「ち、違いよ！？」

《僕、パパの子どもじゃないの？》

琥珀が悲しそうに言う。

くっ、そんなふうに言われたら

「違うなんて言えねえじゃねえか……」

無意識の内に呟いたことに気づかない。

『もしもし』

鉄人はいつの間にか電話をかけており英語で話します。

『宇童 空の親御さんですか？私は彼の担任の西村と言います。
彼のことで話したいことがあるのですが』

俺の親にかけたらしい。

英語で話しているところを見るとおそらく母さんと話しているんだろう。母さんは日本語が話せないワケじゃねえんだがな。
にしても英語上手いな。

体育だけの脳筋じゃねえんだなとも思わなくもない。
てかなんで電話をかけたんだ？

『はい、分かりました。それではお待ちしております』

そう言うつとパタンとケータイを閉じる。

「用は済んだし今日はとりあえず戻っていいぞ」

「あ？……ああ、わかった」

「それと琥珀君を今日1日保健室で面倒見てもらえばどうだ？」

そう言うつて琥珀を見るが

《やなのー！パパといるのー！》

朝と同じようにガシッと俺の頭にしがみつく。

知ってるか？純粹な言葉って時には凶器に（ry

「そうか……。それなら仕方ない。

宇童、しっかりと面倒見るんだぞ？」

「もちろんだ！

んじゃ教室に戻るな……。前に、朝に試験召喚システムをメンテナンス中って言ってたよな？」

「ああ、言ったな」

「ババアからは一新するって聞いたんだが？」

「学園長のことをババアと呼ぶな。

……。それで、今回はメンテナンスだけだ」

「そうか、わかった。

んじゃ教室に戻るな」

ひらひらと手を振ると今度こそ職員室を出て行く。
次の休み時間にババアのところに行かねえとな。

Fクラス教室

「だって、ウチはアキと付き合っているんだから」

シユカカカカツ（畳にカッターが刺さる音）

『『『 チツ』』』

俺が教室に入ると明久に無数のカッターが投擲されたところだった。

……見た感じでだが今の状況を説明しよう。

まず教室内にいるのは、窓側の俺の席付近で畳を返しカッターを防いだ体勢のままの明久と、そのすぐ隣に真っ赤になつた島田。そしてその周りに嫉妬の炎で燃え上がったFクラスの奴ら＋スネーク。俺が教室に入った時に聞こえてきた島田の一言が引き金になり明久にカッターを投擲したんだろう。

男の嫉妬は見苦しいだけだつてのにな。

てか、なぜスネークがここにいる？島田のキスの件がバレたのか？

「お、お姉さま……？付き合っているなんて、冗談、ですよね……？」

打ちひしがれたようによるめくスネーク。

島田は静かに首を横に振って答える。

「冗談なんかじゃないわ。ホントの話」

「そ、それじゃ、お姉さま。美晴の幻想だと思った今朝のキスも、本当に……！」

「……うん。」

だからね、美晴。

これからもウチの

「……が……から……（ボソッ）」

「『あくまでも』お友達として」

「……が存在するから……（ボソッ）」

スネークが何かを呟きながらプルプルと震えだした

「美晴、聞いてる？」

「男なんかが存在するからお姉さまが惑わされるんですーっ！」

と思ったら突然スネークが叫ぶ。

そして弾かれたように動き出す。

「この豚野郎を始末します！」

そして美晴が第2の吉井 明久としてお姉さまと結ばれるのです！」

そう言いながら明久に肉薄する。

「ちょ、ちよつと清水さん！？かなり錯乱してない！？

僕を始末したところで入れ替わることは難しいと思うけど！？」

「心配は無用です！」

極力身体に傷をつけないように始末した後、剥いだ皮を被って吉井

明久になりすまします！

日本昔話のタヌキさんもそうしていましたし完璧です！」

原点は可愛いがやってることがグロいな……。

「く……っ！助けてムツリーニ！」

清水さんを止められるのはムツリーニしかない！」

スネークの言葉を聞き本気でマズいと思ったのか、スネークの素早い動きに対処できる康太に助けを求めるが

「……………消しゴムのカスで練り消しを作るのに忙しい」

そう言いながらねりねりと静かに手を動かしているが、目は明久に

向かって飛び回るスネークのスカートを追っている。
さすが『ムツツリーニ』と呼ばれるだけのことはあるな。

「くそっ！万策尽き……っ！？空！？
空助けて！」

明久はようやく俺に気づき助けを求める。
「しゃあねえな。」

「スネーク、そこまでにしておけ」
「うるさいです！」

男なんてこの世からいなくなってしまうばいいんですっ！」

プランA『Word』失敗。

全然聞く耳持ってくれねえ……。ま、最初から聞くとは思っちゃい
ねえが。

んじゃ続いてプランB『Justice』。

「それは琥珀を見てもそう言えるのか？」

そう言って飛び回っているスネークを捕まえ琥珀を腕に抱かせる。
朝も言ったように琥珀は鼻屑目に見なくても可愛らしい。

こんな可愛らしい男の子を見てスネークはどう反応する気だ？

「……………」
《……………》

スネークは落ち着きを取り戻し琥珀をじっと見つめてから口を開く。

「……この娘になんの関係があるのですか？」

ん？『このこ』のところに違和感が。

「スネーク。もしかして琥珀を女の子だと思ってるか？」

「ええ、そうですが？」

……！？まさか豚野郎と同じ性別なのですか！？」

「ああ、琥珀は男の子だ。明久と同じにするのは癪だな」

「な……っ！？け、穢らわしいですっ！離れなさい！」

そう言つてスネークは琥珀を『抱きしめる』。

《きゅうっ》

「おい、スネーク。言つてることとやつてることが正反対だぞ」

「し、しょうがないです！

こ、こんな可愛い子豚ちゃんがこの世にいるなんて！」

プランB『Justice』はなかなか順調のようだ。

フツ、可愛い正義！

てか豚豚言つのやめろ。

「スネーク。琥珀を豚呼ばわりすんな。ま、俺と琥珀以外は豚で間違つてねえから今まで通りそう呼び続けろ」

俺がそう言つと周りがブーイングをするが無視。

「……それでだ、琥珀を見てまだ全ての男がこの世からいなくなつちまえばいいなんて思つてんのか？」

「うつ……そ、それでも男が抹殺対象なのは変わりません！

……ですが可愛い子には手を出しません。美晴はそんな子まで狩る

悪魔ではありませんから」

男を皆殺しにすることよりはよくなったが、子どもでも可愛くなければ抹殺するってことだよな？

ま、琥珀が無事だし赤の他人の子どもを心配する必要はねえ。

んじゃ次はなんて言おう？うーん……思いつかねえ。

なら適当でいいか。

「じゃあ、もし島田と女装の似合う明久との子が生まれたらどう思う？すんげえ可愛い子だと思うんだがスネークは興味ねえか？」

「そ、そうです！き、興味なんてありません！……というわけじゃないです……」。

……しかし！そんな理由でお姉さまとその豚野郎が付き合っていることにはなりません！」

……適当すぎた。

島田と明久の名前出すべきじゃなかったな……。

「とにかくその豚野郎は消えるべきです！

そして美晴はお姉さまと結婚して、生まれてくる娘にお姉さまの『美波』から一文字とって『美来』と名付けるのです！」

「待つんだ清水さん！

息子が生まれたらどうするんだ！」

「男なんかが生まれるのなら『波平』で充分です！

さあ、5秒あげます。神への祈りを済ませて下さい。

……1……2……」

「く……っ！」

明久が苦悶の表情になる。

……明久はどうでもいいとして子どもに『波平』はつけたくねえな。将来頭が寂しくなりそうだし。

「5」

「ちよつと待つて清水さん！今一気に5秒に飛んだよ！？」

「豚野郎うるさいです。ここでは美晴がルールだということを忘れないで下さい。」

「それでは消えなさい！」

「そんな理不尽な！？」

そして明久の死刑執行間近というところでスネークに話しかける者が1人。

《ねえねえ》

「はい、なんですか子豚ちゃん？」

琥珀の言葉にスネークはピタツと止まる。

《僕は琥珀なのー。だからお姉ちゃんも琥珀って呼ぶのー》

「っ……………！？」

何があつたのかわからないが明久を消すのを中断し、抱いていた琥珀を素早く床におろして琥珀から距離をとる。

《お姉ちゃんどうしたのー？》

「く……………っ！ち、近寄らないで下さい！」

《！！？……………うう……………ひっく……………パパあー》

急に大声をだしたスネークに驚いたのか琥珀が泣き出し俺の元へ駆けってくる。

「あー、よしよし。もう大丈夫だぞ。

おい、スネーク。大人気ないぞ」

琥珀をだっこしてスネークに言う。

「し、仕方ありません！

そんな純粋な子豚ちゃんに『お姉ちゃん』と言われては理性が崩壊しそうです！」

……知ってたか？可愛すぎるってのは時には毒になるんだぜ

「琥珀。スネークは『お姉ちゃん』って呼ばれるのが恥ずかしいから大声出しちまったんだってよ。

だから何度も呼んで馴らさしてあげねえといけねえっぽいぞ？」

「なっ！？美晴はそんなこと」

《ひつく……お姉ちゃんホント……？》

「うっ……」

《ねえお姉ちゃん……ホント……？》

「ち、違」

《うう……ひつく……》

「……本当です」

《ホント！？やたーっ！お姉ちゃん大好き！》

「くふっ……！？」

「おいスネーク！？大丈夫か！？」

突然スネークが吐血し、片膝を床について肩で息をしだす。
今度は純粋な言葉（ryの典型的な例だな。

「し、心配は無用です……」

《ホント大丈夫ー？》

「っ……！？（プシャァッ）」

床におろした琥珀がスネークに駆け寄り声をかけると、今度は康太
よろしく鼻血が吹き出だす。

量も康太と負けず劣らず。

「……お姉さま……美晴は……ここまでの……ようです……」

「美晴っ！！??」

「……憎き豚野郎……コレで終わりだと……思わないで……下さ……
い……（ガクッ）」

そう最後に言って力尽きるスネーク。

……茶番だな。

「島田。俺はスネークを保健室に連れて行ってくるな。

琥珀行くぞ」

《はいなー》

そう言って琥珀を肩車してスネークをお姫様だっこをすると

『宇童！貴様、木下や工藤だけじゃ飽きたらず清水にも手を出す気
か！』

『何ハーレム拡大しようとしてんだ！』

『……カチャカチャ
カチャカチャ
妬ましいが撮影準備』

康太を除く全員（明久含む）が両手にカッターを持ち構える。

「はあ……お前らが妄想してるようなことはしねえよ。
ただ単に保健室に寝かせるだけだ」

『清水と寝るだと!?!』

『子どもがいるというのにやる気が!?!』

『くっ!?!どこでも構わずやる、コレが宇童と俺らの差か……!』

『俺らにはそんな真似はできない……っ!』

負けを認めざるおえないか……っ!』

「自己完結しているとこ悪いが、そんな犯罪まがいなことしねえっ
て言っただけじゃねえか……」

『じゃあ何をする気だ!?!』

「何もしねえっての……」

『嘘をつくなっ!』

……こいつら相手にすんのクソ面倒くせえ。

そう思い俺は返事をせずに教室の扉の方へ歩いていく。

『宇童、貴様どこへ行く気だ!?!』

「……………」

『おい、答える!』

無視するとガシツと肩を掴まれ、俺は振り向かず告げる。

「……離せ。お前らの相手してっ時間だけが過ぎちまっ」

『答えたら離す』

「……離したら答える」

『いや、先に答える』

「いやいや、先に離せ」

『……………」

ガガガガキキギギパキッピキッ

「さあ、授業を始めるぞ。今日は遠藤先生は別件で外しているので俺がビシビシ　ん？宇童。清水を抱きかかえてどうした？」

「別にどうもしてねえよ。」

ただスネークが貧血で倒れたから保健室に連れて行こうとしてるだけだ」

「そうか。すぐに帰って来るんだぞ」

「了解」

そう返事をして教室から出て行った。

バカと俺と血の噴水（後書き）

鉄人が真つ先に『お前の子どもだったりしないのか？』と言ったのは『親戚の子じゃないなら宇童の子なんじゃないのか？』と考えたから。

空の弟だと信じなかったのは空の反応が変だと思ったから。というワケです。

バカと俺と保健室（前書き）

／（＊、・）ノ「保健室と聞いてエロいと思った人は拳手！」
（・・）（・・）（・・）（・・）

バカと俺と保健室

保健室

ガラガラ

「ヤブ。病人連れてきたぞ」

保健室に入って早々、椅子に座って本を読んでいる半黒髪の女性にそう投げかける。

彼女は養護教諭（所謂、保健室の先生）。

なぜ半黒髪と言ったのかというのを思ったのか彼女は髪の右半分を銀色に染めている。

ぶっちゃけ白髪にしかみえねえ。

「宇童君。『ブラックジャック』と呼んでくれと言っているじゃないか」

「あんたに『ブラックジャック』なんていう大層なあだ名はいらねえ。ヤブ医者の『ヤブ』で十分だ。

そんなことよりマンガなんか読んでねえで仕事しろ、この給料泥棒」

実はこの養護教諭、大のマンガ好き。

前に一度仕事中に堂々とマンガを机の上に広げて読んでいたためにそれを生徒にチクられ鉄人の手により廃品回収に全部縛って出されたという逸話がある。

その日以来どうやったらマンガを読んでいることがバレないかを研究しているようだ。

その1つが今しているマンガにブックカバーをつけて読むと言うこ

と。コレをすることにより見た目はちゃんとした本にしか見えない。本人はブックカバーのことを『神の彩色』、ブックカバーでの力モフラージュのことを『人の皮を被った神（ネ申k t k r）』と呼んでいる。

それで『人の皮を被った神（ネ申k t k r）』は何気にバレないらしい。

マンガにコレをして鉄人とすれ違ってもバレなかったと嬉しそうに話してくれた。

……マジで仕事しろ。

「はあ……仕方ないね。その娘は適当にそこら辺に転がしておいてくれないかい？」

「鉄人に言うぞコラ」

「宇童様！あの筋肉達磨を呼ぶのだけはご勘弁を！」

そう言っただけで土下座をするヤブ。

……プライドはねえのかよ。

「わかったから土下座なんてしてねえで働け」

「はい。」

それじゃ、ベッドに寝かせてあげて」

そう言われスネークをベッドに寝かせるとヤブが尋ねてくる。

「気になってたんだけど清水君はDクラスなのになんで宇童君が連れてきたんだい？」

「あー、それはスネークがFクラスで倒れたからだ」

「スネーク？……ああ、清水君のことだね。」

それって宇童君が『押し倒した』の間違いじゃないのかい？」

「んなことしてねえよ。」

純粹の塊にやられたただだ」

純粹の塊Ⅱ琥珀

名前つけてから黒いところが無くなったな。

「なんだいそれは？」

「琥珀のこと」

《はいなー。琥珀なのー》

裏表のない純粹な笑みを浮かべて自己紹介すると

「……………かはっ!？」

ヤブがスネークと同じように吐血をする。

……………耐久力ねえなオイ。

「大丈夫か？」

「……………なるほど。コレならあの清水君がやられたのもわかるよ。それにしてもなんてLOVELY FACEなんだ!！」

……………なんで英語なんだよ。無駄に発音いいし……………。

「お持ち帰りしていいかい？」

「『ブラックジャック』みたいに体中縫い目だらけにしてえんならいいぞ？」

冗談抜きで。

「……………仕方ない。止めておくよ。」

それで琥珀君は宇童君にそっくりだけでもしかなくても宇童君の

子どもかい？」

《そうなのー！》

俺が答える前に琥珀が即答。

コイツにしゃべったらパンデミック並に広がっちゃうー！

「ちょっ」

「なるほどー！子連れ番長か！」

「いや、話」

「もしかして、悪魔の験があるのかいー！」

「だから、話聞」

「『スーパームルクタイム』とかできるんだろー！」

.....。

「なあなあなあ」

「しつこいぞこの厨二ー！」

「なっ！？ワ、ワタシのことが中学2年生に見えるのか！？
眼科に行くことをオススメするよー！」

「テメエは耳鼻科に行けー！」

はあ.....疲れる.....。

「ヤブ。今日のことは絶対言いふらすんじゃないぞ？」

「今日のこと？」

「琥珀が俺の子ってこと」

「ええー。どうしようかな？」

.....。

「あー、もし広がってたら鉄人に言わねえといけねえことがあるかもしれないな。マンガのことか」

俺はわざとらしく呟く。

「く、口が堅いと噂されるこのワタシがそういうことを言いふらすわけがないだろう！

だから！だから、あの筋肉達磨には『本当』に何も言わないでくれ！！」

「大丈夫だ。広がってなかったら言わねえよ」

誰が広げようと鉄人に言うつてことだがな。

ハッ、人の弱みを握るってのはなかなか気分がいいな。

フハハハハハハッ！

「んじゃ、そろそろ戻るな。スネークのこと頼んだぞ？」

「職務を全うします！」

シュバツとヤブが敬礼したのを見ると俺は保健室から出て行った。

Fクラス教室

『 “ I wish I were a bird.” これは仮定法過去という 』

扉越しのためか鉄人の声がくぐもって聞こえる。
ちゃんと説明しているところを聞くと脳筋じゃねえらしい。

ガラガラ

「つまり お、宇童帰ってきたか。ならすぐに席に着け」
「了解」

「つまり直接的な日本語訳は」

俺を席に座るよう促した後、鉄人は説明を続け出す。
それを気にせず俺は自分の席へと向かい座ると島田が話しかけてきた。

「あ、宇童。美晴の様子はどうだった？」

「まあ、大丈夫だと思っぞ。

それにしてもなんでここにいった？」

本来俺の隣には明久しかいないハズなのに島田がプラスされている。
マジでなんで？

「宇童たちが停学処分を受けてた先週に美晴と色々あって使いにくくなっちゃって……」

「あー、なるほど。

でも狭くねえか？密着してるし」

「み、密着って……！？

じゅ、授業を聞くためには同じ側に座らないと駄目でしょ！？」

……島田も島田で隠すの下手だよな？

「本当のところは『明久の隣になれて嬉しい』と」

「そ、そんなこと一言も言っていないでしょ!？」
「でも明久と付き合ってたんだろ？」

朝の明久の様子から言って島田の勘違いだとは思うが。

「え、あ、そ、そうね……」

「んでいつ告ったんだ？」

「え？えーっと……それは……合宿のときに……アキから……」

いつもの強気な性格が嘘のように消え去りもじもじしながら島田が告げる。

恋は人を変える、とか聞くけどマジで変わってんな。女の子らしくていいと思う。

でも勘違いだつて知ったらすんげえショックだろうな……。

…どうにかできねえかな？

「宇童、どうしたの？」

「あ、いや何でもねえよ。」

俺は島田のこと応援してるからな!」

「へ？あ、うん！ありがと！」

「宇童、島田！私語は慎め！」

小声で話していたというのに鉄人に注意される。

「宇童。ごめんね」

「お互い様だ」

島田が手を合わせて謝ってきたので俺は『気にしてない』という意味を込めて微かに手を振る。

そして、俺は意識を島田から琥珀に移し、尋ねる。

「琥珀。膝の上に乗っとくか？」

《そうするー》

そう返事をする。『よししょ』と言って肩から降り、トテトテ歩いて俺の膝の上までやって来て座る。

「授業中は暇じゃねえか？」

《パパと一緒にだから大丈夫なのー》

「そうか」

純粹な言葉にもだいぶ慣れてきたな、と考えていると隣の明久の方から

「ひあつ！」

と肺から空気を絞り出したような声が聞こえてきた。

「あ、ごめんねアキ」

「い、いや、別にいいけど……」

島田の尻尾ポニーテールが明久の首筋に触れたらしい。

《パパー。お馬さんの尻尾みたいだねー？》

「まあ、ポニーテールって言っくらいだしな」

「ひあつ！」

またしても明久から悲鳴が。

今度は島田が自分の髪の毛を片手に楽しげな表情をしている。先ほどのが偶々であれば、今回ののはわざとのようなようだ。

「アキつてば『ひあっ！』って。変な声」
「く……っ！！コイツで美波に仕返しを」

そう言つて筆ペンを取り出すが

サワッ

「ひあっ！」

先に島田に攻撃される。

これで3度目だ。いい加減聞き飽きたな。

《おーっ！！パパ、僕もあの髪型してみたいー！》

「わかった。ちょっと待ってるよ」

島田の尻尾に興味を持ったのかそう言ってきたので、ニット帽を取り肩辺りまである琥珀の髪を結ってやる。
優子に似たのか髪質が良い。

「これでどうだ？」

《おおーっ！？》

感動しながらブンブンと首を振り尻尾でペシペシと俺を叩いてくる。

「琥珀。首が痛むからあんまりしない方がいいぞ？」

《あ、うん！わかったのー！》

そういう琥珀とのやりとりをしていた間にも島田と明久のやりとりが続いており

「ず、ズルいぞ美波！今度は僕の攻撃のはず！
邪魔はナシだよ！」

「そんなもの用意されたら邪魔するに決まってるでしょ！？
思いつきりインクがつくじゃない！」

そう言つて島田に手をパシッと叩かれ筆ペンを落とされる明久。
オイ、畳が汚れるだろうが。

「僕の攻撃手段が……っ！

くそっ！それなら美波の髪を使うまでだ！」

「ちょ、ちよつと！？」

明久に掴ませまいと髪を押さえる島田の頭に明久は手を伸ばす。

程なくして島田の束ねられた後ろ髪は明久の手中に収まつたが一向
に反撃する気配を見せない。

その様子を訝しんで島田が明久の顔を覗き込む。

「……あ、アキ？どうしたの？」

「……………なる

ほど。ツラか……」

「アンタ何言つてんの！？」

明久は申し訳なさそうに手を引く。

「こらあっ！物凄い誤解したまま手を離さないでよ！
きちんと触つて確かめなさいよね！」

そう言つて島田は頭の後ろに手をやると、スルツとリボンを抜き取る。

そしてその直後、束ねられていた柔らかそうな髪の毛が宙に広がる。陽の光を受けて流れるそれは、まるで絹のように艶やかで銀細工のように煌びやかだった。

ま、優子には負けるがな。

愛子の髪は少々傷んでいるが、それは水泳部の宿命だろう。しゃあねえ。

「これでもきちんとして入れをしている自慢の髪なんだからね！
ヅラ扱いなんて冗談じゃないわ！
触つて確かめてみなさいっ！」

「ごめん、美波。僕の誤解だったよ」

「？怪しいわね。本当にちゃんとわかつたの？」

そう言つて島田は明久に疑わしげな視線を送る。

「もちろんだよ。いくら僕でも、その、こんな………を作り物と間違えたりはしないよ」

「こんな、何？」

「そ、その……、こんな、綺麗なものを……」

「……え……？」

……見せつけてくれるな。

こんなことしたらFクラスの奴らが

『『『もう我慢ならねえーっ！っ！』』』

案の定Fクラスの奴らが暴走しだす。

『さつきから見てりゃあ、これ見よがしにイチャイチャしゃがって
！』

『殺す。マジ殺す。絶対的に殺す。魂まで殺す』

「……お姉さまの髪な触るなんて……八つ裂きにしても尚、赦され
ません……！」

『出入りを固めろ！ここで確実に殺るぞ！』

全員がカッターを構え一斉に投擲モーションに入る。

ついさつき貧血で倒れたスネークがもう復活してやがる。

お前は自分の教室に帰れ。

「全員カッターの投擲終了後、間髪入れずに卓袱台を叩きつけるの
ですっ！」

決してお姉さまと子豚ちゃんに当たらないように注意するのですよ
っ！」

『『『了解っ！』』』

スネークはさりげなく琥珀にも気を配る。

俺については何も言わないところを見ると俺も潰す気らしい。

恩を徒で返すとはこのことだな。折角保健室まで運んでやったって
のに。

「お姉さま！早くこちらに避難して下さい！」

そんな豚野郎と一緒にいると危険です！」

「清水さんいつの間に……！」

しかも皆どうして清水さんの言うことを聞いて卓袱台まで構えてる
の！？

クラスメイトを大事にしようよ！」

「美晴、まだウチのことを諦めてくれないの？」

こんなこと続けても、お互いツラいだけなのに……」

「お姉さまはその豚野郎に騙されているだけなんです！
お姉さまのことを本当に想っているのはこの美晴以外」

「お前ら！今は授業中だぞ！！」

言い争う明久たちに、とうとう鉄人の一喝が入り教室が静かになる。
鉄人の怒声の効果は抜群だが琥珀が泣きそうだ。

大丈夫だぞ。よしよし。

「清水。授業はどうした？」

「そ、それどころじゃありません……！お姉さまが」
「清水」

低い声で静かに名前を呼ぶと、それだけでスネークは押し黙る。

「大人しく自分の教室に戻れ。それと、この教室への出入りを禁止する。」

わかったな？」

「……わかりました」

不承不承といった体でスネークが教室から出て行く。

その時、明久を親の敵のように睨みつけていた。

……スネークが変なこと仕出かさねえといいがな。

「お前らも授業中に遊ぶんじゃない。そういうことは休み時間にやれ」

ガタガタカチャカチャ

鉄人に言われた通りに卓袱台を元の位置に戻し、カッターをしまう
バカ共。

こうして、この場は事なきを得た。

バカと俺と鬼ごっこ(前書き)

真のツンデレが姿を現す!!

バカと俺と鬼ごっこ

学園長室

「ババア、召喚獣くれ」

「入って早々になんだいアンタは。」

それは一新してからだって言ったださね」

「メンテナンスも一新するのも大して変わらねえだろ？」

「変わる変わる、大変わりさね。」

そもそも一新するってことは大半をプログラミングし直すってことだよ。それなら1体だけ新しく作るよりもまとめてした方が手間がかからなくていいに決まってるさね」

「……そういうもんか。」

てかなんで今の時期にメンテナンスしてんだ？ いったそのこと一新すりゃいいだろ」

「そうはいかないさね。」

まずは問題を洗い出さないとイケないよ」

「それなら今までのデータを見りゃ済むんじゃないのか？」

「2年になって早々アンタたちがドンぱち騒ぎを起こしてくれたおかげでデータを整理するのも一苦労さね」

「……………悪い。」

でもなんでそれがメンテナンスに繋がるんだ？

一新してからの方がすぐ見つかるだろ？」

「わざわざ問題点を見つげるためだけに一新するなんて時間の無駄さね。」

それならメンテナンスで全ての数値をある一定の値に揃えて、そこからの変動を見る方がいいさね」

「あー、なるほどな」

確かにその方が効率的だな。

けどこの調子だと一新までどれだけ待たねえといけねえんだ？

一向に俺の召喚獣が手に入る気配がねえんだが。

そう考えているとババアが琥珀のことを尋ねてきた。

「それはそうとその子が自立した召喚獣かい？」

「あ？……まあ、そうだが」

俺がそう答えるとババアはじつと琥珀を見だす。

すると琥珀はババアのことを気になったのか自己紹介をする。

《琥珀なのー。おばあちゃんよろしくー》

「ほう、これは本物の人間みたいさね」

「そりゃ人間だからな」

俺の体の半分からできてるしな。

「琥珀ちゃん。私は藤堂 カヲルだよ。好きに『おばあちゃん』って呼びな」

そう言っただけいつものババアにあるまじき笑顔。

子どもに好かれそうな柔和な笑顔だ。

それに男の子だとわかった上で意図的に『ちゃん』付けをしているように思える。

後、好きに呼べって言う割には『おばあちゃん』1択だけらしい。

にしても、ババアのビグザム装甲（錆びついた心の扉）をこじ開けるとは……。

琥珀、恐るべし。

「それで人間って言うのはどういう意味さね？」

「どういう意味ってそのままの意味だが？」

「この子は0と1の羅列じゃないってのかい？」

「ああ。」

飯食うし風呂も入るし寝もする普通の人間だ。あ、ちゃんと成長もすんぞ」

「……アンタの周りにはオカルトがありふれているように思うさね」

「あー……俺もそう思うな。」

ま、今日来たのは召喚獣のことだけだからもう教室に戻るな」

《おばあちゃん、ばいばーい》

「はい、ばいばい、琥珀ちゃん。好きな時に来るといいさね。」

今度はお菓子を置いておくよ」

《わかったのー》

ババアの言葉に琥珀は元気よく返す。

……ババアのデレ具合が半端ねえ。

Fクラス教室

俺が学園長室から戻ると、坂本・明久・秀吉・康太の4人が坂本の席で顔を突き合わせて何かを話し合っていた。

「お前ら真面目な顔して何やってんだ？」

「む、空か。丁度いいところに来おつたな」

秀吉が俺にも座れといった具合に坂本の前の席を空けてきたが、元々俺の席だ。

そんなことを考えながら席につき、琥珀を膝の上に乗せて話を切り出す。

「んで、何やってんだ？」

「明久のせいで面倒なことになりそうなんだよ」

「……ん？僕のせい？」

何が起こっているのか分からないといった表情で首を傾げる明久。

「明久のせいってのは島田関係か？」

「正解じゃ」

「……… Dクラスで試獣戦争を始めようとする動きがある」

「試獣戦争？Dクラスが？」

別にDクラスがBクラスに攻め込んでも僕らに関係ないんじゃないの？」

……俺が『明久の島田関係』って言ったのを聞き逃したのか？

間違いなくDクラスは俺らFクラス狙いだろっな。

「お主の言う通り、Dクラスの目的がBクラスであれば問題はないのじゃが……」

「え？違うの？」

だとすると、まさかAクラス狙いとか？」

……コイツの頭涌いてんのか？

「それなら坂本が『面倒なこと』なんて言うワケねえだろう」

「だとしたら、まさか……」

「……………（コクリ）。Dクラスの狙いはこの教室、Fクラス」

「えええっ!？」

だって、僕らはまだ試召戦争をする権利は無いはずだよな?」

「『Fクラスから他クラスへ試召戦争を申し込む権利』が無いだけで試召戦争をする権利がないワケじゃねえ。

だから申し込まれたら応戦しねえワケにはいかねえよ」

「けど、僕らの最低設備のFクラスなんだし、攻めてくる相手なんていないはずじゃないの?」

「だからさっき言っただろ?」

『お前のせい』で面倒なことになりそうだと」

「明久よ。相手はDクラスじゃ。」

思い当たるフシがあるじやろう?」

「……………もしかして、清水さん?」

「もしかしくなくてもスネークしかいねえだろ……………」

はあ、と溜め息が漏れる。

「やってくれたな明久。」

お前が島田とイチヤついでくれたおかげで、ヒートアップした清水はDクラスの連中を巻き込んで俺たちに八つ当たりをするつもりだぞ」

「そ、そんな!僕は全然そんなつもりは……………!」

「じゃが、お主にそんな気はなくとも清水はそうは思っておらん」

「大方、明久と島田の席を離す為に卓袱台をみかん箱にする気だろうな」

ま、俺は卓袱台でもみかん箱でもどっちでもいいが。

「け、けど、Dクラスだって全員が乗り気なわけじゃないでしょう？
そんな目的でクラスの皆が関わる戦争をするとは思えないよ。」

Dクラス代表だって反対するんじゃないかな」

「そこで今の状況が問題になる。」

空を除き、今俺たちは例の集団覗きの主犯だ。

普通の女子は皆俺たちにいい感情を抱いていない。

むしろ自分たちの手で罰を与えたいと考えているくらいだろうな」

「お主の知つてのとおり、Dクラスの代表は男子生徒じゃ。」

今の覗き犯扱いのような状況では発言力は皆無じやろう。

怒りに燃える女子一同と嫉妬に燃える清水を抑えきれるとは思えん」

「そ、そんな……。」

……雄二、攻め込まれたら勝つ自信はある？」

「そうだな……。うちのクラスの連中は朝からの騒ぎのせいで点数を補充できていないが、空が最初から飛ばして闘^やってくれば勝てる見込みはある。」

姫路もいるし最低でも引き分けに持ち込めるだろう」

「そっか。なら安心」

「悪いが俺は今召喚獣ねえから」

明久が言い切る前に俺は告げる。

こんなことになるんなら無理言つてでも作ってもらったよかったな……。

「……」

「お前ら急に黙りこくってどうした？」

ア水面まで晒して。

「空。よく聞こえなかったからもう一度言ってくれないか？」

「あ？よく聞いとけよ。」

ゴホン……ンツンツ、……今召喚獣ねえから」

声の調子を整え爽やかな笑みとともにそう告げる。

「……今『召喚獣がない』と聞こえた気がするんだがお前らはどうだ？」

「……聞こえたね」

「……聞こえたのじゃ」

「……（コクコク）」

「……ふう……」

お、コレは朝のパターンか。

「くたばれっ！」

案の定俺の顔面に向けて坂本のパンチが放たれるが甘いな！

ガンッ

坂本のパンチが俺の顔面ではなく額に当たるように調節し、坂本の拳が俺の額に接触すると鉄板を殴ったような音が発せられる。

「ぐお……っ！？お前頭に何仕込んでるんだ！！」

「フッフ、こんな事もあるのかと『頭蓋骨』を仕込んでいたのだ！！」

クワツと目を見開いてネタバラシ。
ネタもクソもねえとか言っちゃダメだぞ？

「なるほど！」

「……………手強い……………！！」

「おおっ！？そんな秘密兵器があつたとはの！！」

《おおーっ！？パパすごい！！》

「D A R O？」

そう言つてニヒルな笑みを浮かべると坂本がまだ痛む拳をさすりながら言う。

「くっ…………、お前らバカだろ」

「オイ、琥珀のことをバカとか言うんじゃねえよ」

この可愛らしい容姿のどこにバカの要素があんだよ？

「その子どものことじゃねえよ。そこのバカ3人のことだよ」

「お、そうか。なら許す」

「それで話を戻すが、空が無理だと言うのなら苦しいな。
さつきも言つたようにクラスの連中は点数を補充できていない。

その上まともに戦えるのは姫路と島田のわずか2人だけ。

余程のことがないと勝ち目はない」

「今の状況じゃと戦力は女子のみということじゃからな。

ワシらのFクラスに女子は2人、Dクラスには20人以上。

いくら姫路がおるとしても戦力差は歴然じゃな」

「空が戦えないのは相当キツいんだね」

「ああ、そうだな。」

つてなワケで、今回は戦争を回避する方が賢明だな。

勝ったとしてもDクラス程度の設備じゃあまりメリットが無いし、折角貸しがあるクラスをわざわざ敵に回すこともないだろう」

「え？回避できるの？」

「お前と島田次第だけだな」

そう言つて坂本はあたりをキョロキョロと見回し始めた。

「坂本、どうかしたのか？」

「ああ。島田が近くに居るかと思つてな」

「美波ならさつき姫路さんとどこかに行ったけど」

島田を探していた坂本に明久が言う。

明久のことを話に行ったのか……。てことは

「修羅場だな」

「うむ。修羅場じゃの」

「……………（コクコク）」

「……それより明久、1つ確認しておきたいことがある」

「ん？なに雄二？」

「島田とお前は付き合っているのか？」

「僕の記憶だと、付き合つてはいない、と思う……………」

やっぱそうか……。

「じゃが、島田の態度は明らかに付き合っている者のそれじゃぞ？」

「うん。それは多分、僕の送ったメールが原因で」

説明が長いのでまとめると
始まりは強化合宿の夜

送信者：須川

【気になったんだけど、お前はなんで覗きにそこまで必死なんだ？
そもそも本当に女が好きなのか？

坂本や木下の尻が好きだって言っていた気がするんだけど】

このメールに対し

【勿論好きだからに決まっているじゃないか！
雄二なんかよりもずっと！】
と送ったが

【メール送信完了……

島田 美波】

という具合に島田に送ってしまい、弁明する前に不慮の事故により
ケータイは大破。坂本のケータイで弁明しようとするも登録されて
いたアドレスは霧島のみ。
その後もずっと弁明できずに今に至る。

「なるほどのう。明久も明久じゃが……雄二、お主も素晴らしいタ
イミングでやらかしてくれたものじゃな……」

「全くだよ雄二。腹を切って詫びるべきだよ」

「う……。まあ、確かに悪かった。すまん明久」

「……………けど、そもその原因は明久の確認不足」

「うっ。確かに」

「だが、誤解だというのなら話は早い」

「え？何が？」

「Dクラスとの試召戦争の話だ。」

島田の誤解を解いてお前らがいつもの姿に戻れば清水もおとなしくなるだろう。

そうすればDクラスは俺たちに不満はあっても、開戦するほどの意気込みがある核がいなくなって、戦争の話は流れる。

俺たちはいつもの日常を取り戻して万事解決というわけだ」

「でもよ、島田はあんなに嬉しそうなんだぜ？」

誤解でした、って終わらせるのに俺は納得いかねえ」

「空。夢は覚めるモノだ。」

遅かれ早かれどうせ誤解だということは伝わる。

それなら早い内に知った方が傷つかなくて済むだろう？」

「そうかもしれないけど」

「あ、あの、明久君っ！

聞きたいことがありますっ！」

俺が坂本と言い合っていると突然教室の扉が開き、姫路が駆け寄ってきて告げる。

普段おっとりしている姫路にしては珍しい剣幕だ。

「え？な、なに？」

「そ、その……っ！あ、明久君は……美波ちゃんに告白したんですか……？」

徐々に尻すぼみになっていく姫路の声。
だが何が言いてえのかは理解できる。

「え、えっと……それなんだけど……」

「姫路、その話なんだが、島田も一緒の方がいいだろう。」

どこにいるかわかるか？」

言いよどむ明久に坂本が会話に割って入る。

「美波ちゃんなら、さっきまで一緒に屋上にいましたけど……」

「よし。それなら俺たちも屋上に行くか。」

ここで話すのもなんだしな」

「そうだね。姫路さんには往復になっちゃって申し訳ないけど」

「あ、いえ。私は全然構いませんので」

「んじゃ、行くか」

坂本がそう言うのと全員席を立つ。

いつの間にか眠っていた琥珀をだっこして俺も席をたち屋上に向かう。

屋上への道中

「明久。どうするつもりなんだ？」

「どうするもなにも誤解だったってことを言うつもりだよ」

それだけか？

「……なあ、明久。お前がもし好きな人に告られたでしょう。」

だがそれは偶然が重なってできたただの誤解。

それをその相手から『誤解だったのごめんねー』って言われて、

はいそーですか』って笑って引き下がるか？」

「急にどうしたの？」

「いいから答えろ」

「え、うーん……引き下がれない、かな」

「そうだろ？」

もしそんなことになってそれをお前はどっ感じる？」

「……胸がキュツとなるようで苦しい」

「ソレが今から島田が味わうかもしれない気持ちだ。

お前の返答次第では島田を傷つけることになる」

「で、でも戦争を回避するにはコレしかないんだよ？」

「戦争なんてどうでもいい。

問題なのはお前が島田をどう思ってるかだ。

島田が明久のことを好きなのは知ってるんだろ？」

「……うん、なんとなくだけど」

「なら、それにきちんと答えてやれ。

屋上では島田と2人つきりにしてやるから」

「……わかった」

明久は一度頷くと決意の籠もった目で俺を見る。

「んじゃ誠心誠意尽くせよ」

ポンと背中を軽く叩きいつの間にか止まっていた足を再び動かし屋上に向かう。

屋上に続く扉を開くと、その向こうには晴れ渡る青空と、その下に静かに佇む島田＋坂本たちがいた。

「お、やつと来たか」

「ああ、ちよつと明久と話しててな」

「ねえ、雄二」

明久はさっき俺が言ったことを実行に移すためか早速切り出す。

「僕と美波の２人つきりにさせてくれないかな？」

「それまた急にどうした？」

「坂本。ここは深く考えずに２人つきりにさせろ」

「……絶対Ｄクラスとの戦争を回避しろよ？」

「……それは約束できない」

坂本はしばし考え込んだ後に妥協案を告げるがそついうのは気にすんなと言つてあるため明久は頷かない。

「は？それは　もがっ！？」

「いいから２人つきりにさせてやれ。」

お前らも来い」

「え、でも」

「来い」

「……はい」

俺は坂本の口を手で塞ぎ、姫路たちも含めて屋上から強引に去らせ

て行く。

扉を閉じる時にチラッと見てみると屋上に残ったのは島田と明久の2人だけ…… +琥珀。

…… あ？今幻覚が見えた気がするな。

ゴシゴシと目をこすつて再び明久たちの方を見るとやはりそこには琥珀の姿が。

そついや右腕にあつた温もりが今はねえ。

ダッ

俺は閉じかけていた扉を開き、島田と明久の間にいる琥珀に向かって疾走。

「琥珀！教室に戻るぞ！」

《きゃー！パパが鬼ねー》

そう叫びながら俺から逃げる。

琥珀の中では鬼ごっこということになっているらしい。

ハッ、面白い！

子どもは大人には適わねえってことを教えてやる！（明久のことが忘却された瞬間）

「琥珀。今捕まったら今日の夜はオムライスにしてやるぞ？」

モノで釣ると言う大人の高等技術。

我が頭脳が恐ろしい！

これで琥珀も捕まるだろ？

《パパの考えてることわかるから捕まらないもん。

あっかんべー》

そう舌を出して駆けて行く。

……悪ガキになってきたな。

ま、可愛いから許す。

「琥珀！覚悟！」

琥珀を追いかけ追いついたところを、琥珀を胴からかつ攫^{さら}うように、両腕を伸ばし振るうが、琥珀はそれを察知したのか前転をして腕の範囲外に。

子どものする動きじゃねえよ！？

足は子ども並なのにしなやかさが尋常じゃねえ！？

《パパ、怖い》

きやつきやつと笑って琥珀はそう言う。

……なんかナメられてる気がすんな。

子どもにナメられちゃ俺の立つ瀬がねえ。

真っ正面からが無理なら

キュッキュッキュッ

フェイントを織り交ぜりやいいだけだ！

琥珀に併走し右から再び胴をかつ攫^{さら}うように腕を伸ばすがそれはフェイント。

琥珀の体が左に傾き、避ける体勢となったところで俺はキュッキュッとステップを踏み左に回り込む。

そのまま、左からタックルするかのように抱え込もうとする。

コレで終わりだっ！！
そう考えると思わずにやける俺。
子どもを追ってにやけるヤツって危険に思われそうだな……。

だが俺のフェイントに琥珀はいち早く反応し、転がりかけた体勢を左足で踏ん張り右に修正。
その結果俺の左腕から逃れ、俺は背中を1人床に擦り付けることとなる。

ズザザザザッ

周りからすれば1人勝手に床に背中を擦り付けて喜んでいるただの変態に見えるだろう。

『コレで終わりだっ！！』とか考えてにやけた数秒前の俺を思いっきり殴りたい！

《パパー。大丈夫？》

「大丈夫だ。問題ない」

琥珀が俺の体を心配しながら近づいてくる。
ぶつちやけ俺の体より制服の方が気がかりだ。

《ちょっと汚れてるけど、穴はあいてないよー》

「お、そうか。ならよかった。」

んで琥珀捕まえたぞ？」

近づいてきた琥珀をガシッと抱く。

《あわわっ！？捕まっちゃったー》

「さ、教室に戻るぞ？」
《うん！》

琥珀を肩車して立ち上がると島田の声が聞こえてきた。
そっぴや明久たちのこと完璧に忘れてた。

「どうしてくれるのよー!?」
ウチのファーストキスーっ!?」

「ごごごめんなさいっ！僕も悪気はなかったんですっ！」
「ごめんで済むような問題じゃないでしょ!？」

「そ、その、美波」
「なによ!？」

「えっと……僕も初めてだったから、おあいこってことじゃ、ダメかな……?」

「え……?そ、そうなんだ……。それは、その……えっと……ご馳走さま……?」

……なんかよくわからん。

「えっと……じゃあ、教室に戻ろっか？」
「う、うん。そうね」

なんかどぎまぎしてんな。

「明久ちよつと待った」
「へ?……えっ!?空いたの!？」
「う、宇童!？」

何だよその狼狽^{うろた}えっぷりは。

「島田の言動からして（誤解だったと）教えたっばいけどどうなったんだ？」

鬼ごっこしてて聞いてなかった」

「あ、え、そ、それは　もがっ！？」

「あ、アキ！アレは言っちゃ駄目！」

『アレ』ってなんだ？

「あ、うん。……わかった」

島田は兎も角なんで明久が赤くなってるの？

「空。僕たちはもう教室に戻るね」

「あ？ああ」

結局どうなったかわからねえな。

バカと俺とエンブレム（前書き）

エア・ギア 色濃いめ

バカと俺とエンブレム

Aクラス教室

屋上の一件によりDクラスとの戦争はなくなりそうらしい。

明久の話によると島田に誤解だったと告げたら叩^{はた}かれたってことになっている。

屋上にいたときにはなかった紅葉マークをしっかりつけて説明していたあたり明久が口を滑らした『アレ』なるモノをよっぱど隠したいんだろうな。

んで明久の説明をうまい具合にスネークに伝えれば無事終了。

それから時は進んで今は昼休み。

俺は優子たちと飯を食うためにAクラスに来ていた。

「邪魔すんぞ」

《すんぞー》

ガラガラと扉を開き中に入ると琥珀を肩車しているためか俺に視線が集中する。

……なんか居ずれえ。

そんな俺に優子から声がかかる。

「あ、空。」

今日は天気がいいし屋上で食べましょ？」

「了解。

んで愛子は？」

《お姉ちゃんは寝てるよー？》

そう言つて琥珀が指差した方を見ると愛子がシステムデスクに突っ伏して眠っていた。

「愛子。飯食うぞ」

「すぴー……すぴー……むにゃむにゃ……」

「おーい。愛子食うぞ？」

「空君大胆だね」

いやーんと言つて体をくねらせながら目覚める愛子。
今のどこにエロいところがあつたんだよ！？

「だって空君が」(起きねえと)愛子食うぞ？『って言ったから」

……なんか認識に食い違いがある気がするな。
ま、今はいい。

「今日は屋上で食うぞ」

「野外プレイするの！？」

「そつちの『食う』じゃねえよ！

飯の方だ！」

さっきの『食う』もそつちのことだったのか！？

「そつちななの？もう、空君紛らわしいよ。

普通の人だと間違えちゃう」

ぶーぶーと口を尖らせる愛子。

……うん、可愛いな。

「普通は間違わねえよ」

《ねえパパー。どういう意味ー？》

「琥珀君。それはね」

「どういう意味もなにも『飯を食う』って意味しかねえよ」

愛子が変なことを刷り込む前に言う。

琥珀は純粋なままでいいんだ。

……そもそも知るには早すぎる。

「そんなことより飯食いに行くぞ？」

優子が弁当持って待ってたんだ」

「うん、わかった」

屋上

「はい、琥珀君。あーん」

《あーんなのー》

只今愛子が琥珀に餌付け中。

「こうして見ると愛子が世話好きな姉みたいね」

「あー、確かにな。」

でもいい母親になると思うぞ？」

「そうね。」

あ、琥珀のポニーテールって空がしたの？」

「ああ。してくれて言われてな」

「似合ってるわね」

「本人に言つてやれ」

「そうね」

そこで一旦会話は終了。

ほのぼのとした空気がこの場を包む。

ふう……いい天気だ。なんかいいことありそ

ガシャンッ

あ？なんの音だ？

そう思いフェンスから外を覗いてみるとそこにはオレンジ色のフルフェイスヘルメットを被つて上下長袖ジャージの5人組が門を破つてグラウンドに侵入していた。

「空君。今の音何？」

「下見りや分かるからこつちに来い」

「わかった」

「空。あの人たちが何かわかるかしら？
門を壊すなんて普通じゃできないわよ？」

「俺に聞かれてもよくわかんねえよ」

マジでさっぱり。

『お前ら！何をしている！』

それなりに音は大きかったため鉄人が様子を見に来たようだ。

『リーダー。なんか来たぞ』

『ああ？あんなヤツほつときな』

リーダーは女らしい。

性別判断しずれえな。声も聞きずれえし。
マスクとれ。それが上のジャージ脱げ。

『向こうはやる気満々だすよ？』

『じゃあ、あんたが相手しな。』

アタシたちは探してくるから』

『お、女の子のわだず（私）にあんな筋肉達磨を任せるんだすか！？
無理だすよ！！』

『……じゃあ、あんた。変わりにやってあげな』

『俺ですか？まあ、言われたならやりますがキツチリカツチリ探し
て下さいよ』

『言われなくてもそうするよ！』

あんなひよろひよろしたモヤシをブツ倒すだけで100万も貰える
んだぜ！？

気合い入れて闘るに決まってるんだろ！！』

『姉御。あの男を闘るのはいいッスけど他のヤツ巻き込みまうと
俺らお巡りさんのお世話になっちまうッスよ？』

『そんなこと分かってるよ。』

そもそもお巡り如きに捕まるとは思っちゃいけないけどね』

『丸風来ちまうッス』

『……あんた！男なんだからくよくよしてんじゃないよ！』
『は、はいッス！！』

……気分的には漫才見てる感じだな。

あ、丸風の説明しとくか。

丸風つてのはA・Tによる犯罪を取り締まる警察機関。

この町にはどういうワケかA・Tが普及してねえから普通はお世話になることはねえ。

だから白バイしか追って来ねえ。

『それじゃあ見つけたら大声上げるんだよ？』

『……もつとマシなのないのか？』

『アナログが一番いいんだよ！！』

ほら、散りな！！』

『了解』

鉄人の足止め係りを残し散っていく5人組。

走るにしては速すぎる。あいつらA・T履いてんな。

マジ物の『スチームライダー暴風族』か。

すんげえ面倒そうだ。

にしてもこの町に『スチームライダー暴風族』はいねえハズだぞ？どっから来たんだ？
帰ったら調べてみつか。

『お前ら待たんか！』

『筋肉達磨の相手は俺ですよ』

『年上に対する口の利き方がなていないようだな。』

補習室送りにしてやるっ』

お、鉄人VS足止めマスク（今命名）の戦バトルの勃発っぽい。

なんかワクワクすんぞ。

『唸れ俺の右腕!』

そう叫び鉄人は地面を思いっきり殴る

ガッドゴオオオツツ

と半径5m程のクレーターができ足止めマスクを土砂が飲み込む。

「「「《……………》」」」

屋上組は絶句。

……鉄人って人間か……?

『補習室行き1人目確定』

土砂に埋もれ気絶した足止めマスクを掘り起こしそう告げる鉄人。

『見いつけたあ』

「っ!?!」

不意に背後から声が聞こえ俺はぱつと振り向くと、貯水タンクの上に（話し方からして）リーダーマスク（今命名）が立っていた。フルフェイスヘルメットで見えないがおそらくその下にはニタァツと嫌な笑みを浮かべているのだろう。

『モヤシ見つけたよおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!』

モヤシって俺のことかよ!?

そんなひよろくねえし!!

カツカツカツ

フェンスの上に残りの3人が姿を現す。

『……………』

『女の子侍らしていい御身分だすね』

『お、可愛い子猫たち見つけたッス。』

オイラと熱い夜を過ごさないッスか?』

あア?なんつつたアアアこのチャラマスク(今命名)ウウウウ!
!!!!!!!!!!

「デメエ、ナツメたことオオオ、言ってんじゃアアア、ねエぞオ
オオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!」

ゴオオオオオオオオオオオ

俺の感情の高ぶりの影響が背後に現れた狼の纏う炎が巨大になって
いた。

『あ、姉御おっ!?!』

『ビビってんじゃないよ!』

こんな弱そうなモヤシなんかに!』

「『時』よ！愚かなる者にその誓約を与えん！！」

パパパパパパッ

『時』の連打。それを全方位に。

『っ！？』

『なんスかコレ！？』

『体が……！？』

『う、動かないだす……！？』

突如自分の意志に関係なく体の動きが止まったことに戸惑う4人。
なんだコイツら？すんげえ弱えぞ。
なんか弱い者いじめしてるみてえで嫌になってきたな。

「言っちゃなんだが俺は『王』だ。

『王』にケンカ売るならそれに見合った『力』を持ってからにしろ。
命の無駄遣いだ。

今回は見逃してやるが次来たら容赦しねえからな。

特にチャラマスク。テメエは跡形もなく徹底的に消してやるから覚えとけ。

ほら、リーダーマスクさつさと帰れ」

『……いい（ボソツ）』

「あ？なんだリーダーマスク？」

『あんだスゴくいい！！』

「は？急にどうした？頭痛いたか？」

『ああ、いいよ！！もつとアタシを責めて！！
圧倒的な《力》で敵をねじ伏せる！でも優しい！
そんなあんたにアタシは責められたい！！』

.....。

『あ、姉御！？何言ってるッスか！？』

『リーダーにこんな性癖があったとは.....』

『ぜ、全然知らなかっただす』

『そんなこと堂々と言う人初めて見たよ！？』《お姉ちゃん、ママ
ー。あの人怖いよー》

『はあ.....知らない間に落としてるわね。空にお仕置きしないと』
『優子！俺は誰も落としてねえよ！！』

お仕置きとか何されんだよ！？あー、怖え！！

『その人の顔を見たらすぐ落としたのがわかるじゃない』

なんすかその『何当たり前のこと聞いているの？』みたいな顔は？
ヘルメット被ってんだぞ！？素顔は見えねえだろ！！

『ならヘルメット取りなさい』

『.....はい』

そう返事をし床に倒れたままのリーダーマスクに近寄りヘルメット
に手を伸ばす。

『姉御に触るなッス！』

『止めるんじゃないよ！』

さ、好きに責めて』

『あ、姉御……』

リーダーマスクの声が艶っぽい。
んじゃ御対面。

サワアアア

ヘルメットを取ってやると無理矢理詰め込んでいた明るい茶髪が宙に広がり陽の光を受け輝いている。

そしてリーダーマスクの素顔。

整った顔立ちをしておりクールな印象を受ける。

さらに俺をトロンとした目で見ており、頬を赤く染め、熱っぽい息を吐いていた。

……吐息エロし。

「空。わかったかしら？」

「……はい」

「ほら、早くしな！」

何かを急かすリーダーマスク。

何をしろと？

「やるなら今のうちだよ！」

抵抗できないアタシを存分に責めて!!」

……ぶっちゃけ怖え。

コツッコツッコツッコツ

『時』で動きの止まったままの4人の頭を小突く。

『何するツスカ!』

「うるせえ。コレで動けんだろ?」

『あ、本当だす!?!』

そう言つて床にひれ伏した状態から立ち上がる4人。

『……何故といた?』

「リーダーマスクを持つて帰つて貰おうと思つてな」

『ああ、なるほ』

「いい加減『リーダーマスク』なんて他人行儀な呼び方はするんじゃないよ!

笑^{えみ}つて呼びな!」

「……なるほどMか」

「やん、いけずう」

くねくねすんな。

『リーダー、帰るぞ。このモヤシキングには勝てない』

「おい、クーデレマスク（今命名）。斬新なあだ名つけてんじゃねえよ」

確かに『王』だがそのあだ名はあんまりだ。

『お前の名前を知らないんだ。

しょうがないだろう』

「は?お前ら名前知らずに襲つてきたのか?人違いだったらどうしたんだよ?」

『如月学園にいる金髪碧眼のハーフって言えばそうそういるものじゃないだろう。』
それで名前は？』

その情報源が気になるがひとまず自己紹介でもすつか。

「俺は宇童 空。『獣の道』ロード・フェンリス。」
そして『煉獄の王』」

『《煉獄の王》？聞いたことないツスね』

『《獣の道》ロード・フェンリスも初めて聞いただす』

「そりゃ俺が名乗ってるだけだからな」

『全部自称ツスカ！？』

「あー……そうだな」

『ならぶつちやけ《王》でもなんでもないんじゃないんツスカ？』

「実力で言えば一介の『王』レベルだと自負してる」

『本当か？』

「ああ」

『リードで戦^{バトル}レベルを計ればいいんじゃないだすか？』

『あ、確かにツス』

そう言ってチャラマスクがジャージのポケットからリードを取り出し俺に向ける。

ピピッ

『えーっと…… A・T稼働時間285時間、……始めて3ヶ月くらいツスカ』

「おい、俺は始めて2ヶ月くらいしか経ってねえぞ」

『清涼祭』の月から始めたしな。

『……は？いやいや嘘はいけないツスよ。そんなの有り得ないじゃないツスカ』

「1日5時間くらい走ってっから」

『走りすぎだ』

楽しいことやってなにがいけねえってんだ。

『まあ、気を取り直して次いくだす』

『対地平均速158km/h……』

コレ58km/hの見間違えツスカ？』

そう言つてチャラマスクはクーデレマスクとダスク（語尾の『だす+マスク』にリードを見せる。

『158km/h……だな』

『そうだすね……』

白バイから逃げ切るにはそれ以上で走らねえといけねえけどな。言つとくが道路走らなかつたらよくね？とかいう意見は受け付けねえから。

『最高速……289km/h……。OK。いい加減慣れたツス。最大エア』

（作者：最大エア・・・おそらくホイールに一定以上の力がかからない滞空時間のことだと思われる。空中で空気の『面』を蹴ってどれだけ地面に触れていなくとも、『面』を蹴った時にホイールにそ

れなりの力がかかるため滞空時間には加算されないと予想。ぶつちやけよくわからん)

『 726秒……』

『ど、どうやったら10分も飛んでいられるだすかつ!!??』

「あー……気分?」

『千の風になつて』のタイトルを見て『風』になつてみるか、って思つてやつてみた。

俺の『炎狼の玉璽』^{レガリア}が『風』を取り込んでるから楽にできただけだとは思うが。

『それで戦^{バトル}レベルはいくらなんだ?』

『えーっとツスね』

そう言つてチャラマスクはリードをポチポチといじり始めた。

『うし、出たツス。』

^{バトル}戦レベル269ツス。

普通に化け物ツスね』

だいぶ慣れてきたのかチャラマスクは普通に告げる。

糸目と戦つたときからレベルが20も上がつてんな。

あれか?死に瀕したら強くなんのか?

それにしても上がりすぎじゃね?糸目と戦つたのは4、5日前だぞ。

『確かに一介の《王》以上の《力》があるようだな』

『俺らもそれなりに鳴らした口なんすけどね』

『始めて2ヶ月のそれも同じ年くらいの人に抜かれるのはショック

だす……』

「あ？お前ら高校生なのか？
学校どうしたんだよ」

『サボったツス』

「学校行つて勉強しろよ。目先の100万よりこれから先に稼ぐ金の方がデカくなんだろうが」

『ぐ……っ！ち、違うだす！』

リーダーが行くつて言ったから仕方なく着いてきたただけだす！』

「ヘルメットで見えねえけどぜつてえ目泳いでんだろ」

『なっ！？宇童はエスパーだすか！？』

「なあ、コイツつて結構頭残念な娘？」

俺はダスクを指しながらクーデレマスクに尋ねる。

『ああ、そうだ』

「お前ら見つけたぞ！」

突如屋上の扉が開き鉄人が入ってきた。
クーデレマスクつて話遮られること多いな。

『なっ！？さっきの筋肉達磨！！』

『どうやらあいつはやられたみたいだな』

『は、早く撤退するだす』

そう言つてフェンスの方に向かうが

「動くなあああああ！！！！」

ビリッビリッ

大気を揺るがす鉄人の咆哮により体の筋肉が強張り、動きを強制的に止められる。

やべえ！！琥珀が泣いちゃう！！

俺は優子・愛子・琥珀・Mの4人がいる方へ駆ける。

さつきから静かだと思ったたらここにいたのか。

しかも文月の制服着て。シュシュでポニーテールにしてる。

……似合ってたな。

だが敢えてMには触れずプルプルと震えている琥珀をだっこする。

《うう、パパー！……ひつく、怖かったよー！》

俺が来たことに安心し、せき止められていた感情が決壊して泣きだす琥珀。

「よしよし、大丈夫だぞ」

俺は琥珀の背中を優しくポンポンと叩きながらそう告げる。

「子どもをあやす宇童……」。

いい！スゴくいい！」

……いいからお前は黙れ。

「宇童。コレはお前の知り合いか？」

Mを除く3人を肩に担いで鉄人が俺に問う。

「あ？全然知らねえ。

今日初めてあつた」

『なっ！？宇童！オイラとはあの時夢を語り合った仲じゃないッスか！！』

「『あの時』ってどの時だよ！？」

勝手に捏造すんな！！」

『わだず（私）とのことは遊びだったんだすね！！』

「おい、コラ。お前とそんな関係持った覚えねえ！」

『俺の楽しみにとっておいたプリンを食べたのはお前だな！！』

「なんの話だ！！」

「……お前に慣れ親しんでいるように見えるんだが？」

「コレはマジで初対面」

鉄人の目を見てきつちり断言する俺。

「……ふむ。嘘をついているようには見えないな。

授業に遅れないよう教室に戻るんだぞ。もうすぐ昼休みが終わる」

「了解」

そう返すと鉄人は屋上から去って行った。……Mを残して。

「作戦成功！」

『作戦成功！』じゃねえよ。

「おい、どっからその制服調達してきたんだ？」

「優子が貸してくれた」

「ジャージのままじゃ折角の笑の美貌が台無しだと思ってね」
「そんなこと言われると照れちまうじゃないか」

……もう名前で呼び合う仲になったのか。
にしてもなんで制服をもう一着持って来てんだよ。

「そうか……」。

んでMはこれからどうす」

「あ、宇童にコレ渡しとくよ」

そう言つて手渡されたのは恐竜の頭をモチーフにされた金属製のピンバッチ。

「『エンブレム 族章』……？」

『エンブレム 族章』。

それはチームの誇りでありチームそのもの。
それを手放すということはそのチームの解散を意味する。
そんな大事な物を俺に渡すM。

「エンブレム 族章』」。

アタシたちはあんたに負けた。だからそれをあんたに渡す。
分かり易くていいだろ？」

「……『エンブレム 族章』 ってのは、……『誇り（エンブレム）』 ってのは、……そんな簡単に誰かに渡していいもんじゃねえだろ……？」

それに……俺はA・T使い（ライダー）だがチームを持ってるわけじゃねえし、今回ののは正式な戦バトルじゃねえ……」。

……正直『^{エンブレム}族章』を渡す必要性がねえ……」

「……素直に受け取れ。」

渡すか渡さないかの決定権はアタシにある。
あんたでなくあいつらでもなくアタシに」

そう言っただけで開いたままだった俺の手を握らせるM。

「……わかった」

「それじゃアタシは帰るよ。」

優子に愛子、またな。

琥珀ちゃんは……眠っちゃってるな。起きたらよろしく言っというてくれ」

「わかったわ。またね」

「ばいばい」

そう言っただけでMは帰って行った。

「……………」

……俺もチーム創るか……。

バカと俺とエンブレム（後書き）

チームの『夢』を潰したことにより『天』を駆る覚悟のできた空でした。

補足

MのA・Tチーム名：『T・REX』

エンブレムデザイン：ティラノサウルスの頭蓋骨

バカと俺とじゃんけん大会（前書き）

少々可笑しなところがあるので正常な判断ができない興奮時に読むことをオススメします。

バカと俺とじゃんけん大会

Fクラス教室

「少々マズいことになった」

5時間目始まって早々坂本がそう切り出した。

「マズいつて何が？」

現在自習時間のためしゃべっていても無問題。

テストを受けているクラスの採点やら監督やらで教師の手が回らない上に試験召喚システムのメンテナンスが難航しているためらしい。んで琥珀は俺の腕の中でお休み中。最近よく寝てるな。

「Bクラスが攻めてくるかもしれない」

「それマジか！？」

今来られたらさすがにやべえぞ！？

もし来られたら　　」

「ああ、もし来られたら」

「琥珀が起きちまう！！」「みかん箱に逆戻りだ！」

.....。

「みかん箱なんざどうでもいい。

家からダンボール持って来ちまえばそこのクラスより豪華になって万事解決だろ。」

Aクラスのリクライニングシートも目じゃねえ」

みかん箱を嫌がる意味がわかんねえ。

「いや、さすがにそれは無理だろ!？」

「そうやって『自分、武器用　　違った　　不器用ですから……』
つつーアピールすりや作って貰えると思ってんのか？」

世の中そんな甘くねえんだよ!!」

「アピってねえし!!」

うつわー、出たよ。男のツンデレ。

「前から言ってるように男のツンデレは気色悪いんだよ」

「ツンデレじゃねえ!!」

「坂本うるせえ。琥珀が起きちまう」

「ぐぬぬ……っ!!」

俺から振っというてこの返し。なかなかム力つくようだ。

「んで俺にどうしろと？」

「……………まず、今やっていることだが、今はBクラスとの戦争を回避するために明久と島田を使ってDクラスを焚き付けている」

Dクラスつつーかスネークだよな？

「焚き付けてどうすんだ？」

「俺たちと戦わせる」

「そんなことしたらBクラス戦が辛くなんだろ？」

「……1つの戦争の終了後に点数補充期間があることを忘れたのか？」

……んなもんあったか？……ま、坂本が言うくらいだしあんだろ。

「んじゃ、Dクラス戦が終わってしつかり補充してからBクラス戦に入んのか？」

「いや、そうじゃない。

補充するのはBクラスを牽制するためだ」

「？……十分に補充できりや向こうは戦争を踏みとどまるかもしんねえってことか？」

「ああ。だが、Bクラスは俺たちが向こうの動きに気づいたら即宣戦布告をするつもりのようなのだ。

だから俺たちは何も知らない風を装わなければならない」

ふむふむ。

「そこで、だ。廊下をフラフラするぞ」

……。突然だなオイ。

「あー……分かったが明久はどうすんだ？」

「清水に島田と仲睦まじいところを見せつけるために別で動いて貰っている」

「なるほどな。んじゃ行くか」

廊下

「なあ、坂本。ただフラフラ歩き回るだけじゃ面白くねえしゲームしねえか？」

「それもそうだな。それで何するんだ？」

「『叩いて被ってじゃんけんポン』」

（解説：今週（2011・10・11現在）のジャンプで銀が金になっていた漫画の過去の巻を参照）

「なんだそれは？」

「ルールは簡単。じゃんけんで負けた方がこのダンボール製のヘルメットを被って、勝った方が負けた方がヘルメットを被るより先にこのダンボール製のバットで殴るだけ」

そう言いながらどこからともなくダンボールヘルメットとバットを取り出し、それらをどこからともなく取り出したダンボールの上に置く。

琥珀は俺のどこからともなく取り出したダンボールベット（布団付き・防音対策済み）の中でスヤスヤお休み中。

『どこからともなく』が多いが気にすんな。

「……ヘルメットの強度が心配なんだが」

「ダンボールの間に金属挟んでっから大丈夫だ」

坂本には教えねえがもちろんバットにも。

「……そうか。んじゃ」

「「じゃんけんポン！」」

俺パー、坂本グー。

俺は素早くバットを掴み体を捻り力を溜め、

「ふんっ!!」

すでにヘルメットを被っている坂本の側頭部に向けて居合い斬りのように振り抜く。

「おいしいっ!!!??」

何か叫んでいる気がするが気のせいだろ。

ガコッ

「ぐおっ!!」

ドゴオオオオオッ

坂本が何かに弾かれたかのように吹っ飛び壁を粉碎する。

「おいおい坂本。壁壊すなよ」

やれやれ1人遊び（下ネタではない）が好きなヤツだな。

「ぐ……っ!!お前がやったんだろうが!!」

それよりヘルメット被ってから殴るな!!」

「あ?ヘルメット被ってたか?

悪い悪い、坂本と同じ色してたから見分けつかなかった」

「クソ……っ！！空、もう1回だ！！」

「いいぞ」

「「じゃんけんポン！」」

俺チヨキ、坂本グー。

「よし！！空、くたばれえええええええ！！！！」

そう叫び素早くバットを取って俺に振り下ろす坂本。

バキインッ

だがバットもとい鉄の棒が打ち砕いたのは床だけ。俺は坂本が振りかぶって早々に退避したためノーダメージ。

岩をも砕くその一撃もあたらなければどうってことねえ。

「避けるな！！ヘルメット被って構えてろ！！」

「床を砕くような一撃にヘルメットが耐えられるワケねえだろ！！」

「なら一発殴らせる！！」

「嫌に決まってるんだろ！！」

「しょうがないな」

お、諦め

「力付くで殴るまでだ！！」

るワケねえよな。

坂本がバットを下段に構え俺に迫る。
どうやら拳ではなくバットで殴るらしい。
……この鬼畜ゴリラめ。

「食らえ!!」

俺の胸を目掛けて振るわれるバット。

ブオンッ

俺が振るわれるバットに合わせて思いっきり後ろに跳んだためバットは空を切るだけに留まる。

「そんな大振りがあたるワケねえだろ」

「『大振りは当たらない』？」

誰が決めたそんなこと!!

『殺したいほど殴りたい』という殺意の極致を思い知れ!!
不可能を可能にするその極致を!!!!!!」

坂本は振り抜いたバットを頭上に構え、力を溜め始めるとバットが
どす黒いオーラを纏いだす。

……なんかやべえ気がする。

「ふっ!! 月牙ああああ!!!! 天衝おおおお!!!!」

どす黒いオーラがバットから三日月状に放たれ、床を抉りながら突き進む。

「なんだそれええっつ！！！！？？？？」

マジなんだそれええっつ！！！！？？？？

「ふっ、俺の『殺意』受け止められるか？」

ニヒルな笑みを浮かべそう告げる坂本。

クソが……っ！！琥珀が後ろにいるから避けらんねえ！！！！

「バリアアアアアア！！！！」

俺は黒いのを防ぐため風の『面』を押し出し前方に空気の『壁』を作り出す。

「ぐ……っ！！」

だが『溜め』がほとんどなかったため『壁』は薄く防ぎきれそうにない。

『お前ら！！こんなところで何をしている！！』

『なっ！！鉄じごはっ！？』

不意に坂本のいる方から鉄人の声が聞こえて来た。

こんだけ騒げばバレてもしょうがねえが、今はそんなことはどうでもいい。

この黒いのを何とかしねえと！！

バシユッ

そんなことを考えていると突如黒いのが消える。

「さあ、宇童もいくぞ」

のそつと目の前に現れる鉄人。

「っ!?!『時よ』っ!?!」

それに驚き、俺は咄嗟に『時』を放つ。

あまりに疲れるために『清涼祭』以来やっていないA・Tなしでの無理矢理の『時』を。

「ぐぬ……っ!?!」

よし、止まった!?!今のうちに

「ふんっ!?!ヌルいつ!?!」

バチィッ

っ!?!なぜ『時』を破れる!?!??

撃つてるところは一応人間の弱点だぞ!?!?!???

「さあ、行くぞ」

合宿のときにナマ言ったのは俺が悪かった!?!だから俺を見逃がせ
!?!?!!

「補習室なんて行つてたまるか!!」

「安心しろ。お前は補習室ではなく職員室だ」

「……は……?なんで?」

「くれば分かる。」

琥珀君も連れて一緒に行くぞ」

「……了解」

バカと俺とチーム勧誘（前書き）

「…………日本語

」…………英語

バカと俺とチーム勧誘

職員室

坂本を補習室に放り込み、起きた琥珀をだっこして現在職員室に来ている。

教師が出払っているため職員室はがらんとしているが、唯一奥の一角にある、床が畳張りで卓袱台の置いてある教師の休憩所にだけ人の姿があつた。

その人物は煎餅をバリバリと食べている金髪碧眼で20代くらいに見える西欧系の女性、もとい俺の母さん。

20代くらいに見えるだけで実年齢は35（いや36だったか？）。

……そう考えると俺を産んだの結構早いよな。

『……母さん何やってんだよ』

『おー、久しぶりー！』

細いけどちゃんとご飯食ってるか？』

初っぱなからスルースキルを発動しやがるmy mother。

『ああ、ちゃんと食ってる。』

んで何やってんだ？』

『煎餅食ってる』

『んなの見りゃわかる。』

俺が言いたいのはなんでここにいんのか？ってことだ』

『あー、そーゆーこと？』

それは、今空の隣にいる人に呼ばれたから』

そう言つて鉄人を指差す母さん。

そついや朝、鉄人が電話かけてたな。なんでかけたのか知んねえけ

ど。

「宇童」

「あ？どした？」

「お前の母親に伝えたいことは伝えてある。
後は家族で話し合った方がいいだろう」

………は？どういうこと？話し合うことなんざなんもねえよ？

そんな俺の困惑など露知らず鉄人は母さんに向かって一度会釈を
すると職員室から出て行った。

『ほれ、空座れ』

『……あ？ああ、そうする』

母さんに促され俺は靴を脱いで畳に上がる。

もちろん琥珀の靴も脱がして。

あ、ついでだし言っとくが琥珀の靴とか服は俺んちの納戸にあった
俺のおさがりだ。

『天使の力』^{テレスマ}でも作れるらしいけど何かあったときに真っ裸になる
のが可哀想なためにおさがりを。
その内服買ってやんねえとな。

そして畳の上で胡座^{あぐら}をかき、その上に琥珀を乗せると母さんが尋ね
てきた。

『空。その子の名前なんてーの？』

『琥珀』

『へー琥珀ちゃんか。女の子みたいで可愛いな。』

でもどーせなら《シュバルツ》の方が良かったんじゃない？
カッコー子に成長しそーだし』

どうやら俺と母さんは血のつながった親子のようだ。

……………ん？ちよつと待て。今の言い方からして俺が名付けたって
のを知ってるよな？あれ？なんで？

『急に黙りこんでどーした？』

『なあ、なんで俺が琥珀の名前をつけたこと知ってたんだ？』

『あー、それはさっき西村って人から教えて貰った』

『なるほど』

理由はわかったけどなんで鉄人が知ってたんだ？

……………もしかしてヤブが喋ったのか？…………ふむ。もしかしくてもヤ
ブが喋ったのか。

マンガのこと鉄人に言っとこ。

『琥珀ちゃんだっこさせて？てかさせる』

急だなオイ。

「琥珀。俺の母さんが琥珀のことだっこしたいんだってよ。
どうする？」

《パパのママー？パパのママならいいのー》

『おー！？おしゃべりできんのか！？スゲーな！？』

『オイ、興奮してねえでどうすんだ？』

『琥珀ちゃんを早く！』

『早く！早く！』と手を振って俺を急かすので琥珀を渡すと

「琥珀ちゃん。おばーちゃんだぞー」
「ぶっ！？ゴホッゴホッ！！」

そんなことを宣のたまいなさる我が母君。

「急に何言ってんだよ！？」

「だって空の子どもってことは私の孫だろ？
なら私はおばーちゃんじゃん」

いや……まあそうだが……。

「琥珀ちゃん。ママはどこにいの？」

《ママ？ママはねAクラスにいるのー》

「ふむふむ。なるほど。」

空。琥珀ちゃんの母親呼べ」

「いや、今授業中だし」

「そんなことどーでもいいー」

「いやいや、母さんは良くても優子は点数補充して……」

……やっちまった……。

「ゆーこ？あ、もしかして近所のゆーこちゃん？

……そー言えば目がゆーこちゃんに似てるかも。
琥珀ちゃん。ゆーこちゃんであってつか？」

《うん！ママであってるのー！》

「ママに会いたい？」

《うん！》

ガラッ

「琥珀。呼んだかしら？」

突如職員室の扉が開き優子が入って来た。

……え？何このテレパシー？

シンクロ率400%超え？

「ゆーこちゃん。久しぶり」

「あ、おばさん！久しぶりです！」

「最後に会った時より綺麗になってんな」

確か母さんと優子が会つのは5年ぶりくらいなんじゃねえか？

母さんが何やってんのか知んねえけど全然家に帰って来ねえからな。

「あ、ありがとうございます！」

おばさんも変わらず綺麗ですね」

「おー、ありがと。」

それはそーといつ琥珀ちゃんが産まれたんだ？」

「あ、えっと、琥珀は私が産んだわけじゃなくてどちらかと言うと空が」

「え？どーゆーこと？」

優子の言葉を聞いて母さんが『お前何者？』みたいな顔でこっちを見てくるんだが……。

「文月学園に試験召喚システムってのがあることは知ってっか？」

「知ってる。結構有名だし」

「それで召喚獣を使って戦うんだが、俺の召喚獣はいろいろあって

自立した」

「それが琥珀ちゃん？」

「ああ」

「へー、不思議だな。」

ま、それは置いといて。

優子ちゃん。空とはもうやったのか？」

不意に話題転換をしニヤニヤとイヤラシい笑みを浮かべて優子に迫る母さん。

息子がいる前でそんな話すんなよ。

「え！？あ、そ、それは……」

「母さん。優子が困ってんだろ。」

それに変態丸出しはやめろ」

「ああ？親に向かつて『変態』だと？お前シバくぞ？」

「ハッ、やれるもんならやってみろ！

昔の俺とは違いごはっ！？」

母さんから鳩尾への鋭く思い拳が連続で叩き込まれる。もちろん視認不可。

……弱点に連撃……なん……たる……鬼ち……く……（ガクッ）。

そのまま俺は意識を失った。

「……………」

『おー、やっと起きたか』

目が覚め周りを見ると、いたのは母さんだけだった。

『……………優子と琥珀は？』

『教室に帰った。』

……………それはいいとして、大事な話がある』

母さんは真面目な表情でそう告げる。

『こんなところで話すのか？』

『ああ。今ここには私ら以外に誰もいねえしちょうどいい』

『……………そうか。んで大事な話つてのは？』

『最近A・Tしてんだろ？』

『やってるがなんで知ってんだ？』

『ヤブから聞いた』

『ヤブって保健室の？』

『ソイツ以外に誰がいる』

ふむ。俺のネーミングセンスは母さん譲りのようだ。

『ヤブと母さんは知り合いなのか？』

『知り合いつてか仲間だ』

『仲間？』

『ああ。《アルテミス》の仲間』

『なんそれ？』

『パーツ・ウオウAクラスのA・Tチーム』

『は！？母さんたちってA・Tやってたのか！？』

『ああ。空より大先輩だぞ。』

だから敬え。称^{たた}えろ。跪^{ひざまず}け』

母さんがどや顔をしてリズムよく言う。
どや顔やめろ、とは言わねえ。言ったらまた強制的に眠らされそう
だしな。

『ま、冗談はここまでにして、本題だが』

何言っ気だ？ちよっとドキドキすんぞ。

『私のチームに入れ』

バカと俺と単語集（前書き）

「…………英語

宇童家の公用語は英語デス。

『ちよつと話がブレてる気が…………』な出来です。

バカと俺と単語集

「私のチームに入れ」

そんなことを母さんから言われ現在頭に『？』が浮かびまくっている俺。

「なんで？」

「私の目的のためにお前の『力』が必要だからだ」

へえ、俺の『力』、ね。どこから俺の戦^{バトル}見てんだろうな？
ま、今はいい。

「目的ってのは？」

「……………復讐」

ポツリと呟く母さん。

「復讐…………？」

「ああ…………復讐だ…………！」

私の『翼』を…………ラグナの命を奪った『アイツら』にな…………！」

ゾクッ

「っ…………！？」

突如背筋が凍りつくような鋭利な殺気を感じブルツと身震いをする。
だがそれを感じながらも気になったことを尋ねるため、俺は口を開

く。

「……ラグナってのは誰だ？それに『アイツら』ってのも……」

「あ？ラグナか？ラグナは私にA・Tを教えてくれた人であり最愛の男性^{ひと}。」

そして空。お前の父親だ」

声の質が先程の鋭いモノからいつものモノに戻り一安心。

だがなんでもないかのようにサラリと爆弾発言がましてくれやがった。

「今『俺の父親』って言ったか？」

「あー、言っただぞ」

「んじゃ父さんが父さんじゃねえの？」

「そういうことだ。」

空は今の旦那との子じゃなくラグナとの子

「……………」

……いやー、参った参った。パピーが赤の他人だったなんて。

あ、でも血のつながりはねえけど家族か。

……どっちにしろこんな時どという顔をしたらいいかわかんねえよ。

「笑えばいいーと思うぞ？」

「心を読むな。プライバシーの侵害だ」

優子たちが読むのは無問題。

『だって愛し合っているんだもの そらを』。……なかなかいい

詩だと思っただがどう思う？

「心なんざ読んでねえ。私は空の母親だぞ？何考えてるかぐらい手

に取るようにわかる」

……それって結局心読んでね？

「てか反応薄いな。もっと動揺するかと思ってた」

「あー……うん、そうだな。」

意外とそういうのには取り乱さないらしい」

「面白くねえな。慌てふためくところが見たかったのに。」

……ふふつ、滑稽だ」

俺がそうなるところを想像し笑っている母さん。

さっきの殺気のこと[ギャグではない](#)もあってぶっちゃけ不気味で怖い。

「んじゃ今の父さんは？」

リンクチューナー
「私の『調律者』だ」

……『調律者』……わかんねえな。

聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥、ってことで聞いてみる。

「なんだそれ？A・Tを『[チューニング](#)調律』する専門家？」

「あー……まーそんなとこ。正確に言えば『王』に『[レガリア](#)玉璽』を合わせるヤツらのこと」

へえ。『王』に『[レガリア](#)玉璽』合わせ……ん？……『王』に『[レガリア](#)玉璽』合わせる……！！？？

ってことは

「まさか母さん『王』か！？」

「正解。につき『アイツら』も『王』だからな。」

同じ土俵に立たないと辛いもんがある」

また『アイツら』、だ。

「さつきも聞いたが『アイツら』って誰なんだ？」

「私の復讐対象」

「いや、それはわかる。名前とか特徴は？」

「名前は分からねえが、特徴は……瞳孔に十字架が刻まれてる」

「瞳孔に十字架……？」

変わったコンタクトしてんな」

「コンタクトじゃねえ。直に刻まれてんだよ」

ラグナもそうだったしな、と母さんは続ける。

へえ。俺にも十字架出てくるかもな。ラグナの子どものらしいし。

でも出てきたらヤブが『邪気眼かい！？』とか言って興奮しそうで嫌だ。

「それでソイツらの中で……特に糸目の双子……！」

あのウンコクズ共は必ず殺す……！殺されても殺す……！」

再び鋭利な殺気が放たれる。

だが慣れたためか今度はそれに気圧けおされることはない。

俺の慣れ（『成長』って言うてもいいかもな）はハッキリ言って異常だな。常人の数倍はいく。

にしても『糸目』か……最近あつたような気が……。

……！！そっぴゃ『Sky Link』に不気味な糸目がいたな……！！

もしかしてアイツのことか？……でもアイツは1人だけだったし、

開いてんのか瞑ってんのか分かんねえほど糸目だったから十字架あるかわからなかったな……。うーむ……。

ま、次あったらアイツを殺すことに変わりねえ。俺だけ1回死にかけてアイツは死んでねえとかフェアじゃねえ。

そんな子どもじみた理由で糸目の抹殺を考えていると母さんが話を続ける。

「それで瞳孔に十字架のあるヤツらを『グラビティ・チルドレン重力子』って言うらしい」

ふむ、そんな言葉初めて聞いたな。

「『グラビティ・チルドレン重力子』は常人と比べ身体能力が高くA・Tの扱いに長けてる。……空。ここで問題だがA・Tはなんだと思う？」

急に『重力子』の話からA・Tの話に転換。

母さんのこういうとこ困る。話が行ったり来たりしてワケわからん。

「あー……趣味？」

「真面目に答える」

別にふざけてたワケじゃねえんだが。

「んー……なら『翼』か？」

空飛べるし。

「さっきよりまともだが違う。

正解は『兵器』だ」

「『兵器』……?」

「ああ。A・Tは『神』を殺すための『兵器』。

グラビティ・チルドレン
んで『重力子』はそれを使って『神』を殺すための『戦士』ってところか」

……スケールでけえな。でも『天使の力』テレスマがあるし神様がいても別におかしくねえか。

「てか、どこに神様いんの?」

「すぐそこにいる」

「?どこ?」

「今感じてんだろ?」

……え?なんか怖い。

母さんって凡人には見えねえもんが見える人だったのか?

「お前は『重力』感じてねえのか?」

「は?……まあ、感じてんじゃね?」

「それが『神』だ。『世界の理』って言いかえてもいいな。
『重力』つーのは人類が逆らえねえモノだろ?」

凡人うんぬんは違ったようだ。

「あー……そうだな。

んじゃ『重力』に打ち勝つこと。『神』を殺す。つーことか?」

「あー、そーなんじゃね?」

「……どつちなんだよ」

「いやー、『兵器』うんぬん『神』
グラビティ・チルドレンうんぬんは聞いた話だしよくわかんねえんだよ。後『重力子』も」

「誰に聞いたんだよ……」

「南とかゆー博士。怪しさ満点だったけどな」

……そんな簡単にそのエセ博士の話を信じていいもんかね？

「いーんじゃねえの？自分のことA・Tの開発者だとかなんとか言
つてたし」

「ナチュラルに心読むな」

「だから心なんざ読んでねえ」

頑なに否定するツンデレ母さん。
まったく困ったもんだ。

「んでどうやってその『重力子』殺すんだ？」
グラビティ・チルドレン

「A・Tで」

「いや、そうじゃなくて有象無象がいくら束になると『王』は殺
せねえじゃんか？」

「あー、そーゆーことか。

それなら安心しろ。『アルテミス』には『王』しかいねえから」

「……………それって名字が『王』とかいうオチ？」

「バカか！？んなワケねえだろ！？

メンバー全員が『王』なんだよ！！」

「バカとか言うんじゃねえ！！」

「うつせえバカ！！話聞けコラ！！」

ゴッ

「へぶっ！？……………痛え……………」

頬をグーで殴られ、痛みを和らげるために、畳の跡を隠す康太よろ
しく頬をさする俺。

「……メンバー全員が『王』ってことはヤブも『王』なんだよな？」
「あー、そーだぞ」

「全然『王』には見えねえんだが？」

「能ある鷹は爪を隠す、つつーだろ？」

「んで後2人『王』がいるがソイツらはテストの時に会わせてやるよ」

『アルテミス』のメンバーは全員で4人っぽいな。
ま、それよりも

「テスト？」

「そ、入団テスト。私ら『王』が相手をしてある程度戦えれば即採用」

「へえ、『王』が相手すんのは面白そうだな」

「だろ。それでテストだが今夜」

「けど、俺は『アルテミス』に入る気はねえから」

母さんが言い切る前に声を被せる。

「……………は？……………な、なんでだ!？」

珍しく狼狽する母さん。

そんなに俺に『アルテミス』に入って貰いたかったのか。なんか悪いことしたかな？

ま、俺は俺の『道』を行くだけだ。誰かが作った『道』なんざ歩かねえ。

「ラグナは俺の父親なんだろうが今の父さんが俺の父さんだし仇を取りてえワケじゃねえ。それに俺は『重力子』グラビティ・チルドレンを憎んでるワケじゃねえからな。戦う理由がねえ」

「で、でも!!『重力子』グラビティ・チルドレンがいたから私はこんなにも不幸になったんだぞ!!!!!!」

「そんなこと言われても俺は自分のチームを創る気だし、他のチームに入る気はねえ」

なら始めからそう言っとけって話なんだが俺の知らねえこと知ってそうだったし聞いといた。

「……は……ねえ……（ボソッ）」

そっぴや、チーム名とか『エンブレム族章』とか考えねえとな。

「……私は……ねえ……（ボソッ）」

あ、後メンバーどうすっかな？
明久たち誘ってみるか？

「私は認めねえ!!!!!!」

「っ!？」

母さんが突如大声を上げ、それに驚く俺。
急に大声出すのはやめろ。心臓に悪い。

「てか、何を認めねえの？」

「空がチームを創ること!そんなことせずに私のチームに入れ!!!」
「やだ」

ベーと舌を出してそう告げる。

ブシユウウツ

あ、母さんの血管から血が。

「……………お願いだから空。

私が……………優しく言ってるうちに……………私のチームに入れ」

コメカミをピクピクさせながら母さんが告げる。
うへえ、怖え。だが

「そんなに俺の『力』が欲しいなら賭けろよ

『誇り（エンブレム）』を「

ビシッと母さんを指差してそう告げる。

「俺が負けたら母さんのチームに入ってやる。

そのかわり……俺が勝ったら俺のチームを創らせてもらっ……！」

「……………」

「……………」

しばらく睨み合いが続き、俺が揺らがないことを感じてか母さんは口を開く。

「……フンッ！今夜12時にここのグラウンドへ来い……！」

「……了解」

「狩の女神の力を思い知らせてやる……！」

そう告げると母さんは不機嫌オーラを撒き散らしながら職員室から出ていった。

バカと俺と単語集（後書き）

チューニング
『調律』

A・Tを使用者の生体リズムに合わせることに。

本来は『リンクチューナー調律者』が『レガリア玉璽』を『王』に合わせることに。

リンクチューナー
『調律者』

男性の『王』なら女性の『調律者』が、女性の『王』なら男性の『調律者』がそれぞれつく。

『エア・ギア』を読んでいる限りで言えば、時間を（秒単位で）正確に刻み続けることができれば『調律者』としての素質はあると思われる。

……空の『調律者』は誰にしようか？

バカと俺と6時間目（前書き）

今回は短めです。

帰宅後のことも入れようと思ったのですが変になったので次の投稿で。

バカと俺と6時間目

Fクラス教室

今は6時間目の半ば頃。

ヤブのマンガのことを鉄人にリークして、琥珀を優子に預けたまま俺は教室に戻ってきており、坂本の席にいつものメンバー（坂本含む）と集まってDクラスとの試召戦争のことについて話し合っている。

坂本についてだが、今メンテナンスとか採点とかで教師の手が足りねえからって補習はなくなっただけ。が、かわりに反省文を明日までに書いて来なければならねえんだと。面倒そうだ。

んでそれに対して俺は何も課されてねえけど、1時間も何をやってたんだ？って訝しがられたから鉄人に鉄拳制裁を下されて気絶してたことにした。

実際母さんに50分くらい気絶させられてたし嘘は言ってる。

「んで『スネーク焼き付け作戦』は成功したのか？明久も島田も教室に戻って来てるし」

俺は隣に揃っている明久と島田を一瞥し坂本に尋ねる。

「ああ、成功だ。おもしろいくらいに引っかけたから明日の朝には宣戦布告をしにDクラスの使者がくるだろうな」

「そうか、んじゃBクラスの方は？こっちに攻めてくるかしんねえんだろ？」

「それも大丈夫そうだ。俺と空が廊下で大分騒いだおかげで『またバカをやっているな』とは思われても、『目論見に気づいているな』とは思われないだろう。」

それに保険としてDクラスがBクラスに攻め込むために試召戦争の準備をしているっていう偽情報を流しているし、その偽情報を聞いてDクラスに同盟を結びに行こうとしたBクラスの使者を1人、ムツリーニに殺してもらった。

それでDクラスがBクラスに敵意を持っているってことに信憑性が増しただろう。」

上出来だ、と坂本は笑う。

「そうか。なら明日頑張んねえとな」

「ああ。みかん箱はごめんだからな」

「……………」

今度坂本にみかん箱の良さを語ってやろう、と俺は心に誓った。

バカと俺と6時間目（後書き）

感想待ってます（、ー、）ゞ

バカと俺と調べ物（前書き）

微妙な出来

バカと俺と調べ物

宇童家

只今俺の部屋にいるのは琥珀と俺の2人だけ。

俺が『調べモノをしねえといけねえから何もできねえよ?』って言ったから優子や愛子は来てねえ。

んで何を調べるのかっつーとMのチームのこととか俺に懸かってる懸賞金のこととかだ。

ま、とりあえずパソコンの電源を付けてY A P O O ! に接続。別にO o o g l e でもいいがな。

《パパー、何調べるのー?》

俺の膝に座っている琥珀からそう声がかかる。

「ん? あー、Mのチームについてとかだな」

《なら、僕に任せてー!》

ん? 親の手伝いをしたいお年頃か? そう言ってくれるのは嬉しいが

「パソコン使えんのか?」

《大丈夫なのー! パソコン使わなくても調べられるのー!》

「?..... どうなんだ?」

《もちろん【天使の力】^{テレパス}使っのー!》

「へえ、【天使の力】^{テレスマ}ってマジで便利だな。

それって俺にもできるのか？」

《できるよー。でもパパのお手伝いしたいから今日は教えなーい》

「そうか。なら、今日は頼むな」

《はいなー！》

そう元気よく返事をする両方のコメカミに人差し指をあて、目を瞑って唸りだす。

シャキーンッ

琥珀の前髪が一束重力に逆らって天を向く。

電波受信中、ってか？面白えな。

《えーっとねー。パーツ・ウォウCクラスチーム【T・REX】。

メンバーは5人。平均戦^{バトル}レベル約50。拠点は如月高校だつてー》

「ふむ、Cクラスってどれくらいだ？」

《うーん……それなりに努力しないとイケないらしいよー》

「なるほどな」

ならアイツらのためにもチーム創んねえとな。

んで如月高校つて言や隣町か……。隣町にはあんのになんでこの町にはA・Tがねえんだろうな……？

《それはねー、【アルテミス】ってチームの拠点が文月市だかららしいよー》

「……………どういうことだ？」

《市内のA・T使い（ライダー）を徹底的に潰してたから、市内を

走るようなA・T使いがいなくなっただってー》

それでパーツ売っても全然儲かんねえからパーツ売る店がねえのか。
いい迷惑だ
が、そのためか家の中にいろんなパーツがある
からいいか。

……あ、ついでだし言つとくがA・Tとか【玉璽】^{レガリア}創った時も勝手にパーツ拝借した。

んで基本的に走る時は【天使の力】^{テレスマ}で創ったA・Tではなく自作のA・Tを使ってる。【天使の力】が使えなくなった時のために慣れとかねえといけねえって意味合いがあるからな。

それに自分で創ったんだし、使わねえともったいねえってのもある。

「あ、琥珀。【アルテミス】のこと調べられるか？」

《できるよー。むむむー……！

……えーっとねー。パーツ・ウオウAクラスチーム【アルテミス】。メンバーは4人で、全員が【王】。平均戦^{バトル}レベル約210。拠点は文月市だつてー》

平均レベルが210か。強敵だな。

「【王】の名称を教えてください」

《はいなー。

【朔風の王】^{さくふう} 【閃響の王】^{せんきやう} 【鉄の王】^{くわがね} 【轟滅の王】。

コレで全部なのー》

「さんきゅ」

んー……【朔風の王】^{さくふう}はおそらく風系のA・T使い（ライダー）だな。

それ以外は皆目見当がつかねえ。

「んじゃ次は俺に懸かってる懸賞金のこと調べられるか？」

《懸賞金ー？》

「Mたちが100万円がどうか言ってただろ？」

《そうだったけー？

うーん……あんまり覚えてないけど調べてみるのー。むむむー！》

そう言って再び唸りだす琥珀。

《……えーつとねー。金髪碧眼の文月学園に通っているハーフ。懸賞金500万円だってー。100万円から上がってるねー》

きやつきやつと笑って琥珀が言う。

某海賊王を目指してる麦藁ってワケじゃねえから懸賞金上がったも嬉しくねえんだが……。

「どこのどいつが俺を狙ってるか分かるか？」

《うーん……消されちゃっててわかんない》

「消されてるってどういう意味だ？」

《えーつとねー……【Sky Link】にアクセスして調べてるんだけど、狙ってる本人が見つかりたくないからなのかその情報が消されちゃってるのー》

「そうか」

いかにも面倒事です、っつー嫌な二オイがプンプンするな。
周りに迷惑になんねえといいけど……。

「琥珀」

《なにー？》

「今日は優子んちに泊まっとけよ？俺は用事があるから」

《ええー、やだー！僕もパパと一緒に行くのー！》

「……今日はマジでダメだ。優子と一緒にいる。明日目一杯遊んでやるから」

「むー……約束だよー？」

そう言いながら琥珀は小指を立てる。

それに俺は自分の小指を絡ませ、

「ああ、約束だ」

バカと俺と調べ物（後書き）

読者の中には【王】の名称からどの【道】を走っているのか予想のつく方がいると思いますが、空は自分の走っている【道】に関するある【道】（【風】【炎】【牙】【棘】）にのみ興味があるので、例えば【轟滅の王】なら【轢藍の道】の【壁】が関係している（かもしれない）という事が分かっています。

感想待ってます

俺と自由と鮮血の月（前書き）

これからはエア・ギア色が強いときのサブタイトルは『俺と自由と
』にします。

『グッ……モ〜〜ニンッ、ザ・世界^{ワールド}！！燃えるぜツ世界地上波生中
繼ッ！！』

こちら【P・G・TV】【P・G・TV】プラグ・マン・ゲリラ・
テレビ！！！！』

にしても声デカすぎだ。近所迷惑とかお構い無しだな。

『さあさあ始まったぜッ！！ガン首そろえた変態共ッ！！^{ジャンキー}』

今夜ッ数年前に突如姿を消したッ！！あの最強のチーム【アルテミ
ス】がついに復ッ活ッだアッッ！！！！』

『『ウオオオオオオオオオオ！！！！』』

ふむ、それなりに観客がいるらしいな。んでもって母さんたちは活
動停止してたらしい。【重力子^{グラビティ・チルドレン}】を殺してえんだつたらとつと殺
せばいいの何考えてんだ？

そんなことを考えながら文月学園へ続く坂道を駆けているとプラグ・
マンの聞き捨てならない台詞が耳に入ってきた。

『だがッ【アルテミス】にケンカ売ったチームはビビってるの
かなかなか姿を現さねエゼッ！！』

あア？誰がビビってるだア！！

ビビってねえとこをみせてやるよ！

俺は直接グラウンドに行かず校舎の壁を登って屋上へ。そこから文
字通り【風】に乗ってグラウンドの上空へ駆け上がり、そしてパイ
ルトルネード（風をコイル状に操って蹴り出す技^{ジェットク}）で地面に向け人
為的に螺旋状の【風】の【道】を作り出す。

『な、なんだなんだッ！！？突然竜巻が発生した
たら炎の渦になったぜッ！！？？』

と思っ

プラグ・マンの解説する通り砂を巻き上げ黄色くなっていた竜巻も
 といパイルトルネードは俺がその中を駆ける事により紅く染め直さ
 れる。

トッ

軽やかな音と共に地面に到達。そして、魅せる技を。トリック

キユ、
キユ
キユッ
ポッ
ボアッ

trick: Ikaros pteron

【炎】の渦が消えるのを見計らったかのように足元から3対6翼の紅蓮の翼が開かれる。

URYYYYYY
IIIIII
ツツツツ
!!!!
?????

なんとツ炎の渦から人が出てきたぜツ！！もしかしてコイツが今回【アルテミス】に挑戦するA・T使いかツ！！？？

【アルテミス】に挑戦するA・T使いかッ！！？？

遅れて来たワリに堂々と登場しやがってカツコイイじゃねエかコノヤロウツ!!!!!!』

校舎側にいつもの放送用のセットではなく【MAJIE TV】と書かれた中継車でナレーションをしているプラグ・マンから俺を称讃する声があがる。

それをきっかけとして周りを見回すとグラウンドのトラックの四方

に用途不明のボールがたっていた。

なんに使ったろうな？そんなことを考えながら、形だけの謝罪を。

「よお、母さん。待たせたな」

白のパーカーを上にも、【アルテミス】のチーム・ウェアと思われる黒に赤のラインの入ったジャージを下に着た母さんにそう投げかける。

「おー、やっと来たか。なかなか来ねえから逃げたのかと思ったぜ」

「あ？母さん相手に逃げる？」

ハッ、んなワケねえだろ。母さんなんざ叩き潰してやるよ！」

「フンッ、今の内に吠えとけ。実力の差を思い知らせてやるよ」

互いに挑発していると、上はいつもの白衣（ナースが着ている物ではない）で下は母さんと同じジャージを穿いているヤブから声がかかる。

「宇童君！あの筋肉達磨にワタシの漫画のことをリークしただろ！

！おかげでワタシの半身が焼却炉で焼かれてしまったじゃないか！」

「は？なんのことだ？」

「惚けるなよ！！筋肉達磨から『宇童から聞いたぞ』って聞いたんだよ！」

「……ちっ」

鉄人の野郎いらねえこと言いやがって……。

「今舌打ちしたな！？」

「よろしい！ならば戦争だ！」

ヤブがそう告げるとヤブの背後に【影技】^{シャドウ}が姿を現す。
その【影技】はブラックジャック。
よっばどブラックジャックが好きなようだ。

……【影技】とは関係ねえか？

『おおッ！？両者共に殺る気マックスのようだぜッ！！
それじゃ恒例の【READ】起動オーッッ！！』

ポチッとな、という感じでリードのボタンを押し俺たちのレベルを
計るプラグマン。

それにより文月学園の上空に（どういう仕組みかわからないが）ス
クリーンが展開され俺たちの姿と共に戦^{バトル}レベルが表示される。

『『『！！！？？』』』

そこに表示された俺のレベルを見て周りが驚愕している。

《チーム》

269

VS

チーム【アルテミス】

アトロpos 228

クロートー 202

ヘーパイストス 211

ラケシス 209

（半袖の赤パーカーを着ている俺）

アトロポス（パーカー）の袖を捲った母さん）

クローター（母さんの右後ろにいるヤブ）

ヘーパイストス（ヤブの右隣にいる上半身裸の筋肉達磨）

ラケシス（母さんの左後ろにいるジャージを腰に巻いた女性）

下はみんなジャージのズボン。

……全員洒落た名前してんな。俺と大違いだ……っつーか名前がねえ。なぜに？

U、
UR
Y Y Y Y Y Y Y Y
I I I I I I I I
ツ ツ ツ ツ ツ ツ
! ! ! ! ! !
? ? ? ? ? ?

な、なななんとオッ！！？？【アルテミス】に挑戦するバカヤ

バトル
ロウの戦レベルはツ
まさかまさかの269ツ!!!!!!

平均レベル200越えの【王】ならぬ【魔王】だらけの【アルテミ

ス」に見劣りしねエコノヤロウはツ一体何者なんだツツ！！！！！！

にしてもレベル以外表示されねえってことはコノヤロウはパーツ・

「ウォウに登録してねエらしいぜッ！！？？」

へえ、名前がねえのはそういうことだったのか。

「空って結構レベル高えんだな」

「あ？なんだ？ビビったのか？」

「フンツ、バカ言ってるじゃねえよ。」

ストーム・ライダ
【暴風族】 同士の戦いは合計レベルの高い方が勝つんだ。いくらレベルが高かろうが空1人じゃ私らにや勝てねえよ。

「恥かく前に帰ったらどうだ？そして私のチームに入れ」

「ハッ、闘る前から勝手に決めつけてんじゃねえよ。俺は絶対母さん倒してチーム創るからな。」

にしてもジジババのチームをフルボッコにしねえといけねえっての

は心が痛むな」

「ああ？ナメてんじゃねえぞ！！」

「ナメてるワケじゃねえ、眼中にねえだけだ」

「ハアッ？殺すッ！お前マジ殺すッ！」

仲間に引き入れたいんだつたら殺すなよ……。

そうやって母さんを挑発している間にプラグ・マンは戦方式バトルの説明に入っていた。

『勝負方式はツ四方にたつポールで囲まれたグラウンドを、檻に見立てた【キューブ】ッ！！上への制限は無しッ』

（解説：【キューブ】とはパーツ・ウオウの中で最も過激で危険でポピュラーな戦。本来なら1対1での潰し合いで完全な密室であるもの。今回は1対4）

んじゃそろそろ用意でもするか。

俺は意識的に過呼吸を行い、そして息を吐くと、激痛を伴いながら体の各関節に気泡が発生し無理矢理股関節の可動域を広げる。

『ケダモノ5匹檻中！！生き残るのは一体誰だッ？』

まずは小手調べとするか。

右足を大きく後ろにひきそして前へ振り抜くと、パパパツと乾いた音をたてて【玉璽】についている“爪”が空気を弾き【棘】を撃ち出す。

（解説：A・Tによりある程度の“タメ”があれば【牙】を放ち、なければ【棘】を、という具合に使い分けができるのが【炎狼の玉璽】の特徴の1つ。

ただ、普通に蹴っただけでは【棘】は出ず可動域を限界以上に広げた時の思いつきの蹴り、または“タメ”た力をうまく分散した場合にしか放つことができないため、なかなか扱い辛い。

ぶっちゃけ空の【道】に【棘】を入れるかどうか悩みどころ。

人特有の膝を中心としたバネでの切り返し（ターン）ではなく犬のような“全身のバネ”での切り返し（ターン）を目的として取り入れたため、空は【棘】を攻撃として使用するのには苦手）

『URYYYYYYYYーッッッ！！！！！』

金髪ヤロウがいきなり戦^{バトル}をおつ始めやがったッ！！

しかもまさかの【棘】による攻撃だッ！！

本来【荆棘の道^{ニンジャ・ロード}】を走るにはヤロウの股間じゃ役不足ッ！！それなのに余裕気に【棘】を撃ちやがったぜコノヤロウッ！！チ？コ付いてんのかッ！！？？』

いつものことだが中継中にとんでもねえこと口走ってんじゃねえよ！！？

そんなことを考えていると母さんが口を開く。

「空。こんな爪楊枝飛ばしてどうにかできると思ってたのか？」

「思ってたねえよ。ただの小手調べだ」

「『小手調べ』ね。ナメられたもんだ、なっ！」

ブアッ

母さんは手を前方に突き出し空気の【壁】を作り出して俺の【棘】を防ぐ。

なるほど、母さんが【朔風の王】か。
なら俺の【道】と相性がいいな。そうと分かれば即行動。

タッ

母さんに迫り、

ザザーッ

目前で急停止。そして

t r i c k : G r a n d F a n g F i r e B i r d

ゴオオオオオオッ

右足を振り抜きほぼ零距离で特大の【炎】の【牙】を放つと母さんはそれに呑み込まれ悲鳴をあげる。

「……口ほどにもねえ。ま、とりあえず1人、っ」と

戦はまだ始まったばかり

俺と自由と鮮血の月（後書き）

鮮血の月：戦の前兆

READ：A・Tに付属しているメモリースティックに記録されている走行データを読み込んで戦^{バトル}レベルを算出するソフト
アルテミス：ギリシア神話に登場する狩猟・純潔・月の女神。

チーム：【アルテミス】

エンブレムデザイン：右翼を閉じ左翼を広げた天使

感想待ってます

俺と自由と新たな【道】（前書き）

息抜き更新です

受験勉強の合間に書いたモノなので可笑しなところがあるかもしれませんが

感想待ってます

俺と自由と新たな【道】

「……………まずは1人……………」

俺はポツリと呟く。

『アーンアーンアーンベリイイバボオオオオー……ツツツツツツ……！！！！……？？？？』

誰が予想したこの展開ッ！！【朔風の王】と謳われるアトロポスを苦もなくあっさり倒しやがったぜッコノヤロウ！！まったくなんて化けモンなんだッ！！』

俺の予想した通り母さんが【朔風の王】だったようだ。

んじゃ2人目。こっから先は完全に手探りだな。ヤブたちがどの【道】走ってんのかわかんねえし。

「油断せずにいくか」

………つつて相手が動くのを待って何もしねえってのは勝ちから逃げてるってことだし、とりあえず

「攻撃あるのみっ！！」

次の獲物はいきなりのこととで固まっているラケシスと呼ばれる女性ヘーパイストス（上半身裸の筋肉達磨）とクロートー（ヤブ）は素早く反応し距離をとったため放っておく。

「ふっ！！」

軽く息を吐き出し、ラケシスの右側頭部に蹴り。

「……っ!？」

咄嗟に反応し腕を交差して俺の蹴りを防ぐ。腕からはメキツと骨の軋む音が聞こえてくるが吹っ飛ばないことから力を受け流したようだ。

この至近距離での蹴りを受け流すか……なかなか手強いな。だが、

「ここならそうもいかねえだろっ!！」

素早く足を戻し今度は脹ら脛いかでかへ蹴りを放つ。

パンッ

乾いた音と共に重力から解放されるラケシス。

「……え……?」

その場で無理やり側転（腕と足は投げ出されるような形になっている）させられ痛みよりも自分の状況が飲み込めないことに気の抜けた声を発した。

「どうだ？重力から解放された気持ちは？」

そんなことを尋ねながら腹にガゼルパンチ。

トゴッ

「うつ……げぼつ……！！??」

人が発するハズのない重々しい音を立てポールで囲まれた範囲外へ吹っ飛んでいくがすんでのところでヘーパイストス（上半身裸の筋肉達磨）に受け止められた。

失格にはなかったが気絶しているので邪魔にはならないだろう。

「出しときゃいいのに……。ま、とりあえず2人目つと」

次はヤブに狙いを定める。

ヘーパイストスの方が両手が塞がって倒しやすいそうだがヤブがそれを黙って見過ごすワケねえだろうからな。

t r i c k : A f t e r B u r n e r

【炎】と音を置き去りにした超高速移動。

俺の姿が突如消え、元いた場所に【炎】と、数瞬遅れて衝撃波による乾いた音が響く。

「ヤブ！マンガのことで文句があるんなら“走り”で語れ！」

t r i c k : L e v i a t h a n

毎度のことながら背後に現れ【牙】を放ちながらそう告げる俺。

“花束（【牙】を放ったため当たれば真っ赤な花が咲くだろうの意）

”をプレゼントするあたり俺はなかなか紳士なヤツだと思う。

「言われなくてもそうするつもりだよ」

背後に現れた俺に素早く反応し距離をとった　　かと思つと自ら【牙】に迫るヤブ。

「……………血迷つたか……………」

「いや、ワタシは至つて正常だよ？」

折角だしワタシの【道】を教えてあげよう」

そう言つてヤブが【牙】に“向かつて”蹴りを放つ。

ヒュゴキュウウウツッ!!

「な……………っ!!??」

俺の【牙】がかき消され……………いや

「“喰”つたのか!？」

「御名答。宇童君の【牙】は美味しくいただいたよ。

……………そうだね。ワタシだけもらつのは悪いからお礼に“コレ”を返そう」

につこりと笑つてヤブが足を完全に振り抜く。

すると、パパパツとA・Tのホイールについている突起物が空気を弾く音が聞こえ、俺に向かつて無数の細く鋭い【棘】が放たれる。しかも俺の【棘】と段違いの速さで、俺の視界を埋め尽くし【壁】

のように、だ。

「っ……！！！？このクソつたれがっ！！」

ポッポッ

俺の前方の左右に【炎】で上昇気流を発生させ、

ブアッ

【風】で前方に流し、

ゴアッ

【牙】を放つ。

前方向への上昇気流と【風】により【牙】の威力を増して、【棘】の【壁】に接触。

今のうちに範囲外に！！

そう考え動きだそうとしているとバキンッ！！と何かが碎ける音が耳に入り、それに目を向けると

「クソがっ！！いくらなんでも早すぎんだろ！？」

やはりと言っべきか【牙】が破られ【棘】の【壁】が迫ってきていた。

やっぱ“タメ”がねえといくら【炎】と【風】で威力上げようがナマクラ以下か……っ！！

トトトッ

軽い音を立てながら【棘】が俺に刺さっていく。

「……………ッッ!!??」

軽い音に反して絶大な威力を体感し声にならない叫びをあげながら俺は地面に倒れ込む。

それを満足げに見つめてヤブが口を開く。

……………どや顔うぜえ……………。

「それじゃあ改めて自己紹介をしようか。

ワタシはクロート。オーバー・ロード【轢藍の道】とソニア・ロード【荊棘の道】を融合させた新しい【道】、ロン・ロード【震楚の道】を駆る【轟滅の王】だ」

……………オーバー……………ロード……………。……………なんだそれ……………？

俺の表情を読み取ったのかヤブは親切に説明しだす。

「目の前に立ちはだかる者全てを叩き伏せ、轢き潰すのが【轢藍の道】。オーバー・ロード」

その轢き潰すのに“ラム・ジェット理論”というものを利用しているんだけど、宇童君は“ラム・ジェット理論”というものをご存知かな？」

……………興味ねえことは知らねえよ。

「ラム・ジェット理論」というのは、超々音速飛行機のために開発が進められている究極の推進システム。
その推力は“向かい風”」

……“向かい風”……なら俺の【牙】も【風】も相性最悪じゃねえか……。

「吸気孔に入った“向かい風”は自らの圧力によって圧縮されさらなる加速を生んで後方へと噴射される。

押し寄せる『風』が強ければ強いほどさらに加速されていく。

それは己への風が強ければ強いほど自らの力にかえて猛り狂う風車の如く、ね」

そしてヤブは俺に手を差し出す。

「解説はこれくらいにして、同じチームの仲間として以後よろしく頼むよ」

どうやら『俺が負けたら【アルテミス】に入る』ってことを言うてるらしい。

「……………」

「ほら、どうしたんだい？」

「……………」

「握手だよ、あ・く・しゅ。仲間になるんだから握手くらいいいじゃないか」

その言葉を聞き俺はヤブに手を伸ばし

「まったく宇童君はツンデレだね」

パンッ

やれやれと呆れているヤブの手を弾く。

「……………これはどういうことかな？」

「……………そんな言うまでねえだろ。」

俺は【アルテミス】に入る気はねえ。そもそも負けてねえし！！」

「……………往生際の悪い子だね。そんな子は轢き潰してあげないと」

「そう簡単にいくかよ！！」

うつ伏せの状態から素早く起き上がりヤブから距離をとる。

【棘】が体の芯まで届いたためなかなか体力が回復しないが動く分には問題ない。

「ヤブの“ソレ”は【風】とか【牙】とか強力な“向かい風”がねえと使えねえんだろ？」

なら俺が【風】と【牙】を使わなかったらいい話だ！！」

『時よ』っ！！

高速の拳打が炸裂する。

俺と自由と新たな【道】（後書き）

ラケシスの【道】が不明のまま倒されてしまいました。が、機会があればだします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1732w/>

バカと暴風と召喚獣

2011年11月27日10時51分発行